発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，77-86

原　著

児童養護施設における青年期前期の子どもの愛着状態と心的外傷性症状

出野　美那子
（大阪大学大学院人間科学研究科[1]）

本研究では，児童養護施設で生活する中学生を対象とし，青年期前期における特性としての愛着状態と心的外傷性症状の関連を検討した。対象は調査への協力が得られた児童養護施設10施設で生活する中学生146名であった。階層的重回帰分析の結果，男子より女子の方が心的外傷性症状は強く，両価性の愛着特性が心的外傷性症状を強めることが明らかとなった。このことから，愛着の両価性が心的外傷性症状を強める方向に影響することが明らかとなり，女子の方が心的外傷体験に曝されやすいか症状が強く表出される傾向にあることが示唆された。また男女別に行った分析結果から，男子においては，年齢が大きいほど，両価性得点が高いほど心的外傷性症状が強く，入所年齢が低いほど心的外傷性症状は強い有意傾向が見出された。女子においては，両価性得点が高く，回避性得点が高いほど心的外傷性症状が強いことが見出された。これらの結果は先行研究を支持するものであり，さらに青年期前期において愛着システムが活性化される過程と，愛着システムが心的外傷性症状へ及ぼす影響に，性差の存在する可能性が示唆された。

【キー・ワード】 青年期前期，愛着，心的外傷，児童養護施設，性差

問題と目的

Bowlby（1969）は愛着理論において，乳幼児期の愛着対象との相互作用に始まり，愛着対象への接近可能性，愛着対象の情緒応答性，自己の有効性に関する心的表象が形成されることを仮定した。このような表象は内在化されて“揺りかごから墓場まで”（Bowlby, 1977）継続的に様々な対人的相互作用を経て，“対人的情報の知覚，評価，未来の予測を立て，自己の行動のプランニング”（遠藤，1992）を行う認知的準拠枠である，愛着システムが形成されると仮定された。この愛着システムは脅威や困難を経験した時に活性化され，安全性を確保するために，乳幼児期においては養育者，児童期以降においては内在化された対象との近接性を維持し，その困難への対処を可能にしようとするものである（Mikulincer & Florian, 1998）。愛着研究は，外的に把捉できる愛着行動や具体的な相互作用，つまり乳幼児期の愛着行動や愛着の世代間伝達を扱った発達心理学的研究，臨床心理学的研究に始まり，内在化された表象レベルの愛着特性を扱う方向へと徐々に移行してきた（遠藤，1992）。そして近年では，成人期の精神疾患と愛着との関連を検討する臨床心理学的研究（Dozier, Stovall, & Albus, 1999），青年期後期以降の恋愛関係と自己評定の愛着との関連に焦点付ける社会心理学的研究（e. g., Bartholomew & Shaver, 1998）において知見が蓄積されている（Cassidy & Mohr, 2001）。

各々の分野で依拠される愛着分類はほぼ一致しており，様々な要因との関連が検討されている。乳児期の愛着状態は行動観察によって愛着安定型，回避型，両価型（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978），無秩序型（Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）に分類され，幼児期（Bretherton, Ridgeway, & Cassidy, 1990）では行動観察によって，青年期・成人期（Main & Goldwyn, 1984）では面接や質問紙法によって乳児期に対応した分類が見出されている。回避型／両価型という不安定型においては“様々な問題に対する対処準備性が低いため”（Shaver & Hazan, 1993），心理的，身体的問題が増加する傾向にあるという知見が数多く見られる。成人や青年期後期を対象とした研究では，回避型と両価型は安定型に比べて，不安と敵意（Kobak & Sceery, 1988），孤独（Hazan & Shaver, 1987），身体的症状（Hazan & Shaver, 1990），否定的情動（Simpson, 1990），恥，怒り，否定的評価への恐れ（Wagner & Tangney, 1991）との強い関連が見出されている。本邦においても青年期後期を対象として，安定した愛着スタイルと良好な精神的健康，両価的な愛着スタイルと不良な精神的健康の関連が見出されている（金政・大坊，2003）。児童期についてはGrossmann & Grossmann（1991）が10歳児を対象に，早期の安定した愛着と，他者に援助を求めることや友人から援助を受ける機会に関する知覚との関連を明らかにしている。

このように愛着状態が心理的症状へ及ぼす影響については実証的研究が蓄積されているものの，心的外傷性症状への影響については臨床的知見から述べられることが

1）現所属：お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

多い。Herman (1997/1999), van der Kolk (2005) は，強制収容所への補囚や子どもの頃の虐待などの慢性反復性外傷体験を持つことで，単回性外傷体験に典型的に見られる侵入性症状群・回避麻痺性症状群・過覚醒症状群に加え，感情調整の障害，自己破壊的および衝動的行動，解離症状，身体愁訴，無力感・恥・絶望または希望のなさ，敵意，社会的引きこもり，これまでもち続けていた信念の喪失，他者との関係の障害などの症状が認められることを報告している。被虐待体験は普通とは異なる右脳のストレス対応システムの構造化を引き起こすことが指摘されており (Siegel, 1999)，本邦でも同様の行動や症状が見られることが報告されている (奥山, 1999；奥山ほか, 2000)。虐待的環境では，養育者や養育環境そのものが慢性的反復的に心的外傷性体験となるため，子どもの愛着状態と心的外傷性症状との間に密接な関係のあることが考察されている (奥山, 2000；庄司, 2000)。これはまさに，養育者が適度に支持的応答的でなく，子どもの苦痛に対する養育者の統制が不安定で不適切であり，不快の軽減に対する効力感が低くなるという不安定型の愛着が形成される過程と心的外傷体験から生起する症状との関連を示すものである。また奥山 (2000) は愛着が安定していないと心的外傷への抵抗力が低くなり，一般の子どもには耐えられる問題でも心的外傷となりやすいことを述べ，愛着状態が不安定であると心的外傷性体験になりやすいという可能性を臨床領域から示している。一般的な心理的症状のみならず心的外傷性症状に焦点づけて，愛着状態の影響を実証的に検討することが必要であると思われる。そこで本研究では，愛着研究において取り上げられることの少ない青年期前期，特に児童養護施設児を対象として，心的外傷性の心理的症状と愛着状態の関連を検討することを目的とする。

児童養護施設で生活する青年期前期の子ども達においては，様々な心理的症状の見られることが報告されている (西澤・中島・三浦, 2000；大西ほか, 1994；堤・高橋・西澤・原田, 1996)。例えば，不安，怒り (西澤ほか, 2000)，多動，イライラ，落ち着きがない，感情の起伏が激しいなどの情緒不安定 (大西ほか, 1994)，心因性嘔吐，頭痛などの身体症状化，理由のはっきりしない怯えや不安，強迫的行動などの神経症的傾向 (堤ほか, 1996) といった症状が把握されている。また易怒性・抑うつ感・侵入性症状や回避性症状といった心的外傷性の症状・解離性障害が見られたことも指摘されている (西澤, 2003；西澤ほか, 2000)。一方で児童養護施設児に限らない一般の子どもにおいて，第二次性徴に伴う身体的変化と並行して，感情の高ぶりや苛立ちの自覚，めまい，動悸，不眠などの経験者が多くなるとされ (加藤, 1984)，心理的身体的問題は小学生に比べ中学生において増加することが知られている。すなわち青年期前期においては，心理的身体的成長に伴い一時的に心理的身体的症状が出現しやすい時期である可能性が高い。そのため，青年期前期の児童養護施設児に見られる心理的症状には，年齢による心理的症状の増加と，心的外傷性の症状とが混在している可能性があると考えられる。

児童養護施設で生活している子どもに心的外傷性症状が見られる背景として，被虐待体験に加え，多様で複雑な「対象喪失」(小此木, 1979) を経験していることが挙げられる。転校による友人と離れる経験や住み慣れた場所を離れる経験など様々な喪失体験がある中で，児童養護施設児が共通して経験しているのが近親者との一時的または半永続的な生別あるいは死別である。このような体験が子どもに与える衝撃については，離別や死別と精神的・身体的問題の関連 (鈴木, 1989)，10歳以前の離別体験と臨床医学的な抑うつの関連 (北村, 1984)，ストレスフルなライフイベントと心因性の障害との関連 (上林ほか, 1992) などが見出されている。Winnicott (1971/1979) は，離別体験に伴って社会的不適応が生じる背景として，愛着対象との相互関係を土台として発達する世界に対する主観的概念が健全に構築されないためとしている。また親から虐待を受けた子どもも親を愛着対象としているため，虐待の直接的影響だけでなく，親と離れて施設に入所するという親との離別により情緒的混乱や心理的問題を生じる場合があるとされる (西澤, 1994)。曽田 (1998) は，乳幼児期に親との離別を経験して乳児院や児童養護施設で生活することになった子どもにとって，依存の対象が明確で，特定の大人との信頼関係を形成して維持できることが重要であることを指摘しており，同様の指摘は児童入所施設に関わる様々な援助者からなされている (平田, 1999；加賀美, 2001；藤野, 2005；坪井, 2005)。このように児童福祉領域において，被虐待体験を受けた子どものみならず，離別を経験している子どもにとって，信頼できる大人との愛着関係の形成と維持が重要であることが臨床的観点から多く示されている。そのため心理発達的に心理的症状が増加しやすい青年期前期，かつ離別体験を共通して経験している児童養護施設児を対象として，愛着状態と心的外傷性症状の関連を実証的に検討する意義は十分にあるものと思われる。

以上を踏まえ本研究において，以下の二点を目的とする。第一に，児童養護施設で生活する青年期前期にあたる子どもにおいて，愛着状態のどの特性が心的外傷性症状に影響を及ぼしているかを検討することを目的とする。その際，対象とする青年期前期には身体的成長に性差があるように，心理的症状においても性差の見られることが報告されている。例えば，中学生女子が男子より高いストレス反応を示し (岡安・嶋田・坂野, 1992)，

女子は友人関係のストレスに対してより感受性が強い（三川，1988）ことが挙げられる。また大学生女子の方が親から精神的暴力を受けていたと回顧的に報告する割合が高い（増田・山中・鄭，2006），女子が同じ出来事でも男子よりも脅威と評価しやすい可能性がある（岡安ほか，1992）といった認知様式においても性差の存在する可能性が示されている。そこで第二の目的として，愛着状態と心的外傷性症状との関連について性差を検討する。

なお本研究では，成人愛着面接で測定されるものとは異なる，Hazan & Shaver（1987）に基づいた詫摩・戸田（1988）の愛着スタイル尺度を用いる。Hazan & Shaver（1987）の質問紙は，Ainsworthの理論に基づく三種類の対人関係態度を表す記述から最も該当するものを選ばせるものである。詫摩・戸田（1988）は，Hazan & Shaver（1987）の三分類に対応する三下位尺度を想定した多項目式の愛着スタイル尺度を作成している。この尺度は個人の自己認知による，意識化された対人関係の枠組み，自己や他者のあり方に関する態度特性を測定しており，Main et al.（1985）の成人愛着面接で扱われる，過去の両親との関係や面接内容の整合性を重視する包括的な内容とは異なる。まず成人愛着面接では過去の両親との情愛豊かな関係や拒絶的関係など詳細に回答を求められるため，養育者との間に様々な事情を持つ子どもにとっては心的負荷の高い可能性がある。そして愛着システムは危機や脅威に遭遇した場合に活性化されることが提唱されており（Bowlby, 1969, 1973 ; Mikulincer & Florian, 1998），青年期前期においては友人との関係が親を始めとする大人との関係よりも重要になり，大きなストレス事象となりうる（岡安ほか，1992）ため，青年期前期において自己や他者のあり方に関する態度特性は重要な側面である。また本研究が横断研究であること，青年期前期は質問紙への回答が可能であること，詫摩・戸田（1988）とその後の研究において愛着スタイル尺度の測定内容と児童期までの愛着状態との連続性が前提とされず検討されていないことから，本研究では狭義の，かつ測定時点での愛着状態，「個人がもつ対人関係の枠組み，自己や他者のあり方に関する態度特性」について検討することとする。

また心的外傷性症状の測定には，改訂出来事インパクト尺度（飛鳥井，1999 ; Horowitz, Wilner & Alvarez, 1979), Clinician-Administered PTSD Scale, Child and Adolescent Version（Nader, Blake, & Kriegler, 1994）などの様々な尺度が開発されている。これらの測定法で把握できる症状がそれぞれ狭い（西澤ほか，2000）とされる一方で，本研究ではある出来事に特化しない，広範囲の心的外傷性症状を把握するために開発されたTSCC（Trauma Symptom Checklist for Children : Briere, 1996）を用いる。

方　法

調査対象および調査方法

調査への了解が得られた大阪府内の7施設，三重県・石川県・鹿児島県下の各1施設の計10の児童養護施設で生活する中学生154名に回答を求めた。欠損値の多いものを除いた146名（男子78名，女子68名，平均年齢及び標準偏差は13歳4ヶ月±10ヶ月）を分析対象とした。子どもの属性については，子どもを担当する児童養護施設職員109名に回答を依頼した。

調査は質問紙法で2001年7月～10月に行った。調査への了解を得られた児童養護施設宛に質問紙を郵送した。調査に際し，項目の理解度を高めるために検査者が項目を読み上げて対象者が回答していく方法を採った。その際の検査者は児童養護施設の職員に依頼し，集団で行うことを依頼した。また内容の守秘性を対象者に保証するために，対象者が回答した後，自ら封をする方法を採った。その際，匿名性を保ち，対象者の属性とデータを一致させる必要があるため，ナンバリング方式[2]をとった。データ解析には統計パッケージSPSS ver. 10（SPSS Inc., 2000）を用いた。

調査内容

愛着状態　詫摩・戸田（1988）の愛着スタイル尺度18項目を用いた。これは愛着状態の特性を測定することを目的とした尺度で，安定性，両価性，回避性の三下位尺度各6項目からなり，一個人において三特性の内いずれの傾向が強いかを明らかにすることができる。「ぜんぜんあてはまらない1」「あてはまらない2」「どちらともいえない3」「あてはまる4」「とてもあてはまる5」の5件法により評定を求め，高得点である程その特性の傾向が強いことを示している。

心的外傷性症状　TSCC（Briere, 1996）[3]は心的外傷体験に由来する複数の症状を測定する尺度であり，54項目の内，西澤ほか（2000）によって翻訳された，性的問題に関する一下位尺度をのぞいたTSCC-A 45項目を用いた。この尺度は以下の5下位尺度からなり，統計手法でなく，症状を評価する臨床的観点から作成されたため，項目の重複する下位尺度がある。不安9項目，抑うつ9項目，怒り9項目，外傷後ストレス10項目，解離10項目である。「まったくない0」「めったにない1」「ときど

2）本研究でのナンバリング方式は，回答を厳封した後に番号を封筒の表に記載してもらい，子どもの回答した内容について他者は関知できないこと，番号は個人を特定する目的でないことを子どもに保証し，子どもを施設職員のみが識別できるようにして子どもの調査票と施設職員の調査票をマッチングさせた後に，子ども個人の識別を不可能にした上で回収した。

3）尺度の使用にあたり，出版元のPsychological Assessment Resources社に使用許可・調査版権を得た。またこの日本語訳を転載もしくは使用する場合には，同社の許可が必要である。

きある2」「いつもある3」の4件法により評定を求めた。TSCC-Aは，下位尺度毎に素点の合計をプロフィールに書き込んでT得点化し，視覚的に各下位尺度得点を把握して臨床的評価が行われる。また男女間と12歳，13歳の間に質的な違いが存在するとされ，得点化の方法が異なる4種類のプロフィールが用意されている。低得点であるほど，心的外傷に伴う心理的症状が少ないことを示している。

基本的属性　入所年齢（平均及び標準偏差は7歳7ヶ月±4歳1ヶ月）と入所理由について尋ねた。入所理由は「日本子ども資料年鑑第4巻 Ⅵ家族と子どもの福祉」（社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所，1994）を参考に10選択肢から単一回答を求めた。選択肢は以下の通りである（（ ）内に件数/%を示した）。父母の死亡（6/4.1）・行方不明（9/6.2）・離婚（30/20.5）・入院（7/4.8）・就労（16/11.0）・精神的問題（8/5.5）・虐待または放任（26/17.8）・破産などの経済的理由（19/13.0）・児童の問題による監護困難（6/4.1）・その他（12/8.2），欠損値（7/4.8）であった。被虐待体験の影響を検討するため「虐待または放任」（26/17.8）と「それ以外の入所理由」（113/77.4）に分類した。

結　　果

愛着状態の特性，性別，基本的属性の心的外傷性症状への影響

本研究では心的外傷性症状の強弱を量的に評価するために，全下位尺度の素点の合計をTSCC-A得点として扱った。TSCC-Aのα係数は.95と高い信頼性を有しており，愛着スタイル尺度各下位尺度のα係数については安定性が.73，両価性が.73，回避性が.61とある程度の内的一貫性を有していると思われたため，各構成項目を合計したものを下位尺度得点とした。愛着スタイル尺度各下位尺度得点の平均及び標準偏差は，安定性得点19.03±4.34，両価性得点19.19±4.63，回避性得点15.33±4.29であった。TSCC-Aの平均及び標準偏差は34.42±24.40であった。各変数のPearsonの相関係数について全対象者の結果と男女別の結果をTable 1に示した[4)]。

心的外傷性症状を従属変数とし，性別と年齢，入所年齢と入所理由の虐待，愛着状態の下位尺度得点を独立変数とする階層的重回帰分析を行った。Table 2に146名全対象者の結果と男女別の結果を表した。全対象者での結果では，性別と両価性得点が影響を及ぼしており，女子の方が男子よりもTSCC-A得点は高く，両価性得点が高いほどTSCC-A得点は高いことが明らかとなった。また男子のみの結果では，年齢，入所年齢，両価性得点

4) TSCC-Aの下位尺度，愛着スタイル尺度各下位尺度のα係数と，各尺度得点の平均及び標準偏差をAppendix 1に示す。TSCC-AについてBriere（1996）のデータは文化と環境による差から（西澤ほか，2000）カットオフポイントが高いことが指摘されているため，比較は西澤ほか（2000）のデータと行う。標準化されていないため参考にとどまるが，本データの平均は西澤ほか（2000）の施設群の値に近く，対照群に比べやや高い値となっていることが認められた。愛着スタイル尺度についても値の比較のみに留まるが，一般中学生を対象とした値（久保田，1995）は，成人女性を対象とした値（山岸，1997）よりも安定性が高く，回避性が低く，女子において両価性が高いという特徴を持ち，両データよりも本データの方がより安定性が低く，両価性の高いことが認められ，一般中学生との比較のみにおいては回避性の高いことが認められた。統計的検定については今後の課題として残された。またTSCC-A下位尺度得点と総得点，下位尺度得点間，愛着スタイル尺度との相関係数を参考のためAppendix 2に表す。

Table 1　*各尺度得点の全体／男女別の相関分析結果*

	性別	年齢	入所年齢	入所理由の虐待	心的外傷性症状	愛着スタイル尺度 安定性	愛着スタイル尺度 両価性
入所年齢		.09 (.13/.03)	1.00				
入所理由の虐待	.03	-.07 (-.12/.01)	.15† (.14/.16)	1.00			
心的外傷性症状	.23***	.05 (.17/-.03)	-.08 (-.11/-.03)	-.05 (-.09/-.02)	1.00		
愛着スタイル尺度							
安定性	-.08	.06 (.06/.04)	-.01 (-.03/.00)	.03 (.04/.02)	-.29*** (-.16/-.40**)	1.00	
両価性	.14	-.01 (-.07/.10)	-.03 (.05/-.11)	-.10 (-.09/-.13)	.47*** (.41***/.50***)	-.46*** (-.42***/-.49***)	1.00
回避性	.11	-.06 (-.05/-.03)	-.07 (-.22†/.10)	.09 (.03/.15)	.21* (.03/.36**)	-.32*** (-.35**/-.28*)	.21* (.29*/.11)

注．† $p<.10$，* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$
性別には男子0，女子1のダミー変数を用いた。各セルの上段が全体，下段（ ）内左が男子，下段（ ）内右が女子。
入所理由の虐待には虐待での入所を1，それ以外の入所を0とするダミー変数を用いた。

Table 2　*愛着スタイル尺度得点と心的外傷性症状の全体／男女別の階層的重回帰分析結果*

	標準偏回帰係数（男子のみ／女子のみ）		*t* 値（男子のみ／女子のみ）		決定係数	決定係数変化量	*F*値（自由度）
第一階層							
性別	.293		3.442**		.087	-	6.111** (2, 128)
年齢	.091	(.214/-.041)	1.071	(1.829†/-.311)	.046	-	3.345† (1, 70)
					.002	-	.097 (1, 57)
第二階層							
性別	.290		3.383**		.093	.006	3.244* (4, 126)
年齢	.100	(.229/-.038)	1.151	(1.911†/-.279)	.064	.019	1.562 (3, 68)
入所年齢	-.080	(-.137/-.041)	-.928	(-1.140/-.298)	.005	.003	.091 (3, 55)
入所理由の虐待	.013	(-.009/ .047)	.154	(-.079/.345)			
第三階層							
性別	.204		2.599*		.291	.198	7.218***(7, 123)
年齢	.097	(.266/-.085)	1.231	(2.497*/-.708)	.310	.245	4.862***(6, 65)
入所年齢	-.070	(-.214/-.024)	-.905	(-1.959†/-.205)	.313	.308	3.941** (6, 52)
入所理由の虐待	.033	(.047/ .030)	.421	(.445/.255)			
愛着スタイル尺度							
安定性	-.085	(-.090/-.069)	-.947	(-.753/-.496)			
両価性	.374	(.490/ .389)	4.234***	(4.108***/2.883**)			
回避性	.089	(-.170/ .288)	1.054	(-1.469/2.331*)			

注. †$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$
性別には男子0，女子1のダミー変数を用いた。
入所理由の虐待には虐待での入所を1，それ以外の入所を0とするダミー変数を用いた。
決定係数，決定係数変化量，*F*値については，各階層の上段が全体，中段が男子，下段が女子。

が影響を及ぼしており，年齢が高いほど，また両価性得点が高いほどTSCC-A得点は高くなり，入所年齢が低いほどTSCC-A得点は高くなる有意傾向にあることが明らかとなった。女子のみの結果では，両価性得点，回避性得点が影響を及ぼしており，両価性得点が高いほど，また回避性得点が高いほどTSCC-A得点は高くなることが明らかとなった。いずれの分析においても，入所理由の虐待は影響を及ぼしていなかった。

性別による心的外傷性症状への影響要因の異同

ここで愛着の下位尺度とTSCC-Aの単相関は有意であるが，重回帰分析では標準偏回帰係数（以下β）が有意でないという現象が一部認められた。愛着の下位尺度間に中程度の相関関係があることから，他の下位尺度の間接効果による擬相関が疑われたので，三下位尺度のうち二変数ずつを独立変数，TSCC-Aを従属変数とする重回帰分析を三組合せについて行った。それぞれの組合せにおけるβは，全対象者の分析において安定性 -.087と両価性.434***，安定性 -.244** と回避性 .132，両価性.450*** と回避性 .116，男子のみの分析において安定性.015と両価性.417***，安定性 -.170と回避性 -.034，両価性.440*** と回避性 -.103であり，女子のみの分析において安定性 -.198と両価性.404**，安定性 -.322** と回避性.265*，両価性.468*** と回避性.304** であった（ここでは*F*値と決定係数は割愛する：有意確率はTableと同様）。男子のみの分析においては，安定性と回避性のTSCC-Aへの直接効果と間接効果は共に見られず，両価性の直接効果のみが認められ，相関分析及びTable 2と一致した結果であった。一方女子のみの分析においては，安定性と回避性を独立変数とした場合，つまり回避性のTSCC-Aへの直接・間接効果を統制した場合は安定性のβが有意となったが，安定性と両価性を独立変数とした場合，つまり両価性の直接・間接効果を統制した場合は安定性のβは有意とならず，安定性のTSCC-Aへの直接効果（Table 2における安定性のβ）も有意ではなかった。すなわち女子においては，安定性はTSCC-Aに対して両価性の影響を受けた間接効果を及ぼしており，全体の分析での単相関とβの相違は女子のデータの影響を受けたことが明らかとなった。

また男子のみの分析において，年齢・入所年齢とTSCC-Aの相関は有意でなかったが，重回帰分析で有意・有意傾向が見られたことについて検討するため，年齢とそれ以外の一変数ずつの二変数を独立変数，TSCC-Aを従属変数とする重回帰分析を五つの組合せについて行った。モデルは年齢と両価性の組合せのみ有意となり，βは年齢.197†，両価性.425*** となった。同様に入所年齢とそれ以外の二変数ずつを独立変数とした結果は，入所年齢と両価性の組合せのみ有意となり，βはそれぞれ -.133，.457*** となった。そこで年齢，両価性，入所年齢を独立変数とした結果，βはそれぞれ.254*，.469***，-.165となった（有意確率はTableと同

様)。結果から，年齢のTSCC-Aへの直接効果が両価性と入所年齢によって抑制されたことが見出され，入所年齢の直接効果についても他変数によって抑制されている可能性が見出された。

考　察

愛着状態の特性の影響と性差

第一に女子の方が男子よりも心的外傷性症状が高かったという結果は，先行研究を支持するものであった。使用した尺度TSCCの標準化の際にも，その性差の意味については検討されていないものの，同様の結果が見出されている（Briere, 1996）。男子よりも女子の方が心的外傷反応を強く表出する可能性があること，もしくは女子の方がより心的外傷を負いやすい可能性のあることが，親との離別を共通して体験した児童養護施設児を対象とした本研究においても支持されたものと考えられる。

次に愛着スタイル尺度の両価性得点が，全対象者，男女別のどちらの分析においても心的外傷性症状を高めていたという結果も先行研究を支持するものであった。両価性は，他者との関係において接近したいがうまく接近できないといった矛盾を孕んだ側面を捉えており，青年期前期の子どもにとってその特徴を持ち合わせること自体が心的葛藤のもと非常にストレスフルに認知されるものと考えられる。佐藤（1998）によると，両価タイプに分類される者は心理的負荷に過度に敏感で，それを誇張することで愛着対象（成人においては一般的他者や恋愛対象と置き換えられる）のケアを求めようとし，負荷の自己報告が最も大きい（Pianta, Egeland, & Adam, 1996）とされ，本研究の結果はこのような先行研究の知見を支持するものであったといえる。

一方で症状に回避性が影響するという先行研究の知見は女子のみの分析において支持された。女子の間では，特に中学生の時期，男子に比べ，対人距離を近付けることや対人接触を求められることがより多い可能性があり，そのために他者への接近を回避する回避性の特徴が心的外傷性症状を高めた可能性が考えられる。男子において回避性が心的外傷性症状へ影響を及ぼすことは見出されなかったが，先行研究から専門家による他者評定では回避タイプの症状が両価タイプに比べてより深刻であったこと（Dozier & Lee, 1995）が見出されている。回避性は安定した自己像や他者像に裏打ちされているとは言い難い特徴であり，潜在的に心理的危機に陥る危険性があると考えられるため，男子においても，両価性に加え回避性の特徴についても援助対象とする必要性があるものと考えられる。

児童養護施設児を対象として先行研究を支持する結果が認められたことは，児童養護施設児を対象とした実証的な愛着研究が少ない中で意義深いと思われ，また，被虐待体験の愛着への影響において臨床的知見と発達心理学的研究とを結び付ける一知見として重要であると思われる。一方で愛着各下位尺度の関連と心的外傷性症状への影響には性差が認められた。男子については愛着下位尺度間に中程度の相関が見られたものの，心的外傷性症状への直接効果は両価性のみが認められた。女子の結果において安定性と心的外傷性症状との間に両価性の影響を受けた擬相関が存在し，両価性と回避性の間に有意な相関は見られなかったものの，それぞれ心的外傷性症状への直接効果が認められた。この興味深い性差について，本研究のみでは児童養護施設児を対象としたため見られたのか，青年期前期だからこそ認められたのか，それとも全般的に認められるのか判断することはできない。しかし少なくとも，親との離別を共通して経験した児童養護施設児において，青年期前期に，愛着状態の構成や心的外傷性症状への影響に性差の存在する可能性を示唆することはできたと言えよう。

基本的属性の影響と性差

本研究では入所理由が虐待または放任であることと，心的外傷性症状との関連は見出されなかった。この結果は臨床的観点から考察されている内容とは相反するものである。この結果が得られた背景としては，三点の可能性が挙げられる。まず被虐待体験以外の心的外傷性体験を経験した子どもが存在する可能性，そして入所時に虐待または放任が確認されていなくても被虐待体験を持った子どもが存在する可能性がある。また入所時に被虐待体験が確認されていてもその影響が入所後の環境改善や対人関係によって緩衝された可能性がある。心理的虐待や性的虐待については表面化しにくく確認されにくいため入所後に確認されることも多い。さらに入所直後の症状と現在の症状との比較や被虐待体験の程度・種別・養育者との質的関係などの変数との詳細な検討が必要であり，今後更なる検討が待たれる。

また男子においてのみ，年齢が高いほど心的外傷性症状の強いことが見出された。これは，男子において青年期前期は年齢によって症状の強さに差のある時期である可能性を示すものと考えられる。女子においては年齢による差がなく，全対象者の分析においては女子の症状がより強いことから，女子において，年齢によって症状の強さに差のある時期は青年期前期以前である可能性もあろう。身体的心理的成長に伴って一時的に心的外傷性症状の強まる時期が存在することも考えられる。これについては幅広い年齢を対象とするか，縦断的研究によって検討することが必要である。また男子においてのみ，入所年齢が低いほど症状が強い有意傾向が認められた。入所年齢が低いことは養育者との分離を人生の早い時期に経験していることに繋がり，分離体験を経験する時期が早いほど，外傷性症状が強く現れる可能性や外傷体験を

負いやすい可能性が考えられる。本データでは有意傾向であり，また分離体験に関連する変数を詳細に検討することが必要であるため，これについては示唆に留まる。

本研究の限界と今後の課題

本研究で扱った愛着状態は，子どもの現在の主観的な表象であり，乳幼児期の愛着状態や入所後の変化は扱っていない。また一般中学生との統計的比較が必要であり，被虐待体験の種別や程度を含む心的外傷性症状の原因，離別体験の種類や個人の認知評価などについて検討することはできなかった。これらの点については，今後更なる検討が必要である。

また愛着状態が幼児期から成人期に至る発達過程の中で大きく変化する可能性が仮定され，それがどの時期のどのような要因に起因して生じるのかが問われている（遠藤，1992；Grossmann & Grossmann, 1990；Ricks, 1985）。変化を促す要因として，Bretherton (1990), Ricks (1985) は，ある時点で親以外との支持的で暖かい関係を享受することや，初期の愛着表象の内容とは根本的に異なる際だった情緒的体験をすること等の重要性を指摘している。様々な対象喪失を経験し，心的外傷体験を持っていると考えられる児童養護施設児において，入所後の対人関係によって，子どもの受けた心的外傷体験に対する衝撃を緩和することができるということは，職員にとっても子どもにとっても非常に大きな意義を持つと思われる。対象喪失体験の種類や時期などの，より詳細な条件と愛着状態の関連を検討すること，そして愛着状態がどのように，どのような要因によって変化するのかを明らかにすることにより，児童福祉領域においては，子どもにとっての施設の重要性や，子どもの成長発達にとってプラスに働く施設運営の要素などを示すことができるものと期待される。子どもを守る環境の向上を目指し，人間同士の相互関係というマニュアルのない環境の中で，奮闘されている職員を支えること，その働きの作用を実証的に示すこと，またその働きを保障するための豊富な人員配置や労働環境などの整備のために，臨床的実践と並行して更なる基礎的研究の蓄積と検討を行うことが必要であると思われる。

文　献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

飛鳥井望．(1999)．外傷後ストレス障害（PTSD）．*臨床精神医学*，**28**（増刊），171-177．東京：アークメディア．

Bartholomew, K., & Shaver, P. R. (1998). Method of assessing adult attachment: Do they converge? In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 25-45). New York: Guilford.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol. 1 : Attachment*. New York: Basic Book.

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2 : Separation : Anxiety and anger*. New York: Basic Book.

Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, **130**, 201-210.

Bretherton, I. (1990). Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, **11**, 237-252.

Bretherton, I., Ridgeway, D., & Cassidy, J. (1990). Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp. 273-308). Chicago: University of Chicago Press.

Briere, J. (1996). *Trauma symptom checklist for children scoring program*. Lutz, FL: Psychological Assessment Resources, Inc.

Cassidy, J., & Mohr, J. J. (2001). Unsolvable fear, trauma, and psychopathology: Theory, research, and clinical considerations related to disorganized attachment across the life span. *Clinical Psychology : Science and Practice*, **8**(3), 275-298.

Dozier, M., & Lee, S. (1995). Discrepancies between self- and other-report of psychiatric symptomatology: Effects of hyperactivating vs. deactivating strategies of attachment. *Development and Psychopathology*, **7**, 217-226

Dozier, M., Stovall, K. C., & Albus, K. E. (1999). Attachment and psychopathology in adulthood. In J. Cassidy, & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment : Theory, research, and clinical applications* (pp. 497-519). New York: Guilford.

遠藤利彦．(1992)．愛着と表象：愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観．*心理学評論*，**35**(2)，201-233.

藤野興一．(2005)．児童養護施設の乳幼児たち．*世界の児童と母性*，**59**，52-55．東京：資生堂社会福祉事業財団.

Grossmann, K. E., & Grossmann, K. (1990). The wider concept of attachment in cross-cultural research. *Human Development*, **33**, 31-47.

Grossmann, K. E., & Grossmann, K. (1991). Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp.93-114). New York: Routledge.

Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

Hazan, C., & Shaver, P. (1990). Love and work: An attachment-theoretical perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 270-280.

Herman, J. M. (1999). *心的外傷と回復*（増補版）（中井久夫，訳）．東京：みすず書房．(Herman, J. M. (1997). *Trauma and recovery* (rev. ed.). New York: Basic Books.)

平田ルリ子．(1999)．乳児期のかかわりで大切にしたいこと．*世界の児童と母性*，**47**，35-37．東京：資生堂社会福祉事業財団．

Horowitz, M., Wilner, N., & Alvarez, W. (1979). Impact of event scale: A measure of subjective stress. *Psychosomatic Medicine*, **41**(3), 209-218.

加賀美尤祥．(2001)．児童養護施設の現状と課題．*小児の精神と神経*，**41**(4)，229-231.

上林靖子・中田洋二郎・藤井和子・北　道子・斎藤万比古・佐藤至子・森岡由起子・生地　新・梶山有二．(1992)．ライフイベントと児童思春期の情緒の障害に関する研究．*社会精神医学*，**15**(1)，51-59.

金政祐司・大坊郁夫．(2003)．青年期の愛着スタイルと社会的適応性．*心理学研究*，**74**(5)，466-473.

加藤隆勝．(1984)．現代の思春期．加藤隆勝(編)，*思春期の人間関係：両親・先生・友だち*（pp.13-32）．東京：大日本図書．

北村俊則．(1984)．児童期の喪失体験と抑うつ状態：マッチド・ペアによる研究．特集社会・文化精神医学における事例研究：躁うつ病．*社会精神医学*，**7**(2)，114-118.

Kobak, R. R., & Sceery, A. (1988). Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.

久保田まり．(1995)．*アタッチメントの研究*．東京：川島書店．

Main, M., & Goldwyn, R. (1984). Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience: Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, **8**, 203-217.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton, & E. Waters, (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*. Monographs for the Society for Research in Child Development, **50**, 66-104.

増田彰則・山中隆夫・鄭　忠和．(2006)．思春期の精神的問題と性差．*性差と医療*，**3**(3)，305-310．東京：じほう．

三川俊樹．(1988)．青少年の生活ストレスと対処行動について．*青少年問題*，**39**，47-63．東京：青少年問題研究会．

Mikulincer, M., & Florian, V. (1998). The relationships between adult attachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes, (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 143-165). New York: Guilford.

Nader, K. O., Blake, D. D., & Kriegler, J. A. (1994). *Instruction manual : Clinician-administered PTSD scale, child and adolescent version*. White River Junction, VT: National Center for PTSD.

西澤　哲．(1994)．*子どもの虐待：子どもと家族への治療的アプローチ*．東京：誠信書房．

西澤　哲．(2003)．特集心的外傷　PTSDの診断をめぐる問題．*臨床心理学*，**3**(6)，771-847．東京：金剛出版．

西澤　哲・中島健一・三浦恭子．(2000)．児童養護施設に入所中の子どものトラウマ反応：TSCCの結果の分析から．*社会事業研究*，**31**，43-46.

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二．(1992)．中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果．*教育心理学研究*，**41**，302-312.

小此木啓吾．(1979)．*対象喪失*．東京：中公新書．

奥山眞紀子．(1999) 被虐待児の行動の特徴と臨床的意味：特集子ども虐待と心のケア．*世界の児童と母性*，**47**，6-9．東京：資生堂社会福祉事業財団．

奥山眞紀子．(2000)．特集虐待をめぐって　児童虐待と心のケア．*母子保健情報*，**42**，74-81．東京：母子愛育会．

奥山眞紀子・宮本信也・中島　彩・大川千尋・庄司順一・西澤　哲・北山秋雄・井上登生．(2000)．被虐待児の精神症状の特徴：愛着を含む他者関係および自己制御の問題を中心として．*厚生科学研究費補助金報告書：第6/7*，子ども家庭総合研究所，東京，426-446.

大西俊江・山下由利子・伊藤俊子・原　智子・林　光玉・足立富美子．(1994)．養護施設児に対する心理学的援助．*島根大学教育学部紀要：人文・社会科学第28号*，島根大学，島根，51-60.

Pianta, R. C., Egeland, B., & Adam, E. K. (1996). Adult attachment classification and self-reported psychiatric symptomatology as assessed by the Minnesota Multiphasic Personality Inventory-2. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**, 273-281.

Ricks, M. H. (1985). The social transmission of parental behavior: Attachment across generations. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment*

theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development, **50**, 211-227.

佐藤　徳. (1998). 内的作業モデルと防衛的情報処理. *心理学評論*, **41**(1), 30-56.

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会　日本総合愛育研究所. (1994). *日本子ども資料年鑑　第4巻　VI. 家族と子どもの福祉*. 愛知：KTC中央出版.

Shaver, P. R. & Hazan, C. (1993). Adult romantic attachment: Theory and evidence. In D. Perlman, & W. Jones (Eds.), *Advances in personal relationships : Vol. 4* (pp. 29-70). London: Kingsley.

庄司順一. (2000). 特集虐待をめぐって　家庭内暴力の現状と課題　子ども虐待. *母子保健情報*, **42**, 8-11. 東京：母子愛育会.

Siegel, D. J. (1999). *The developing mind : Toward a neurobiology of interpersonal experience*. New York: Guilford.

Simpson, J. A. (1990). Influence of attachment styles on romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 971-980.

曽田里美. (1998). 特集青少年の自立支援　児童養護施設における自立支援：自立への準備段階として必要なこと. *世界の児童と母性*, **45**, 34-37. 東京：資生堂社会福祉事業財団.

SPSS Inc. (2000). *SPSS ver. 10. 0. 8. Standard version* Chicago : SPSS Inc.

鈴木乙史. (1989). 母子家庭の心理学的研究：その問題点と今後の展望. *母子研究*, **10**, 31-40. 神奈川：真生会社会福祉研究所.

詫摩武俊・戸田弘二. (1988). 愛着理論から見た青年の対人態度：成人愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報第196号*, 東京都立大学, 東京, 1-16.

坪井裕子. (2005). Child Behavior Checklist/4-18(CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴：児童養護施設における調査の検討. *教育心理学研究*, **53**, 110-121.

堤　賢・高橋利一・西澤　哲・原田和幸. (1996). 被虐待児調査研究：養護施設における子どもの入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査研究. *日本社会事業大学社会事業研究所年報第32号*, 日本社会事業大学, 東京, 213-243.

van der Kolk, B. A. (2005). Developmental trauma disorder. *Psychiatric Annals*, **35**(5), 401-408.

Wagner, P. E., & Tangney, J. P. (1991). *Affective style, aspects of the self, and psychological symptoms*. Unpublished manuscript, Department of Psychology, George Mason University, Fairfax, VA.

Winnicott, D. W. (1979). 遊ぶことと現実 (橋本雅雄, 訳). 東京：岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1971). *Playing and reality*. Tavistock Publications Ltd., London: Associated Book Publishers Ltd.).

山岸明子. (1997). 青年後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究. *発達心理学研究*, **8**, 206-217.

付記

本研究は日本発達心理学会第15回大会でのポスター発表の一部を再分析したものである。また大阪大学大学院人間科学研究科修士論文を一部再分析して加筆したものである。本研究の実施にあたり，ご指導いただいた大阪大学大学院人間科学研究科柏木哲夫先生（現金城学院大学），藤田綾子先生，恒藤 暁先生（現大阪大学医学部）に深謝致します。またデータ収集に際し，ご協力を賜りました児童養護施設職員の方々と子ども達に厚く御礼申し上げます。

Deno, Minako (Graduate School of Human Sciences, Osaka University). *Attachment Organization and Traumatic Symptoms among Early Adolescents in Residential Institutions.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 77-86.

This research examined the effects of attachment style on traumatic symptoms in early adolescence (N=146, Age Mean=13 years 4 months, SD=10 months). The participants who had experienced object loss were in 10 residential institutions for children. Girls scored higher on traumatic symptoms than did boys, and anxious/ambivalent attachment style scores were positively related to traumatic symptoms for both genders. In addition, the traumatic symptoms of older boys were higher than younger boys, and anxious/ambivalent attachment style scores aggravated their traumatic symptoms. Boys who entered residential institutions at a younger age tended to have higher traumatic symptom scores, whereas only girls who scored high for anxious/ambivalent and avoidant attachment styles aggravated their traumatic symptoms. These results supported previous research findings, and suggested that gender may have an important role in activating the attachment system and in the attachment system's influence on traumatic symptoms in early adolescence.

【Key Words】 Early adolescence, Attachment, Trauma, Residential institution, Gender difference

2006. 7. 24 受稿，2008. 2. 7 受理

Appendix 1 *心的外傷性症状と愛着スタイル尺度下位尺度得点の平均と標準偏差，α係数*

		本データ		西澤ほか（2000）		Briere（1996）		α
		平均	*SD*	平均	*SD*	カットオフポイント		
心的外傷性症状								
不安	施設群	6.23	5.15	7.15	5.34	10.35	（男子）	.82
	対照群	—	—	4.70	4.23	14.05	（女子）	
うつ	施設群	6.50	5.46	6.67	5.33	10.50	（男子）	.81
	対照群	—	—	4.75	4.15	16.15	（女子）	
怒り	施設群	8.09	6.40	8.85	5.72	17.45	（男子）	.87
	対照群	—	—	5.96	4.98	18.75	（女子）	
外傷後ストレス	施設群	9.14	6.88	8.64	6.20	14.35	（男子）	.88
	対照群	—	—	7.35	5.51	19.50	（女子）	
解離	施設群	6.24	5.40	5.79	5.38	13.55	（男子）	.81
	対照群	—	—	4.86	3.95	16.15	（女子）	

		本データ		久保田（1995）		山岸（1997）		α
		平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	
愛着スタイル尺度								
安定性	男子	19.36	4.32	23.53	—	—	—	.73
	女子	18.65	4.36	23.59	—	19.39	4.04	
両価性	男子	18.58	4.30	15.91	—	—	—	.73
	女子	19.90	4.92	19.15	—	17.00	3.04	
回避性	男子	14.91	4.16	11.91	—	—	—	.61
	女子	15.81	4.41	11.19	—	15.45	4.56	

注．西澤ほか（2000）のデータは各110名を対象。対照群は施設群と属性を適合させて選定されており，7-15歳（M=11.89±2.50）である。
Briere（1996）のデータは13-16歳の男女別による。
Briere（1996）のカットオフポイントは平均＋1.5SDの値である。
山岸（1997）のデータは25-28歳女性31名を対象。
久保田（1995）のデータは一般中学生男子34名，女子26名を対象とし，安定性7項目，両価性7項目，回避性8項目計22項目を使用していたため，表の値は，本データの値と比較するため，掲載されていた値から筆者の再計算によって算出した値である。

Appendix 2 *心的外傷性症状の下位尺度と総得点，愛着スタイル尺度との相関分析結果*

	不安	うつ	怒り	外傷後ストレス	解離
心的外傷性症状					
うつ	.762***	1.000			
怒り	.689***	.636***	1.000		
外傷後ストレス	.855***	.734***	.637***	1.000	
解離	.784***	.724***	.715***	.788***	1.000
総得点	.909***	.865***	.848***	.899***	.903***
愛着スタイル尺度					
安定性	-.265**	-.394***	-.212*	-.234**	-.187*
両価性	.458***	.522***	.298***	.469***	.401***
回避性	.194*	.254**	.226**	.123	.146

注．*p<.05，**p<.01，***p<.001

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，87-97

原　著

育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に

荒牧　美佐子
（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科[1]）

無藤　隆
（白梅学園大学）

本研究の目的は，未就学児を持つ母親の抱く育児への否定的・肯定的感情とその関連要因について明らかにすることである。子どもを首都圏の幼稚園・保育所に通わせる母親に質問紙調査を行い，有効であった733名の回答に基づいて分析を行った。育児への否定的・肯定的感情に関する項目として，住田・中田（1999）の尺度を用い，確認的因子分析を行った結果，育児への「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」とに分かれることが確認された。そして，各々の関連要因について分析を行った結果，主に以下のことが明らかになった：①「負担感」は，末子の年齢が高いほど高く，夫や園の先生・友人らのサポートが多いほど低い。また，幼稚園群の方が保育所群よりも，専業主婦の方が有職者よりも高い傾向が見られる。②「育ちへの不安感」は男児を持つ母親で高い傾向にあり，「育て方への不安感」は夫からのサポートが多いほど低い。「育て方／育ちへの不安感」ともに情報サポートが多いほど高い。③「肯定感」は，夫や園の先生・友人らのサポートが多いほど高い。以上，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」の関連要因は一部重複しつつも，それぞれに違いがあることが確認された。

【キー・ワード】 育児への負担感，育児への不安感，育児への肯定感，ソーシャル・サポート，幼児を持つ母親

問題と目的

近年，少子化や核家族化などによる子育て環境の変化を背景に，育児不安や育児ストレスなど，育児に否定的な感情を持つ母親は増加する傾向にある（厚生労働省，2003）。だが，こうした感情を全く経験しない親などいないために（Deater-Deckard, 2004），それ自体は問題と言えない。問題なのは，育児不安や育児ストレスなどの否定的感情が高まることが，親業（parenting）や一般的な生活全体に対する満足度の低下（Crnic & Booth, 1991；Crnic & Greenberg, 1990）や，抑うつなど母親自身のメンタルヘルスの悪化（佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）をもたらしたり，子どもの発達，親子関係にネガティブな影響を及ぼしたりすることである（Belsky, 1984；Webster-Stratton, 1990）。

さて，こうした育児への否定的感情は“育児不安”あるいは“育児ストレス”などと呼ばれることが多い。だが，その名称や定義は統一されておらず，また同時に，その捉え方や内容も多岐に渡る。例えば，川井ほか（1999, 2000）は，2つのタイプの「育児困難感」として，「育児に自信が持てない」「子どものことでどうしたらよいかわからない」といった“育児への心配や戸惑い，不適格感”と，「子どものことがわずらわしくてイライラする」「子どもがかわいいと思えないことがある」といった“子どもへのネガティブな感情や攻撃・衝動性”とを挙げている。また，住田・中田（1999）は，育児不安という概念を「A. 育児についての一般的な不安感情」「B. 子どもの成長・発達に対する不安」「C. 母親自身の育児能力に対する不安」「D. 育児負担感・育児束縛感による不安」の4つに分類している。佐藤ほか（1994）は，育児ストレスを「子どもや育児に関する出来事や状況などが母親によって脅威であると知覚されることや，その結果，母親が経験する困難な状態」と定義した上で，「親関連ストレス」と「子ども関連ストレス」とに区別している。

欧米でも“parenting stress”（親業ストレス）に関する研究は数多く見られ，主に，親子関係理論（parent-child-relationship theory）と“日常的な煩わしさ”理論（daily hassle theory）の2つの理論に二分される（Deater-Deckard, 2004）。前者は，親，子ども，そして親子関係のそれぞれに起因するストレスが高まるに伴い，親業ストレスも高められ，それが親業と子どもの発達における問題へと発展すると説明している（Abidin, 1992）。一方，後者の理論は，親業ストレスが時間の経過とともにどのように展開していくか，親業や子どもの発達にどう影響を及ぼすか，そして親の心理的・身体的健康とどのような関連があるかを説明するのに，離婚や子どもの病気，経済的な貧困などの生活上の大きなストレス（major life stresses）よりも，日常的な育児場面で起こりうるストレス（minor daily stresses）を重視している。これはさらに，「子どもに合わせて，予定を変更せざるを得ない」

1）現所属：東京福祉大学

などの“親としての課題（parenting tasks）の遂行”と「子どもが公衆の場ではじっとしていられない」といった“子どもの挑発的行為（challenging behavior）”とに分類される（Crnic & Greenberg, 1990；Crnic & Low, 2002）。しかし，これら2つの理論は，互いに相反するものではなく，parenting stressを説明する上で，補完的であるとされる（Deater-Deckard, 2004）。

このように育児への否定的感情の捉え方は様々であるが，これらは，以下のような2つの枠組みにより分類可能と考えられる。第一は，育児への否定的感情は，母子の相互関係の文脈において生起されるということを前提に，「親側に起因する」ものと「子ども側に起因する」ものとに区別する枠組みである。佐藤ほか（1994）の育児ストレス尺度や，欧米の研究でしばしば用いられるParenting Stress Index（Abidin, 1983, 1990）などがこれに当てはまるだろう。そして第二は，育児への否定的感情をその質的な内容から区分する枠組みであり，育児への否定的感情は，日常的な育児場面において生じる苛立ちや束縛感，子どもへの嫌悪感などを含む「育児への負担感」と，子どもの発達や成長，自分自身の親としての適性への不安感を含む「育児への不安感」とに大別できると考えられる。例えば，川井ほか（1999, 2000）の「育児困難感」のうち，“育児への心配や戸惑い，不適格感”は「育児への不安感」に，“子どもへのネガティブな感情や攻撃・衝動性”は「育児への負担感」に分類できるし，“日常的な煩わしさ”（Crnic & Greenberg, 1990；Crnic & Low, 2002）は「負担感」の一部となるだろう。また，住田・中田（1999）の定義する4つの育児不安概念については，荒牧（2005）による探索的な因子分析の結果，「A.育児についての不安な感情」と「D.育児負担感・育児束縛感による不安」領域の項目により構成される“育児への負担感”因子と，「B.子どもの成長・発達に対する不安」と「C.自分自身の育児能力に対する不安」とで構成される“育児への不安感”因子の2因子が検出されている。そして，障害児を持つ親の育児ストレス研究においても，育児への「不安感」や（例えば，稲浪・小椋・Rodgers・西，1994），「負担感」（例えば，種子田・桐野・矢嶋・中嶋，2004）は，それぞれ重要な因子であることが指摘されている。

さて，このように育児への否定的感情が注目される一方で，子どもはかわいい，育児は大事な仕事だといった育児への肯定的感情は，世代によって変化がないとの指摘もある（柏木，2003；厚生労働省，2003）。単に育児への否定感だけが強まっているのではなく，育児に対して否定的・肯定的感情が混在し，心理的な葛藤状態にある母親が増加していると言えるだろう。すなわち，否定的・肯定的感情は，それぞれ別次元の感情と捉えるべきである。例えば，首藤・馬場（1995）は，「充実感」「疲労感」「否定感」の3つの下位尺度から構成された「育児感情測定尺度」を作成し，育児への否定的・肯定的感情それぞれが独立した概念としている。また，育児不安との関係について住田（1999）は，育児は母親の肯定的感情が基底をなしていると指摘している。そして，誰もがある程度の育児不安を抱えるが，育児への肯定的感情が確固としているために，育児不安が喚起されることはなく，それによる混乱も生じないが，育児不安が喚起され，育児への肯定的感情を上回るようになると，両者のバランスが崩れ，結果的に不安状況に陥ることになると説明している。

そして，育児の感情について，否定的・肯定的の両側面から説明しようとする場合には，第2の枠組みを採用した方が都合がよいであろう。しかし，この第2の枠組みは，第1の枠組みによる育児感情の捉え方を必ずしも否定するものではない。仮に否定的・肯定的側面を含めた育児への感情が，その内容的な違いからいくつかの因子に分かれるとき，それらは「親側」あるいは「子ども側」のいずれが起因となるかで，さらなる分類が可能だからである。しかし，質的側面からの分類を試みる第2の枠組みの場合，そこに明確な差があると証明するのは難しい。また，第2の枠組みを採用するこれまでの知見の多くは，探索的な因子分析の結果に基づく検証にとどまっている。これは，住田・中田（1999）の育児不安尺度を元に分析を行った荒牧（2005）においても同様である，よって，本研究では，育児への否定的・肯定的感情が，育児への「負担感」，「不安感」，「肯定感」の3因子によって構成されるとするモデルの因子的妥当性について，確認的因子分析を用いて検証する（研究Ⅰ）。そして，これらがそれぞれ独立した因子であるとするならば，その生起メカニズムも異なると考えられるため，育児への「負担感」「不安感」「肯定感」それぞれの関連要因について分析し，そこに違いが見られるかを検証する（研究Ⅱ）。

これまでの知見から，育児への否定的感情ついては，①親，②子ども，そして，③家族システムに関連する要因の3つに分類されている（Crnic & Low, 2002）。①親に関する要因には，親になることへの移行に伴うストレス（Cowan & Cowan, 1992）や，親の考え方や信念，態度（Abidin, 1992）などが挙げられる。②の子どもに関する要因では，発達障害・脆弱性・気質の困難さ・児童精神病理などが（例えば，水野，1998），そして③家族システムに関しては，パートナーとの親密性や，結婚満足度や夫婦関係との関連などが挙げられる（Belsky, 1984；Webster-Stratton, 1990；数井・無藤・園田，1996）。また，ソーシャル・サポートも，母親の親業ストレスを低める効果が指摘されている（Cochran & Niego, 2002；McVeigh, 2000；Melson, Windecker-Nelson,

& Schwarz, 1998)。

このように諸要因が挙げられる中，概ね共通して指摘されているのは，第一に，専業主婦の方が有職の母親よりも育児不安が高いといった母親の就労形態との関連である（例えば，牧野，1988；冬木，2000）。第二には，父親の育児参加の程度との関連が挙げられる（例えば，柏木・若松，1994；前田・松田，2000；牧野，1983；牧野・中西，1985）。また，否定的感情の研究より数は少ないが，育児への肯定的感情についても，母親の就労形態（柏木，2003）や父親の育児参加（柏木・若松，1994）との関連が指摘されている。

以上のことを踏まえ，研究Ⅱでは，親，子ども，そして家族システムに関するそれぞれの視点から，関連要因についての検証を行う。

子どもに関する要因　先行研究では，予め子どもの年齢が統制されている場合（Crnic & Greenberg, 1990；佐藤ほか，1994）や，育児感情と子どもの年齢や数，性別は，直接的な関連がない，あるいは大きくないとする知見がある（Deater-Deckard, 2004；牧野，1983）。その一方で，2，3歳児を持つ母親は，1歳児よりも，母親のイライラ感情や子どもへの攻撃性が高いといった指摘もあるなど（平岡・松浦・野村，2004），明確な結論は得られていない。子どもの年齢や数，性別は最も基本的な属性変数であるとともに，本研究では，育児への否定的感情を「負担感」と「不安感」の2側面から捉えることで，各側面にてこれらの変数との関連性に違いが生じる可能性がある。よって，これらを関連要因として取り上げることとする。

親に関する要因　基本属性として母親の年齢，就労形態，所属園の違いを取り上げる。

ソーシャル・サポート　母親を取り巻く周囲からのサポートは育児への否定的感情を低めると同時に，育児への肯定的感情を高める効果を持つことも予測される。サポートの提供者としては，夫や親族，友人の他に，親子ともに日常的にかかわりの深い幼稚園・保育所の先生も含める。また，これらの対人的サポート以外にも，育児期にある母親が影響を受けやすいと思われる育児雑誌や育児本などからの情報も，情報サポートとして設定した。

研　究　Ⅰ

目　的

育児への否定的・肯定的感情が，育児への「負担感」「不安感」「肯定感」の3つの因子により説明されるか否かについて，その因子的妥当性を確認的因子分析にて検証する。

方　法

手続き　電話帳に記載された連絡先に電話で交渉した結果，調査への協力を了承してくれた首都圏の保育所15園，幼稚園6園に調査の協力を依頼した。園の先生方を通じ，計2,481名の園児の母親に質問紙と返信用封筒の配布をお願いした。質問紙の回収は，園の都合に合わせた形で行い，うち8園では郵送による回収，残り13園では園を通して行った。調査時期は，2002年7～9月，2003年7～9月。有効回収数は830票（33.4％）であり，分析対象は，ふたり親家庭の母親733名分のみとした。そのうち，保育所366票，幼稚園367票である。分析には，統計処理用ソフトSPSS11.5JとAMOS4.0を使用した。

対象者の属性　保育所群の母親の平均年齢は33.9歳（範囲：22-47歳，SD＝4.7），末子の平均年齢は2.8歳（範囲：0-6歳，SD＝1.6）。フルタイマー62.5％，パートタイマー24.4％，専業主婦5.2％，その他7.4％，不明0.5％である。幼稚園群の母親の平均年齢は35.5歳（範囲：23-48歳，SD＝3.8），末子の平均年齢が3.5歳（範囲：0-6歳，SD＝1.7）。フルタイマー2.7％，パートタイマー10.7％，専業主婦78.1％，その他5.2％，不明3.3％である。

育児への否定的・肯定的感情尺度　住田・中田（1999）の育児不安尺度を使用した。このうち，荒牧（2005）による因子分析結果から，「育児への負担感」（6項目）と「育児への不安感」（6項目）と，「育児への肯定感」（4項目）の計16項目を使用し，「4. よくある～1. 全くない」の4件法にて得点化した。得点が高いほど，各感情が高いことを示す。また，子どもが複数いる場合には，特定の子どものことだけではなく，子育て全般を思い浮かべて，当てはまる項目を選択してもらった。

結果と考察

確認的因子分析を行うにあたり，2つのモデルを想定した。まずモデルAは，育児への「負担感」「不安感」「肯定感」の3因子構成を仮定するモデルである。そして，各因子を構成する項目の内容を検討し，「育児への不安感」については，親側・子ども側どちらに起因するかによってさらに分類可能と考えられたことから，2つの下位因子（「親の育て方への不安感」と「子どもの育ちへの不安感」）を設定したモデルBを想定した。モデルの適合度指標として，適合度指標（GFI），修正適合度指票（AGFI），平均二乗誤差平方根（RMSEA），赤池情報量基準（AIC）を求めた。確認的因子分析の結果，モデルAでは，GFI＝.86，AGFI＝.82，RMSEA＝.09，AIC＝897.42であり，やや適合度が低かったのに対し，モデルBでは，GFI＝.93，AGFI＝.90，RMSEA＝.06，AIC＝513.13であり，いずれもモデルAよりも適合度が高く，データのあてはまりの良いことが確認された。よって，モデルBを採用することとした（Figure 1）。そして，これによって得られた下位尺度ごとにα係数を算出したところ，育児への「負担感」が.80，「育て方／育ちへの不安感」のうち，

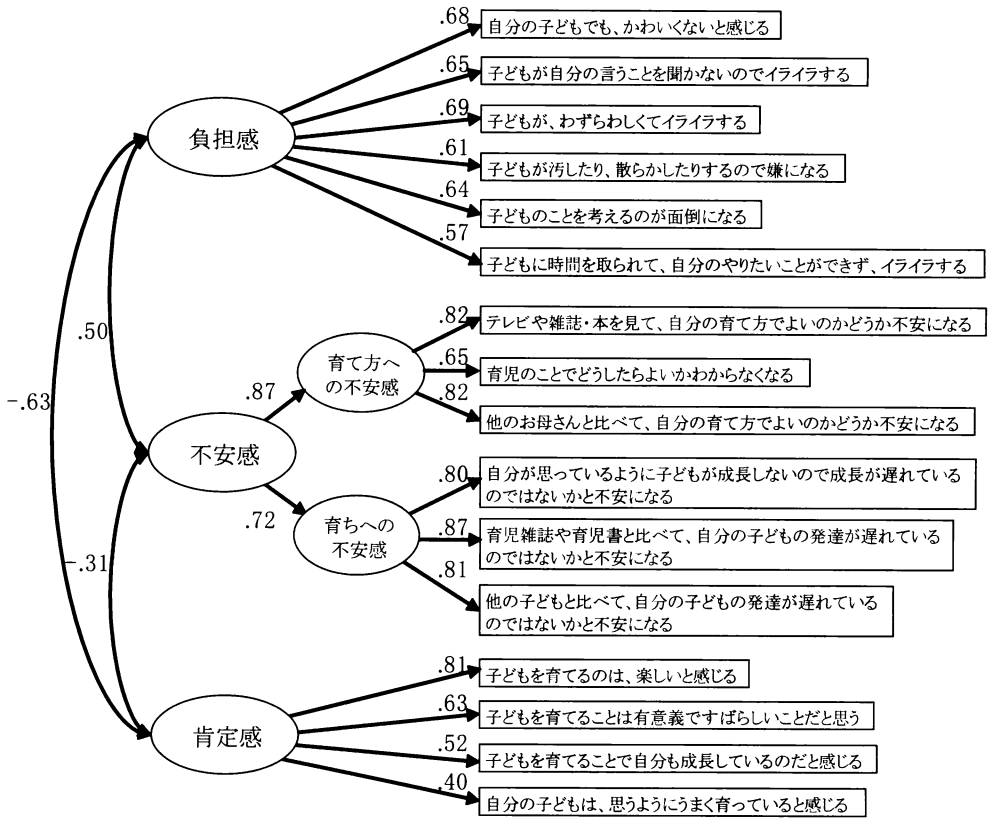


Figure 1 *育児への否定的・肯定的感情尺度の確認的因子分析結果（モデルB）*

「育て方への不安感」が.80,「育ちへの不安感」が.86,「肯定感」が.68であり，概ね良好な値であったことから，内的整合性は十分であると判断した。以上のことから，育児への感情は「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」により構成されているということが明らかになった。

研究 II

目的

育児への「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」の関連要因を明らかにする。仮説を以下に述べる：(1) きょうだいがいる方が「子どもに合わせて，予定を変更せざるを得ない」などの“親としての遂行課題”が増え，また，末子年齢が高くなるほど，運動能力が発達し，活動性や行動範囲が拡大するため（平岡ほか，2004）に，「子どもが公衆の場ではじっとしていられない」などの“子どもの挑発的行為”が増えると考えられる。さらに，男児は女児よりも攻撃性が強いという知見（Rubin, Hstings, Chen, Stewart, & McNichol, 1998）や，概して男児の方が女児よりも，不服従や多動傾向などの問題行動が多く見られるなどの指摘（Deater-Deckard, 2004）などから，こうした母親の方が母親の「負担感」は高いだろう。末子年齢が低く，ひとりっ子の方が，母親の子育ての経験が浅いために，「育て方／育ちへの不安感」は高いだろう。また「負担感」と同様，男児を持つ母親の方が「育て方／育ちへの不安感」も高いだろう。住田（1999）の指摘するように，肯定的感情が育児の基底を成すとすれば，「肯定感」と子どもの年齢や数，性別は関連ないだろう。(2) 母親の年齢は，先行研究の指摘どおり（Deater-Deckard, 2004；牧野，1983），関連ないだろう。有職の母親の方が，また，幼稚園群より保育所群の方が，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」が低く，「肯定感」が高いだろう。(3) 夫・親族・親族外からのサポートが多いほど，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」は低く，「肯定感」は高いだろう。情報サポートと「負担感」「肯定感」には関連がないだろう。情報が多く，振り回されるほど「育て方／育ちへの不安感」は高いだろう。

方　法

研究Ⅰに同じ。

調査項目

育児への否定的・肯定的感情尺度　研究Ⅰに同じ。

ソーシャル・サポート尺度　母親がどのくらいのサポートを受けていると認知しているかについて，久保（2001）を参考にして，以下の項目を設定した。①道具的・情緒的サポート（計4項目）は，「夫／妻方の親／夫方の親／母親の兄弟姉妹／友人／幼稚園・保育所の先生」らがどの程度サポート源となっているか「4. とてもそう～1. 全くそうではない」で評定してもらい，提供者ごとの尺度得点を算出した。②情報サポートは，「育児書／育児雑誌／テレビの育児番組／インターネット上の子育て情報／新聞の育児欄／保健所や児童相談所などの専門機関／市の広報」からどのくらい情報を得ているか「4. とてもしている～1. 全くしていない」で得点化した。高得点ほど情報サポートが多いことを示す。

結果と考察

子ども／母親に関する変数　末子年齢と育児への各感情尺度得点との間に相関係数を算出したところ，末子年齢と「負担感」との間に正の相関があったが，母親の年齢とはいずれも相関がなかった（Table 1）。きょうだいの有無，子どもの性別については，これらの変数を掛け合わせ，「1人×男児」「1人×女児」「2人以上×男児」「2人以上×女児」「2人以上×両性」の5つのカテゴリーを作った。また，母親の就労形態では，保育所群の母親はほぼ全員が就労している（保育所群のうち95％）のに対し，幼稚園群は専業主婦の割合が多いといった具合に偏りが見られたことから，幼稚園群を専業主婦（無職）群と有職群（パート／フルタイマー）に，さらに，保育所群はパートタイマーとフルタイマーの2群に分け（専業主婦は分析から除外），それぞれを組み合わせた上で計4群に分類した。なお，幼稚園，保育所群ともに，その他の就労形態群と不明群は除外した。そして，この「きょうだいの有無×子どもの性別」カテゴリーと「所属園×母親の就労形態」カテゴリーの2要因を独立変数とし，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」の4因子を従属変数とした二元配置の分散分析を行った（Table 2）。まず，「負担感」については，「きょうだいの有無×子どもの性別」（$F(4,641)=3.27$, $p<.05$）と「所属園×母親の就労形態」（$F(3,641)=5.74$, $p<.01$）の主効果が有意であった。Tukey法による多重比較の結果，「2人以上×男児」群が「1人×女児」より有意に高かった。また，「保育所×フルタイマー」群が，「幼稚園×専業主

Table 1　*変数間同士の単純相関係数*

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 育児への負担感	1.00									
2. 育て方への不安感	.37**	1.00								
3. 育ちへの不安感	.29**	.53**	1.00							
4. 育児への肯定感	-.44**	-.19**	-.32**	1.00						
5. 母親の年齢	.05	-.06	-.02	.04	1.00					
6. 末子年齢	.12**	.01	.00	-.03	.39**	1.00				
7. 夫サポート	-.25**	-.15**	-.08	.27**	-.02	-.05	1.00			
8. 親族サポート	-.15**	.01	-.08	.17**	-.12**	-.11*	.17**	1.00		
9. 親族外サポート	-.15**	-.01	-.10*	.22**	-.04	.04	.12**	.39**	1.00	
10. 情報サポート	-.06	.20**	.25**	.07	-.02	-.10*	.12**	.15**	.10*	1.00

注．*$p<.05$, **$p<.01$

Table 2　*「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」を従属変数とした二元配置の分散分析の結果*

子数×性別	1人×男児				1人×女児				2人以上×男児				2人以上×女児				2人以上×両性				分散分析		
所属園×就労形態	保×フル	保×パート	幼×有職	幼×専業	保×フル	保×パート	幼×有職	幼×専業	保×フル	保×パート	幼×有職	幼×専業	保×フル	保×パート	幼×有職	幼×専業	保×フル	保×パート	幼×有職	幼×専業	きょうだい有無×性別	所属園×就労形態	交互作用
被験者数	50	14	7	30	45	13	10	19	38	22	9	48	30	5	16	60	64	32	26	123			
負担感	13.3 (2.2)	14.4 (2.9)	16.1 (2.7)	15.2 (3.3)	13.6 (2.6)	14.5 (3.3)	12.7 (2.1)	14.2 (2.6)	14.3 (2.8)	16.0 (3.2)	16.2 (2.6)	15.2 (3.1)	14.2 (2.8)	13.2 (2.2)	14.7 (3.3)	15.1 (3.2)	14.0 (3.0)	14.3 (2.9)	15.5 (3.6)	15.6 (2.8)	3.27*	5.74**	*ns*
育て方への不安感	7.0 (2.0)	6.9 (1.3)	6.4 (2.4)	7.0 (2.0)	6.5 (1.9)	6.9 (2.5)	5.9 (1.8)	7.5 (1.7)	6.8 (1.7)	7.7 (2.0)	6.5 (1.3)	6.8 (1.7)	6.7 (1.9)	6.4 (1.5)	6.2 (1.2)	6.9 (1.7)	6.3 (1.9)	7.0 (1.9)	6.9 (1.7)	7.4 (1.8)	*ns*	2.97*	*ns*
育ちへの不安感	5.4 (2.2)	6.2 (1.8)	6.0 (2.9)	6.1 (2.8)	4.6 (1.6)	5.5 (2.1)	4.6 (1.3)	5.4 (2.0)	5.3 (2.0)	6.2 (2.6)	5.2 (2.0)	5.4 (1.8)	5.0 (1.6)	4.6 (1.8)	4.9 (1.8)	4.9 (1.7)	4.6 (1.7)	4.8 (1.7)	4.9 (1.3)	5.5 (2.0)	4.08**	*ns*	*ns*
肯定感	12.8 (1.9)	12.4 (1.8)	12.3 (1.7)	12.0 (2.4)	14.0 (1.6)	12.5 (2.1)	13.1 (1.3)	12.5 (2.3)	13.3 (1.7)	11.6 (2.2)	13.4 (1.7)	12.7 (2.0)	13.3 (1.6)	13.4 (3.1)	13.0 (1.7)	12.9 (1.8)	13.1 (1.9)	12.4 (1.8)	12.6 (2.2)	12.3 (2.1)	*ns*	6.89***	*ns*

注．*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$。（　）は*SD*

婦」群，「幼稚園×有職」群よりも有意に「負担感」が低く，幼稚園群の方が保育所群より高くなる傾向が見られた。続いて「育て方への不安感」は，「所属園×就労形態」の主効果のみが有意であり（$F(3,641)=2.97$, $p<.05$），多重比較の結果，「幼稚園×専業主婦」群が，「幼稚園×有職」群より有意に高かった。「育ちへの不安感」では，「きょうだい有無×性別」の主効果のみが有意であり（$F(4,641)=4.08$, $p<.01$），多重比較の結果，「1人×男児」群の「育ちへの不安感」が，「1人×女児」「2人以上×女児」「2人以上×両性」群よりも高いことがわかった。最後に，「肯定感」については，「所属園×就労形態」の主効果のみが有意であり（$F(3,641)=6.89$, $p<.001$），多重比較の結果，「保育所×フルタイマー」群が，「幼稚園×専業主婦」「保育所×パートタイマー」群よりも有意に「肯定感」が高いことが明らかになった。

ソーシャル・サポート変数　対人的サポートのうち，妻方／夫方の親／母親の兄弟姉妹からのサポートをひとまとめにして「親族サポート」，友人／園の先生からのサポートを「親族外サポート」とした。これらに情報サポートを加えた4つのサポート変数と「負担感」らとの相関係数を算出した結果（Table 1），夫からのサポートは，「負担感」「育て方への不安感」と負の相関，「肯定感」とは正の相関関係にあった。これに対し，親族サポートは「負担感」と負の相関，「肯定感」と正の相関関係にあり，親族外サポートは，さらに「育ちへの不安感」とごく弱い負の相関が見られた。また，情報サポートは「育て方／育ちへの不安感」との間で正の相関関係にあった。

各説明変数と「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」との関連

最後に，どの変数との関連が大きいかを検証するために，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」を従属変数とした階層的重回帰分析を行った（Table 3, 4）。モデルⅠでは，子どもに関する変数（末子年齢・きょうだい有無・子どもの性別）の関連を検討した。子どもの性別は，男児のみ群をレファレンスグループとし，女児のみダミーと両性ダミーを作成した。モデルⅡには，母親に関する要因として，母親の就労形態×園の関連を検討した。ここでは，保育所×フルタイム群をレファレン

Table 3　*階層的重回帰分析に用いた変数の平均値・標準偏差*

		M	*SD*
育児への負担感		14.7	3.1
育児への不安感	育て方への不安感	6.9	1.9
	育ちへの不安感	5.3	2.0
育児への肯定感		12.7	2.0
末子年齢		3.1	1.7
きょうだいダミー		0.7	0.4
子どもの性別	女児のみダミー	0.3	0.5
	両性ダミー	0.4	0.5
母親の就労形態	保×パートダミー	0.1	0.3
	幼×有職ダミー	0.1	0.3
	幼×専業主婦ダミー	0.4	0.5
夫サポート		11.9	2.9
親族サポート		29.7	7.8
親族外サポート		21.6	4.8
情報サポート		13.2	3.5

Table 4　*育児への「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」を従属変数とした階層的重回帰分析の結果*

		育児への負担感			育児への不安感 育て方への不安感			育児への不安感 育ちへの不安感			育児への肯定感		
		$n=495$			$n=495$			$n=495$			$n=495$		
		標準偏回帰係数（β）			β			β			β		
説明変数		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
末子年齢		.13**	.10*	.10*	.01	.01	.04	.00	-.02	.01	-.04	-.02	-.02
きょうだいダミー		.11*	.07	.06	-.03	-.05	-.02	-.04	-.06	-.03	.02	.05	.06
子どもの性別	女児のみダミー	-.04	-.05	-.05	-.10	-.09	-.10	-.17**	-.17**	-.18***	.10	.10	.09
	両性ダミー	.04	.03	.04	-.02	-.02	-.02	-.11	-.12*	-.11*	-.05	-.04	-.06
母親の就労形態	保×パートダミー		.08	.04		.09	.06		.11*	.10*		-.14**	-.10*
	保×有職ダミー		.10*	.07		-.01	-.04		.05	.03		-.05	-.02
	保×専業主婦ダミー		.18***	.14**		.09	.07		.12*	.10*		-.17**	-.12*
夫サポート				-.19***			-.17***			-.07			.21***
親族サポート				-.04			.03			-.04			.03
親族外サポート				-.11*			-.02			-.10*			.19***
情報サポート				.01			.23***			.28***			.01
R^2		.04**	.06***	.12***	.01	.02	.09***	.02*	.04**	.13***	.02	.04**	.14***
ΔR^2			.03**	.06***		.01	.07***		.01	.09***		.03**	.10***

注．*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

スグループとして，保育所×パートダミー，幼稚園×有職ダミー，幼稚園×専業主婦ダミーの各ダミー変数を作成した。そしてモデルⅢでは，夫／親族／親族外／情報サポートの4変数を加えたモデルを検討した。

「負担感」との関連要因　まず，モデルⅠについては，子どもに関する要因のうち，末子の年齢ときょうだい有無との関連が有意であった。モデルⅡでは，モデルⅠと比較した決定係数の上昇が有意となり（$\Delta R^2=.03$, $p<.01$），母親の就労形態×園の違いが有意に関連していることが明らかとなった。そしてモデルⅢでは，モデルⅡと比較した決定係数の上昇が有意となった（$\Delta R^2=.06$, $p<.001$）。また，夫のサポートと親族外サポートのみが有意に関連しており，これらからのサポートが多いほど「負担感」は低い傾向が見られた。

「育て方への不安感」の関連要因　子どもに関連する変数との関連は有意ではなかった。また，モデルⅡとモデルⅠとを比較した決定係数の上昇は有意ではなく，（$\Delta R^2=.01$, ns），母親の就労形態×園との関連も有意ではなかった。しかし，モデルⅢでは，モデルⅡと比較した決定係数の上昇が有意となった（$\Delta R^2=.07$, $p<.001$）。対人的サポートのうち夫のみが有意であり，情報サポートとは正の相関関係にあることが明らかとなった。

「育ちへの不安感」の関連要因　子どもの年齢や数との関連は見られず，性別による違いと関連していた。モデルⅡでは，モデルⅠと比較した決定係数の上昇が有意ではなかったものの（$\Delta R^2=.01$, ns），母親の就労形態×園とは有意な関連が見られた。さらにモデルⅢでも，モデルⅡと比較した決定係数の上昇が有意となった（$\Delta R^2=.09$, $p<.001$）。親族外からのサポート並びに情報サポートとの関連が有意であることが明らかとなった。

「肯定感」の関連要因　子どもに関する要因との関連はいずれも有意ではなかった。モデルⅡでは，モデルⅠと比較した決定係数の上昇が有意となり（$\Delta R^2=.03$, $p<.01$），母親の就労形態×園との関連が明らかになった。またモデルⅢでは，モデルⅡと比較した決定係数の上昇が有意となった（$\Delta R^2=.10$, $p<.001$）。また，夫・親族外サポートとで有意な関連が見られる一方，親族サポートならびに情報サポートとの関連は有意ではなかった。

以上の結果をもとに，仮説を検証する。まず（1）のうち，「負担感」と末子の年齢について仮説は支持された。ただし，子どもの性別については，重回帰分析の結果，有意な結果は見られず，仮説は支持されなかった。きょうだいは，いた方が「負担感」の強い傾向が見られるにとどまった。「育て方／育ちへの不安感」はいずれも，子どもの年齢，数とは関連がなく，仮説は支持されなかった。ただし，子どもの性別は「育ちへの不安感」とだけ関連が見られ，仮説は支持された。また，「肯定感」は，仮説どおり，子どもの年齢やきょうだいの有無，性別と関連が見られなかった。（2）の母親の就労形態との関連については，ほぼ仮説が支持されたが，「育て方への不安感」については，階層的重回帰分析の結果では関連がなかった。そして（3）について，夫サポートに関してはほぼ仮説通りであったが「育ちへの不安感」とは関連がなかった。親族サポートは重回帰分析の結果，いずれとも有意な関連はなかったが，親族外サポートは，「育て方への不安感」以外の感情と関連があった。そして，情報サポートと「育て方／育ちへの不安感」については仮説を支持した。以上，各感情で重複する要因も見られたため，これらが質的に全く異なるとは断言できないが，それぞれに違いもあることから，同一であるとも言えない。一部重複する感情であることを認めつつ，それぞれの背景にある母親の心理の違いについて考察する。

統合的議論

育児への否定的感情における2つの側面

今回の確認的因子分析の結果で，育児への感情は，「負担感」「不安感」「肯定感」の3因子構造となり，さらに，「不安感」については，住田・中田（1999）の指摘するように，「母親自身の育児能力に対する不安」（育て方への不安感）と「子どもの成長・発達に関する不安」（育ちへの不安感）とに分けた方がモデルとして当てはまりのよいことが確認された。しかし，これらは完全に切り離される感情ではない。子どもの成長や発達に不安を抱くがゆえに，自分の育児能力に自信が持てなくなると考えられるし，その逆もあり得る。すなわち，子どもの発達や成長に対する不安と，自分の育て方に対して自信が持てないという感情は，表裏一体である。また，「育て方／育ちへの不安感」は，子どもの発達・成長への不安であることから，今すぐに問題が“解決する・しない”ではない，子どもの将来のことまで視野に入れた漠然とした恐れであり，親にとっては長期的・継続的な問題として捉えられるのではないだろうか。一方「負担感」は，育児から解放されたい，自分の時間がほしいなど，今その瞬間におかれている状況に対するイライラであることから，当座の感情の現れとも考えられる。以下，これらの感情の質的・内容的な差について，それぞれの関連要因からどう読み取れるか考察していく。

「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」の質的な違い

まず，「育児への負担感」は分散分析の結果から，子ども要因（「きょうだいの有無×性別」），母親要因（「所属園×母親の就労形態」）のいずれの主効果も確認され

た（Table 2）。きょうだい有無については，階層的重回帰分析モデルⅠにおいて，末子年齢はモデルⅠからⅢの全てにおいて「負担感」との関連が見られ，子どもが1人よりも2人以上いる場合，また，末子年齢が高いほど「負担感」が高い傾向にあることがわかった（Table 4）。一方，子どもの性別については，分散分析の多重比較の結果，「2人以上×男児」群が「1人×女児」より有意に高いことが確認されたのみで，重回帰分析の結果からは，有意な関連は見られなかった。性別そのものが「負担感」増大の直接的な要因になるというよりも，問題行動傾向がみられるかどうかに性差が関連している可能性がある。今後は，子どもの気質や問題行動との関連について分析していく必要があるだろう。Crnic & Greenberg（1990）は“親としての課題の遂行”や“子どもの挑発的行為”が親業ストレスの要因となると指摘しているが，きょうだいゲンカをする，おもちゃを片付けない，親のいうことを聞かないことなどは，母親にとってはイライラする原因となり，それが「負担感」に結びつくと予測される。このように，育児への手間やそれに伴う煩わしさとともに「負担感」が増大するのであれば，母親自身が日常的にどのくらい育児に拘束されているか，また，周囲からどのくらい道具的なサポートが得られているかによって，「負担感」に差が生じるはずである。預かり時間の短い，すなわち育児への負担の大きい幼稚園群の方が保育所群よりも，また，育児に携わる時間の長い専業主婦が有職の母親よりも「負担感」が高いという結果（Table 2）や，夫や，友人・園の先生からのサポートが多いほど「負担感」が低いという結果（Table 4）がこれらを裏付けている。

そして，「育て方への不安感」は母親関連要因，「育ちへの不安感」は子ども関連要因との関連が確認された（Table 2）。ただし「育て方への不安感」と母親関連要因との関連はごく弱いものであったことや，階層的重回帰分析の結果では有意ではなかったことから（Table 4），母親の就労や所属園の違いによる差はあまりないと考えてよいだろう。「育ちへの不安感」は，きょうだいの数ではなく，性別と関連があり，男児を持つ方が女児よりも「不安感」の高い傾向が見られた（Table 2）。先述の通り，男児の方が攻撃性の強く，多動などの問題行動が多いことや，子どもの発達に関する親の懸念が女児より男児の方が高い（野沢，1989）ことなどが要因として考えられる。一方で「育て方への不安感」とは，子どもの特定の行動や行為に対してというよりも，育児に関わる全体的な文脈の中で喚起される不安かもしれない。今後，「育て方への不安感」の生起メカニズムについて，更なる分析が必要である。また，サポートについては，「育て方への不安感」は，夫サポートとの関連が確認された（Table 4）。「育て方への不安感」の高まった状態とは，母親自身が客観性を失って混乱し，育児に対して必要以上に過敏になりすぎているために，親としての自信を喪失している状態とも考えられる。夫が積極的に育児に参加し，そういう状態に陥らずにすめば，「育て方への不安感」は高まらずにすむのかもしれない。一方で，「育ちへの不安感」については，園の先生や友人のサポートとの関連が認められた。子どもの発達や成長に関する悩みは，同じ母親同士や専門家である園の先生からの助言などのサポートが有効なのであろう。これとは逆に，情報をたくさん得ている母親ほど，「育て方／育ちへの不安感」が高いという結果が得られた。これは，育児に関する多くの情報を得て，それに振り回されることにより「不安感」が煽られる，あるいは，高まった「不安感」を解消するために，より多くの情報を得ようとしているなどの可能性が考えられるが，その因果関係については，今後縦断研究などを通じ検討する必要があるだろう。

最後に「育児への肯定感」は，分散分析並びに階層的重回帰分析の結果，子どもの要因との関連は見られなかった（Table 2, 4）。「肯定感」とは，子どもの年齢や性別，きょうだい数などにかかわらず，母親の育児感情を支える基盤となりうると考えられる。こうした感情に支えられてこそ，多少の困難や苦労があっても，育児に携わることができるのではないだろうか。また，フルタイマー群の母親の「肯定感」は，専業主婦や保育所群のパートタイマーよりも高いことから（Table 2），母親が仕事をもち，育児と自分のキャリアとを両立させている方が，育児を肯定的に捉え，楽しめているものと推察される。さらに，夫や友人・園の先生からのサポートが多いと「肯定感」も高いことから（Table 4），周囲からの支えや助けも「肯定感」を支える上で重要であることが明らかになった。

以上の結果を踏まえ，今後の子育て支援のあり方について考える。まず，「負担感」との関連では，夫が平日も育児に関われるよう帰宅時間を早めるなど，雇用状況の改善を含めた物理的な環境整備が望まれるところである。また，これまでの分析から，「負担感」は末子年齢が高いほど，そして専業主婦で強いことが明らかになっている。よって，園での預かり保育など，母親が一時的にでも育児から解放されたり，子ども同士でも安心して遊ばせられたりするような場所の確保が，「負担感」を軽減するのに効果的であると考えられる。「育て方／育ちへの不安感」については，情報サポートとの関連も考慮し，園において，子どもの発達や成長や，子どもへの関わり方などに対する適切な情報を提供することなどが重要であろう。特に，男児を持つ母親で「育ちへの不安感」が高い傾向が見られたので，男児を持つ親同士の情報交換など，保護者同士のネットワーク作りの場を提供することなども意味があると考えられる。このように，

幼稚園・保育所が中心となり，子育てを通じた保護者同士の関わりを深めていけるよう働きかけることは，「育児への肯定感」を支える点でも重要であるといえる。そして，さらにどういった子育て支援が効果的であるかを明らかにしていくには，育児への感情とその関連要因について，より掘り下げて分析していく必要がある。特に子どもの年齢や数，性別については，先行研究においても要因として挙げられている子どもの気質（Crnic & Low, 2002；水野，1998；McBride, Schoppe, & Rane, 2002；Mulson, Caldera, Pursley, Peifman, & Huston, 2002）や問題行動（Shaw, Winslow, Owens, & Hood, 1998）などとの関連も含め，さらなる分析が必要である。

最後に，本研究の限界を以下3点挙げる。第一は，質問紙の回収率が約33％と低い点である。幼児を持つ母親が対象であったため，やむを得ない面もあるが，今後は謝礼の準備など，回収率を上げるための工夫が必要である。第二は，横断調査のため規定要因まで言及できなかった点であり，今後，縦断調査によってこれらを明らかにする必要がある。第三に，階層的重回帰分析の全体的な説明率の低さが否めない点が挙げられる。母親のパーソナリティや子どもの気質など，他の変数を含めた分析が必要であろう。そして，育児への感情と子どもの気質との関連について明らかにするには，特定の子どもとの関係に絞り，回答してもらうなどの配慮も必要である。

これらの限界を認めつつも，先行研究によって様々に定義されてきた育児への否定的・肯定的感情は，「負担感」「育て方／育ちへの不安感」「肯定感」によって整理・分類が可能であること，また，一部重複しながらも，それぞれの関連要因に違いが見られたことが本研究で明らかになった点である。特に，先行研究でたびたび強調されてきた母親の就労形態の違いや，夫のサポート効果についても，育児感情の側面によっては，大きな関与が認められなかったというのは興味深い点だと思われる。今後は，子どもの気質や問題行動の他にも，母親のパーソナリティなど母子それぞれの個人内要因も分析に組み込み，これらを統制した上で，さらにどういったサポートが育児感情に対して効果を持つのか検証していく。また，それと同時に，各感情の生起メカニズムについても明らかにしていくことが，今後の子育て支援のあり方に対する具体的な提言へとつながるものと考える。

文　献

Abidin, R.R. (1983). *The parenting stress index*. Charlottesville, VA: Pediatric Psychology Press.

Abidin, R.R. (1990). Introduction to the special issue: The stresses of parenting. *Journal of Clinical Child Psychology*, **19**, 298-301.

Abidin, R.R. (1992). The determinants of parenting behavior. *Journal of Clinical Child Psychology*, **21**, 407-412.

荒牧美佐子．(2005)．育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連：ひとり親・ふたり親の比較から．*小児保健研究*，**64**，737-744.

Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, **55**, 83-96.

Cochran,M., & Niego, S. (2002). Parenting and social networks. In M.H. Bornstein (Ed), *Handbook of parenting: Vol.4. Practical issues in parenting* (2nd ed., pp.123-148). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Cowan, C.P., & Cowan, P.A. (1988). Who dose what when partners become parents: Implications for men, women, and marriage. *Marriage and Family Review*, **12**, 105-131.

Crnic, K.A., & Booth, C.L. (1991). Mother's and father's perceptions of daily hassles of parenting across early childhood. *Journal of Marriage and the Family*, **53**, 1042-1050.

Crnic, K.A., & Greenberg, M.T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, **61**, 1828-1637.

Crnic, K.A., & Low, C. (2002). Everyday stresses and parenting. In M.H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Vol.5. Practical issues in parenting* (2nd ed., pp. 243-267). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Deater-Deckard, K. (2004). *Parenting stress*. New Haven and London: Yale University Press.

冬木春子．(2000)．乳幼児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因：母親の属性及びソーシャルサポートとの関連において．*現代の社会病理*，**15**，39-56.

平岡康子・松浦和代・野村紀子．(2004)．乳幼児を持つ就労女性の育児ストレスと職業性ストレスの分析．*小児保健研究*，**63**，647-652.

稲浪正充・小椋たみ子・Rodgers, Catherine・西信高．(1994)．障害児を育てる親のストレスについて．*特殊教育学研究*，**32**(2)，11-24.

柏木惠子．(2003)．*家族心理学：社会変動・発達・ジェンダーの視点*．東京：東京大学出版会.

柏木惠子・若松素子．(1994)．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．*発達心理学研究*，**5**，72-83.

川井　尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村　敬・安藤朗子・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也．(1999)．育児に関する臨床的研究Ⅵ：子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究．*日本子ども家庭総合研究所紀要第36集*，日本子ども家庭総合研究所，東京，117-138.

川井　尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・安藤朗子・

中村　敬・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也. (2000). 育児不安のタイプとその臨床的研究Ⅶ: 子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成. *日本子ども家庭総合研究所紀要第37集*, 日本子ども家庭総合研究所, 東京, 159-180.

数井みゆき・無藤　隆・園田菜摘. (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. *発達心理学研究*, **7**, 31-40.

厚生労働省. (2003). *厚生労働白書平成15年度版*. 東京：ぎょうせい.

久保桂子. (2001). 働く母親の個人ネットワークからの子育て支援. *日本家政学会誌*. **52**, 135-145.

前田正子・松田茂樹. (2000). 父親の育児参加に関する研究. *LDI REPORT*, **2**, 5-24.

牧野カツコ. (1983). 働く母親と育児不安. *家庭教育研究所紀要第4号*, 家庭教育研究所, 神奈川, 67-76.

牧野カツコ. (1988). 〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討. *家庭教育研究所紀要第10号*, 家庭教育研究所, 神奈川, 23-31.

牧野カツコ・中西雪夫. (1985). 乳幼児を持つ母親の育児不安：父親の生活および意識との関連. *家庭教育研究所紀要第6号*, 家庭教育研究所, 神奈川, 11-24.

McBride, B.A., Schoppe, S.J., & Rane, T.R. (2002). Child characteristics, parenting stress, and parental involvement: Father versus mothers. *Journal of Marriage and Family*, **64**, 998-1011.

McVeigh, C.A. (2000). Satisfaction with social support and functional status after childbirth. *Maternal Child Nursing*, **25**, 25-30.

Melson, G.F., Windecker-Nelson, E., & Schwarz, R. (1998). Support and stress in mothers and fathers of young children. *Early Education & Development*, **9**, 261-281.

水野里恵. (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. *発達心理学研究*, **9**, 56-65.

Mulson, M., Caldera, Y.M., Pursley, M., Peifman, A., & Huston, A.C. (2002). Multilevel factors influencing maternal stress during the first three years. *Journal of Marriage & the Family*, **64**(4), 944-956.

野沢みつえ. (1989). 親業ストレスに関する基礎的研究. *関西学院大学教育科学研究年報第15号*, 関西学院大学, 兵庫, 35-56.

Rubin, K., Hstings, P., Chen, X., Stewart, S., & McNichol, K. (1998). Intrapersonal and maternal correlates of aggression, conflict, and externalizing problems in toddlers. *Child Development*, **69**, 1614-1629.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島　悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64**, 409-416.

Shaw, D. S., Winslow, E. B., Owens, E. B., & Hood, N. (1998). Young children's adjustment to chronic family adversity: A longitudinal study of low-income families. *Journal of the American Academy of child and Adolescent Psychiatry*, **37**, 545-553.

首藤敏元・馬場康宏. (1995). 母親の育児感情と幼児の社会的コンピテンスに関する研究. *埼玉大学紀要教育科学第44巻*, 埼玉大学, 埼玉, 53-67.

住田正樹. (1999). 母親の育児不安と夫婦関係. *子ども社会研究*, **5**, 3-20.

住田正樹・中田周作. (1999). 父親の育児態度と母親の育児不安. *九州大学大学院教育学研究紀要第2号*, 九州大学, 福岡, 19-98.

種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫. (2004). 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係. *東京保健科学学会誌*, **7**, 79-87.

Webster-Stratton, C. (1990). Stress: A potential disruptor of parent perceptions and family interactions. *Journal of Clinical Child Psychology*, **19**, 302-312.

付記

調査にあたり，多大なるご協力をいただきました保育園・幼稚園の先生方，保護者の方々に深く感謝いたします。

Aramaki, Misako (Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University) & Muto, Takashi (Shiraume Gakuen University). *Factors Related to Negative and Positive Feelings about Child-rearing: A Survey of Mothers of Young Children.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 87-97.

The purpose of this study was to investigate negative and positive feelings towards child-rearing, and factors relating to these feelings. Mothers with preschool children in the Tokyo area participated in a questionnaire survey ($N=733$). Confirmatory factor analysis revealed that mothers' feelings about child-rearing included a sense of being burdened, anxiety, and positive feelings. Three main findings were as follows. (1) The sense of burden of child-rearing was related to the child's age (greater burden from younger children), support from the husband, mothers' working arrangement, and the child's type of preschool (kindergarten vs. day care). (2) Child-rearing anxiety was related to support in the form of information about child-rearing. (3) Positive feelings towards child-rearing was related to support from their husband, preschool teachers, or friends. These results suggest that mothers' sense of burden, anxiety, and positive feelings are related to both common and unique factors.

【Key Words】 Burden of child-rearing, Child-rearing anxiety, Positive feelings towards child-rearing, Social support, Mothers of preschoolers

2005. 7. 28 受稿, 2008. 2. 8 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，98-107

原　著

谷崎潤一郎の否定的アイデンティティ選択についての分析

三好　昭子
（立教大学大学院現代心理学研究科）

Erikson（1968/1998）はアイデンティティ拡散の諸相のひとつとして「否定的アイデンティティ」（negative identity）を挙げ，全体主義的に否定的アイデンティティを選択するにいたる誘因として 1. アイデンティティの危機，2. エディプス的な危機，3. 信頼の危機を指摘している。本研究では否定的アイデンティティを選択した一つの典型例として作家谷崎潤一郎を取り上げ，全体主義的に否定的アイデンティティを選択する心理力動・メカニズムについて伝記資料を用いて示した。谷崎は青年期に至り創作家を志したものの，依然として何物にもなれないという葛藤状況が続いた。1. 自らが選んだものに忠誠を尽くすにあたり感じる罪悪感，2. エディプス的な潜在的罪悪感，3. 自身の存在にかかわるような罪悪感というように，当時の谷崎には全体主義への変化の誘因が存在しており，それらの罪悪感を否認しつつ主導性を発揮するために，谷崎は全体主義的に否定的アイデンティティを選択したと解釈することができる。また否定的アイデンティティという概念を導入することにより，谷崎の青年期における作家活動および私生活を一貫した内的世界として把握することができ，不良少年の文学・悪魔主義と評される作品を生み出しつつ放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返した谷崎の行動，態度，感情をより深く理解することができたと考えられる。

【キー・ワード】 否定的アイデンティティ，E.H.Erikson，アイデンティティの危機，罪悪感，谷崎潤一郎

問　題

否定的アイデンティティの定義　Eriksonは漸成発達理論において，青年の心理社会的危機として「第Ⅴ段階アイデンティティ対アイデンティティ拡散」を位置づけ，アイデンティティ拡散の諸相のひとつとして否定的アイデンティティ（negative identity）を挙げている。それは「第Ⅲ段階主導性対罪悪感」の葛藤の青年期での表れでもあり，役割固着（role fixation）という用語で説明されることもある。否定的アイデンティティとは，社会的に忌み嫌われている価値に積極的にコミットし自己の拠り所を見出すというアイデンティティであり，Eriksonは“発達の危機的な段階において，最も危険で望ましくないもの，にも拘わらず最も現実的なものとして提示されたすべての同一視や役割に，基礎づけられた倒錯したアイデンティティのことである。（Erikson, 1968/1998, p.239）”と定義している。

西平（1983）は，若年にして飲酒・喫煙，暴力などによって中学を退学になり，その後は放蕩を重ねるといった荒廃した生活を続けたボードレールの青年期について，“‘僕は病人だ’，‘僕は悪魔だ’，‘宿命の子’という存在論的呪詛（サルトル）を取り入れてネガティブ・アイデンティティによって，不信と憎悪と孤独感を基底気分とし，すねた，居なおったダンディズムのライフ・スタイルをとり続けて生きた（西平，1983, p.206）”と分析している。青年期において“世の中に己のような悪人は又とあるまい。己こそ本当の背徳漢だ。天にも神にも見放された人間なんだ。（谷崎，1917a, p.444）”と自己定義し，放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返した作家谷崎潤一郎もまた，否定的アイデンティティを選択した典型だと考えられる。なぜこのように自らが自らを悪者であると定義づけ，社会からも悪者であると認識され，悪者としての役割に固着するという否定的アイデンティティが選択されたのだろうか。どのような心理力動・メカニズムによって否定的アイデンティティ選択にいたったのだろうか。

柔らかく統合されたまとまり（wholeness）の成り立ち　西平によると，totalとwholeとの区別はErikson理解のひとつのキーワードであり，“totalとは‘あれかこれか’‘すべてか無か’といった二者択一を迫る態度（Erikson, 1958/2002, p.xiii）”を指し，全体主義（totalism）とは“絶対的な境界線が強調されるところの一つのゲシュタルトをつくり出すもの（Erikson, 1968/1998, p.98）”であり，“まったく排他的であると同時に絶対的に包括的なもののこと（Erikson, 1968/1998, p.99）”である。それに対して“wholeは，異質なものを共存させる‘柔らかく統合された’状態（Erikson, 1958/2002, p.xiv）”を指し，柔らかく統合されたまとまり（wholeness）とは“内部に矛盾を抱えつつも，互いに排除することのない，多様性と柔軟性に富んだ，しなやかで強靭なまとまり（Erikson,

1958/2002, p.xiv)”を意味している。

柔らかく統合されたまとまりは，“受けたいという子どもの欲求と，与えたいという母親の欲求との間の相互関係を通して維持されるような生理学的な均衡過程の問題である段階から徐々に生まれてくる（Erikson, 1968/1998, p.100)”とEriksonは述べている。基本的信頼感は，“外的なものと内的なものとは相互に関連した善なるものとして経験されうるのだということを含意しているという点で最初の基本的な成全性〔柔らかく統合されたまとまり〕(Erikson, 1968/1998, p.101)”だといえる。つまり最初の柔らかく統合されたまとまりである基本的信頼感を基盤として，各段階の危機を乗り越えて成長し，いよいよアイデンティティ確立という大きな主題をもつ青年期を迎える。

柔らかく統合されたまとまりから全体主義への移行と，それに伴う否定的アイデンティティの選択　ところが通常の発達過程において，柔らかく統合されたまとまりから全体主義へと突然変化する場合がある。Eriksonは“人間というものは，偶発的または発達的な変化のために本質的な成全性〔柔らかく統合されたまとまり〕を失うと，全体性向〔全体主義〕と呼ばれるものに頼ることによって，自分自身と世界とを再構築するものである(Erikson, 1968/1998, p.99)”と述べ，人間は柔らかく統合されたまとまりを失った際に，一時的な応急処置として，全体主義に頼ることによって“より原始的なレベルにおける再適応の試み（Erikson, 1968/1998, p.98)”を行うとしている。

柔らかく統合されたまとまりから全体主義への変化は，1. アイデンティティの危機，2. エディプス的な危機，3. 信頼の危機を誘因としているとErikson（1968/1998）は述べている。Eriksonは“同一性〔アイデンティティ〕の危機が，エディプス的な危機をよびさまし，さらにこの段階を越えて，信頼の危機にまで達する場合，否定的同一性〔否定的アイデンティティ〕の選択は，罪悪感の完全な否認，あるいは野心の完全な否認としての唯一の積極性〔主導性〕の形態となり，罪悪感を処理する唯一の可能な方法となる。(Erikson, 1959/ 1988, p.190)”と述べ，深刻なアイデンティティの危機において罪悪感を否認しつつ主導性を発揮する唯一の形態が，自らが全体主義的に否定的アイデンティティを選択することだとしている。

目　　的

Eriksonはアイデンティティ拡散の諸相のひとつである否定的アイデンティティを説明するために，様々な事例を断片的に紹介しているが，否定的アイデンティティ選択にいたる心理力動・メカニズムについては，全体主義を説明する中で抽象的・理論的に述べているだけである。そのせいかEriksonの理論に基づいた否定的アイデンティティ選択にいたる心理力動・メカニズムについての体系的な研究は，西平（1983）など数少ない。

そこで本研究では，まず第1に否定的アイデンティティを選択した一つの典型例として谷崎を取り上げ，Eriksonの理論に基づいて，否定的アイデンティティを選択する心理力動・メカニズムを具体的に示すことを目的とする。第2に，否定的アイデンティティという概念を導入することによって，谷崎の行動，態度，感情をより深く理解するということも本研究の目的である。これまで谷崎が青年期に放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返したことについては，印象批評的，もしくは感想的な文学評論はあるが，心理学的な理論から，特に否定的アイデンティティという観点から資料を積み上げて論証した研究はない。本研究により，青年期の谷崎についての理解が促進されるだけでなく，現代青年においても否定的アイデンティティに基づいた行動，態度，感情を理解する手がかりになると考えられる。

方　　法

伝記研究とは伝記資料に基づいてその人物の生涯発達を研究する方法であり，伝記分析，心理－歴史的接近法(Erikson, 1958/2002)，生育史分析（西平，1996）といった名称でも呼ばれている。伝記研究では，行動を予測することが目的である一般的な心理学の方法とは異なり，歴史的事実である行動に対して，なぜそのような行動にいたったのかについての仮説を資料から論証する。つまり伝記研究は，“解釈のより確からしさ（蓋然性）（大野，1998)”を検討する研究である。そのため，より蓋然性の高い別の仮説・解釈が示される可能性が絶えず存在している。その可能性を絶えず保証するためにも，資料の出典や解釈の根拠を明らかにする必要がある。多くの人からその仮説・解釈が合理的で説得力があると判断されることが研究の妥当性の検証になり，さらには新たな仮説が繰り返し吟味されることで，徐々に蓋然性が高められていくと考えられる。

本研究ではErikson（1958/2002, 2003），大野（1996）を参考にしながら，西平（1983, 1996）の方法論に基づいて作家谷崎潤一郎の個別分析を行った。谷崎は23歳で帝国大学に入学すると同時に怠学し，放浪生活を始めた。“世の中に己のような悪人は又とあるまい。己こそ本当の背徳漢だ。天にも神にも見放された人間なんだ。(谷崎，1917a, p.444)”と自分自身を定義づけ，親不孝を繰り返し，当時は弟にも“‘兄貴は結局だめなのかな’(谷崎，1967, p.75)”と思われるほどにすさんだ生活を送っていた。谷崎は26歳で作家として成功を収めた後も，30歳で結婚する直前まで放浪・放蕩を重ね，谷崎の作品に対しても世間から不良少年の文学・悪魔主義と評さ

れていた。このように谷崎は，自身を悪人と定義づけ，悪人として行動し，周囲からも悪人と認識されていたという意味で，青年期において否定的アイデンティティを選択した事例の典型であるといえる。

西平（1983, 1996）の個別分析の手順としてはまず，一般的な年代順の生涯の年譜を作り，伝記資料を心理学の専門用語によって解釈し年譜に加える（生育史心理学[1]的年譜の作成）。そして心理学的解釈に必要な根拠を伝記資料から列挙する（列挙法）。最終的には生育史心理学的問いを提起し，その問いに答えうる解釈（心理学的仮説）を構成し，その仮説を論証する資料を提示していくという方法である。本研究では谷崎が青年期に放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返したのはなぜかという生育史心理学的問いを提起する。その問いに対し，柔らかく統合されたまとまりから全体主義への変化の誘因（1. アイデンティティ（同一性）の危機，2. エディプス的な危機，3. 信頼の危機）が当時の谷崎に存在し，罪悪感を否認しつつ主導性を発揮するために，全体主義的に否定的アイデンティティを選択したという仮説を立て，これを資料から論証する（目的1）。また，否定的アイデンティティという概念を導入することにより，谷崎がどのような心境でどのような作家活動を行い，どのような私生活を送ったのかという観点から具体的に考察し，谷崎の否定的アイデンティティゆえの行動・態度・感情を理解する（目的2）。

主に分析対象としたものは，「谷崎潤一郎全集[2]（全30巻）」（1981-1983）の随筆，談話，書簡であり，小説は創作であるため対象外とした[3]。また最初の本格的な伝記であり信頼も高い「伝記谷崎潤一郎」（野村，1972），谷崎の実弟が記した「明治の日本橋・潤一郎の手紙」（谷崎，1967），谷崎の青年期に焦点をあてた評論「青年期谷崎潤一郎論」（尾高，1999），谷崎の全体像を把握するために「群像日本の作家8　谷崎潤一郎」（大岡・高橋・三好，1991），「谷崎潤一郎必携」（千葉，2001）を参考にした。

結果と考察

最初の基本的な柔らかく統合されたまとまりである基本的信頼感の様相

谷崎の家は代々江戸の素町人であり，“谷崎家の繁栄を一代で築き上げた‘偉いお祖父さん’（谷崎，1955b, p.44）”の庇護の下，谷崎は1886年（明治19年）に裕福な家庭に生まれた。両親と，祖父母，親戚，ばあやをはじめとする大勢の奉公人たちに可愛がられて育ち，谷崎が18歳のときに書いた自叙伝では，“いとおしの幼児よ，愛らしの少年よと，人にももてそやされ，我もただ何とのうつれしき心にみたされて…朝はわが頭をなでたもう母上が御手の指環に戯れ，ゆうべはわれをとらえて戯れたもう父上が御膝の上にいつしか寝入り，たのしき月日を送りける（谷崎，1903, p.74）”と振り返っている。谷崎は愛情的に豊かで安定した生育環境によって，最初の基本的な柔らかく統合されたまとまりである基本的信頼感がしっかりと育まれたと考えられる。

アイデンティティの拡散

“誰しも，文学を志す青年は去就に迷う時代がある。……私の十八九歳から二十四五歳に至る六七年間は，実にこの暗澹〔あんたん〕たる危惧の時代であった。（谷崎，1932, pp.358-359）”と谷崎は振り返っている。当時谷崎の家庭は貧窮を極め，文壇への縁故は絶無という状況の中，“この後如何にして，どういう経路で文壇へ出るという成算も立たないので，それを思うと，前途が真っ暗であるような気がした。（谷崎，1932, p.359）”という。当時流行の自然主義文学に反感を持ち，それに反旗を翻そうという野心があったために，なおさら文壇への進出が困難であると感じられ，さらに雑誌へ投稿した谷崎の作品は一向に掲載されず，“この前後における私の失望は可なり大きなものだった。そして自信がグラツキかけたこともしばしばであった（谷崎，1932, p.360）”という。

このように谷崎は創作家を志したものの，依然として何者にもなれないという葛藤状況が続いたと考えられる。当時，谷崎の机の上に走り書きしてあった和歌“さびしさは巷の角にたたずみて，いづち行かんとためらう時ぞ（谷崎，1967, p.72）”もアイデンティティ拡散の心情を表現していると解釈することができる。

全体主義への変化の誘因1　アイデンティティの危機

長期にわたるアイデンティティ拡散に直面した際に人間は“アイデンティティを構成する諸断片のバラバラな束という矛盾した存在（Erikson, 1968/1998, p.109）”にとどまることができず，全体主義に頼ることによって，

1）生育史心理学（Psychology of Life-history）とは，“伝記資料を用いて，人格形成の秩序を追求しようとする，教育心理学の一領域である（西平，1996, p.1）”。人間の人格を全生涯の視点で，全体としてとらえようとするものであり，人間を運命論的決定論と自由意志論のバランスのうえにとらえ，どのような条件でどのような人格が形成されるのかを探求する点が特徴である。

2）谷崎の著作については，常用漢字，現代仮名遣いに改め，常用漢字外の字を含む熟語には〔 〕内にふりがなをふった。

3）「神童」，「異端者の悲しみ」は小説だが，谷崎は次のように述べていることから，創作とは区別し，谷崎の心境の告白として分析対象に入れている。“……‘神童’や‘鬼の面’なども，その実予の境遇に多少似よりの一青年に仮託して，予が胸中の傀儡を述べたに過ぎない。然るに此の‘異端者の悲しみ’だけは，少々趣を異にして居る。周囲の人物は別として，少なくともこの中に出て来る四人の親子だけは，その当時の予が心に事実として映じた事を，出来る限り，差支えのない限り，正直に忌憚〔きたん〕なく描写した物なのである。この意味において，この一篇は予が唯一の告白書である。（谷崎，1917b, p.23）”

“性的・人種的・職業的・類型的な二者択一を，綜合するのではなくむしろ対立させ，そして明確かつ全体的にどちらかの側につくことを決心するよう追い込まれてしまうことが，しばしばある。(Erikson, 1968/1998, p.108)”と，Eriksonは述べている。

①古えの聖賢の道か純文学か　小学校時代の担任である稲葉先生は，谷崎に小学校としては異例の学問的に高水準の儒教的・仏教的英才教育を施していた。稲葉先生の“真に志すところは古えの聖賢の道で，私を儒教的に，もしくは佛教的に育成することを念としたらしいので，しまいには私に失望する結果となった（谷崎，1955b, p.229)”と谷崎は述懐している。谷崎は“次第に，自分の哲学や倫理宗教に対する興味は，要するに一時の附け焼刃で，先生からの借り物であるに過ぎず，自分の本領は純文学にあることを悟るようにな（谷崎，1955b, p.229)”ったと，自身の適性の自覚に至っている。“己は禅僧のような枯淡な禁欲生活を送るにはあんまり意地が弱過ぎる。あんまり感性が鋭過ぎる。恐らく己は霊魂の不滅を説くよりも，人間の美を歌うために生まれて来た男に違いない。(谷崎，1916a, pp.366-367)”と，自分の本領は先生の期待（古の聖賢の道）とは別の，純文学にあると確信した。

高校進学の際には将来の生活の点を考慮して英語法科に入学した谷崎だったが，恋愛沙汰で家庭教師の職を失ったことを機に，“一高から大学へ移る時に，全く背水の陣を敷くつもりで文科へ転じた。……いよいよ創作家になろうという悲壮な覚悟をきめた（谷崎，1932, p.359)”，それは“一人前の作家になれる自信があったからではなく，況んや食って行けるという目算などがあったのでもなく，悲壮な覚悟で背水の陣を布いたのであった。(谷崎，1935, p.307)”と，自らの適性に基づいて創作家になるという決意をした。当時文科に進むことは世間的出世からの逸脱を意味し，まして学者ではなく創作家になるということは社会的には白眼視され，経済的にも不安定な状態になることを覚悟しなければならなかった。このような状況にもかかわらず谷崎は自分の適性を信じ，背水の陣を敷いて純文学の世界で創作家になることに忠誠を尽くす決意をしたと考えられる。

②儒教的禁欲主義か快楽主義か　アイデンティティ感覚の喪失は，自分の身近な共同体から，適切で望ましいものとして提供されている役割に対する軽蔑と憎しみという形で表現され，それまでの価値観への全面的な嫌悪と，自分の住んでいない世界への非合理的な過大評価が起こると，Erikson（1959/1988）は述べている。谷崎の場合，小学校の修身の時間に聖人舜や二宮金次郎の話によって，子は親に孝行しなければならないと熱心に説かれたことを振り返り，当時の教育がいかに儒教的であったかを指摘している。はじめは純粋な感銘をもって受け取った谷崎だったが，次第にそれが心に重く覆いかぶさるようになり，“‘自分は親不孝の子である’という呵責〔かしゃく〕の念を，絶えず感ずるようになった。(谷崎，1957b, p.456)”と述べている。

しかし23歳で一高を卒業し，帝国大学国文科へ進学すると同時に学校の勉強をしなくなり放浪生活をはじめた谷崎は，釈迦・孔子崇拝から一転し，快楽主義・エゴイズム・唯美主義を特徴としたオスカー・ワイルドに傾倒していく（尾高，1999)。31歳で父親となった谷崎は，それまでの自分を振り返り，“甚しいエゴイスト……あくまでも自分独りを可愛がって生きて来た人間……私はただ自分の快楽のためにのみ生きて行きたかった。自分の所有している金銭を，自分の利益のためにのみ消費したかった。私はこのエゴイズムをこれまでかなり極端に実行していた。……私のエゴイズムは骨肉の関係も親友の間柄も一切無視して顧みない。(谷崎，1916b, p.25)”と述べている。社会的風潮においても小学校からの教育においても，当時当然のように望ましいものとして提供されていた儒教的禁欲主義に対する軽蔑，憎しみ，嫌悪が表現されており，谷崎はあえて儒教的禁欲主義とは正反対の快楽主義・エゴイズムの実践を強調したのだと考えられる。

そして“親たちもまた何かというと，‘親に楯をつく’‘親を馬鹿にする’‘罰あたりだ’‘いうことを聴かない奴だ’‘今にロクな者になりはしない’などという語をすぐ口にした。親たちはそれほど深い考があっていうのではなく，簡単に口から出るのであろうが，聞かされる子は学校の修身の話が身にこたえているので，やはりそれらの親の叱言〔しつげん〕が呵責〔かしゃく〕の種にならずにはいない。(谷崎，1957b, p.456)”というように，親の予言的な小言が最も現実味のあるものとして谷崎の眼前に提示されていたために，一層，否定的アイデンティティを選択しやすい環境にあったと考えられる。

③一家の家計を支える長男か収入の確約のない創作家か　かつては裕福だった谷崎家は，父親の事業失敗により徐々に貧窮していき，進学したい谷崎と就職させたい両親との衝突が続いていた。結局，先生の説得に両親が折れる形で谷崎は家庭教師として他家に住み込みながら中学・高校へ通い，一中・一高というエリートコースを進む中で，一家の家計を支える長男として両親の期待を一身に受けていた。このような状況の中で谷崎は，一時は中学校の教師や新聞記者といった職も視野に入れたが，結局は副業を持たず，まったく二者択一的に背水の陣を敷いて収入の確約のない創作家になることを選んだ。

世間的出世に背を向け，今は収入の確約もできないという意味で両親の期待に背かざるをえなかった谷崎は，消極的な親不孝という不安定な立場にとどまるよりも，

積極的に否定的アイデンティティを選択することによって徹底的に悪なる存在に同一化する方がたやすいという状況が生じたと考えられる。それは“中途半端に良い子であるよりも，完全にワルであるほうがずっといい（近藤，2004, p.94）”という非行少年の言葉に端的に表されているように，Eriksonは否定的アイデンティティの選択について“肯定的アイデンティティを構成するのに利用可能な諸要素が互いに相殺しあうような状況において，何らかの自己支配権を奪還しようとする絶望的な試みの表われ（Erikson, 1968/1998, p.240）”であると述べている。谷崎の場合，一家の長男として家計を助けるという肯定的なアイデンティティと創作家という肯定的なアイデンティティとが葛藤するという，現時点の自分の決意だけではどうすることもできない状況の中，自らの統制下で完全に実現可能だったのが親不孝者・道楽者・悪人だったと解釈することができる。

全体主義への変化の誘因2　エディプス的な危機

Eriksonは，罪悪感という漠然とした緊張感ほど耐えがたいものはないという状態から“全体的によき人間になったりまたは全体的に悪い人間になることによって，この道徳的なあいまいさを克服しようとする者もいる。（Erikson, 1968/1998, p.106）”と述べている。

エディプス葛藤による潜在的罪悪感　谷崎は美人でお嬢さん育ちである母親への強い愛着と，甲斐性のない父親への潜在的な敵意をさまざまな機会に思い出し，表現している。5歳ころの記憶では，ばあやに連れられて転地から帰ってきた両親を迎えに出たとき，“父もその時母と一緒であったはずだけれども，不思議に父の顔には覚えがなくて，母の顔だけを覚えている。（谷崎，1955b, p.56）”という。また，家業が不振になり，家庭が貧窮してからは“私はよく，私の母のような人を女房にしながら貧苦にやつれさせて置くとは何事かと，父の腑甲斐なさを歎息〔たんそく〕したものであった（谷崎，1955b, p.244）”，さらに大学時代に至っては“ある不思議な，胸のつかえるような，頭を圧さえつけられるような，暗い悲しい腹立たしい感情が，常に父親と彼〔谷崎〕との間に介在して居て，彼〔谷崎〕はどうしても打ち解ける事が出来なかった。……この老人の血液の中から，自分という者が生れたのかと考えると，何だか溜らない気持ちがして，体が一時に硬張〔こわば〕ってしまう。（谷崎，1917a, p.405）”と述べているように，谷崎の場合，大学時代に至ってもなおエディプス的な葛藤からの潜在的な罪悪感があったと考えられる。

そして，“母の顔だちのことについては今までにもいろいろな折りに書いたことがあるが，私はよく，母が美人に見えるのは子の欲目ではないか知らん，誰でも自分の母の顔は綺麗に見えるのではなかろうか，と，そう思い思いした。（谷崎，1955b, p.52）”，“母の胸のところに抱かれたときの感じだの，乳のにおいだのというのも，ずっとのちまで覚えていて，それだけに母がなつかしかった。……そのときにまだ若かった母親のすがたが，いまもありありと浮かんできます。（谷崎，1947, pp.225-226）”などと表現される谷崎の母親への強い愛着は，母一族への同一視へとつながっていく。母親のすぐ下の弟で，顔立ちが母親に一番よく似ていたという谷崎の叔父庄七について谷崎は，“私はこの‘道楽者の叔父’がいろいろの意味で甚だ私に近似している人間であったように思う。……もし谷崎家の代々の血すじの中に‘不孝者の血’や‘道楽者の血’が，つまり‘悪の血’が交っていたとすれば，それがこの叔父から伝わって私の血の中に流れていたように思う。……彼女〔母親〕の何処かしらに潜在していた，庄七が持っていたものと同じ親不孝の血が，私の代になって表面に出たように思えるのである。（谷崎，1957b, pp.449-451）”と述べているが，谷崎は母方の血統に「不孝者」，「道楽者」，「悪」を見出し，そこに同一視していたと解釈することができる。逆に父親への潜在的な敵意が，律儀で実直な父一族への異質視へとつながっていったのではないだろうか。谷崎は“私の父や今の伯父は，律義一方の融通の利かない性分の男で，凡そ道楽や親不孝とは縁の遠い種族であった。（谷崎，1957b, p.450）”と述べている。

つまり谷崎の場合，エディプス葛藤による潜在的な罪悪感という漠然とした緊張感から，道徳的なあいまいさを克服しようと全体的に悪い人間になることを選んだだけではない。母親への強い愛着から母親の実弟「道楽者の叔父」への同一視，父親への潜在的な敵意から律儀で実直な父一族への異質視もまた，谷崎の否定的アイデンティティ選択に大きく影響したと考えられる。

全体主義への変化の誘因3　信頼の危機

全体主義的に「すべてか無か」，「生きるか死ぬか」の二者択一を迫る態度は，祝福されんがために天使と格闘したヤコブと似ており，祝福してもらうことによって初めて“自分が生きており，生きている者として，自分の前にも生があり，自分にも生きる権利があるという確信を持つことができる（Erikson, 1958/2002, p.159）”と，Eriksonは述べている。つまり自分が生まれてきたことに対する罪悪感ともいえるようなものが根底にあり，自分の存在そのものを全面的に受け入れ祝福してもらえない限り，自分が存在してもよいのだという確信を持つことができないのである。それは両親に対して，乳児にとっての母親のような全能を期待しているという意味であり，深刻な退行が生じているといえる。

①両親への完全な依存か孤立無援か　谷崎は“親に向って無理難題を吹っかけて，聴いてもらえないと直ぐに膨れっ面をして食ってかか（谷崎，1957b, p.446）”るというように，自分の欲望をすべて満たしてくれるべき万

能な親を求めつつその一方で，両親への反発・反抗心が勃興し，独立したいという欲求も高まり，そのジレンマに苦しんでいた。"'自分の体なんぞどうにでもなるがいい。己には親も友達もいないんだ。'そう思っては見るものの，彼〔谷崎〕にはやっぱり自分を生んだ親の家が，よしやどれ程むさくろしくとも，どれ程不愉快に充ち充ちて居ても，最後の落ち着き場所であった。自分の生れた土を慕い，自分の育った家を恋うる盲目的な本能が，常に心の何処か知らに潜んで居て，漂泊の門出に勇む血気をひるませた。……頻りに親を疎んじながら，遂に親の手を離れられない自分の意志の弱さを怒った。(谷崎，1917a, pp.407-408)" というように，万能な両親への完全な依存か，全くの孤立無援かという二者択一的な態度によって放浪生活を繰り返していたと考えられる。すなわち，自分の欲求を完全に満たしてくれないのであれば親なんかいらない，という感覚で家を出るが，当時の谷崎にとってはどうしても親によって全面的に受け入れ祝福してもらえない限り，自分が存在してもよいのだという確信を持つことができなかったと解釈することができる。

②両親からの愛情を独占するか，一切を拒絶するか

また谷崎は，両親からの愛情に対しても独占するか一切を拒絶するかという二者択一を迫る態度で臨んでいる。谷崎は，"私は祖母が七人を数える娘や息子たちのうちで，分けても庄七〔道楽者の叔父〕をどんなにいとしがっているかということを，その時〔谷崎の大学時代〕身に沁みて知ることが出来た。それは庄七が総領だからでもあったろうし，親不孝者であっただけにひとしお不憫がかったのでもあろうし，この歳になって未だに家も妻子もないのが可哀そうでならなかったのでもあろう。(谷崎，1957b, p.452)" と推測しているように，道楽者は道楽者ゆえに母親の愛を独占することができるのだという信念を持つようになっていたと考えられる。

しかしその一方で，"朝夕親の傍らにいて，その生活を助けていた精二〔谷崎の4歳年下の弟〕の方に親が親しみを感じるのは当り前で，だからといって私を疎んじる気はなかったに違いないのに，私は何となくそういう風にひがむ気味もあった (谷崎，1957b, p.440)" と，孝行者である弟に対して自分は親不孝・道楽者・悪人なのだから愛されなくて当然だという感覚もあったと考えられる。当時家庭が貧窮していたために弟は働きながら大学へ通い，家にもお金を入れていたのに対し，谷崎はまったくの無収入であった。それは自分が長男として家計を支えて欲しいという期待に応えられないだけでなく，無収入で，かつ親不孝・道楽者・悪人であっても愛してくれるのかと両親の愛情を試しながらも，どうせ自分は親不孝・道楽者・悪人なのだから愛されなくて当然だ・仕方がないという一種の諦めの心境へもつながっていたと考えられる。

③生か死か　谷崎は24歳と27歳のとき，死に対する異常なほどの恐怖のため神経衰弱になっている。"何とかして，津波のように襲い来る死の恐怖を払い除けつつ，生きられるだけ生きたかった。(谷崎，1917a, p.441)" というように生への強い執着がありながらも，"'己はいつ死ぬか分からない。いつ何時，頓死〔とんし〕するか分からない。'そう考えると章三郎〔谷崎〕は，立っても居てもたまらないほど恐ろしい折があった。(谷崎，1917a, p.439)" と述べている。

さまざまな症状 (脳充血・脳溢血・心臓麻痺のような症状が急激に現れる病気に対する過敏からの不安発作) は，悪行・背徳のために "医者からも神様からも見放されたのだ……お前の苦しみは天の罰だ。(谷崎，1917a, pp.440-441)" という感覚を谷崎に生じさせている。両親という実在する対人関係を超えて，神様・天という絶対的な存在からの祝福か罰かという二者択一が，生きたいけれども自分のような背徳的な人間は神によって命を助けてもらえないのではないかという意味で，究極的には生 (神の祝福) か死 (神の罰) かという二者択一的な思考につながっていったと考えられる。

全体主義的に否定的アイデンティティを選択

こうして長期にわたるアイデンティティ拡散に直面した谷崎は，全体主義への変化の誘因1～3により，全体主義に頼ることによって，悪人としての自分自身と世界とを再構築したのだと考えられる。"世の中に己のような悪人は又とあるまい。己こそ本当の背徳漢だ。天にも神にも見放された人間なんだ。(谷崎，1917a, p.444)"，"どうせ自分は利己主義な，不信用極まる性格なのだから (谷崎，1917a, p.431)" と自己定義した谷崎は，放浪生活に身を投じ，道楽者となり，親不孝を繰り返した。

当時谷崎の母親は "精二〔4歳年下の弟〕はやさしいんですけれど，此奴〔こやつ〕はどうしてこんななのか，大学生だなんていいながら何を勉強しているのか，毎日毎日方々ほっつき歩いていて十日も二十日も家へ帰って来なかったり，たまに帰ってきたかと思うと親泣かせのことをいい出したり，……此奴〔こやつ〕のお陰でお父っつあんだってどんなに苦労していなさるか (谷崎，1957b, p.445)" と愚痴をこぼし，弟の記述からも "両親だけでなく，親戚からも兄は一時見放された。(谷崎，1967, p.73)"，"少年時代私は兄を敬愛していたけれど，その頃になって両親と同じく '兄貴は結局だめなのかな' と思うようになった。(谷崎，1967, p.75)" というように当時の谷崎は，谷崎自身の自己定義だけでなく，他者に対する自分自身の意味においても確固たる否定的アイデンティティを持つにいたったと考えられる。

厳密にいうと谷崎のいう悪とは，エゴイズムのことであり，谷崎はエゴイズムによる親不孝者・道楽者，すな

わち悪人という否定的アイデンティティを選択したと考えられる。つまり谷崎にとって，恩師を失望させ，眼前の立身出世・世間的成功を放棄し，親や親族らの期待に背いてまで自らの意志を通し，創作家になるという決意に対して忠誠を尽くすには，罪悪感が大きい過ぎたのではないだろうか。さらにエディプス的な潜在的罪悪感もあり，アイデンティティの危機が信頼の危機にまで達し，根底には自身の存在にかかわるような罪悪感も生じたため，積極的に悪人の仮面を付けエゴイズムを気取ることが，罪悪感を否認しつつ主導性を発揮する方法だったと考えられる。

否定的アイデンティティゆえの作家活動と私生活との一致

そんな中，谷崎は26歳で初めて原稿料をもらい，永井荷風の激賞により文壇での地位を確立し，原稿料で生活することができるようになった。世間では当時全盛だった自然主義文学との対比で“自然主義文学の蒼白〔そうはく〕な肌に，芳烈絢爛〔けんらん〕な刺青をほどこし，たちまちわが文学界を席捲〔せっけん〕した（小林，1931, p.83）”と評価される一方で，ワイルドやボードレールなど西欧頽唐派との関係で不良少年の文学，悪魔主義とも評され，一躍時代の寵児となった。つまり谷崎の否定的アイデンティティと，谷崎の生み出した作品と，世間に対する自分の意味とがぴったりと一致し，谷崎本人も“私はその不良少年の文学のお先棒を承った（谷崎，1932, p.396）”と自覚している。当時は谷崎にとって“第一が芸術，第二が生活（谷崎，1916b, p.28）”であり，“生活を芸術と一致させ，若しくは芸術に隷属させようと努め……それが可能の事であるように思われて居た。（谷崎，1916b, pp.28-29）”というように，“真の芸術は生活と一致す可きものである（谷崎，1916b, p.29）”という持論のもとに極端な芸術至上主義を貫いており，不良少年の文学・悪魔主義という芸術に対して，自らの生活の方を一致させていた。そして“私のエゴイズムが滅びてしまえば私の芸術も滅びてしまうに違いないと思われた。（谷崎，1916b, p.26）”というほど，自身の否定的アイデンティティ（エゴイズム）と芸術との関係が密接であった。

こうして谷崎は小説家としての確固たる地位を築いた後も親不孝を繰り返し，27, 8歳になっても相変わらずの放浪生活を続けていた。“その頃の私は放浪時代で，さまざまな悪徳に身を持ち崩していた。両親の家は日本橋の箱崎町にあったけれども，一二年前にそこを飛び出したきりめったに寄り着いたことがなく，たまにふらりと戻って来ることがあっても，すぐ親たちを怒らせたり泣かせたりして又ぷいと出て行ってしまうという風であった。（谷崎，1957b, pp.437-438）”と谷崎は述懐している。弟精二も谷崎が28歳当時を振り返り，“当時兄はワイルドの唯美主義，快楽主義に心酔し，元禄袖の着物などを着て得意になっていた。（谷崎，1967, p.117）”と述べており，依然としてワイルドに心酔していた谷崎の様子がうかがえる。

否定的アイデンティティゆえの作家活動と私生活とのギャップ

しかしながら否定的アイデンティティは真のアイデンティティではないため，谷崎は次第に“私には今の傾向を何処迄も押し進めて，自分の宗教とする程の，十分な勇気と情熱とがまだまだ湧いて来ない（谷崎，1916b, p.27）”と述べるようになり，“私は‘悪’の力を肯定し賛美しようとしながらも，絶えず‘良心’の威嚇を受けている。……私の心が芸術を想う時，私は悪魔の美に憧れる。私の眼が生活を振り向く時，私は人道の警鐘に脅かされる。臆病で横着な私は，動もするとこの矛盾した二つの心の争闘を続けて行く事が出来ないで，今までしばしば側道へ外れた。（谷崎，1916b, pp.27-29）”と自己洞察している。つまり谷崎は次第に，自分自身の芸術と生活との間に見逃しがたいギャップを見出すようになり，これまでは芸術も生活も手っ取り早く悪に一致させていたが，今後は“厳重に自分の臆病を排斥して，正直な心の中の闘いを，解決のつくまで続けて行こうと決心している。（谷崎，1916b, p.29）”と述べている。これらのことは谷崎が“偽悪家（佐藤，1927, p.363）”であり，谷崎の悪魔主義も“仮面”，“ポーズ”（佐藤，1927, p.364）であって，“趣味から出ていて，信仰からは出ていないような感じがする。（赤木，1916, p.90）”といった評論とも合致している。

全体主義から再び柔らかく統合されたまとまりへ（再統合）

谷崎は41歳のとき“たとえ神に見放されても私は私自身を信じる　潤一郎（谷崎，1926）”と，アイデンティティの確固とした感覚の確立を表現した。否定的アイデンティティを選択していた頃は，“天にも神にも見放された人間なんだ。（谷崎，1917a, p.444）”と全体主義的に投げやりに自己定義し，親不孝者・道楽者・悪人として生きていた谷崎だったが，ついに再び柔らかく統合されたまとまりへと至った。谷崎自身も晩年には，自分の27，8歳頃（放浪時代）について“今考えると多くは恥かしいものばかりを書いていた時代（谷崎，1957b, p.437）”と振り返り，“私は不惑の齢を過ぎてから一人前の小説家になった（谷崎，1955a, p.288）”，“四十台以後において始めて，人に読んでもらいたいと思うようなものが書けたのである。（谷崎，1957a, p.339）”と述べている。

このように否定的アイデンティティは決して青年の最終的な真のアイデンティティではなく，今目の前にある物事に取り組むための一時的な代替的方法だといえる。Erikson も“教師や裁判官や精神病医が，そのような‘否定的アイデンティティ’を，青年の‘自然な’，しかも最終的なアイデンティティと考えてしまうならば，青年

は，自分の誇りや，全体的志向への欲求をすべて投入して，地域社会から嫌われるような人間になってしまうであろう。(Erikson,1968/1998, p.109)”と警告している。

まとめ

本研究では，谷崎が青年期に放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返したのはなぜかという問いに対して，柔らかく統合されたまとまりから全体主義への変化の誘因（1. アイデンティティの危機，2. エディプス的な危機，3. 信頼の危機）に焦点を当て，全体主義的に否定的アイデンティティを選択する心理力動・メカニズムについて伝記資料を用いて示した。

谷崎は安定した養育環境のもと，最初の基本的な柔らかく統合されたまとまりである基本的信頼感を形成した。青年期に至り創作家を志したものの，依然として何物にもなれないという葛藤状況が続いた。こうして長期にわたるアイデンティティ拡散に直面した結果，自分の進むべき道が古の聖賢の道か純文学か，自分の在り方が儒教的禁欲主義か快楽主義か，自分の立場が一家の家計を支える長男か収入の確約のない創作家かといった二者択一に対して，明確に，全体的にどちらかの側につくことを決心するように追い込まれてしまったと考えられる（全体主義への変化の誘因1　アイデンティティの危機）。また，谷崎には潜在的にエディプス葛藤による罪悪感があり，母親の実弟である道楽者の叔父への同一視と実直な父親への異質視があったと考えられる。潜在的なエディプス葛藤による罪悪感から，谷崎は道徳的なあいまいさを克服しようと全体的に悪い人間になることを選んだのではないだろうか（全体主義への変化の誘因2　エディプス的な危機）。さらに谷崎はアイデンティティの危機が信頼の危機にまで達したため，深刻な退行状態にあったと考えられる（全体主義への変化の誘因3　信頼の危機）。自分の欲求を完全に満たしてくれる両親を求めつつ，満たしてくれないのであればいらないと，両親への完全な依存か孤立無援かの両極を揺れ動くように放浪生活を繰り返し，両親からの愛情に対しても独占するか一切を拒絶するかという態度で臨んでいたと考えられる。また両親という実在する対人関係を超えて，神様・天という絶対的な存在からの祝福か罰かという二者択一は，生（神の祝福）か死（神の罰）かという二者択一的な思考につながっている。谷崎は祝福されんがために天使と格闘したヤコブのように，否定的アイデンティティを選択することによって，たとえどんな自分であっても，自分にも生きる権利があるという自身の存在をかけた格闘をしていたのではないだろうか。

これらのことから谷崎には，柔らかく統合されたまとまりから全体主義への変化の誘因が十分に存在していたことが分かる。自らが選んだものに忠誠を尽くすにあたり感じる罪悪感，エディプス的な罪悪感，自身の存在にかかわるような罪悪感を否認しつつ主導性を発揮するために，谷崎は自らが積極的に全体主義的に否定的アイデンティティを選択したと解釈することができる。さらに谷崎の否定的アイデンティティと，谷崎の生み出した作品と，世間に対する自分の意味とがぴったりと一致した結果，否定的アイデンティティにおいての使命感が発生し，なかなか否定的アイデンティティから脱することができなかったと考えられる。

谷崎の放浪時代，明治時代末期から大正時代にかけては，激しい西欧文化流入の一方で，依然として封建社会を背景とした強大な儒教的禁欲主義と立身出世主義に貫かれていた時代であった。その中で青年たちが主導性を発揮しようとした場合，必ずと言っていいほど旧態依然とした親世代との衝突がある。谷崎は“とにかくわれわれは新旧思想の衝突を口にし親不孝を売り物にするという不心得な時代にあった。殊に私なぞはその方の音頭取りであったから（谷崎，1932, p.353）”というように，快楽主義・エゴイズム・唯美主義というような新しい思想と儒教的禁欲主義や立身出世主義といった古い思想との衝突は，谷崎に限ったことではなく，当時の青年たちの間では盛り上がりつつあったのだと考えられる。このような時代であったからこそ，谷崎の作品は不良少年の文学・悪魔主義として当時の社会に歓迎され，そのため一層，谷崎の否定的アイデンティティと芸術との関係が強まったのではないだろうか。

以上のように本研究では谷崎の伝記資料を用い，否定的アイデンティティを選択する典型的な心理力動・メカニズムを示した。また，否定的アイデンティティという概念を用いることによって，どうせ自分は悪人だからと谷崎が自己定義し，その定義に基づいて作家活動に取り組み私生活を送ったというように，谷崎の一貫した内的世界を把握することが可能となり，放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返した谷崎の行動，態度，感情をより深く理解することができたと考えられる。これらのことは今後の否定的アイデンティティ研究の発展に対して，また否定的アイデンティティに基づいた現代青年の行動，態度，感情の理解についても重要な役割を果たすだろう。しかし谷崎のように罪悪感を感じなければ，否定的アイデンティティの選択にはいたらない。創作家になりたいということは本来罪悪感を感じるような悪いことではないはずだが，親の期待や当時の社会的な背景・価値観からすると外れているといわざるを得ない。Eriksonも否定的アイデンティティの選択は“適応，画一性，規格化を求める要求の増大がなければ，必ずしも必然的なものではない（Erikson, 1968/1998, p.269）”と述べ，青年の理想像の活動範囲を制限せず，入会式や堅信礼のような“積極性〔主導性〕を元気づける道を切り開き，罪悪感を

やわらげるような償いを提供するさまざまな社会制度(Erikson, 1959/1988, p.190)”の必要性を指摘している。

本研究は否定的アイデンティティを選択した典型的な事例として明治生まれの谷崎潤一郎のみを分析の対象としているため，現代青年において一般的に本研究の仮説が当てはまるかどうかは検証できていない。したがって今後は，「どうせ俺／私は……だ」と否定的アイデンティティを選択している青年を対象に，谷崎のような心理力動・メカニズムが実際にどの程度の一般性を持つのかについて実証的に検討していく必要がある。また谷崎のように，否定的アイデンティティを選択した後，再び柔らかく統合されたまとまりへ再統合されるかどうかという問題は臨床家だけでなく教育関係者，さらには一般の人々にとっても大きな関心事だと考えられる。本研究では再統合の過程について触れなかったが，今後は否定的アイデンティティを選択した後，再び柔らかく統合されたまとまりへ再統合された谷崎の事例と，再統合されなかったと考えられる事例の比較伝記分析によって，再統合にいたる要因について検討することも有意義であろう。

文　献

赤木桁平．(1916)．谷崎潤一郎氏に就いて．*中央公論*，**31**，87-100.

千葉俊二(編)．(2001)．*谷崎潤一郎必携*．別冊国文学No.54．東京：学燈社.

Erikson, E.H. (1988)．*自我同一性*（新装版）(小此木啓吾，訳)．東京：誠信書房．(Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. (Psychological Issues Vol. 1. Monograph 1.) New York: International Universities Press.)

Erikson, E.H. (1998)．*アイデンティティ：青年と危機*（改訂五刷）(岩瀬庸理，訳)．東京：金沢文庫．(Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.)

Erikson, E.H. (2002, 2003)．*青年ルター1，2*（西平　直，訳)．東京：みすず書房．(Erikson, E.H. (1958). *Young man Luther: A study in psychoanalysis and history*. New York: Norton.)

小林秀雄 (1931)．谷崎潤一郎．*小林秀雄全集第2巻* (2001) (pp.81-96)．東京：新潮社.

近藤隆夫．(2004)．否定的アイデンティティ．谷　冬彦・宮下一博(編)，*さまよえる青少年の心：アイデンティティの病理* (pp.94-101)．京都：北大路書房.

西平直喜．(1983)．*青年心理学方法論*．東京：有斐閣.

西平直喜．(1996)．*生育史心理学序説：伝記研究から自分史制作へ*．東京：金子書房.

野村尚吾．(1972)．*伝記谷崎潤一郎*．東京：六興出版.

尾高修也．(1999)．*青年期谷崎潤一郎論*．東京：小沢書店.

大野　久．(1996)．ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析．*青年心理学研究*，**8**，17-26.

大野　久．(1998)．伝記分析の意味と有効性：典型の研究．*青年心理学研究*，**10**，67-71.

大岡　信・高橋英夫・三好行雄(編)．(1991)．*谷崎潤一郎：群像日本の作家8*．東京：小学館.

佐藤春夫．(1927)．潤一郎。人および芸術．*佐藤春夫全集第11巻* (1969) (pp.357-374)．東京：講談社.

谷崎潤一郎．(1903)．春風秋雨録（自伝）．*谷崎潤一郎全集第24巻* (pp.73-82)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1916a)．神童（小説）．*谷崎潤一郎全集第3巻* (pp.275-367)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1916b)．父となりて（随筆）．*谷崎潤一郎全集第22巻* (pp.24-31)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1917a)．異端者の悲しみ（小説）．*谷崎潤一郎全集第4巻* (pp.377-452)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1917b)．異端者の悲しみはしがき．*谷崎潤一郎全集第23巻* (pp.22-25)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1926)．*現代小説全集：谷崎潤一郎集*（口絵）．東京：新潮社.

谷崎潤一郎．(1932)．青春物語（随筆）．*谷崎潤一郎全集第13巻* (pp.343-439)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1935)．職業として見た文学について（随筆）．*谷崎潤一郎全集第22巻* (pp.306-316)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1947)．幼年の記憶（談話）．*谷崎潤一郎全集第23巻* (pp.198-228)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1955a)．「蓼喰う虫」を書いたころのこと（随筆）．*谷崎潤一郎全集第23巻* (pp.288-290)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1955b)．幼少時代（随筆）．*谷崎潤一郎全集第17巻* (pp.41-253)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1957a)．偶感（谷崎潤一郎全集刊行に際して）．*谷崎潤一郎全集第23巻* (pp.339-340)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1957b)．親不幸の思い出（随筆）．*谷崎潤一郎全集第17巻* (pp.433-459)．東京：中央公論社.

谷崎潤一郎．(1981-1983)．*谷崎潤一郎全集全30巻*．東京：中央公論社.

谷崎精二．(1967)．*明治の日本橋・潤一郎の手紙*．東京：新樹社.

付記

本論文の一部は日本教育心理学会第44回総会シンポジウム，第46回総会にて発表された。本研究をまとめ

るにあたりご指導を賜りました立教大学の大野久教授，貴重なご意見をいただきました西平直喜先生に厚く御礼申し上げます。また，査読してくださった先生方の具体的かつ的確なご助言に深く感謝いたします。

Miyoshi, Akiko (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University). *An Analysis of Novelist Junichiro Tanizaki's Choice of a Negative Identity.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 98-107.
Erikson (1968) proposed negative identity as one major aspect of identity diffusion, and suggested three crises that may induce negative identity: 1. identity crisis, 2. Oedipal crisis, and 3. a crisis of trust. This study examined the life of Japanese novelist Junichiro Tanizaki as a case example of negative identity, and revealed the psychodynamic mechanisms of a person who chose a negative identity. Tanizaki was determined to become a novelist, but he remained an unknown writer for some time, and experienced identity diffusion. In addition, Tanizaki 1. had feelings of guilt when he remained faithful to his intention to become a novelist, 2. experienced latent guilt from an Oedipus complex, and 3. remained in a state of profound regression with a sense of guilt about his own existence. These factors brought about in him a change from an essential wholeness to totalism. In effect, negative identity was the only possible way for him to take the initiative in his life as he completely denied any sence of guilt. The concept of negative identity allows us to more fully understand Tanizaki both as a novelist and in his private psychological life.
【Key Words】 Negative identity, E.H.Erikson, Identity crisis, Guilt, Junichiro Tanizaki

2006. 2. 1 受稿，2008. 2. 8 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，108-120

原　著

「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析

山田　みき
（広島大学大学院教育学研究科）

岡本　祐子
（広島大学大学院教育学研究科）

本研究では，近年重要な視点として取り上げられている「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティから青年理解を試みた。研究Ⅰでは，大学生175名を対象にして，先行研究を参考に「個」と「関係性」の視点を含む新たなアイデンティティ尺度を作成した。因子分析の結果，3因子15項目からなる「個」としてのアイデンティティ尺度と，3因子13項目からなる「関係性」に基づくアイデンティティ尺度が構成された。しかし，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティとを完全に分離することは難しいことが示された。研究Ⅱでは，大学生295名を対象にして，作成した2つの尺度の妥当性と信頼性を検討した。作成した尺度を用いてクラスタ分析を行ったところ，4つのクラスタが抽出された。その後，対象者のうち20名を対象にして，対人関係に関する質問項目からなる半構造化面接を行い，4クラスタの実際の対人関係に見られる相違を検討した。結果の整理にはKJ法を用い，最終的に各クラスタ3～5個のカテゴリーが抽出された。それらを比較・検討した結果，青年期のアイデンティティにおける「個」の側面は，自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること，「関係性」の側面は，他者を自己とは独立した存在として認識し，親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。

【キー・ワード】「個」としてのアイデンティティ，「関係性」に基づくアイデンティティ，青年期，対人関係，大学生

問題と目的

アイデンティティとは，Erikson（1950/1977）によって提唱された概念であり，「自己の単一性，連続性，不変性，独自性の感覚を意味する」（小此木，2002）。アイデンティティの確立は，青年期の重要な心理社会的課題とされ，これまでに青年期を対象として多くの研究が積み重ねられてきた。

この中で，アイデンティティを「個」と「関係性」の側面から捉える試みがなされている。この動向はJosselson（1973）に始まり，彼女は，女性のアイデンティティ発達には，男性とは異なり関係性が重要な意味を持つという見解を示した。その後，アイデンティティ発達における男女の差異を示す研究がなされ（例えばHodgson & Fisher, 1979；高橋，1988），「個人内領域（男性）－対人関係領域（女性）という2分法」（杉村，1998）でアイデンティティを理解する図式が導かれた。しかし今日では，男女の差異を強調するのではなく，性別にかかわらずアイデンティティを捉える際に共通する要素としての「関係性」の観点を含むことの有用性が示され始めている（Archer, 1993；杉村，1999）。このことは，アイデンティティ形成における「関係性」の観点が，より人間の根源的なものとして取り入れられるようになったことを表している。

この立場に立つ代表的な研究に，Franz & White（1985）が挙げられる。彼女らは，Erikson（1950/1977）の唱えた精神分析的個体発達分化の図式の第Ⅵ，Ⅶ段階の説明が不足していることを指摘した。そして，一方でErikson（1967/1982）が内的空間説を提唱していることを踏まえ，性差についてのEriksonの考察を再検討し，アイデンティティ発達に愛着の観点を加える必要があると結論付けた。彼女らは，特に成人期のアイデンティティ発達に着目し，親密性と世代性も他の段階の課題と同様に発達の初期から存在するというEriksonの考えに基づき，アイデンティティ発達における愛着の先駆的プロセスについての精緻化の必要性を述べた。まず，Eriksonによる各段階の記述を検討し直し，精神分析的個体発達分化の図式の第7行（他の段階での世代性の感覚）と第7列（世代性の先駆）を埋め，最終的に個体化経路と愛着経路からアイデンティティ発達を捉える「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」を提唱した。このモデルでは，既存の課題のうち第Ⅵ，Ⅶ段階は愛着経路に組み込まれ，愛着経路の他の段階の課題と，個体化経路の第Ⅵ，Ⅶ段階の課題が新たに想定された。なお，第Ⅰ，Ⅷ段階の課題は，両経路で同じものが設定されている。Franz & White（1985）によると，この2つの経路は「独立してはいるが相互に関係をもつ」要素であり，「より糸」と表現されている。本邦においても，岡

本（1997）が類似した立場からの見解を示している。彼女は，特に成人期のアイデンティティを捉える際に，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の2つの観点の導入が有用であるとし，この2つの観点は同等の価値を持ち，互いに影響を及ぼしあう，アイデンティティを支える両輪であると述べている。つまり，アイデンティティにおける「個」の側面と「関係性」の側面は，別の特質を持つ発達経路，つまり個体化経路と愛着経路を経て発達すると考えられる。しかしその後，これらの理論についての研究は乏しく，実証的データによる検討が求められている。

なお，上記2つの研究では，成人期のアイデンティティに焦点が当てられているが，従来からアイデンティティの確立が課題とされる青年期についても，「個」と「関係性」の観点の導入は有用であると考えられる。本邦において杉村（1998）が，青年期におけるアイデンティティ形成を「個」と「関係性」から捉える試みを行っているが，アイデンティティ形成を他者との意見の相互調整による模索の過程として捉えており，他者との関係の在り方に焦点が当てられている。しかし，青年期におけるアイデンティティの形成・確立を，それまでの様々な同一化対象を，能動的に取捨選択し秩序付け統合する過程（小此木，2002）と捉えるならば，アイデンティティを捉える「関係性」の観点とは，個人の持つ，他者と関係を結ぶ力を表すものでなければならないと考えられる。これに関して，鑪・山本・宮下（1984）は「対人的－心理的な距離を保つ能力」という言葉を用いている。アイデンティティを確立する，つまり自己表象を明確で納得のいくものにしていくためには，他者表象を自己表象に取り込んだり，そぐわないものを切り捨てたりする必要がある。アイデンティティを捉える「関係性」の側面には，上述した内的・外的に他者と関係を結び，時には切り離すことのできる能力が含まれることが求められる。

以上のことから，本研究では次の2点を目的とする。①青年のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える尺度を作成する（研究Ⅰ）。②作成した尺度の妥当性と信頼性を検討し，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティのバランスから青年を分類する。さらに，見出された各群の特徴を，他の心理的変数と対人関係の在り方の点から検討する（研究Ⅱ）。

なお，上述の先行研究を踏まえ，本研究では「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティを次のように定義する。「個」としてのアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」（Franz & White, 1985）の個体化経路に沿って発達し，自己の能力に対する信頼感を基盤に，個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。「関係性」に基づくアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」（Franz & White, 1985）の愛着経路に沿って発達し，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。これまでの先行研究でも示されてきたように，この2つの側面は互いに補完し合う関係にあり，両者が絡み合いながらアイデンティティの形成・確立がなされると考えられる。

また，研究Ⅱにおいて，対人関係の在り方に着目した理由として，以下のことが挙げられる。まず，鑪ほか（1984）の言及から，青年のアイデンティティの形成・確立が対人関係の文脈で捉えやすいことが考えられる。さらに，アイデンティティの様相を対人関係の観点から検討した研究（杉村，1998など）や，アイデンティティと対人関係との関連を検討した研究（金子，1995など）が散見されることから，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティのバランスによって，対人関係の在り方に相違が見られることが予測される。つまり，鑪ほか（1984）で言われる「対人的－心理的な距離」を，青年がどのように保ち，もしくは保ちにくく，それについてどのように認識しているのかという点に，相違が見られると考えられる。さらに，そのような青年の認識は，語りという質的なデータによりあらわれやすく，ひいては青年の実相に近づくことが可能になると考えられる。

研　究　Ⅰ

目　的

Franz & White（1985）をもとに，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える新たなアイデンティティ尺度を作成する。

方　法

対象者と調査期日　A大学の学生165名（男性90名，女性75名），平均年齢21.1歳（$SD=1.53$）。2005年1月に授業内で集団実施し，回収率は96.5％。

質問紙の構成　フェイスシート（性別，年齢，学年），「個」としてのアイデンティティ項目群（80項目，4件法），「関係性」に基づくアイデンティティ項目群（80項目，4件法）。

項目選定の手続き　Franz & White（1985）を参考に設定した課題に基づき作成した選定基準（主要部分をTable 1に示す）に従い，先行研究（中西・佐方，1983；宮下，1987；谷，1996, 2001；下山，1992；井梅，2001；中尾・加藤，2004）を参考に，項目を収集・作成した。なお，Franz & White（1985）からの変更点として，第Ⅰ，Ⅷ段階の課題も「個」と「関係性」の側面それぞれに設定したことが挙げられる。これは，基本的信頼感は，母親

Table 1　*「個」としてのアイデンティティ項目群と「関係性」に基づくアイデンティティ項目群の項目選定基準の一部と項目例*

	「個」としてのアイデンティティ			「関係性」に基づくアイデンティティ		
	課題	項目選定の基準	項目例	課題	項目選定の基準	項目例
第Ⅰ段階	「個」に対する基本的信頼感	心の最も深いところでの自己肯定。希望に支えられる。	・私は，幸せになる価値のある人間である。	自己を取り巻く世界に対する基本的信頼感	他者をはじめとする自分を取り巻く環境に対する肯定・信頼感・安心感。世の中に対する信用。	・自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる。
第Ⅱ段階	自律性	外的な命令や禁止の内在化。自分の力で決断，実行ができる。自分の行いに対する責任感。	・私は，決断する力が弱い。*	恒常性	他者という存在の認識。無力感や孤独感の脅威からの解放と，愛情対象との密接な関係性の獲得。	・人間関係は，常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる。*
第Ⅲ段階	自主性	積極的に物事に取り組む。自己統制の確立。自我理想と超自我のスムーズな形成。	・一つの目的のために，積極的に物事を進めていくことができる。	遊戯性	心理的に独立した存在として他者を認識できる。他者の思考や感情，意図に気づく。	・私は，他者は異なる考えを持っているということを感じても不安になることはない。
第Ⅳ段階	勤勉性	他に働きかけ，統制し，自己の世界に作り変えていく技術獲得のプロセス。有能感の獲得。勉強や課題などに集中し継続して取り組む。	・私は，自分の仕事をうまくこなすことができる。	共感・協力	第Ⅲ段階の状態に加え，相互性にも気づく。他者が自律的で自分と相互依存的関係を持つ存在であるという認識。	・他者と対等に接し，協力して物事を行うことができる。
第Ⅴ段階	アイデンティティの確立	自己の一貫性・連続性，社会的存在である「個」としての自分の意識化。時間的展望を有する。	・現在の自分は，過去の自分の上に築き上げられているという感覚がある。	相互性・相互依存	自己の斉一性（空間における自己の定位）が可能。対人関係に対するより精緻な理解。行動と内面の統合。	・人は互いに支え合いながら生きていくものである。
第Ⅵ段階	職業及びライフ・スタイルの模索	社会的存在としての自己を認識し，人生の方向付けを行おうとしている。またそのことに対して真剣に取り組んでいる。	・人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている。	親密性	異性や特定の他者と親密な関係を持つことができる。自分を見失わずに他者と関わることができる。	・誰かに個人的な話をされると，私は当惑してしまう。*
第Ⅶ段階	職業及びライフ・スタイルの確立	安定した生活を送れており，またその自信がある。自分の役割への自覚，誇り。	・自分の役割というものを意識することがある。	世代性	世話をする立場になることに，ある程度の自信を持っている。世代感覚を覚えつつある。	・私は，後輩のめんどうをよく見る。
第Ⅷ段階	「個」としての人生の統合	これまでにしてきた仕事や働きに対する満足感。自分の人生としての納得。自己の過去と直面し，内的な生き生きとしたものに高める。	・私は，悔いのない人生を歩んでいる。	関係性の視点からの人生の統合	これまで出会ってきた人々との関係を肯定的に捉えようとする。あるがままの過去経験に直面し，それらが現在を支え，決定しているものとみる。	・昔よくけんかをしたりあまり仲良くなかった人も，一人の人として受け入れることができる。

注．項目例の項目末の*は逆転項目であることを示す。

と母親を通じての世界に対する信頼感と自己の存在そのものに対する信頼感を含むというErikson の記述から，信頼感や統合性についても「個」と「関係性」の2つの側面を有すると考えられたためである。また，Erikson と同様に生涯を通じて発達し続けるものとしてアイデンティティを捉えているFranz & White (1985) に倣い，段階ごとに項目を収集した。選定基準と項目との対応について，筆者以外の心理学専攻の大学院生2名により，妥当性が確認された。選定基準と項目を提示し，不適当と判断された項目については，内容や項目表現の修正を行った。なお，修正の必要があると判断されたのは，「個」としてのアイデンティティ項目群で6項目（一致率は92.5％），「関係性」に基づくアイデンティティ項目群で8項目（一致率は90.0％）であった。

結　果

分析ソフトは，SPSS11.0を用いた。

因子分析　まず，回答の60％以上が1か4に偏っている項目を反応偏向項目として除外した。次に尺度別に主因子法による因子分析を行い，固有値や因子の解釈のしやすさ，共通性が.30以上という基準を設け，尺度を構成した。最終的に採用した項目は因子負荷量が，.55以上のものとした。なお，因子間に相関関係があることが予想されたため，プロマックス回転を用いて因子を抽出した。

「個」としてのアイデンティティ尺度（以下，「個」尺度と略記）では，「自己への信頼感・効力感」，「将来展望」，「自律性」の3因子15項目の因子構造が得られた（Table 2）。下位因子の信頼性係数はそれぞれ，α=.85, .81, .79であり，尺度全体の信頼性係数はα=.85であった。「関係性」に基づくアイデンティティ尺度（以下，「関係性」尺度と略記）では，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」，「他者との適度な距離感」，「関係の中での自己の定位」の3因子13項目の因子構造が得られた（Table 3）。下位因子の信頼性係数はそれぞれ，α=.90, .70, .67であり，尺度全体の信頼性係数はα=.83であった。以上より，一部やや低い値も見られるが，両尺度とも尺度全体としては，十分な内的整合性をもつことが示された。

相関分析　「個」尺度と「関係性」尺度との関連を検討するために，2つの尺度の下位因子と尺度得点間の相関分析を行った（Table 4）。その結果，尺度得点間に，r=.57の1％水準で有意な相関が認められた。また，「個」尺度得点は，「関係の中での自己の定位」と（r=.52），「関係性」尺度得点は，「自己への信頼感・効力感」と「自律性」と（それぞれr=.53, .55），比較的強い相関を持つことが示された。両尺度の下位因子間で特に相関が強かったのは，「自律性」と「関係の中での自己の定位」であった（r=.60）。

考　察

因子分析の結果，それぞれ3因子から構成される「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度が作成された。

「個」尺度の第1因子「自己への信頼感・効力感」は，5項目中3項目が第Ⅰ段階に対応する項目であり，自己への基本的信頼感が，青年期の「個」としてのアイデンティティの中核にあることが示唆された。第2因子「将来展望」は，5項目中3項目が第Ⅵ段階に対応する項目であり，青年期の次の段階である成人期の課題への取り組みが，「個」としてのアイデンティティの構成要素であることが示された。これに関しては，本研究の対象者が大学生，つまり詳細に分類すると青年期後期にあたる人々であったことが影響している可能性が考えられる。第3因子「自律性」は，5項目中3項目が第Ⅱ段階に対応する項目であり，残りの2項目も青年期以前の段階に対応する項目である。このことは，青年期以前の発達段階の課題の中で，特に自律性が青年期のアイデンティティ形成にも重要な役割を果たすことを示す。これは，Erikson（1967/1982）の青年は「人生の道の一つを，自由なる同意をもって意思決定する機会を求める」という青年期と幼児前期（第Ⅱ段階）の類似性への言及と一致する。

次に，「関係性」尺度の第1因子「自己を取り巻く世界

Table 2　*「個」としてのアイデンティティ尺度の因子分析結果*

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己への信頼感・効力感」（α=.85）				
私は，多くのことに対して自信を持って取り組むことができる（Ⅰ）	.83	-.07	.02	.65
私は，自分が役に立つ人間であると思う（Ⅳ）	.78	.03	-.10	.57
私は，自分が好きだし，自分に誇りをもっている（Ⅴ）	.73	.00	.00	.53
私は，きっとうまく人生を乗り越えられるであろう（Ⅰ）	.66	-.04	.03	.43
自分の考えに従って行動することに自信を持っている（Ⅰ）	.58	.20	.05	.54
第2因子「将来展望」（α=.81）				
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている（Ⅴ）	.02	.80	-.01	.65
将来の職業（専業主婦も含む）について，具体的に考えている（Ⅵ）	-.10	.73	-.02	.46
人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている（Ⅵ）	-.02	.66	-.02	.42
私は，目的を達成しようとがんばっている（Ⅳ）	.08	.61	.01	.44
今後，どんな風に生活していくかを考えている（Ⅵ）	.09	.57	.05	.41
第3因子「自律性」（α=.79）				
私は，決断する力が弱い*（Ⅱ）	-.01	.04	.70	.48
私は，自分の判断に自信がない*（Ⅱ）	.03	.05	.70	.52
私は，誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている*（Ⅲ）	-.11	.02	.66	.38
私は，物事を完成させるのが苦手である*（Ⅳ）	-.03	.03	.64	.40
何かしたあとで，それが正しかったかどうか心配になることが多い*（Ⅱ）	.14	-.16	.61	.44
寄与率（％）	30.25	12.51	6.06	
因子間相関　F1		.52	.48	
因子間相関　F2			.18	

注．項目末の*は逆転項目であることを示す。
　項目末の（ ）は，その項目を選定した際の対応する段階を示す。

Table 3　「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（α＝.90）				
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる（Ⅰ）	.87	-.06	.02	.74
これまでに出会った人々によって，今の自分が支えられていると感じる（Ⅷ）	.83	-.18	.09	.65
私は人間関係を大事にしており，それによって多くのものを得ている（Ⅴ）	.76	.13	-.10	.62
これまで私が築いてきた人間関係は，私にとって価値のあるものである（Ⅷ）	.68	.08	.07	.53
私がこれまでに関わりをもった人々は，私によい影響を与えてくれた（Ⅷ）	.67	.00	-.13	.44
友人関係は，比較的安定していると思う（Ⅴ）	.63	.20	.03	.52
自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる（Ⅰ）	.60	.00	.10	.39
第2因子「他者との適度な距離感」（α＝.70）				
私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる*（Ⅱ）	.10	.69	.04	.56
私は批判に対して敏感で傷つきやすい*（Ⅳ）	-.19	.67	.17	.53
閉じこもって全く人と話をしたくなくなるときがある*（Ⅳ）	.15	.62	-.14	.39
第3因子「関係の中での自己の定位」（α＝.67）				
集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことを表明できる（Ⅵ）	.14	-.14	.69	.45
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見を主張するのにためらいを覚える*（Ⅵ）	-.05	.10	.66	.50
他者と一緒に何か物事を行うとき，私はよく受身的になってしまう*（Ⅲ）	-.04	.07	.56	.34
寄与率（%）	32.54	13.40	5.24	
因子間相関　F1		.30	.19	
F2			.48	

注．項目末の*は逆転項目であることを示す。
　項目末の（ ）は，その項目を選定した際の対応する段階を示す。

Table 4　「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の下位因子間相関

	「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」	「他者との適度な距離感」	「関係の中での自己の定位」	「関係性」に基づくアイデンティティ尺度得点
「自己への信頼感・効力感」	.41**	.35**	.40**	.53**
「将来展望」	.28**	.00	.16*	.18*
「自律性」	.18*	.41**	.60**	.55**
「個」としてのアイデンティティ尺度得点	.39**	.34**	.52**	.57**

注．*p<.05　**p<.01

への信頼感と関係性の価値付け」は，第Ⅰ，Ⅴ，Ⅷ段階に対応する項目から構成されており，発達段階全体に渡る「関係性」に基づくアイデンティティの課題を集約的に反映していると考えられる。第2因子「他者との適度な距離感」は，3項目中2項目が第Ⅳ段階に対応する項目であった。この段階の課題は「共感・協力」であり，項目選定基準として，自分と相互性を持つ心理的に独立した存在として他者を認識することが挙げられている。他者の意思や思考と自分の意思や思考とを混同しないことにより，自分が周囲から取り残されていると感じるのではなく，相互関係を持つことが可能な対象として周囲の他者を捉えることができることと考えられたため，第2因子を「他者との適度な距離感」と命名した。第3因子「関係の中での自己の定位」は，3項目中2項目が第Ⅵ段階に対応する項目であった。この段階の課題である「親密性」の項目選定基準には，異性との関係を築けることと「自分を見失わず他者と関わることができる」ことが挙げられている。項目にある意見の表明や主張を可能にするのは，他者との関係の中で自己を位置づけ，他者の存在に自己の存在が脅かされないことと考えられたため，第3因子を「関係の中での自己の定位」と命名した。成人期についてErikson（1967/1982）が，「すでに確立された活力的な力強さのゆえに，二人は，意識や言語や倫理の点ではじめて類似した存在となり，しかも成熟した成人としてのお互いの違いを率直に認め合うようになれる」と述べていることから，真の親密性とは，他者に自らのアイデンティティを参与させながらも，互いの違いを認めることができることと捉えられる。本研究の結果から，アイデンティティの形成・確立と重なって，親密性の獲得に向かう取り組みも始まっていると考えられ，このことは先行研究においても示唆されている（伊藤，1983；高橋，1988）。

以上のことより，青年期における「個」としてのアイデンティティは，自己の能力に対する肯定的な意識や将来に向けての取り組みを中心として構成されていること，「関係性」に基づくアイデンティティは，他者をはじめとする自己を取り巻く世界への信頼感や，自己と他者の相互性への十分な気づき，親密性への取り組みを中心として構成されていることが明らかになった。また，収集した項目のうち最終的に採用されなかった項目の多くは，両尺度共に第Ⅶ，Ⅷ段階のものであった。このことより，具体的なレベルの課題や人生の統合に向かう課題は，青年期においては取り組まれず，意識されていないと考えられる。

相関分析の結果，両尺度得点間に比較的強い相関が認められたことより，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティとは，青年期においては完全に分離しえないことが示された。これに対して，成人期のアイデンティティは，ケア役割など社会的役割の影響が反映され，「個」と「関係性」が2つの軸として区分される（岡本，1997）。つまり，親として育児に関わることや上司として部下の指導に当たることなどは，成人期の主要な役割であり，これらのケア役割は，成人期における「関係性」に基づくアイデンティティの典型的なものと考えられる。しかし，役割が一定でない青年期，特に大学生においては，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の様相はより融合的であると考えられる。なお，特に「自律性」と「関係の中での自己の定位」とは強い関連を持ち，また，この2つの因子はそれぞれ，「関係性」尺度得点と「個」尺度得点とも比較的強い関連をもつことが示された。従って，自律や他者との関係の中での自己の位置づけにおいては，より「個」と「関係性」が融合し，相補的な関係にあることが考えられる。

本研究ではFranz & White（1985）の理論の実証的検討を第一の目的としたため，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の側面を当初から別のものと想定したところに限界点がある。Franz & White（1985）も述べているように，個体化と愛着は「独立してはいるが相互に関係をもつ2つの要素」であり，まずは理論に沿った尺度を作成し，探索的な検討を行うことには意味があると考えられる。今後，理論の精緻化と並行して実証研究を重ねることにより，より実相に近づくことのできる尺度の作成が期待される。

研　究　Ⅱ

目　的

研究Ⅰで作成した尺度の妥当性と信頼性を検討し，尺度得点を用いて対象者を分類する。信頼性に関しては，内的整合性と再検査信頼性について検討する。妥当性に関しては，以下の予測に基づき分析を行う。①同一性混乱尺度と負相関をもつ（併存的妥当性の検討），②加齢に伴い両尺度得点が上昇する，③自尊感情尺度と正相関をもつ，④特性不安尺度と負相関をもつ（以上が構成概念妥当性の検討）。また，探索的に，尺度得点を用いて見出された各群の特徴を，他の心理的変数との関連と，対人関係の在り方に関する語りから明らかにする。

方　法

対象者と調査期日　A，B大学の学生295名（男性167名，女性128名）。平均年齢19.8歳（$SD=1.49$）。面接調査の対象者は，調査への協力に応じた学生のうち，後述する4つのクラスタからそれぞれ5名ずつ計20名（男性9名，女性11名）を，男女比を考慮した上でランダムに選出した。平均年齢20.0歳（$SD=1.03$）。質問紙調査は，2005年5，6月に授業内で集団実施し，回収率は95.2％。面接調査は2005年7月下旬～9月上旬に実施。

質問紙の構成　フェイスシート（性別，年齢，学年），「個」尺度（15項目，4件法），「関係性」尺度（13項目，4件法）。併存的妥当性を検討するために，砂田（1979）の同一性混乱尺度（34項目，3件法）を用いた。構成概念妥当性の検討には，清水・今栄（1981）の特性不安尺度（20項目，4件法）と，山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（10項目，5件法）を用いた。なお，これら3つの尺度は，既存のアイデンティティ尺度の作成において妥当性の検討のために用いられており（谷，1996，2001；宮下，1987），また構成概念妥当性の検討のために加えた2つの尺度に関しては，過去のアイデンティティ研究において，アイデンティティの発達・成熟と関連がある変数として用いられている（鑪ほか，1984）ことから採用した。

再検査法の手続き　調査実施の1カ月後に，A大学の一部の学生を対象に再検査を実施した。対象者の照合のために，学籍番号の記入を求めた。分析対象者は，50名（男性21名，女性29名）。平均年齢は20.0歳（$SD=1.33$）。

面接調査の手続き　個別に1回90～120分の半構造化面接を行った。調査開始前に面接承諾書に署名を求め，録音や結果の公開についての同意を得た上で，内容を全て録音し逐語記録を作成した。調査場所は，A大学は大学附属の心理臨床センターの面接室，B大学は学生相談室であり，いずれも第3者の出入りのない場所であった。

面接調査の質問内容　対象者の対人関係の在り方や，それに対する評価・考え方などを幅広く聴取するために，以下の5項目を尋ねた。①周囲にいる関わりのある他者との関係の在り方とそれへの評価。②最も関わりの深いと思う他者との関係の在り方とそれへの評価。③他者との関わりの中で困難であった出来事とそれへの対

応。④小学校入学前，小学校，中学校，高校の各時期で関わりの深かった他者との関係や思い出とそれへの評価。⑤一人でいる時の過ごし方。

面接調査データの整理の手順　逐語記録から各対象者の対人関係に関する発言を文章単位（1～3文程度）で抜き出し，それぞれのクラスタの特徴を抽出するために，クラスタごとにKJ法（川喜田，1967）により，類似した発言をグルーピングしカテゴリー化した。抜き出した発言数は，クラスタ1から順に184個，163個，197個，174個であった。抜き出した発言を1枚のカードに1つずつ記入し，それらを机上にランダムに並べ，記入してある発言を何度も読み，意味の近いと考えられるカードを収集してグループ化した（第1段階）。次に，収集したカード全体を見渡し，それらに共通するテーマ（そこに表れている心理的な意味）を1つのグループに1つつけた。この作業を全てのグループに対して行い，各クラスタの下位カテゴリーを構成した。下位カテゴリーを記述したカードに対し，同様の作業を実施し（第2段階），さらにもう1段階同様の作業を行い（第3段階），最終的なカテゴリーを構成した。この時点での各クラスタのカテゴリー数は3～5であり，これらを各クラスタの特徴を表すカテゴリーとした。以上の作業を，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生6名の計7名で行った。後日，最終的に抽出されたカテゴリーの妥当性を検討するため，筆者が作成した評定マニュアルにより，それぞれのカテゴリーの特徴を提示し（KJ法第2段階の時点でのカテゴリーも提示），全発言数の7割の発言を，臨床心理学を専攻する大学院生2名が独立して再分類した。評定者間の一致率は，クラスタ1から順に81.0％，78.7％，86.6％，88.7％であり，十分な妥当性が示された。なお，評定が一致しない項目は，評定者間で協議の上分類を行った。

結　果

分析ソフトはSPSS11.0を用いた。

信頼性と妥当性の検討　内的整合性と再検査信頼性の観点から，尺度の信頼性を検討した。「個」尺度の信頼性係数は，研究Ⅰではα=.85，研究Ⅱではα=.86であり，「関係性」尺度の信頼性係数は，研究Ⅰではα=.83，研究Ⅱではα=.79であった。研究Ⅱにおける下位因子の信頼性係数は，「自己への信頼感・効力感」α=.84，「将来展望」α=.83，「自律性」α=.68，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」α=.86，「他者との適度な距離感」α=.50，「関係の中での自己の定位」α=.66であった。

再検査法による信頼性の検討では，1回目と2回目の得点の相関係数を算出した結果，「個」尺度では，尺度得点r=.87，「自己への信頼感・効力感」r=.83，「将来展望」r=.83，「自律性」r=.79であった。「関係性」尺度では，尺度得点r=.71，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」r=.68，「他者との適度な距離感」r=.71，「関係の中での自己の定位」r=.77であった。

作成した尺度の妥当性を検討するために，「個」尺度得点，「関係性」尺度得点，下位因子得点と，同一性混乱尺度，特性不安尺度，自尊感情尺度の尺度得点との相関係数の算出，及び「個」尺度得点と「関係性」尺度得点の学年差を検討した（Table 5）。

Table 5　*「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の下位因子得点と尺度得点の全体と学年ごとの平均値と，他の尺度との相関*

	全体	1年生	2年生	3年生	4年生	F値（多重比較）	同一性混乱尺度	特性不安尺度	自尊感情尺度
「自己への信頼感・効力感」	2.39 (0.66)	2.37 (0.66)	2.26 (0.64)	2.44 (0.67)	2.60 (0.70)	*n.s*	-.53**	-.57**	.73**
「将来展望」	2.61 (0.71)	2.45 (0.70)	2.43 (0.65)	2.77 (0.68)	2.88 (0.88)	6.38 (1<2<3<4)	-.51**	-.35**	.44**
「自律性」	2.59 (0.56)	2.49 (0.48)	2.53 (0.63)	2.69 (0.54)	2.53 (0.60)	*n.s*	-.61**	-.59**	.55**
「個」としてのアイデンティティ尺度得点	7.59 (1.53)	7.31 (1.36)	7.22 (1.53)	7.90 (1.50)	8.01 (1.81)	4.75 (2<3)	-.69**	-.63**	.72**
「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」	3.02 (0.61)	2.98 (0.59)	2.99 (0.65)	3.01 (0.61)	3.20 (0.54)	n.s	-.46**	-.30**	.37**
「他者との適度な距離感」	2.53 (0.69)	2.61 (0.69)	2.51 (0.63)	2.53 (0.72)	2.25 (0.75)	n.s	-.51**	-.64**	.40**
「関係の中での自己の定位」	2.39 (0.68)	2.18 (0.65)	2.33 (0.71)	2.51 (0.67)	2.56 (0.59)	4.09 (1<3)	-.51**	-.43**	.41**
「関係性」に基づくアイデンティティ尺度得点	7.94 (1.41)	7.77 (1.31)	7.84 (1.47)	8.07 (1.42)	8.01 (1.33)	*n.s*	-.69**	-.65**	.55**

注．（ ）内は標準偏差を示す。
**p<.01

相関分析の結果，全ての変数間に1％水準で有意な相関関係が認められた。「個」尺度においては，「自己への信頼感・効力感」と自尊感情尺度間と，「個」尺度得点と自尊感情尺度間で，$r=.70$ を越える強い相関係数が示された。「関係性」尺度においては，$r=.70$ を越える高い相関係数は得られなかった。

次に，1年生から4年生までのデータを用いて両尺度の尺度得点と下位因子得点について分散分析を行った結果，「個」尺度では，「将来展望」($F(3,290)=6.38$, $p<.01$)，「個」尺度得点 ($F(3,290)=4.75$, $p<.01$) において有意差が，「自律性」($F(3,290)=2.36$, $p<.10$) において有意差傾向が認められた（Table 5）。下位検定（Tukey法）の結果，2年生と3年生の間を境に有意に得点が上昇していることが示された。「関係性」尺度についても，同様の手続きを取り学年差を検討した結果，「関係の中での自己の定位」($F(3,290)=4.09$, $p<.01$) において，有意差が認められた。下位検定（Tukey法）の結果，1％水準で1年生より3年生の方が高得点であることが示された。

クラスタ分析　研究Ⅰで「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティの完全な分離が難しいことが示されたことから，尺度得点の高低の組み合わせでの分類は妥当ではないと考えられたため，クラスタ分析を用いて青年の分類を試みた。作成した尺度の下位因子得点を標準化し，非階層法によるクラスタ分析を行った結果，4つのクラスタが抽出された（Figure 1）。クラスタ1 ($n=86$) は，「自律性」，「他者との適度な距離感」，「関係の中での自己の定位」が平均より高く，「自己への信頼感・効力感」，「将来展望」，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」が低い群であり，「関係性」優位群と命名した。クラスタ2 ($n=73$) は，全ての因子得点が平均値より高い群であり，統合群と命名した。クラスタ3 ($n=61$) は，全ての因子得点が平均値より低い群であり，未熟群と命名した。クラスタ4 ($n=75$) は，クラスタ1と逆の得点配置を示す群であり，「個」優位群と命名した。

各クラスタの特徴　各クラスタに属する対象者の特徴を明らかにするために，特性不安尺度の合計得点を従属変数とした分散分析を行った（Table 6）。その結果，クラスタの主効果が認められた ($F(3,290)=77.04$, $p<.01$)。引き続き下位検定（Tukey法）を行ったところ，「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に1％水準で有意な差が認められた。なお，「関係性」優位群と「個」優位群の間には，有意差傾向が認められた。自尊感情尺度についても同様に分析を行ったところ，クラスタの主効果が認められた ($F(3,290)=58.28$, $p<.01$)（Table 6）。引き続き下位検定（Tukey法）を行ったところ，「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に1％水準で有意差が認められた。

この結果から，統合群は，他のクラスタに比べて特性不安が低く自尊感情が高く，精神的健康度が最も高いことが示された。これとは反対に，未熟群は，他のクラスタに比べて特性不安が高く自尊感情が低く，精神的健康度が最も低いことが示された。「関係性」優位群と「個」優位群は，自尊感情，特性不安共に，統合群と未熟群の中間に位置した。

各クラスタの語りの特徴　KJ法により抽出された複数のカテゴリーについて，具体的な発言例を交えて詳細に検討した（Table 7）。

「関係性」優位群では，KJ法の結果，第1段階で34個，第2段階で15個，第3段階で5個のカテゴリーが抽出

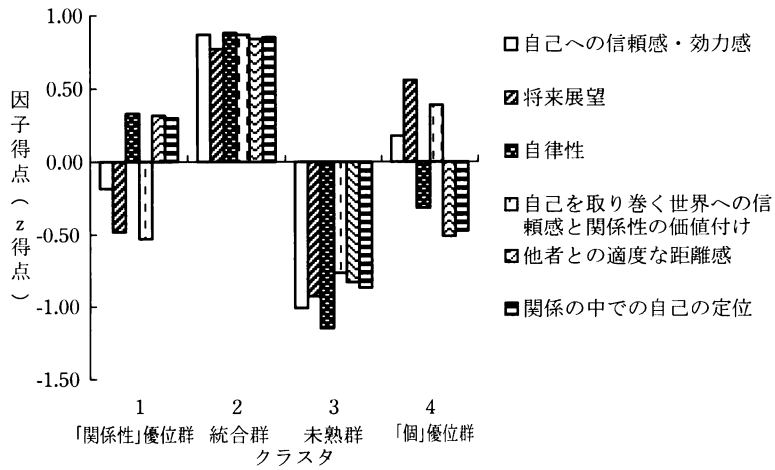


Figure 1　*クラスタ分析の結果*

Table 6　*クラスタごとの特性不安尺度，自尊感情尺度の平均値と標準偏差*

クラスタ	特性不安尺度得点	自尊感情尺度得点
1「関係性」優位群	46.85(6.36)	31.89(6.11)
2 統合群	40.66(7.31)	38.53(4.94)
3 未熟群	58.92(7.32)	24.60(6.18)
4「個」優位群	49.64(7.20)	31.45(6.85)
F値	77.04**	58.28**
(多重比較)	(2<1,4<3)	(3<4,1<2)

注．( ) 内は標準偏差を示す。
**$p<.01$

Table 7　*KJ法により抽出されたカテゴリーと発言例*

クラスタ	カテゴリー	発言例	該当者
1「関係性」優位群	他者への信頼感	・相手（恋人）を尊重しても大変なことにはならない。(B) ・やっぱ一番信頼して，一番理解してくれるのは親。(C)	A, B, C, E (4人)
	相互尊重	・(恋人とは）基本的にお互いの意見や考えをちゃんと言う，全部。(B) ・(友人とは）理解を示すような感じでお互いの違いを否定することはない。(C)	A, B, C, D (4人)
	表面的な対人関係志向	・あまり連絡しない家族。(B) ・周りはすごい本当に仲良しって感じに見えるけど，そんなに深く仲良くならない，私は。(E)	B, C, D, E (4人)
	他者からの被影響性	・(他者に）あんまり干渉されたくない。自分の生活の中に入ってきそうな時は面倒くさいなと思う。(D) ・わざわざ自分のリズムを崩す必要はない。(E)	A, B, C, D, E (5人)
	自己と他者の融合	・相手を相手として，一人の人として認めてるわけじゃなくて，自分の延長みたいな感じに捉えてしまう。(A) ・(恋人と）一緒にいると2人とも主体性がなくなる。(B)	A, B, C (3人)
2 統合群	関係への満足と安心感	・(仲間の存在は）自信になる。自分のこと分かってくれる人がそれだけいるっていう意味で。(H) ・居心地がいい。サークルは大事。(J)	F, G, H, I, J (5人)
	相互に独立した他者の認識	・(親友とは）性格全然違うから全然合わないと思ったけど意外と。(F) ・ライバルじゃないけどいい刺激っていうか。負けたくないけど，でも仲がいい。尊敬じゃないけど大事，いい友達。(J)	F, G, H, I, J (5人)
	自他の視点の分化と他者への配慮	・(友人が傷つかないようにという意図を持ち，友人の）機嫌を損ねないようにしようと。(G) ・(自分は先入観をもたれやすく）友達の方がそういう抵抗を持ってるから，最初のうちは優しめに接する。(I)	G, I, J (3人)
	周囲への不満と自己内緩和	・お父さんが我儘。でも今は落ち着いているからいい。(G) ・(サークルの仕事をしていて）居心地がいい，求められてる感じ。だけど私だけやってるんじゃないかと，たまに不安に思う。(J)	F, G, I, J (4人)
	一人でいることへのアンビバレントな気持ち	・人といると楽しいけど，やっぱり疲れるところもあって。(G) ・(親友を）積極的に欲しいとは思わないけど，いないのはマイナスかな。(J)	G, H, I, J (4人)
3 未熟群	親密な関わりの拒否・回避	・私は友達にしても何にしても，仲が悪くなったら連絡を断つ。(L) ・僕の周辺世界って5人ぐらいで回ってます。(O)	K, L, M, N, O (5人)
	関わることへの不安	・人と話す時も不安。余計なことしないか，不愉快にさせないかと。(K) ・あの時なんであんな風に言ったんだろうとか，結構考えて一人でもやもやする。(M)	K, L, M, (3人)
	不安定な家族関係	・やっぱり家族は重い。(L) ・勉強しろと言われ，反抗期の延長みたい。(O)	K, L, M, N, O (5人)
	特定の他者への信頼感	・やっぱり実家は安心する。(N) ・(サークルの仲間は）全然連絡取らなくても大切。(O)	K, L, M, N, O (5人)
4「個」優位群	関係の深まりへの拒否感	・本当に表面的。個人的なことはしゃべらない。(R) ・その場その場での人付き合い。(T)	P, Q, R, S, T (5人)
	他者への信頼感	・人には言いづらいことでも，この人なら言える。(R) ・実家に帰った時に，やっぱり家族の中にいるのはいいなと思う。(S)	P, Q, R, S, T (5人)
	対人関係の広がりを志向	・ネットワークを形成したい。(Q) ・いっぺんに友達が増えた。たくさんの人と友達になるのも好き。(S)	Q, S (2人)

注．該当者欄のアルファベットは事例番号を示す。

された。「他者への信頼感」は，友人や家族などの他者への信頼感や，信頼感を伴った他者との関係を表す発言が含まれる。「相互尊重」は，主に友人との関係において，互いの意見を伝え合い相違を認めようとすることや対人関係上の問題に積極的に取り組む態度を表す発言が含まれる。「表面的な対人関係志向」は，他者との関わりにおいて，深く入り込まず論理的な思考によって対処しようとすることを表す発言を含む。「他者からの被影響性」は，他者との関係の中で他者からの影響を拒否・排除しようとすること，集団に属することへの苦手意識などを表す発言を含む。「自己と他者の融合」は，主に両親や恋人との関係における他者との融合感や密着を表す発言を含む。自己と融合した他者像を求めるため，実存的な孤独感を抱いていることも語られた。

統合群では，KJ法の結果，第1段階で30個，第2段階で12個，第3段階で5個のカテゴリーが抽出された。「関係への満足と安心感」は，周囲の他者や環境に対する満足感やそこで感じる安心感を表す発言を含む。特定の他者との関係のみならず，幅広い他者との関係も言及された。「相互に独立した他者の認識」は，相互尊重や対人関係への内省的態度など，他者を相互に独立した存在として認識し，関わっていることが示される発言を含む。「関係性」優位群の「相互尊重」に比べると，互いの違いを認めた上で信頼関係を結んだり相手を受容したりすること，さらに生産的なライバル関係を結ぶことも含まれている。「自他の視点の分化と他者への配慮」は，他者と関わる際に他者の視点や見方にも目を向け，時には配慮して関わることを表す発言を含む。なお，統合群であっても，他者の目や視点を気にするという青年期的な特徴は見られること，この自他の視点の分化に基づき，他者への配慮がなされることが示された。「周囲への不満と自己内緩和」は，家族や周囲の他者に対しての不満や批判とそれを自分の中で緩和していることを示す発言を含む。「関係への満足と安心感」に含まれる肯定的な感情が語られる一方で，不満や批判などの否定的な感情も同時に語られた。「一人でいることへのアンビバレントな気持ち」は，一人でいることへの肯定・否定の両方の思いが語られた発言を含む。関わりを持つことのいいところと悪いところを並列して語り，結果的には両方ある現状に満足していることが語られた。

未熟群では，KJ法の結果，第1段階で32個，第2段階で24個，第3段階で4個のカテゴリーが抽出された。「親密な関わりの拒否・回避」は，他者に対する不信や関わりへの苦手意識と強い拒否感のために，関係が深いものにならないよう撤退する，もしくは関係を切るという方法を用いていることが示された発言を含む。「関わることへの不安」は，行動的には「親密な関わりの拒否・回避」と類似しているが，その根底にある他者との関わりへの不安が強く表された発言を含む。他者を傷つける不安や他者に傷つけられる不安，他者に対する攻撃的な思いが表れている。「不安定な家族関係」は，家族との密着した関係やネガティブな関わりを表す発言を含む。青年期に至っても，他者との関わりの大半を家族が占め，それが家族以外の他者との関係にも影響を及ぼしていることが語られた。「特定の他者への信頼感」は，関わる他者の人数は少なく，また関係の中身も具体的には語られないが，他者に対する肯定的な感情が示された発言を含む。尊敬する他者との関係に多く見られるような，極端な信頼感が特徴的であった。

「個」優位群では，KJ法の結果，第1段階で31個，第2段階で16個，第3段階で3個のカテゴリーが抽出された。「関係の深まりへの拒否感」は，表面的で浅い対人関係を築いているという発言や，仲の良い他者との関わりの深さを会う頻度や時間などの物理的な基準で説明した発言を含む。他人に関心がない，プライベートなことは話さないなど，関わりへの拒否が示された。「他者への信頼感」は，限定的ではあるが，他者との安定した信頼関係を表す発言を含む。大学入学後の家族との関係の変化への言及が多く，家族との関係を客観的に捉え，肯定的な感情を持つに至っていることが語られた。また友人との関係での相互理解も，統合群と類似し，自分とは異なる他者の意見を受け入れることが可能であることが示された。「対人関係の広がりを志向」は，浅い付き合いでの関係の広がりを志向することを示す発言を含む。

なお，全ての群に共通して，他者への信頼感に関わる発言が見られた。詳細に見ると，信頼を向ける対象の質には相違が見られるが，他者への信頼感は，全ての青年に共通して見られる資質であることが示された。

考　察

信頼性と妥当性の検討　内的整合性と再検査信頼性の検討により，両尺度の安定した信頼性が確認された。下位因子の信頼性係数において，一部低い値も認められたが，研究Ⅰの結果も踏まえ，一応の信頼性を有すると考えられた。

両尺度得点，下位因子得点と，他の尺度得点との相関分析，及び両尺度得点の学年差の検討の結果，両尺度の妥当性が確認された。なお，自尊感情尺度との相関分析の結果，「個」としてのアイデンティティの方がより高い相関を示した。このことから，「関係性」に基づくアイデンティティよりも，「個」としてのアイデンティティの方が，個人の自己価値に関する変数とは，強い関連を持つと考えられる。これは，本研究で想定した，アイデンティティを捉える視点としての「個」と「関係性」の違いが示された結果とも考えることができる。また，両尺度の学年差の結果からは，全体的に学年が上がるほど尺度得点も上昇することが示された。下位検定の結果，有

意差の多くは，1，2年生と3年生の間で認められており，これは青年期においてアイデンティティが形成されやすいのが大学3年から4年にかけてであることを示した加藤（1989）を支持する。特に，「将来展望」や「関係の中での自己の定位」など，より発達後期に顕在化すると考えられる要素については，大学生の間での発達的な差が認められると考えられる。一方，「自己への信頼感・効力感」，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」，「他者との適度な距離感」には有意差が認められなかったことからは，信頼感というより発達早期に重要となる要素については，大学生の間では発達的な差が認められないことが示唆された。

クラスタ分析　作成した尺度の下位因子得点を用いて行ったクラスタ分析の結果，4つのクラスタが得られた。クラスタによる特性不安尺度得点と自尊感情尺度得点の違いから，全ての下位因子が平均より高い統合群において，特性不安が低く自尊感情が高いという結果が得られ，精神的健康度が高いことが示された。また，全ての下位因子が平均より低い未熟群においては，統合群と逆の結果が得られた。「個」優位群と「関係性」優位群の間には，明確な差は示されず，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティの両方が高いことが，精神的健康の高さに関連すると考えられる。

対人関係の在り方に見られる各クラスタの特徴　クラスタごとに対人関係に関する語りを整理した結果，「個」と「関係性」のバランスによる対人関係の在り方における差異が認められた。語りに見られた「個」と「関係性」それぞれの特徴について，以下に述べる。

まず，「個」の側面が平均より低い未熟群と「関係性」優位群に共通して見られた特徴として，自己と他者の融合感からくると考えられる関わることへの不安が挙げられる。未熟群の「関わることへの不安」と「関係性」優位群の「自己と他者の融合」に含まれる発言を見ると，自分の存在や行動を他者のそれと重ねてしまう傾向が認められ，「関係性」優位群では，「他者からの被影響性」を表す語りも見られた。小此木（2002）は，青年期においては，周囲への同一化した状態から「その価値観を自分のものにするプロセス」が進行すると述べている。このことからも，周囲への同一化が強い状態に自他の融合感が生じ，「関係性」優位群では，「他者からの被影響性」に示されるように他者の影響を拒否・排除しようとすると解釈される。また，「個」の側面が平均より高い統合群と「個」優位群に共通して見られた特徴として，幅広い他者との関係を求める傾向が見られた。関係の質の面では2群間に差異が認められ，「個」優位群の一部の対象者においては，対人関係の広がりを自分の利益と考えていることも示されており，他者との関係自体よりも，そのことが個人としての自分にどのように役立つかに価値を見出していることが考えられる。

次に，「関係性」の側面が平均よりも低い未熟群と「個」優位群に共通して見られた特徴として，親密な関わりや関係の深まりへの拒否が挙げられる。未熟群の「親密な関わりへの拒否・回避」と「個」優位群の「関係の深まりへの拒否感」に含まれる発言を見ると，他者と関係を築く「対人的－心理的な距離を保つ能力」（鑪ほか，1984）が未熟であり，他者との関係を浅いものに止める，もしくは関係そのものを回避するという手段を用いることが示唆された。一方で，「関係性」の側面が平均より高い統合群と「関係性」優位群に共通して見られた特徴として，自己と他者を相互に独立した存在として認識していることが挙げられる。これは，Erikson（1967/1982）が成人期の特徴として述べている，自らのアイデンティティを相手に参与させ，互いの違いを尊重することが可能な状態に近づいていると考えられる。また，統合群では，関係への満足と安心感が語られる一方で，その中で感じる不満についても述べられ，他者との関係をうまく築きつつ，個人としての見方や意見を持つこともできると考えられる。つまり，「個」としてのアイデンティティも「関係性」に基づくアイデンティティも共に成熟した在り方であると言える。

以上のように，対人関係の在り方において，「個」の側面は，自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること，「関係性」の側面は，他者を自己とは独立した存在として認識し，親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。しかし，「関係性」優位群にも「個」優位群にも，それぞれ「個」と「関係性」の側面を示唆する発言も存在した。「関係性」優位群に見られた「他者からの被影響性」に見られる他者の影響の拒否や排除に，どの程度「個」の側面が反映されているのか，「個」優位群に見られた「他者への信頼感」がどの程度「関係性」の側面を反映しているのかという点については，面接調査の内容を「個」にも焦点を当て，検討を重ねる必要がある。

今後の課題

本研究では，Franz & White（1985）に依拠し，青年のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを目的とした。しかし，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」に明確に区分することは難しく，特に数量的な分析では2つの要素を完全に分離することはできなかった。そのため，本研究では，概念的構成に疑問が残る結果となった。今後，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティに関する理論的・実証的研究のさらなる積み重ねが必要と考えられる。なお，「関係性」尺度は，再検査信頼性が「個」尺度に比べて低かったこと，下位因子の信頼性係数に低いものが

あったことから，尺度の安定性には検討の余地が残る。また，研究Ⅱの面接調査では対人関係のみを扱ったため，「個」の側面がより表れる領域についても，検討していくことが求められる。加えて，本研究では，面接調査のデータを十分に分析し考察することができなかった。今後，面接調査のデータを詳細に分析し，「個」と「関係性」のバランスによる対人関係場面での違いについて，より詳細に検討していく必要があると考えられる。

文　献

Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity* (pp.75-99). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Erikson, E. H. (1977/1980). *幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ*（仁科弥生，訳）．東京:みすず書房．(Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.)

Erikson, E. H. (1982). *アイデンティティ：青年と危機*（岩瀬庸理，訳）．東京：金沢文庫．(Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.)

Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.

Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, **8**, 37-50.

伊藤研一．(1983)．青年期における親密さ対孤立の危機と自我同一性．*東京大学教育学部紀要第23巻*，東京大学，東京，325-330.

井梅由美子．(2001)．青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み．*人間文化論叢第4巻*，お茶の水女子大学，東京，311-320.

Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.

金子俊子．(1995)．青年期における他者との関係のしかたと自己同一性．*発達心理学研究*，**6**，41-47.

加藤　厚．(1989)．大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究．*心理学研究*，**60**，184-187.

川喜田二郎．(1967)．*発想法：創造法開発のために*．東京：中央公論社.

宮下一博．(1987)．Rasumussenの自我同一性尺度の日本語版の検討．*教育心理学研究*，**35**，253-258.

中西信男・佐方哲彦．(1983)．青年期における同一性の発達――エリクソン心理社会的段階目録（EPSI）の改訂．*昭和57年度文部省教育研究開発に関する調査研究報告書（関西青年心理研究会）：幼児・生徒の心身発達の状況と学校教育への適応について*．pp.5-21.

中尾達馬・加藤和生．(2004)．“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討．*九州大学心理学研究第5号*，九州大学，福岡，19-27.

岡本祐子．(1997)．*中年からのアイデンティティ発達の心理学*．京都：ナカニシヤ出版.

小此木啓吾．(2002)．*現代の精神分析：フロイトからフロイト以後へ*．東京：講談社.

清水秀美・今栄国晴．(1981)．STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成．*教育心理学研究*，**29**，348-353.

下山晴彦．(1992)．大学生のモラトリアムの下位分類の研究：アイデンティティの発達との関連で．*教育心理学研究*，**40**，121-129.

杉村和美．(1998)．青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し．*発達心理学研究*，**9**，45-55.

杉村和美．(1999)．現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達．岡本祐子(編)，*女性の生涯発達とアイデンティティ*（pp. 55-86）．京都：北大路書房.

砂田良一．(1979)．自己像との関係からみた自我同一性．*教育心理学研究*，**27**，215-220.

高橋裕行．(1988)．同一性と親密性の危機の解決における性差：自我同一性地位のRasmussenのEISによる併存的妥当性の検討．*教育心理学研究*，**36**，210-219.

谷　冬彦．(1996)．基本的信頼感尺度の作成．*日本心理学会第60回大会発表論文集*，310.

谷　冬彦．(2001)．青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成．*教育心理学研究*，**49**，265-273.

鑪幹八郎・山本　力・宮下一博．(1984)．*アイデンティティ研究の展望*．京都：ナカニシヤ出版.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子．(1982)．認知された自己の諸側面の構造．*教育心理学研究*，**30**，64-68.

Yamada, Miki (Graduate School of Education, Hiroshima University) & Okamoto, Yuko (Graduate School of Education, Hiroshima University). *Individuality-Based Identity and Relatedness-Based Identity: An Analysis of the Characteristics of Adolescent Interpersonal Relations.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 108-120.
The purpose of this study was to understand adolescents in terms of individual-based identity and relatedness-based identity. In Study 1, university students answered a questionnaire regarding their identity. Based on an analysis of these data, a scale was constructed consisting of 15 items related to individuality based identity and 13 items related to relatedness based identity. Differentiation of these two aspects of identity was shown to be difficult. In Study 2, university students completed the questionnaire derived from Study 1, and the scale's validity and reliability were confirmed. A semi-structured interview containing questions related to interpersonal relations was conducted with 20 of the participants from Study 2, to clarify differences between the 4 groups of items formed by cluster analysis. The "KJ" (Kawakita Jiro) Method was used to organize the interview data, and revealed 3-5 categories. The results indicated that in individuality based identity one has little assimilation with others, and seeks wide interpersonal relationships. In contrast, in relatedness based identity one perceives others as independent from oneself and has the ability to from intimate relationships.

【Key Words】 Individuality based identity, Relatedness based identity, Adolescence, Interpersonal relations, University students

2006. 5. 29 受稿, 2008. 2. 12 受理

発達心理学研究
2008, 第19巻, 第2号, 121-131

原　著

歩行開始期における親子システムの変容プロセス：母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係

高濱　裕子
(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科)

渡辺　利子
(武蔵野大学現代社会学部)

坂上　裕子
(東京経済大学コミュニケーション学部)

高辻　千恵
(埼玉県立大学保健医療福祉学部)

野澤　祥子
(東京大学大学院教育学研究科)

歩行開始期の子どもをもつ母親の行動＝思考＝感情システムにおける変化を，子どもの反抗・自己主張と母親のもつ枠組みとの関係から検討した。対象は3組の母子で，子どもは全て第一子であった。目的は面接調査（21か月齢～36か月齢）を通して，親子システムに出現する変化のプロセスを時系列に記述することであった。子どもの反抗・自己主張の強まりとともに，母親はそれらを統制しようとした。反抗・自己主張のピーク時には統制は困難となり，母親の心理的負荷は増大した。やがて子どもの発達的変化(言語発達，基本的生活習慣の確立)や子どもの言動の意味の読み取りの熟達化，社会的資源の活用によって心理的負荷が軽減され，母親は新たな行動をとるようになった。事例ごとに問題は異なるが，システムの変化のパターンには共通性がみられた。すなわち，当初は不明確であった母親の枠組みが明確化し，反抗・自己主張のピーク時には複数の枠組みが絡みあって母親を締めつけた。母親の心理的負荷の軽減と枠組みのゆるみとは連動し，その結果問題から焦点をずらすことや子どもの言動を異なる側面からとらえることが可能となった。これらは母親の行動＝思考＝感情システムの再組織化プロセスとして考察され，母親のもつ枠組みと日本の文化的特徴との関係も議論された。

【キー・ワード】 歩行開始期，反抗と自己主張，母親のもつ枠組み，親子システム，縦断研究

問　題

成人発達への関心の高まりは，親になることを解明しようとするさまざまなアプローチを生み出した。新たな子どもの誕生や子どもの発達的変化が，家族システムや親子システムに変化をもたらすことが指摘されている。例えば，氏家（1996）は親自身を行動，思考，感情からなるひとつのシステムととらえ，子どもとの関係においてもたらされる変化を検討した。新たな子どもの誕生によって母親の行動＝思考＝感情システムが不安定になり，それまでの親行動が機能しにくくなること，やがて親は新たな親行動を獲得して適応することを明らかにした。この行動の再組織化こそが成人発達の好例であるという。

一方，子どもの発達的変化は親側にいかなる変化を引き起こすのだろうか。子どもの発達的変化によって親の対処が困難になる時期として，2歳頃（第一次反抗期）や思春期（第二次反抗期）があげられる。生涯発達心理学の観点からも，これらの時期が心理・社会的危機をはらむことが指摘されている（例えばErikson, 1982/1989）。これらの時期にいる子どもをもつ親は，子どもの自立をめぐって対応の調整が必要になるからである。したがって，親子システムに出現する変化を検討するには格好の時期と考えられる。

子どもが歩行開始期（乳児期と幼児期にはさまれた時期で，第一次反抗期はこの時期にあたる）にはいると，多くの親が本格的にしつけを考え始める（Edwards & Liu, 2002）。しつけとは，その子どもが生れ落ちた社会や文化の様式や規範に適合するように大人が方向づけ，その社会や文化のありようを身につけさせてゆくことである。このプロセスは社会化と呼ばれ，そこでは社会化の担い手としての親の役割が重視されてきた。その当然の帰結として，社会化研究では親が独立変数として扱われ，子どもがその結果としての従属変数として検討されることが圧倒的に多かった（坂上，2005）。これは，親から子どもへという一方向の影響性のみ考慮されていたことの現われであろう。

ところで，幼児の反抗期に焦点を当てた研究を概観するとその数は極めて少なく，しかも子ども側にのみ関心が向けられてきた（例えばWenar, 1982）。もっぱら子どもの認知的・社会的スキルの発達に関心が向けられ（例えばKuczynski & Kochanska, 1990, 1995），親子の関係性の変化や親側の心理的変化にはあまり関心が向けられていない。親側の変化を取りあげた研究は，氏家（1995）およびUjiie（1997）のみであった。この研究は，2歳半と3歳半における反抗・自己主張の変化についての母親

の認識を明らかにしたものである。ここでは2時点間の変化を示したものの，変化のプロセスは検討されていない。最近，発達心理学の研究者によって歩行開始期に焦点化した研究が発表された（例えば川田・塚田-城・川田，2005；坂上，2005）。川田らは乳児期から歩行開始期にかけての食事場面を継続的に観察し，子どもが母親にものを食べさせる行動を検討した。坂上は母親側に焦点化し，横断データを用いて子どもの反抗・自己主張に対する母親の中心的経験を分析した。どちらもシステム論的視点をもち，子どもの発達的変化とそれに対する親の認知を検討した点において，これまでの研究とは異なるアプローチであった。

しかし，川田らが反抗や自己主張の始まりをとらえたものの，それらに質的な変化が出現する時期をとりあげていない点や，坂上がこの時期の平均化された母親の認識や対応の傾向をとらえたものの，個人の発達軌跡やその多様性をとらえていない点は課題であろう。子どもの反抗・自己主張がどのように変化してゆくか，その変化に直面する親側の認知や評価の変化がいかなるものかについては推測の域をでていないからである。

本論ではいわゆる第一次反抗期の子どもをもつ親を対象に，親側の心理的・行動的変化を通して親子システムの変化を検討しようと思う。親は子どもに対して一定の期待や目標をもち，その期待や目標にもとづいて子どもの状態や行動を知覚する（氏家，1996）。もし子どもが変化した（変化しない）と知覚（評価）すれば，親は自分自身の行動を再調整するだろう。このような子どもに対する知覚・評価は親自身の自己知覚・評価と不可分であり，しかも親はその知覚・評価にもとづいて子どもに働きかけ，自分自身を調整するだろう。その結果を，さらに子どもについてと自己についてという，二重の意味において知覚・評価すると考えられる。したがって，親システムを検討するには，必然的にそこに内包される子どもシステムをも視野に入れる必要がある。つまり親は，子どもというサブシステムによって動く親子システムのもうひとつのサブシステムと考えることができる。ここに，子どもの発達的変化を親システムに焦点化して検討する意義があるといえる。

親子システムの変化のプロセスを検討するには，子どもの反抗や自己主張を認識する装置，すなわち親のもつ枠組みを析出することが必要になる。親のもつ枠組みに関連する概念として，氏家（1996）はChess & ThomasのTransactional Model（トランザクションモデル）に依拠し，親行動の適合／不適合を生み出す要因を分析した。それらは，個人の体験にもとづく価値システム，文化＝社会的価値システム，現在の条件の3つであり，いずれも個人の現実知覚＝評価を決定し，個人のふるまいを制御する要因になるとした。そして母親の心理的変化は，これら3つの要因間の不適合や新たな状態の出現によってうみだされた適合としてマッピングできるというのである。

子どもが反抗期にはいると，現在の条件が劇的に変化することになるから，母親の認知は影響を受けると予想される。一般的に，この時期の子どもの扱いは難しいことが知られており，電話による育児相談において上位を占める内容も，子どもの反抗に関する相談である。「いうことを聞かない。どうしたらよいのか？」，「反抗するので，つい体罰を与えてしまう」といった相談がふえること，力によって統制しようとして虐待が起こりやすいことも指摘されている（児童虐待防止協会，1997）。つまり，反抗や自己主張の変化をどのように認知するかが親行動を決定し，さらにその行動の結果が親の認知に影響を及ぼすと考えられる。ここでいう認知とは知覚とその評価を含んだものであるから，同じ状態に直面しても評価のしかたが異なれば親のふるまいは異なったものになる。子どもの反抗・自己主張の個人差だけでなく，親の知覚や評価の個人差を明らかにすることも必要であろう。

親側の変化を検討するために，本論では親のもつ枠組みを次のように定義する。この枠組みは上述した個人の体験にもとづく価値システム，文化＝社会的価値システム，現在の条件によって構成されるもので，これが作動して母親の現実の知覚やその評価を決定する。従来とりあげられてきた親の社会化方略や社会化の目標，あるいは親の信念といった概念は，いわば親のもつ枠組みを反映したものである。Dix & Branca（2003）によれば，親の社会化の目標と関心事に関する研究は多様であり，生活習慣の確立，自立性，健康と安全，学業の達成，円滑な対人関係，礼儀やマナー，伝統的文化と習慣の尊重などがとりあげられてきた。しかも，親の性別，子どもの年齢と性別，家族の社会経済的状態や人種などの背景，都市部か地方かといった家族の居住地域などとも密接に関係していた。

本論では，反抗期の本格化する時期をはさんで縦断的に追跡することになるから，この時期における親の関心事の共通性を予測することができる。おそらく，聞きわけがでてくること（氏家，1995），生活習慣が確立すること（川田ほか，2005；坂上，2005）があげられるだろう。一方，子どもの個性や行動特徴によっては親の関心の個別性も予想される。子ども同士の関係に親の関心が向くようになる（柏木，1988；坂上，2005）ことから，自分を強く押し出す子どもには相手に配慮することを，引っ込み思案な子どもにはより社交的なふるまいを期待するであろう。加えて，時間経過による変化を検討することで，もうひとつのメリットが期待できる。子どもの反抗・自己主張が変化するにつれ，親のもつ枠組みも変

化するだろう。子どもの反抗・自己主張が強まるプロセスでは，親がそれを肯定的に評価すればその変化をさらに強化し，一方親がその変化を否定的に評価すれば，抑えたり，異なる方向づけを与えると予想される。つまり，子どもの反抗・自己主張の変化のプロセスに着目することで，親のもつ枠組みがいかに変化するのかを明らかにすることができる。

このように親と子どもの相互影響性を丹念に跡づけようとすれば，追跡的アプローチを採用し，時間間隔をあけずに繰り返し測定する必要がある。それによって，親子システムの変化それ自体とその変化の中で何が起きているのかを検討できるからである。必然的に，多くのサンプルを対象にすることは困難になる。以上の議論にもとづき，本論は（1）反抗期の親子システムに出現する変化を時系列的に記述すること，（2）反抗期の子どもをもつ母親の経験の個別性と共通性を探ることの2点を目的とする。

方　法

対　象

対象は1歳時点で“反抗期の子どもをもつ親への支援”を検討するプロジェクト調査に応じた236名（全て核家族の第一子）の中から，意思確認などの手続きをへて抽出された8組の母子である。8組中3組は，第二子の妊娠，家族の介護，転居などの理由で継続訪問が困難になったため，本論では最後まで追跡できた5組のうち3組を分析対象とした（倫理面での配慮の必要な事例と36か月時点までに反抗・自己主張のピークを迎えたと判断できなかった事例を除いた）。対象者のリクルート手順は高濱・渡辺（2004）を参照されたい。継続調査を承諾した対象に，研究者が誕生月順に電話で依頼した。その際多様な特徴をもつ子どもを対象とするために，子どもを扱いにくいと感じている対象には優先的に依頼した。それぞれの特性は結果に示した。

測度と手続き

本論では面接調査でえられたデータを分析する。面接者は第2著者を除く4名と臨床心理学専攻の大学院修了生（数回分担当）であった。面接は対象の自宅で実施され，1回の所要時間は約1時間半であった。先行研究（Schneider-Rosen & Wenz-Gross, 1990; Wenar, 1982）から親子システムに質的な変化が出現する時期を24か月前後と予測し，調査開始時をその少し前に設定した。訪問は子どもが21か月齢に達した時点から36か月過ぎまで，1か月半に1回の頻度で実施された。訪問回数は最少10回（対象児の病気による中止があった），最多13回であった。なお，第1回と第2回の面接を対象の都合にあわせて1度でおこなった事例があった。訪問時の調査内容は，日頃の反抗・自己主張をめぐるエピソードとそれへの対応や認識などに関する面接，実験場面における母子相互交渉の観察，反抗・自己主張に関する質問紙，家族システムに関する課題であった。第1回の面接では子どもの健康・発達，離乳・食事，生活習慣，しつけ，子どもの反抗・自己主張，人見知り，お母さんのなだめ効果などについて，第2回は，子どもの個性，育児，夫婦関係などについてあらかじめ決められた質問をした。第3回以降はこの1か月を振り返って特に印象に残った激しい親子の対立や衝突のエピソード，日常よくある対立や衝突のエピソード，子どもが成長したと感じるエピソードについて話してもらった。また2歳と3歳の誕生日を迎えた時点では，誕生日を迎えての印象や感想を，最終回にはそれまでの子どもの成長ぶりを振り返ってもらった。面接では強い情動体験を伴う経験を語ることになるので，対象の心理的負担が予想された。そこで，この時期の子どもをもつ親に共通の経験であることを説明し，さらに反抗期の子どもをもつ親の大変さを共感的に受けとめること，評価的な言動を控えること，対象からの相談ごとは十分に傾聴すること，発達に関して専門的な対応が必要と考えられる（あるいは対象から要請された）場合の連携先をリストアップしておくことなどに配慮した。対象は調査者の意図を理解して積極的に，かつ自分自身の体験が後輩の親たちの参考になることを願って率直に話してくれた。全ての面接終了後に，対象には面接のもつ意味を確認した。日常の親子のかかわりや自分の対応を振り返る機会になったこと，話をすることが育児の負担軽減につながったことがあげられた。面接が一方的に情報を与える行為ではなく，客観的に自分自身をとらえる機会になったと考えられる。なお，面接内容は事前に対象の許可をえてテープレコーダーに録音した。

分　析

事例ごとに面接の文字記録を作成し，A4判で平均100頁の記録をえた。母親の語る反抗や自己主張のエピソードに，母親の関心や問題をとらえる枠組みが示されるだろうと予測した。エピソードと問題の変化を検討するために，母親の発話内容を一覧表にまとめた。まず，訪問ごとに語られた印象に残る激しい親子の対立・衝突エピソードとそこで認識された問題を，同じ内容の場合には欄を横につなげて記入し，異なるエピソードや問題が語られた場合には新たに欄を設けて記入した。同様に，日常よくある対立・衝突エピソードと問題を記入し，次に，子どもが成長したと感じるエピソードとその内容を記入した。母親の言及内容を時間軸に沿ってみると，認識された問題の経時的な関連性が認められた。そこで肯定的に認知された内容，否定的に認知された内容，困惑や迷いなどの反映された内容，それまで語られなかった新たな対応や子どもの行動の見方が反映された

内容にマーカーで印をつけた。一連の作業により，認知された子どもの反抗・自己主張の変化と母親の行動，思考，感情の変化との対応関係が明確になった。最後に，一覧表をもとに，繰り返し語られた問題，表層的には異なる内容として語られたが根源は同一と考えられる問題を特定し，これらの問題群にラベルをつけた。これら子どもの問題を知覚するものが母親の枠組みであると判断した。母親のもつ複数の枠組み間の関係とシステムの変化点に留意し，各事例の変化のプロセスをまとめた。乳幼児期の発達研究者に分析を依頼し，同一手順によって母親のもつ枠組みを確認した。その結果，枠組みを表す用語はほぼ一致した。

結果と考察

分析手順にしたがって整理された結果をもとに，各事例の変化のプロセスをFigure 1からFigure 3に示した。3事例とも変化の生じた時期ごとに整理し，親子システムの変化がどのように進行したのか，大きな変化の出現した時期にはシステム内でいかなる変化が起きたのかを，視覚的に把握できるように描写した。なお，事例中の括弧内の数値はその言及がえられた時期（子どもの月齢）を示す。

〔事例1〕

対象は32歳の専業主婦，対象児は男児，父親は34歳の会社員であった。結婚4年目。帝王切開による出産であった。12か月時の調査表には「ミルクをあまり飲まず，体重が少なめでかなり心配」と記入された。分析の結果，母親は〔食事をきちんととること〕，〔我慢すること・きちんとすること〕，〔他児と仲良くすること〕という枠組みをもつと推測された。それは，問題が「食が細く体重が増えない」，「挨拶や生活習慣が身についていない」，「気に入らないと物を投げる」と知覚されたからである。

第一の〔食事をきちんととること〕は，子どもの生育歴の中で顕在化した発育の不安に由来する。母親の関心が食事へ向いていることは，「食事は毎日毎日戦いだ。食事時間はこの子も苦痛だと思うが，私も苦痛で」（29M）という言及に示される。母親が食事や食事場面への圧力を強めるにつれて，子どもは激しい情動表出をともなう反抗や自己主張をみせるようになる（28M）。食事に関する母親の関心事には，「好き嫌いをする」「食事の時にテレビを見たがる」「食事に時間がかかる」「ひじをついて食べる」「（口の中のものを）なかなか飲み込まない」「『ご飯できたよ』」と呼んでも『まだテレビ見てる』

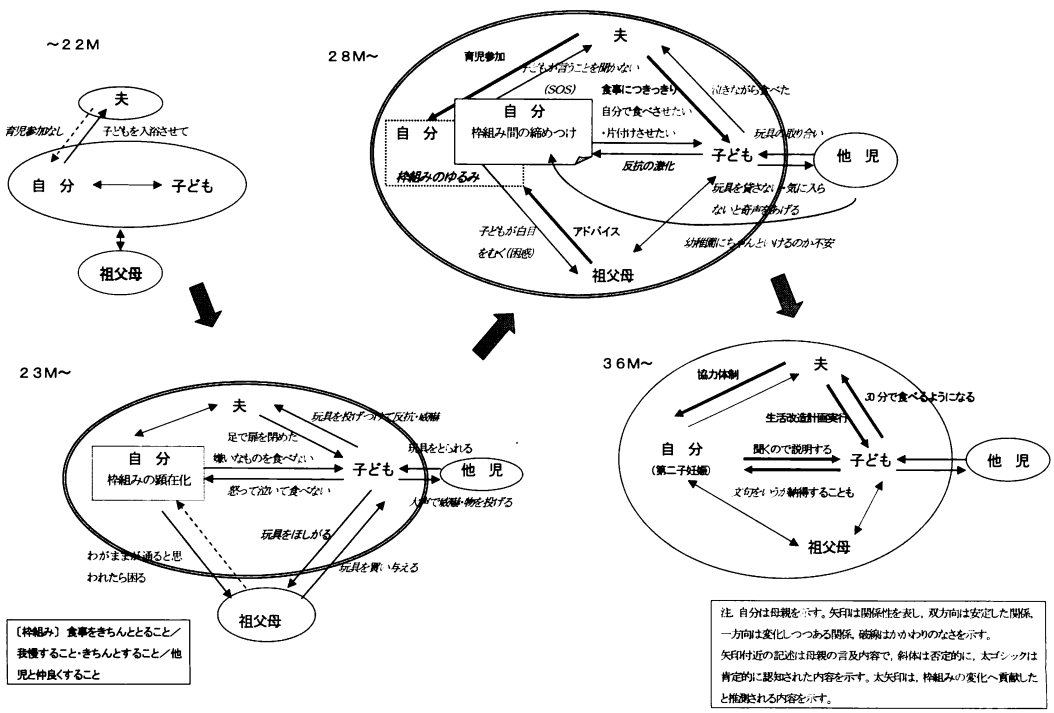


Figure 1　*事例1の親子システムにおける変化のプロセス*

と口応えする」などがあった。これらは，次の第二の枠組みによって知覚された問題とみることもできる。

第二は〔我慢すること・きちんとすること〕である。しつけの目標を問われた時，「挨拶はきちんとできるように。外から帰った時は手を洗うこと」(22M) と答えたが，これらは具体的な関心の一部であった。この4か月後に祖父母と一緒に旅行するが，そこで大きなできごとがあった (26M)。子どもが「パーキングエリアの売店で車の玩具をみつけ，その場から動かなかった。『帰るよ』といってもしゃがみこんだままで，20分位泣いた」という。見かねた祖父が「『買ってあげるから帰ろう』と声をかけると，(子どもは) スクッと立った」という。その晩，宿泊したホテルの売店で昼間と同じ状況が起きた。また玩具を買い与えようとする祖父 (実父) を，母親は今度は制止した。「1日に2個もダメだし，『昼間買ってもらったのだから』と子どもに言い聞かせた」という。「今までダダをこねることはなかったが，ダダをこねれば買ってもらえるのを覚えたのか。ママがダメでも，おじいちゃんに買ってもらえると子どもなりに思ったのではないか」と語った。これ以後の親子の対立は，遊びの片づけをめぐっても起きている (26・28M)。一方，母親は「お出かけから帰ったら手を洗うこと，テレビから離れて見ることは習慣づいた」(26M) と評価した。

第三は〔他児と仲良くすること〕である。当初母親が問題と感じた行動は「物を投げる」ことだが，公園でも起きてしまったのである。他児に玩具を取りあげられ，「(それを) 取り返そうとして大声を出し，威嚇して玩具を投げつけた」(23M) という。さらに「遊んでいる時に，自分の思った通りにいかないと玩具を投げつける。私が『投げちゃいけない』ときつく叱ったら，白目をむいた。それから怒られるたびに白目をむく」(25M) という。

このような母親の関心の背景には，子どもの集団生活への参入があると考えられる。29か月時には「幼稚園にちゃんといけるのかなと，最近不安になってきた」と強い懸念が表明された。母親は，「親は意地悪したり (子どもから玩具を) 取ったりしないから，もまれる経験がない。だからたぶんわからないのだろう。何回もその場面に出くわすので，わかってくれてもよいような気もするが，まだまだダメ」と評価した。家の中で物を投げても実害はないが，「外ではお友だちがけがしたり，投げた物が当たったりとかしたらいけない。みんな仲良く遊んでいるから，『うまくやってよ』という感じでハラハラする」という。

子どもの反抗・自己主張が強まるにつれて，「どこでこういうことを覚えたのか。誰もこんなことを教えないのに」(25M) という原因帰属と，「子どもに根気よくつきあうのは大変。最後は頭にくる」(23M) といった母親自身の感情制御の難しさが繰り返し語られた。28か月には子どもの反抗・自己主張がピークに突入する。もはや「子どもは自分をなめて，いうことを聞かない」(28M) と語り，自己言及的な悪循環のループに巻き込まれたのである。

このようなシステムの強い緊張状態は，あらたな変化を引き起こす。この事例では夫側の変化を引き出した。まとまった休暇のとれるゴールデンウィークに「(生活) 改造計画を実行した。ちゃんとご飯を食べるようにしよう」(36M) と相談したのである。冬場は外遊びの機会が減少して活動量が減り，完全に夜型の生活になっていた。「(朝は) 7時か7時半には起して，ご飯を食べさせて，昼は昼でちゃんとご飯を食べさせて，夜は10時半には寝かせて。(夫に) 生活の軌道修正をしてもらった」という。その結果「前は (食事に) 2時間位かかったが，30分位で食べるようになった。」母親自ら「食事はズーッと永遠のテーマだった」と指摘しているが，これによって気がかりが解消された。

当初，父親はほとんど育児に参加していない。母親は入浴を手伝ってほしいと夫に訴え，けんかになった。この夫婦げんかをきっかけに「夫が入浴させてくれる」(22M) ようになり，さらに父親の出番がふえていった。「玩具を片づけなかったりすると，最近はしょっちゅう怒られている」(29M)，そして最後の手段としての父親の役割が語られた。「パパの話をすると『パパこわい，やめとく』とかいう。脅しは本当はよくないが，こわいものをひとつ位作っておかないとダメなこともある」(32M) という。このように，子どもの発達的変化が父親の育児参加の質を変えてゆき，夫婦の協力体制が確立されたと考えられる。

やがて子どもの反抗の程度と自己主張の質が変化し，子どもは「言い聞かせれば納得する時もある」(34M) し，「前はそういうことはなかったのに，『これどうやってやるの？』と聞くようになった。私が説明すると納得してやったりする」(36M) という。そして，母親は子どもの行動の変化を「前のようにキィーッという感じではなくなってきた。一応考えたり自分でやってみたりする」(36M) と肯定的に評価した。衣服の着脱も「自分でやりたがるようになった。できないのだけれど，靴下とか自分で履きたがる。『ママ，見ててね』といって自分でやるようになった」(36M) という。これらの言及から，子どもの行動の変化に合わせて母親も対応を調整していることがわかる。加えて，第二子の妊娠 (34M) によって，彼女の関心の焦点が対象児からより拡大したことも推測される。とはいえ，母親は子どもの自己主張の変化を肯定的には受けとめていない。「口応えする，屁理屈をいう，いちいち文句をいう」(36M) と否定的であった。

母親の振り返りでは，「反抗は2歳半を過ぎた頃が一番ひどかった。いつになったらこれが終わるのだろうか

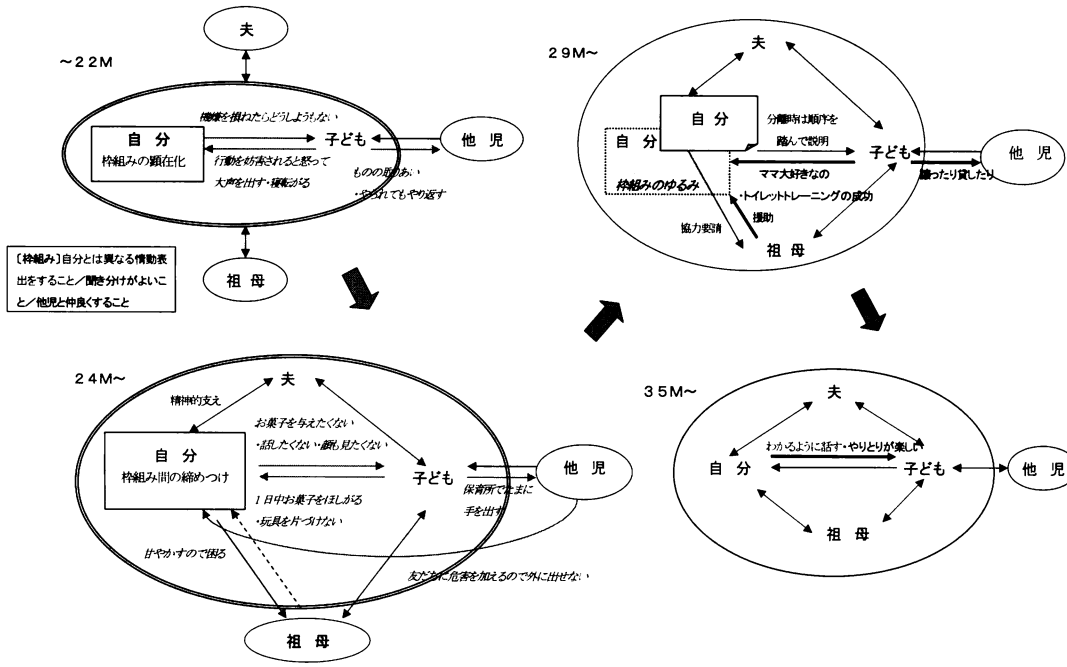


Figure 2　*事例2の親子システムにおける変化のプロセス*

と思った」(36M) と語った。その渦中では，出口の見えないトンネルにいるように感じられたのであろう。ここでは自己言及的な悪循環のループは断ち切られ，親子の関係を客観的に振り返ることが可能になった。

〔事例2〕

対象は29歳の専業主婦，対象児は女児，父親は30歳の会社員であった。結婚2年目。生育歴に特記すべき事項はなかった。分析の結果，母親は〔自分とは異なる情動表出をすること〕，〔聞き分けがよいこと〕，〔他児と仲良くすること〕という枠組みをもつと推測された。それは問題が，「情動表出が激しい」，「お菓子をほしがって我慢できない」，「友だちを叩いたり押しのけたりする」と知覚されたからである。

対象児は「機嫌を壊しやすく，なだめるのが難しい子」であり「行動を妨げられた時に怒って大声を出したり寝転がったり」(21M) する。それを母親は「自分とは違うなと感じていた」(22M) という。そして「子どもと対立すると感情的になる」自分を「まだ母親になりきれていない部分がある」(22M) と否定的に評価している。

初回の訪問時にしつけの目標を尋ねると「聞き分けのいい子になってほしい」(21M) と答えた。しかしこの時点では，まだ一般論としての目標設定であったと考えられる。やがて反抗・自己主張のピークにいたって，母親のもつ枠組みが鮮明に浮きあがる。「子どもはお菓子をほしがる」が母親は与えたくないし，与えなければ激しい情動表出に直面する。〔自分とは異なる情動表出をすること〕と〔聞き分けがよいこと〕という枠組みは，一方を行使しようとすればもう一方が反転するような形で母親を締めつけることになった。子どもの反抗・自己主張が一層エスカレートするプロセスで，母親の信念も明確になってゆく。母親は「子どものやりたいことはわかるが，今やってはいけないことをどうやってわからせるかが難しい」(25M) と感じる。要求を通そうと激しく泣き叫ぶ子どもを前にして「しつけのことが頭にあったから，これだけはさせたくない，ここで許したらたぶん続いちゃったりするんだろうな」(27M) と，子どもの要求としつけとの間でゆれている。

とはいえ，子どもの反応に「あきれはててどうしたらいいのかわからなくなって，イライラする」し，子どもと「話したくない，顔も見たくない」(28M) と感じてしまう。母親は自分自身の感情を制御する難しさだけでなく，子どもに対する否定的感情を抱く自己を突きつけられたのである。臨床的な見地からも，危機的な状況であったと考えられる。

第三は〔他児と仲良くすること〕である。これは37か月時の振り返りの言及から明らかにされる。「(1歳半から2歳位まで) まわりに危害を加えたりすることが多い時期で，公園とか児童館にいくのが嫌だった。『また始

まったらどうしよう？』と不安で，外に出るのが嫌だった」のである。24か月時にお菓子をめぐる親子の激しい対立の様相が語られたが，面接者の問いに対して「外に出ている時は（親子の）衝突はないが，家に帰ってくるともうダメ」と答えた。外に出れば子どもはお菓子のことを忘れ，お菓子をめぐる親子の対立は避けられるのに，なぜ子どもを外に連れ出さないのだろうか。その理由は子ども同士のトラブルを恐れ，それを避けたいと考えたからであった。

反抗・自己主張のピーク時には，3つの枠組みが絡み合って母親を締めつけた。外に出れば親子ともに気分が変わることはわかっていたが，外に出れば他児とのトラブルが引き起こされかねない。そうなった時，母親にはそれに対処する術も自信もない。家の中では他児とのトラブルは起きないが，子どもは手持ち無沙汰で朝からお菓子をしつこく要求する。その要求を制限しようとすれば，子どもの激しい抵抗にあう。まさしく母親には対処不能と感じられたのである。

母親の心理的負荷は，対象児の反抗・自己主張の激化にともなって最大に達したと考えられる。母親のもつ3つの枠組みが絡み合った結果，反抗・自己主張を統制しようとすれば対象児の情動反応に向き合わなければならない。とはいえ「どう対応してよいかわからない」し，そうかといって「いいなりになることもできない」のである。むろん「友だちに手を出す」ことが心配で，外に連れ出すこともできない。つまり，自己言及的な悪循環のループに巻き込まれた状況であった。

この状態を変えるには，母親の関心の焦点を問題からそらすようなことが起きればよい。母親の関心を他に移動させるか，あるいは肯定的な変化が母親によって認知されることである。このような変化が29か月以降は連鎖的に起きた。まず子どもの反抗の程度と自己主張の質が変化した。子どもは泣きわめくがおさまるようになる。子どもの言語発達ともあいまって，泣いた時にはとりあえず放っておき，その後「どうしたの？」と聞くと理由を話すようになる。お菓子を要求する時も「1個だけ」と自ら条件をつけるようになる。母親は子どもの変化を察知し，その変化にあわせて母親自身の対応を変えていった。この間排泄の訓練もうまくゆき，子どもにも自分自身にも自信をもてるようになる。

母親は，子どもの言動の意味についても洞察の機会をえていた。体操教室では子どもは親から離れて活動するが，一旦離れた後に大泣きした。そして「『ママ大好きなの』と抱きついてきた」（31M）という。このできごとは，母親が子どもの情動表出の背後には不安があることを察知した点，その不安を子どもが見事に言語化した点で，母子にとって大きな意味があったと考えられる。その後，母親は母子の分離が必要な場面では「順序を踏んで説明して『じゃいってらっしゃい』というと，吹っ切れる」（33M）と語るように，子どもの不安を取り除くような対処のこつをつかんでゆく。

また母親は周囲のサポートを積極的に利用するようになる。それまでは実母が対象児を甘やかすことを問題にしていたが，「わがままをいうなら（家に）こないで」と実母に話してもらうよう頼んだ。つまり，対象児の反抗や自己主張に対する協力体制を確立したのである。これは社会的資源を調整したうえでの活用と考えることができる。

このような変化が次々と出現するにつれ，母親の肯定的言及もふえてゆく。母子相互交渉についても「こっち（私）も自分の気持ちがわかってもらえるように話をすると，子どももわかってくれる。そのやりとりが最近ふえてきたので楽しい」（35M）と報告した。悪循環のループは断ち切られ，親子の関係を客観的に振り返ることも可能になった。それが「（私たちは）女と女で意地の張り合いになっていた」という反省的言及に示されている。

〔事例3〕

対象は31歳の会社員，対象児は女児，父親は29歳の研究機関職員であった。結婚3年目。対象児は生後17か月で保育所に入所。保育生育歴に特記すべき事項はないが，12か月時の調査表には「子どもがかなり扱いにくい」と記入された。

分析の結果，母親は〔泣きへ対処すること〕，〔母子分離すること〕，〔他児と仲良くすること〕という枠組みをもつと推測された。それは問題が，「泣かれるのが怖い」，「母から離れてほしいのに離れない」，「人見知りが強く慣れにくい」と知覚されたからである。

子どもの〔泣きへ対処すること〕，すなわち子どもの情動を適切に制御することができれば，母親としての効力感は徐々に高まるだろう。この事例の場合，子どもの泣きは彼女の対処不能感を高め，親としての自信を喪失させた。「子どもの泣きでノイローゼになり，実家を離れられなかった」（12M）のだが，後には「他の人はできるのに，私は何でできないのか。えらいものを産んでしまった。罰を与えられたみたいな感覚だ」（21M）と説明している。しかも彼女は子どもの泣きを反抗ととらえていた（12M）。その後も対象児の泣きはおさまらず，「自分の思い通りにいかないと泣き叫ぶ。スーパーでは地べたを転げまわって泣き叫ぶ」（23M）ようになり，さらには「（自分の）要求を満たしてもらうまで泣く。最近はうそ泣きをする」（23M）というのである。発達とともに，子どもは泣きを道具的に使うようになったのである。「日に日に我が強くなる」様子に，実母は「あんたのしつけが悪いからこんなにわがままに育っている」（23・27M）と批判し，彼女の無力感を高めた。

第二は〔母子分離すること〕である。彼女が母子分離

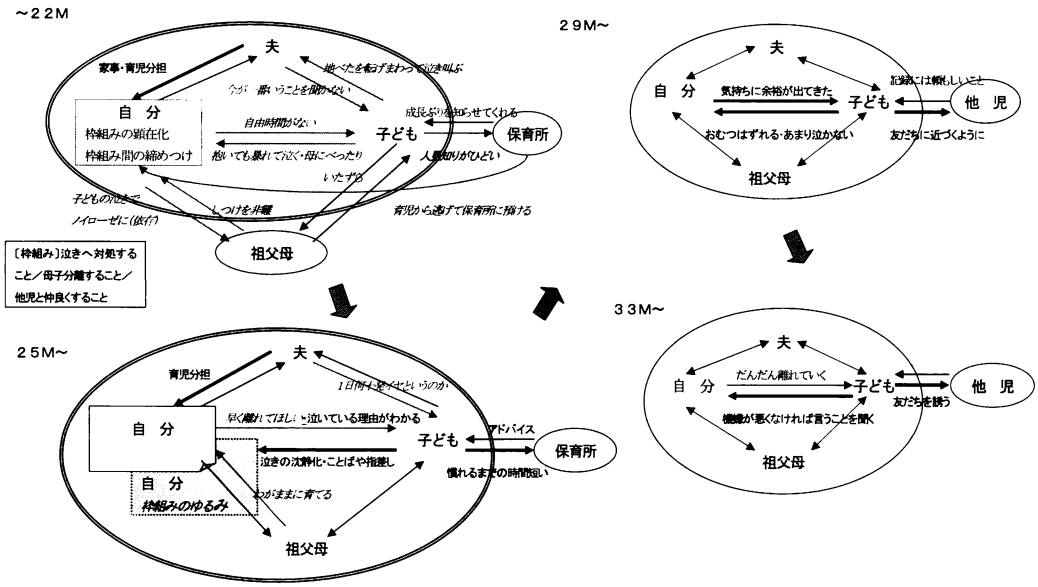


Figure 3　*事例3の親子システムにおける変化のプロセス*

を考えた契機は，腱鞘炎を患ったことかもしれない。しかし，その起源は初めての育児で体験した強い制約感にあろう。「私は育児から逃げて保育所に預けている。育児のストレスよりも自由時間がないことがストレス」（23M）という言及から，子どもに拘束されて自分のことができないと感じていたことがわかる。さらに職業的アイデンティティもゆらいでいた。彼女はIT関連の仕事に本格的に復帰したいと希望していたのである。夫は彼女の心情を理解し，朝は保育所へ送るなど積極的に育児を分担していた。

子どもの発達にともなって，「何か集中できることがあったら，ひとりでもよく遊んでいる」（33M）ようになる。36か月時の振り返りの中では「離れている時間があるから，私も自分の時間がもてて心にゆとりができた」という言及があった。

第三は〔他児と仲良くすること〕である。25か月時には人見知りをしない子がうらやましいと語ったが，「人見知りはするが，慣れるまでの時間が短くなった」（27M），「（保育所の）登園時，友だちが遊んでいると自分からそこへ近づいていく」（30M）と，徐々に対人関係にも変化が起きる。保育所の保育士は，連絡帳に子ども同士の関係にかかわるエピソードを記入してくれる。「保育所の記録にはすごく頼もしいことが書いてあって，そんなことをやっているのか」（32M）と話し，面接者には毎回連絡帳を見せてくれた。彼女は家庭では知りえない子どもの行動を教えてもらうことで，人見知りが強いという子どもの見方を変えていったのである。

この事例では，泣きの沈静化が状況の変化に貢献した。すなわち「ことばや指差しで示すようになって，大体泣いている理由がわかるようになった」（27M）ことは，極めて大きな意味をもつ。親にとっては対処不能としか思えなかった泣きへ対処できるようになり，最後の手段としての「お菓子を与えれば泣きやむ」こともつかめるようになる。無論，この変化には対象児の言語発達が貢献していることを忘れてはならない。この変化は対象が感じ続けてきた心理的負荷を軽減させるように働き，これを具体的には「昔の大変さを10とすれば7位」（25M）と表現している。

母親の心理的負担は軽減されたが，「一日何十発『イヤ』というのだろう？」（25M）という言及に示されるように，その後が子どもの反抗・自己主張のピークであったと考えられる。とはいえ，それまでの親行動とは異なる反応も示されている。「泣いて寝ないと，前はイライラしたが，今はそのうち寝るだろうと思う。大体パターンが読めてきた」（27M）というのである。親の心理的負荷が軽減されてゆとりや余裕が生まれたのである。

29か月時には，対象児の自己主張は一層強くなっていた。正確に表現すれば反抗の質が変わり，自己主張が巧妙になったのである。例えば対象児は以前からビデオをみるのが好きだが，その好みがうるさくなった。前は飴をほしがってワーッと泣いたが，親の顔色をうかがいながら上手に要求する。（親のいうことと）絶対に反対

のことをいうなどである。

しかし母親は「楽になった。前の大変さを10とすれば今は5位」と，精神的負担が半減されたという。この時期には肯定的な変化がいくつか起きていた。まず完全におむつがはずれた（30M）。「この夏に絶対取ろうとがんばって，悲願が達成できた」というように，排泄の自立は親子ともに自信となった。また対象児は「最近あまり泣かなくなった。この1か月で急に賢くなった」と感じられる。自分でも「『全然泣かなかったよ』と，何度も親にいうようになった。」そして「私の気持ちにも余裕が出てきた。前の大変さを10とすると今は3位」（30M）と，親としての効力感や自信を表明するようになったのである。

状況が変わると，同じ現象でも受けとめ方が異なる例を紹介しよう。子どもの自己主張について「いうことは聞かないものだと思っているから，条件つけて聞くだけでもラッキーと思う」（35M）と語った。ここにはもはや泣きを怖がり，泣きを制御できずに苦悩した姿はない。「今までは何かさせるには，本当に体罰というか怖がらせたり，脅したりした。でもことばがわかるようになったから，説明をして納得させることが多くなった。2歳の時はもう何もわからず，やらせるために脅かすことぐらいしかなかった。今は『何々だからダメでしょう』というようになった」（36M）と，関係の質の変化を見事に洞察している。

振り返りの中では，子どもへの肯定的な感情が表明された。「だんだんかわいいなって思い始めたのは1歳半位かな。それまであんまりかわいいかわいいっていうほどのことはなかったから」と語った。まさに子どもの変化に上手にのり，そのプロセスで親自身の対応を身につけていったと考えられる。

全体的考察

本論の目的は，第一に反抗期の親子システムに出現する変化を時系列的に記述することであった。母親の関心と問題は事例ごとに異なり，子どもの反抗・自己主張の現われ方やピーク出現の時期にも個人差があった。とはいえ，親子システムに出現した変化とその変化のプロセスには興味深い共通性も見出された。まず，親子システムの変化は子どもの反抗・自己主張が変化することによって引き起こされ，おおよそ4局面のプロセスをへた。

子ども側の変化は，反抗・自己主張が本格化する前の時期，反抗・自己主張が強まる時期，反抗・自己主張のピーク時，激しい反抗が沈静化して自己主張が強まる時期，としてまとめられた。この変化に対応させると，親子システムの変化は次のように記述される。①子どもの反抗・自己主張が本格化する前は，親は一般論としての信念をもつが，枠組みは不明確であった，②子どもの反抗・自己主張が強まる時期には，親は反抗・自己主張を統制しようとするため，枠組みが顕在化していった。同時に，母親の心理的負荷も増加した，③子どもの反抗・自己主張のピーク時には，複数の問題が絡みあって枠組み間の締めつけが起きた。増大する反抗・自己主張を統制できない母親の混乱や苦悩は著しく，子どもへ否定的感情を抱くこともあった，④激しい反抗の沈静化する時期には，子どもの言語発達にのって，母親は子どもの言動の意味を読み取れるようになった。生活習慣の確立や社会的資源の利用なども，枠組みの締めつけをゆるませるように働いた。

事例1（Figure 1）を例に，親子システムの変化のプロセスを再度描写してみよう。親システムは22か月までの安定した状態から異なる状態へと変化したが，それは23か月以降子どもの反抗・自己主張が強まったからである。それまでの母子関係に祖父母を巻き込み，さらにその関係を再調整させるまでになる。そのプロセスでは，母親のもつ枠組みが子どもの強まる反抗・自己主張を統制しようとする努力と連動して浮かびあがる。つまり，それまで漠然と考えていた子育てに関する信念や子どもへの期待・希望が，子どもの行動特徴と結びついた個別の関心へと変化する。28か月には反抗・自己主張のピークを迎えるが，それを統制しようとすればするほど，母親のもつ枠組みが母親自身の感情や思考の閾値を制約するようになる。しかも複数の枠組みが絡み合って母親を締めつけ，母親の心理的負荷は増大してゆく。ひとつの問題に対処しようとすれば，必然的に他の問題にも抵触するからである。事例1に限らず，この時期の親は感情をかき乱され，苦悩し，対処不能であることに言及した。母親としての自分の未熟さを責め，厳しい評価をくだし，あるいは現実の反抗・自己主張のすさまじさに無力感を感じていた。このような統制不能の状況は，システムを不均衡状態におくことになり，さらなる変化を呼び込む契機となる。事例1では父親が育児に巻きこまれ，夫婦で食事の問題へ取り組むことになった。他の事例においても，同様に祖父母や保育所などの社会的資源を取り込み始めた。

36か月時には，激しい反抗が沈静化し，事態が少しずつ変化し始めた。母親は，子どもの拒否や否定の背後に子どもなりの理由があることに気づく。親側のこの変化は子どもの言語発達にのったものであるが，泣きや激しい反抗の理由がわかるようになると，親は反抗を恐れなくなる。また排泄の自立にみられるように，基本的生活習慣の確立は親の有能感を高めるように働いた。さらに夫の育児参加や，祖母との協力体制の調整にみられた社会的資源の活用も，心理的負荷を軽減する効果があった。それまで同様の事態で動揺し混乱した親たちが，こ

こではものごとの見方を変え，あるいは泰然として動じない様子を見せるようになった。過剰に反応しなくなり，焦点をずらして問題に対応するなど，新たな対処様式を身につけたと考えられる。加えて，子どもに対する肯定的な言及も増加した。

このようなシステムのダイナミズムを記述する方法に，Dynamic Systems Approach (DSA) (Thelen & Smith, 1998) がある。DSAはシステムの変化を集合変数により測定し，それらの集合変数に変化をひきおこす構成要素であるコントロールパラメータ（CP）を推測する。そしてこのCPを操作し，多様な発達の軌跡を描いてゆく（例えば西條，2002）。

この考えにしたがえば，反抗期の親子システムを構成する集合変数は，子どもの反抗・自己主張の程度，子どもの言語発達，子どもの基本的生活習慣の確立，親による子どもの言動の意味の読み取り，親の社会的資源の利用であろう。これらの変数の変化とその相互作用によって親システムの緊張度が高まるが，その程度を示す指標が母親の心理的負荷の推移と考えられる（事例3の対象はそれを数値化して語った）。これら集合変数の中で最も影響力のあるCPの候補は，子どもの反抗の程度と考えられる。3事例とも，子どもの反抗の沈静化が報告され，「聞けば理由を話そうとする」，「言い聞かせれば納得するようになった」という変化が報告されたからである。

本論の第二の目的は，反抗期の子どもをもつ母親の経験の個別性と共通性を探ることであった。母親たちのもつ枠組みは，この時期の親の多くが関心を向ける自立などの社会化に関する枠組み，他者との協調に関連する枠組み，そして子どもの行動特徴から生み出される枠組みであった。もっとも，社会化のプロセスでは子どもの気質や行動特徴の影響を受け，親の信念は子どもの個性にあわせて修正や再構成を迫られることになった。

生態心理学的視点（Reed, 1996/2000）によれば，反抗期は親の生息環境が劇的に変化する時期と考えられる。それまでの適応戦略を行使不能になると，親はさまざまな資源をシステムにもち込んだ。母親たちは夫や祖父母を巻き込み，保育の専門家に支援を求めた。それまでの祖父母との関係を再調整し，新たな協力体制をも組むようになった。

さらに，子どもが3歳の誕生日を迎える頃から，母親たちの関心は幼稚園生活や子ども同士の関係に向き始めた。自己主張タイプの事例1と事例2では，母親は子どもが自己を押し出しすぎて相手に怪我をさせたり，仲良く遊べないことを心配した。一方自己抑制タイプの事例3は保育所に通っていたが，周囲の様子を傍観することが多く，母親は友だちと一緒に遊べるようになることを期待した。これらは先行研究で指摘された日本に特徴的な他者との協調や集団の和に関する内容であった（Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz, 2000）。加えて，きちんとすること，我慢すること，乱れないことといった母親の枠組みの共通性もうかがえた。これらは氏家（1995）が指摘した内容とも一致する。

最後に，子どもの自己主張に対する親の評価が二極化している可能性も示唆された。事例1のように自己主張をいいわけ，理屈，口応えと否定的にみなす見解は，日本の伝統的なしつけ観とも合致する。一方他の事例からは，自分とは異なる子どもの独自性や自己表出を意味づける母親の言及もえられた。また，本論の母親たちは対象児の反抗は沈静化したが，自己主張は一層強まったと認識した。今後は3歳以降の自己主張や交渉スキルの発達について，家庭や就学前教育場面での丹念な追跡調査が必要と考えられる。

文　献

Dix, T., & Branca, S.H. (2003). Parenting as a goal-regulation process. In L. Kuczynski (Ed.), *Handbook of dynamics in parent-child relations* (pp.167-187). Thousand Oaks: Sage Publications, Inc.

Edwards, C.P., & Liu, Wen-Li. (2002). Parenting toddlers. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting*: Vol.1 (pp.45-71). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Erikson, E.H. (1989). *ライフサイクル，その完結*（村瀬孝雄・近藤邦夫，訳）．東京：みすず書房．(Erikson, E.H. (1982). *The life cycle completed*. New York : W. W. Norton & Company.)

児童虐待防止協会．(1997)．電話相談における子どもの虐待防止アセスメント基礎調査：母と子のサポートに向けて．電話相談における母親のストレス研究会・児童虐待防止協会．

柏木惠子．(1988)．*幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に*．東京：東京大学出版会．

川田　学・塚田-城みちる・川田暁子．(2005)．乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容：食事場面における生後5ヶ月から15ヶ月までの縦断研究．*発達心理学研究*，**16**，46-58.

Kuczynski, L., & Kochanska, G. (1990). Development of children's noncompliance strategies from toddlerhood to age 5. *Developmental Psychology*, **26**, 398-408.

Kuczynski, L., & Kochanska, G. (1995). Function and content of maternal demands: Developmental significance of early demands for competent action. *Child Development*, **66**, 616-628.

Reed,E.S. (2000). *アフォーダンスの心理学：生態心理*

学への道（細田直哉，訳，佐々木正人，監修）．東京：新曜社．（Reed, E.S. (1996). *Encountering the world: Toward an ecological psychology*. New York : Oxford University Press.）

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, **71**, 1121-1142.

西條剛央．(2002)．母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究：ダイナミックシステムズアプローチの適用．*発達心理学研究*，**13**，97-108.

坂上裕子．(2005)．*子どもの反抗期における母親の発達：歩行開始期の母子の共変化過程*．東京：風間書房．

Schneider-Rosen, K., & Wenz-Gross, M. (1990). Patterns of compliance from eighteen to thirty months of age. *Child Development*, **61**, 104-112.

高濱裕子・渡辺利子．(2004)．2～3歳児をもつ母親の自己評価：子どもの扱いにくさおよび発達との関係．*椙山女学園大学研究論集第35号*，椙山女学園大学，愛知，79-90.

Thelen, E., & Smith, L. B. (1998). Dynamic systems theories. In R. M. Lerner (Ed.), *Handbook of child psychology:* Vol.1 (pp.563-634). New York: John Wiley & Sons, Inc.

氏家達夫．(1995)．自己主張の発達と母親の態度．二宮克美・繁多進（執筆代表）．*たくましい社会性を育てる*（pp.51-67）．東京：有斐閣．

氏家達夫．(1996)．*親になるプロセス*．東京：金子書房．

Ujiie, T. (1997). How do Japanese mothers treat children's negativism? *Journal of Applied Developmental Psychology*, **18**, 467-483.

Wenar, C. (1982). On negativism. *Human Development*. **25**, 1-32.

付記

長期間にわたる調査にご協力くださったお母さまとお子さんに深く感謝いたします。調査を実施するにあたり，愛知県A市およびB市，東京都C市の母子保健担当各位のご協力をいただきました。草稿に対して，氏家達夫先生（名古屋大学教育発達科学研究科教授）から貴重なコメントをいただきました。記して感謝いたします。

本研究は平成16度－平成17年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：16500490，研究代表者：高濱裕子）の補助を受けておこなわれた。

本論文は，「お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学」シリーズ第3巻『子どもの発達危機の理解と支援：漂流する子ども』（金子書房，2007）の3章「幼児の反抗期と親子システム」Ⅲ節において取りあげた1事例に，新たに2事例を追加して分析したものである。

Takahama, Yuko (Ochanomizu University), Watanabe, Toshiko (Musashino University), Sakagami, Hiroko (Tokyo Keizai University), Takatsuji, Chie (Saitama Prefectural University) & Nozawa, Sachiko (The University of Tokyo). *The Transformation Process of the Mother-Child System during Toddlerhood: The Relationships between a Mother's Framework and a Child's Negativism.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 121-131.

The present study examined changes in maternal behavior in three mother-child dyads. Data were collected by semi-structured interviews of children (all first-borns) ages 21 to 36 months old, and analyzed from the viewpoints of children's problems as recognized by the mothers, and the mothers' framework. When children's negativism and self-assertion became stronger, their mothers tried to control them. However, it was difficult to control children's behavior when children reached their peak of negativism, and the psychological pressure on mothers increased. The synchrony of developmental changes in the children and mothers reduced the psychological pressure on mothers. Although the problems were different in each case, the pattern of change that emerged in mother-child's dyadic systems was similar. These results reflected a reorganization of the system consisting of the mothers' behaviors, thoughts, and feelings.

【Key Words】 Toddlers, Negativism and self-assertion, Maternal framework, Mother-child system, Longitudinal study

2006. 5. 25 受稿，2008. 2. 14 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，132-143

原　著

日本の中高年男性の失業における困難さ：会社および社会との繋がりに注目して

高橋　美保
（東京大学大学院教育学研究科）

本研究は，平成不況下でリストラに遭った日本の中高年男性を対象に，なぜ彼らの失業が困難になるのかを検討することを目的とした。1990年代後半以降に非自発的失業を経験した10名の中高年男性を対象に2度にわたって半構造化面接による面接調査を実施し，さらに失業経験者を対象とするグループインタビューを行い，累計26のデータを収集した。本研究では，現在は失業状態を脱した中高年男性のレトロスペクティブな語りを元に，当事者の目線からその体験を理解することを試みた。特に，日本では就業時における会社および社会との繋がりに特異性があると考え，分析に際しては“会社および社会との繋がり”に注目した。修正版M-GTAを用いて質的分析を行った結果，大きく3つのステージ（「Ⅰ．会社への没入と喪失」「Ⅱ．社会からの度重なる疎外体験」「Ⅲ．社会との多面的な繋がりの構築」）からなる失業体験過程の仮説モデルが生成された。仮説モデルを元に，失業の困難が生じる要因として，以下の4つを指摘した。①会社との繋がりの強さ，②会社生活の喪失，③社会からの排除と孤立，④社会との繋がりの段階的喪失。最後に，失業の困難の体験がその後の生活に及ぼした影響についても考察した。
【キー・ワード】 失業，困難，中高年男性，中高年者，体験過程

問題と目的

問題の背景

1990年代のバブル経済の崩壊を受けて完全失業率は一時急激に上昇した。昨今では景気の回復を受けて，完全失業率は漸減傾向にはあるものの（総務庁統計局，2006），依然高水準にあるといえよう。特に，45歳以上の中高年の男性失業者は自身のキャリアに見合った高い水準の労働条件を求めるのに対して，企業側は若い人材や即戦力を求めるために，いわゆる雇用のミスマッチが生じ，思うような仕事につけない状態にある。

ここで，中高年期，特に50－60代の発達的特徴を省みると，この時期は40代の“中年期の危機”（小此木，1983）を超えて，中年後期から定年退職期を迎えようとする年代である。岡本（1997）によれば中年後期はアイデンティティの安定期にあたり，家庭生活では育児が終わりに向かい，社会的にはある程度の社会的地位と収入を確保する時期でもある。また，昨今の中高年者は，1950年代中頃から約20年続いた高度経済成長期に終身雇用，年功序列といった日本企業の雇用慣行を前提として就職し，働いた経験を持つ世代である。終身雇用のもと，職業人生の終盤には社会的地位も収入も得られる人生の結実の時を迎えるはずであった。ところが，バブル崩壊後はリストラの名の下に人員整理が行われ，多くの中高年者がリストラの対象とされた。近年では，このような中高年のリストラ失業者の精神健康度の悪さも報告されている（久田・高橋，2003）。

なお，完全失業率が4.0％の大台に乗った1998年，自殺者数も3万人を突破し（警察庁生活安全局地域課，2006），日本の自殺率は「世界の中でも高率国の一角を占める」ようになっている（高橋，2006）。内閣府経済社会総合研究所・京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター（2006）が「98年以降の30歳代後半から60歳代の前半の男性自殺率の急増に最も影響があった要因は，失業あるいは失業率の増加に代表される雇用・経済環境の悪化である可能性が高い」と報告しているように，失業と自殺の関係が示唆されている。ただし，世界に目を向けると，近年日本の失業率は先述のように歴史的には上昇したものの，諸外国と比べると依然低水準にある（OECD, 2007）。日本の失業率は世界的には低いにもかかわらず，中高年男性を中心に自殺率が高くなっていることから，近年の日本の中高年男性失業者に特有の困難があることが推察される。しかし，日本の中高年男性の失業がなぜ困難になるのかについては充分に検討されていない。本研究では失業に伴うネガティブな体験を失業の困難と称し，この困難がなぜ生じるのかを検討する。

諸外国との違いを鑑みる時，最も考慮すべきは社会的・文化的背景であろう。失業者支援に関する社会政策の違いは勿論のこと，先述のように，昨今の日本の中高年者男性は高度経済成長期に日本的経営の下で終身雇用の期待を抱いて働いてきたという点で特徴的である。野口（2002）は日本型の雇用慣行が既に1940年代に形成されたと指摘し，日本的企業における企業と従業員の関

係を「個人の生活のすべてが，会社の盛衰に依存している」と述べている。日本人の企業帰属意識に注目した関本（1992）は，組織にとどまっていたいという願望は非常に強く，またとどまっている以上はある程度組織のために働こうという意欲を持つ「企業依存型」の増加傾向を指摘している。このような社会的背景の中で働いてきた昨今の中高年男性は，心理的にも会社との距離が近いことが推察される。このような就労時の特徴を考えると，失業の困難の要因を検討する際にも“会社との繋がり”に注目することが重要と考えられる。また，Hill（1978）が失業による社会的孤立を問題視したように，失業は“社会との繋がり”の喪失ともなる。したがって，“会社および社会との繋がり”に注目することで失業の困難が生じる要因の一端を描き出すことができると思われる。

先行研究の概観

海外では1930年より膨大な量の失業研究が行われ，失業に対する心理的反応やその要因が検討されてきたが，総じてネガティブな影響を指摘するものが多い（Mckee-Ryan, Song, Wanberg, & Kinichi, 2005）。50－60代の中高年失業者の心理的反応についても，Schlossberg & Leibowitz（1980）が「引退するには早いが再就職をするのは難しい中年後期の人たちが最もネガティブな反応を示す」と否定的な反応が現れることを指摘している。しかし，一方で，Hepworth（1980）は「55－65歳の中高年失業者には抑うつ的になる人もいるが，定年が近い場合には自由時間が得られるために失業を歓迎する人もいる」と述べており，中年後期の失業者の反応については一致した見解が得られていない。

また，失業の影響をプロセスの中で捉える研究も見られる。失業に対する心理的変化に注目したステージモデルは古くから注目されており（Eisenberg & Lazarsfeld, 1938；Kaufman, 1982），失業過程を喪のプロセスと捉えたKets & Balazs（1997）は，第1段階を混乱，第2段階を過去への拘泥，第3段階を今までの考え方を捨てる，第4段階を再定義と創意工夫が行われるとした。しかし，ステージモデルについては，過度の一般化，研究の方法論の問題など批判も多く（Fryer & Payne, 1986），失業体験の複雑さを説明する枠組みとしては有効ではないという指摘もある（Ezzy, 1993）。なお，失業後のプロセスをローラーコースターモデルとして提示したBorgen & Amundson（1987）は，そのパターンは性別や年齢によって異なることを明らかにした。普遍的なモデルを描くことには限界があるが，特定の対象群がどの時期にどういう困難を体験するのかを理解する上でプロセスという視点は有効であると考えられる。

一方，日本は歴史的に低い失業率を維持してきたため，国内では心理的な視点からの失業研究はほとんど行われてこなかった。近年になって徐々に散見されるようになり（廣川，2006），坂爪（2000）は再就職支援会社における再就職活動位相の分析から再就職プロセスの課題を抽出している。しかし，日本では失業研究自体が黎明期にあることから，再就職支援会社の再就職プロセスではなく，一般の失業者の体験過程全体を失業者の視点から理解する必要があるであろう。その際，先述のように，中高年者は会社および社会との繋がりに特徴があると考えられることから，就労中の会社との繋がりや失業体験後の生活も含めて，失業の体験過程を文脈の中で理解することが重要となると思われる。

本研究の目的

以上より，本研究では会社および社会との繋がりという視点から，近年の日本の中高年男性の失業体験を失業前後も含めた体験過程の中で描き出し，彼らの失業がなぜ困難になるのかを検討することを目的とする。さらに，失業の困難の体験がその後の生活に及ぼした影響についても考察することとする。

方　法

研究手法　失業は心理的に大きな痛手を伴うことの多いデリケートなテーマであり，一般的に積極的に話せる内容ではないと推察される。また，たとえ語られたとしてもその実態は質問紙調査や構造的面接などによる表面的な語りから容易に理解できるものでもない。失業によって所属集団を失ってしまうため，失業者に大規模調査を実施することも極めて困難である。以上のような事情により，本研究では当事者の体験を丁寧に分析する質的研究がより適切であると考えた。なお，会社および社会との繋がりを考える上で，会社との繋がりを失った理由や形態は極めて重要な要因となると考えられる。したがって，まずは考えうるすべての離職形態による失業経験者10名を対象に面接調査を行った。10名のデータをすべて取り終わった後で，離職形態を基準として同じような離職理由の対象群毎に，順にデータの分析を進めていった。さらに，そのデータ分析を精緻化させる目的で，同じ対象者に対して実施された2度目の面接データを分析した。最後に，失業経験者を対象に実施したグループインタビューから得た6名のデータを分析し，累積データ数は26に及んだ。このような手続きによりデータを丁寧に精査していく質的分析を試みた。

調査手続き　本研究では，リストラが最も盛んであった1990年代後半以降に失業を経験し，面接時点で失業状態にない50－60代の中高年男性を対象とした。なお，失業形態については，心理的ストレスが最も高いと想定される非自発的な離職に限定した。ただし，非自発の基準は本人の主観的意味づけに依拠したため，正式な離職理由が早期希望退職，自主退職の事例も本人が非自発的と認識していれば対象者に含まれる。

調査は，失業者のための社会的支援を行うNPO法人の協力を得て実施された。条件に該当する調査協力者10名に対して面接を行った（Table 1参照）。面接時の年齢は51～64歳で平均年齢58.9歳，離職時の年齢は48～58歳で平均年齢54.4歳，離職後経過年数は平均4.7年であった。なお，累計26名の調査協力者のうち1名を除いてすべて同NPO法人の会員であった。そのため，失業問題への関心の高さ，失業者仲間を有しているなどの偏りがある可能性はあるが，調査に対して協力的で率直な語りが得られたと考えられる。

面接調査対象者には，事前に依頼文書を渡し，了解を得てからアポイントメントを取った。面接時に改めて本研究の目的と意義，調査内容の取り扱いと秘密保持などについて説明し，同意書にサインをしてもらった。調査期間は，1回目は2005年8月～2006年3月，2回目は2006年4月～5月に行われ，各面接時間は1～2時間半に及んだ。調査はNPO法人のオフィスか喫茶店等で行われた。面接内容は，就労時から失業を経て現在に至るまでの体験について，職歴，仕事生活，失業体験，失業生活，再就職活動，その後の生活を中心に，半構造化面接を行った。ただし，語りの流れを重視し自由に話してもらうよう意識した。グループインタビューは2006年5月に実施され所要時間は1.5時間であった。グループインタビューはNPO法人のオフィスで1.5時間にわたって実施された。実際には女性1名を含む7名で実施されたが，分析の対象は50－60代の男性の非自発的失業経験者6名に絞った（内2名は面接対象者（Info.2,3））。インタビューでは面接調査で生成されたカテゴリーを提示し，自由な意見交換を行った。面接調査およびグループインタビューの内容は，本人および参加者の承諾を得てすべて録音により記録された。

分析方法　分析は，修正版グラウンディッド・セオリー・アプローチ（以下，修正版M-GTA；木下，2003）に基づいた。本調査では多くのエピソードが得られたが，それゆえにデータを切り刻んでしまうと解釈が難しくなる。その点，研究者の問題意識に忠実にデータを解釈し，データの切片ではなくデータに表現されているコンテキストを重視する修正版M-GTAは有効と考えられた。また，本研究はあくまで中高年男性失業者という限定された範囲の対象者を対象としているため，限定された範囲内において説明力を持つ修正版M-GTAは本研究に適していると判断した。

失業者の外界との繋がりを意識して何度もデータを読み込み，「会社および社会との繋がりの喪失と再獲得」が分析テーマとして適当と考えた。分析は，逐語記録の中で最も情報量が豊かな対象者のデータから着手し，分析焦点者である中高年男性失業者にとっての体験の意味を考えて「概念」を形成した。概念を分析ワークシートにまとめ，2例目以降は1例目の概念との類似点，対極例について比較検討を行いながら新たな概念を生成した。さらに，概念間の関係性を吟味して複数の「概念」からなる「カテゴリー」を生成した。分析経過で心理学専攻の研究者1名の協力を得て，概念やカテゴリーの妥当性を吟味した。

分析過程

修正版M-GTAではデータの確認と概念の生成を継続的に行うため分析プロセスそのものが重要となるため，以下では分析プロセスを詳述する。分析は，「Step 1. 第1回面接データを元にした基礎的カテゴリーの生成」「Step 2. 再面接によるカテゴリーの精緻化」「Step 3. グループインタビューによるカテゴリーの精緻化」に分けて行われた。Step 1は，離職理由を基準にさらに「Step 1-①倒産」「Step 1-②早期退職」「Step 1-③自主退職・

Table 1　*対象者のプロフィールと分析のステップ*

分析手順	各ステップの累積データ数	対象者	離職形態	面接時年齢	業種	学歴	家族	現状
Step 1 1－①	3	Info. 1	倒産	50代後半	証券	高校	妻子	非正規
		Info. 2	倒産	60代前半	証券	高校	妻	引退
		Info. 3	倒産	60代前半	証券	高校	妻子	非正規
1－②	5	Info. 4	早期希望退職	60代前半	エネルギー	大学	妻子	非正規
		Info. 5	早期希望退職	50代後半	運送	大学	妻子	非正規
1－③	8	Info. 6	自主退職	60代前半	イベント	大学	妻子	正規
		Info. 7	自主退職	50代前半	コンピュータ	大学	妻子	非正規
		Info. 8	事業縮小	50代後半	建築	大学	妻子	非正規
1－④	10	Info. 9	普通解雇	50代前半	医療	専門学校	なし	正規
		Info.10	普通解雇	60代後半	サービス	高校	なし	非正規
Step 2	20	Info.1-Info.10　第2回面接						
Step 3	26	グループインタビュー						

事業縮小」「Step 1-④解雇」に分けた（Table 1参照）。『　』はコアカテゴリー，【　】は上位カテゴリー，〈　〉はカテゴリー，「　」は概念，“　”は生の語りを示す。ただし，分析過程で用いられる概念やカテゴリーはあくまでそれらの生成過程段階におけるものである。なお，移行要因やサポート資源も重要であるが，紙幅の問題により，本論文では会社および社会との繋がりに注目し，失業の困難に関わる体験過程の分析部分のみを記述する。

1. Step 1：第1回面接データを元にした基礎的カテゴリーの生成

Step1-①倒産　最初の分析は倒産の経験者3名を対象とした（Info. 1, 2, 3）。倒産は一方的で強制力が強いが，全従業員が対象となるため原因が個人に依拠しない。なお，Step 1-①の対象者は同じ会社，高卒という共通点があった。また，いずれも企業内労働組合活動を行っていたため，労働問題への意識が高く，面接に協力的で豊かな情報が得られた。

中高年失業者の会社および社会との繋がりという視点から分析を進めたところ，コアカテゴリーとして，『第Ⅰステージ：会社への没入と喪失』『第Ⅱステージ：社会からの度重なる疎外体験』『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』が抽出された。

『第Ⅰステージ：会社への没入と喪失』　強い入社動機は見られず〈何となく入社〉し，入社後に〈会社が家族や社会になる〉という傾向が見られた。また，プライベートの人間関係も会社や仕事から派生し，〈会社との繋がりの広がり〉が見られた。ただし，労働組合員であったためか，〈仕事の仕方〉としては長時間労働は避けられていた。一方で，会社に対する誇りや〈会社への愛着〉は見られ，〈会社との繋がりを絶対視〉していた。ここまでの就労中の前職の会社との深いつながりを【Ⅰ-①会社への没入】とした。しかし，〈経営状況が悪化〉し，〈リストラ〉が行われるも会社は〈倒産する〉。Info. 3は倒産時にも会社の創業時の看板を持ち帰るなど最後まで会社への愛着が見られた。一方，会社との距離を比較的保っていたInfo.1, 2も倒産時には現実感の乏しさ，ショックを述べるなど〈倒産への反応〉は様々な形で見られた。以上の倒産体験と倒産への反応を【Ⅰ-②会社の喪失体験】とした。その後，倒産後の残務処理を経て会社に行かなくなったことにより，生活は大きく変化した（〈生活の変化〉）。これを【Ⅰ-③会社生活の喪失】とした。

『第Ⅱステージ：社会からの度重なる疎外体験』　倒産によって失業者となり，公的職業安定所でぞんざいな扱いを受け，〈失業者として扱われる〉体験をする。また，働いていないことに後ろめたさを感じ，〈社会の目〉が気になるようになる（Info. 1）。一方，充分に働いた自負から失業を公言する人もおり（Info. 2），個人差が見られた。いずれにせよ行き場を失って孤立し（〈孤立する〉），失業者のためのNPO活動を開始（参加）していた。以上のような失業後の社会における体験を【Ⅱ-①社会からの排除・孤立】とした。このような中で，規定の日数が経過すると雇用保険[1]の受給が終了し，【Ⅱ-②社会からの経済的支援の喪失】を体験する。この段階で〈経済的問題に直面する〉。家族からの再就職への要請もあり〈再就職意欲の高まり〉が生じ，〈再就職活動の本格化〉が起こっていた。しかし，再就職活動は思うようにうまくいかず〈厳しい現実に直面する〉。プライドを傷つけられる，公的職業安定所にも不満を感じるなど〈再就職がうまくいかない葛藤〉が高まる。次第に焦りが募り，〈失業の長期化の可能性〉や〈ホームレスになる可能性〉を感じる。再就職活動の本格化以降の体験を【Ⅱ-③労働市場からの拒絶】とした。

『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』　その後，引退（Info. 2）や非正規雇用による再就職（Info. 1, Info. 3）で，失業状態を脱していた。引退者も積極的に家事労働をして妻を助けており，いずれの失業者も何がしか〈働くことの喜びの再認識〉をしていた。再就職者は〈仕事の意味の再確認〉をし，〈仕事ならではの意味〉を実感していた。しかし，一方で，仕事以外の人との付き合いを大事にして，ボランティア活動をするなど〈他者とのかかわりの中で生きる喜び〉を感じていた。ただし，中には前職のプライドを引きずったり（〈前職との違い〉），心残りがあるなど心理的には〈会社への未練〉も認められた。また，体調不良で〈再就職を繰り返す〉ケースもあった。

Step1-②早期退職　次に，早期希望退職者2名（Info.4, 5）を分析した。なお，本来早期退職は自主選択によるものであり非自発的ではない。しかし，会社の経営状況が傾く中，退職金の割増金の提示を受け，実際には離職を選択せざるを得なかった。早期退職でも概ねStep1-①と同様の流れであったが，特徴的な体験も見られた。その一つが，【Ⅰ-①会社への没入』において，両者とも社内の〈出世競争を意識〉し長時間労働をしていたことである（〈仕事中心の生活〉）。また，【Ⅰ-②会社の喪失体験】においても，早期退職者は自身の離職以前に他者のリストラに携わる（Info. 4），失業者の採用業務を行う（Info. 5）など他者のリストラに関わる体験をしていた。自分のリストラに際しては，就労時に仕事や会社に強く関わっていたことから葛藤も大きかったが，

1）失業者への基本手当は，かつては失業保険といわれていたが，現在では雇用保険の失業等給付として支給されている。本論中で雇用保険とする場合には雇用保険の失業等給付の基本手当を指すこととする。ただし，失業経験者は面接で失業保険という呼称を使っていたため，発言に関しては失業保険のままで記している。

最終的に〈離職の決断〉がなされていた。一方で，【Ⅰ-③会社生活の喪失】で実際に失業生活に入ると，〈仕事・会社からの解放感を楽しむ〉という心境も強く見られた。また，【Ⅱ-①社会からの排除・孤立】で，世間から無職者として扱われる体験をし（〈社会システムからの排除〉），社会に対する強い怒りを感じていた。『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』で生活が安定してからは，会社員時代にはできなかったことをすることで充実感を得ていた。

Step1-③自主退職・事業縮小　次に，自主退職2名（Info. 6, 7）と事業縮小1名（Info. 8）の3名を分析した。自主退職は本来は自発的な離職であるが，実際には2例とも失業を選ばざるを得ない状況で離職していた。自主退職は退職金の割り増しがない上，雇用保険の給付制限もあり，個別性も高い。Info. 6が“下手すると自殺することになるかもしれないと考え”て離職したように，自主退職では離職前の葛藤がより大きい。また，事業縮小は会社の経営不振による強制的なものであるが，退職金の割増もなかったため，自主退職と事業縮小を同じステップで分析した。自主退職も事業縮小も，【Ⅰ-②会社の喪失体験】の段階で会社への愛着の喪失が見られたことが特徴的である。また，彼らにも離職後の〈仕事・会社からの解放感を楽しむ〉感覚が強く見られた。なお，自主退職は個別性が高いため離職者仲間がおらず，NPOに参加して〈社会に居場所を求める〉傾向が見られた。

Step1-④解雇　最後に，解雇のケース2名（Info. 9, Info. 10）を分析した。解雇は一方的で，かつ原因が自らの非に帰されるため心的ストレスが高いと推察された。解雇の場合，【Ⅰ-②会社の喪失体験】の葛藤は強く，離職時に労働基準監督所に行く（Info. 10），弁護士と相談する（Info. 9）など〈拒否・抵抗〉の行動化が見られた。いずれも失業を複数回経験していたため，離職時の不安感は一層高く，再就職活動も最初から積極的であった。

2. Step 2：第2回面接によるカテゴリーの精緻化

Step 1で考えられるすべての離職形態について分析をした。研究者の一方的な思い込みや偏りを是正するため，同じ対象者に再面接を実施した。第1回面接で得られた知見を元に意見や補足を求め，その発言をデータとしてさらにカテゴリーの精緻化を行った。第2回面接では，失業体験を振り返る中で失業を経た現在の心境が多く語られた。したがって，『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』を再度検討し，【Ⅲ-①新たな働き方】【Ⅲ-②失業による気付きと社会との多面的な繋がり】のカテゴリーに分けた。

3. Step 3：「Step3. グループインタビューによるカテゴリーの精緻化

さらなるカテゴリーの精緻化を図ると共に，面接対象者以外の失業経験者からも意見をもらうために，NPOが主催する懇談会の場でグループインタビューを実施し，そのデータを分析した。その結果，概ね既に生成されたカテゴリーで説明可能であった。

結果と考察

すべてのデータを分析した後に，会社および社会の繋がりを軸に概念およびカテゴリーの表現や，各々の関係性を全体的に吟味した。最終的なカテゴリーと発話例をTable 2・3・4に示す。なお，カテゴリーや概念を図示した失業の体験過程の仮説モデルがFigure 1である。以下に，失業の困難が生じる第Ⅰ・Ⅱステージを中心に，結果と考察を記述する。

『第Ⅰステージ：会社への没入と喪失』「会社との関係の深まりとリストラによる会社との繋がりの喪失」と定義され，3つの上位カテゴリーからなる。【Ⅰ-①会社への没入】は，「会社への時間的・経済的・人間関係的関与の強さをベースとして，会社以外の生活が会社との関係性の影響を大きく受けており，かつそれを当然視するようになるプロセス」と定義され，6カテゴリー10概念からなる。このステージでは，就職時は明確な入社意識も会社への拘りもなく〈何となく入社〉するが，〈会社が家族や社会になる〉〈仕事中心の生活〉〈会社の仕組みに巻き込まれる〉体験の中で，次第に〈会社への愛着〉が高まり，終身雇用を信じて〈会社との繋がりの絶対視〉が生じるようになっていた。

【Ⅰ-②会社の喪失体験】は「非自発的な形で会社を失う体験」と定義され，3カテゴリー13概念からなる。会社の業績の悪化に伴い，次第に〈会社への不信と不安の高まり〉を感じる。そして，非自発的な形で自身が〈会社から見捨てられる〉体験をする。〈離職によって生じる反応〉は様々であったが，それらの反応には就労中の〈会社との繋がりの絶対視〉が関係していると考えられる。特に，失業後の反応の一つに「愛着の維持」があることは興味深い。Info. 4の“会社を恨んで辞めていった人は少ない”という発言には，集団の利害を個人のそれに優先させる集団主義（間，1971）の特徴が窺われる。一方で，会社への愛着は「裏切られ感」や「怒り」も生んでいた。海外では失業のポジティブな影響として，前職の仕事が不満足であった場合には，離職をポジティブに捉えると指摘されているが（Little, 1976），前職に不満があったInfo. 6も離職をポジティブなこととは捉えていなかった。以上に見られる前職の会社への愛憎には，仕事への思いだけではない，組織・集団に対する思い入れが窺われ，日本的な企業帰属意識を反映したものと考えられる。

【Ⅰ-③会社生活の喪失】は「離職によって，会社員として過ごしてきた生活を喪失する体験」と定義され，3

Table 2 *『第Ⅰステージ：会社への没入と喪失』のカテゴリーと発話例*

上位カテゴリー	カテゴリー	概念と発話例〈(　　)は著者が意味を損なわないよう内容を補足したもの，文頭の番号は，Info.Noを示す〉
Ⅰ—①会社への没入	何となく入社	「よくわからないままの入社」“⑧別にこういう業界だけではなく，最初に受けたのが受かっちゃっただけ” “①大学入ろうと思っていて最初はアルバイトで入った。それが大学行かないで会社入っちゃったっていう。･･･〈中略〉･･･〈業界のことは？〉しらない” “⑤どういう仕事をさせられるのかわからなかったからね。職員として採用されて，あっちこっちの営業所に行ったわけだ”
	会社が家族や社会になる	「擬似家族としての会社」“①営業所だったから何かあるとファミリー，ほんとファミリーだったから” 「会社で社会化する」“②そこから人生が段々段々と，知らない私がそうなってくるわけよ。こうだって言われればそうなわけだから。それが色々と会社の裏側を見るようになるわけ” 「会社中心の人間関係」“①お客さんと親しくなって，一緒に遊んだりなんかしてたから” “⑥結局そんな仕事のやり方だから，日常的にも友達なんかにもほとんど会わなかったしね”
	仕事中心の生活	「家族生活を犠牲にした仕事」“⑥うちの子はててなし子といわれたくらいだから。朝早く家出てったり，夜遅く帰ってきたりするから” “④父親はいつも転勤で，単身であっちこっちに行ってるもんだと思っているから，子どもたちは。要するに働いて稼いで家にちゃんと生活させてくれるだけの仕送りをしてくれているのが，父親の役目と思ってたんじゃないの？” 「一生懸命働く」“④仕事そのものは面白かったし，やりたい放題やってましたから。典型的な企業戦士じゃないけれど働いていましたね” “⑧残業はほとんど残業ですけど，早く帰る雰囲気じゃない。何かいないといけない。有給もほとんどとったことない”
	会社の仕組みに巻き込まれる	「出世競争」“⑤社内的には出世だよね。･･･〈中略〉･･･そんなゴマすってまで偉くなろうとは思わないから。自分は酒も呑まない，タバコも吸わない，ゴルフもあんまりうまくないしね。出世なんてものはもう” “④達成感，常に。通信簿じゃないけど，会社の評価も。良い人も悪い人もとにかくランキングしますよね。ランキングが上の方の人は達成感がある。下の方になってくるとそれがない。それの繰り返しですよ”
	会社への愛着	「会社への愛着」“⑤我々はサラリーマンだから，後ろに〇〇という看板をしょってるからね。ブランド品だと思ってるから･･･〈中略〉･･･親戚の中でもブランドイメージとして，あの人は〇〇会社に勤めてるよ，っていうのはあったよね” “②僕は会社人間じゃないから，自分のために，家族のためにっていうのですよね。だから自分を犠牲にしてなんていうことはないですから”
	会社との繋がりの絶対視	「終身雇用を信じる」“⑤1社でずーっと終身雇用，会社入ったときは終身雇用だと思っていたからね” 「社会経済システムの過信」“②自分が失業するとは思ってなかった。日本の国で銀行・証券がつぶれるようなことがあったら国が駄目になると聞かされていたから，絶対にないと思っていた”
Ⅰ—②会社の喪失体験	会社への不信と不安の高まり	「会社の業績の悪化」“⑧後半はノルマノルマで厳しかった。･･･〈中略〉バブルはじけてからは厳しくなった。気持ちをしっかり持たないと，嫌になって辞めるとか，精神的におかしくなって辞めたのもいた” 「他者のリストラに関わる」“④彼らにこの商売は儲からないから辞めなさいと，いずれ駄目になるからもう辞めなさいとそういう急ブレーキをかける時期を我々は指導してきたんです。･･･〈中略〉今度は己の身になるわけですよ” 「会社への愛情の喪失」“⑧〈愛着？〉最後の1年はなかったけど，それまではあった”
	会社から見捨てられる	「リストラ」“⑦営業力のない会社で仕事がなくなった。給料も目減りしてきて，自宅待機になった。こりゃ駄目だなと。「辞めるか自宅待機でいいよ」といわれて，それで辞めますと”
	離職によって生じる反応	「拒否・抵抗」“③あなた方次長部長クラスが率先して会社という船から下りてくれれば，水位がそれだけ上がるわけで，負担が少なくなる。だから会社のために降りてくれと。･･･〈中略〉人員削減で，全部拒否を致しました” 「残りたい葛藤」“⑦（できるだけいたい）人間はそうですよね。安定志向を求める。それを振り切ってまでも” 「裏切られ感」“⑥会社が大きくなっていく時期に，まぁ貢献，貢献したって言ったらオーバーだけどね” 「怒り」“③なんで人は働き続けたいと思っているのに，自分の都合で他から第3者からお前働かなくていい，働く場所がなくなったということを言われなきゃいけないのか。これがこういうことが近代社会であっていいのか” 「愛着の維持」“④(早期退職の)条件は（リストラの時期で）ほとんど変わらなかったですよ。それは企業として立派だと思いましたね。だから，企業を恨んでやめていった人は少ない” 「人生設計が狂う」“⑤サラリーマンっていうのは一生懸命働いて，身を粉にして働いて･･･〈中略〉･･･住宅ローンを抱えている人なんかは定年退職まで組んで，右肩上がりで上がるようにして組んでいっているからね” 「実感がない」“①これからのこととかそういうことも全然考えない。あれ，現実なんだなって，あれだけ” 「楽観視」“⑧精神的に負い込められたのはない。落ち込んでも何とかなるわと” 「会社との一体化の拒否」“②倒産した会社っていうのは人間扱いしないの，銀行は。まともに扱ってくれない”
Ⅰ—③会社生活の喪失	日常生活の変化	「活動の変化」“①そうね。何もやることがないんだもんね” “⑧暇だったら図書館に行って本を読むとか，かなり読んだな” 「健康状態の変化」“②運動不足で太っちゃった” “④体のほうは調子よくなった” “⑨不眠的なものがあった”
	仕事・会社からの解放	「仕事からの解放」“⑧ちょっとはほっとした，失業する前の方が大変。失業でほっとした” 「人間関係からの解放」“⑨あいつとはもう会わなくてもいい。そういう意味で楽になった” 「会社生活からの解放」“⑤羽伸ばしてたから。今まで31年間休みとったことなかったけど毎日が日曜日だから”
	生活の喪失に伴う苦痛	「行き場と居場所の喪失」“⑥行くとこがあるというのは大事なんだよ” 「人間関係の喪失」“①友達がいなくなるよね。･･･こっちも言いづらいから，段々こう遠ざかっていくっていう” 「生活のリズムの喪失」“⑤普通小学校から，朝行って学校で勉強して帰ってくるんでしょ。会社行くと仕事をやって夕方家に帰ってくるわけだ。それがある日突然何もしなくなっちゃったら”

Table 3 『第Ⅱステージ：社会からの度重なる疎外体験』のカテゴリーと発話例

上位カテゴリー	カテゴリー	概念と発話例〈(　　)は著者が意味を損なわないよう内容を補足したもの，文頭の番号は，Info.Noを示す〉
Ⅱ―①社会からの排除・孤立	社会システムからの排除	「社会的差別を受け屈辱を味わう」“④生命保険でも書き換えがあったのかな。そしたら生命保険会社の担当員がね，「職業欄あるけど，これ適当に書いてください」と。「いや，俺無職だから無職」と。「それまずいんですよね」っていうわけですよ。「何でまずいの？」って言ったら「無職は駄目なんですよ。こんなの調べませんから適当でいいですよ」と” 「社会システムの再認識」“④やっぱり，一般企業の源泉徴収票がすごい価値観があるんですね。不思議な世界ですね” “③失業がこれほどマイナーな，人間の尊厳を否定するようなものに繋がるようなマイナーなことだとは思わなかった。失業者というだけで自分のすべてが否定されるような。社会的に見ても自分が認められないような” 「社会への怒り」“④こんなにまで職というものに対して社会の信用性を失うのは，歯がゆくてしょうがない” 「人として丁寧に扱われない」“②窓口って感じじゃないね。事務処理ね。大勢一杯来ますから，ハイハイって名前読んでどんどんどんどん処理していくって感じ。相談して何するって感じじゃあ”
	社会の目を意識する	「罪と恥の意識」“⑦自分が罪を犯しているような，犯罪者と同じような心理状態になる。例えば家から出る時に近所の奥さんが井戸端会議をすると出られない。近所の人は知らないけど，自分自身は後ろめたいという気持ちを持ってるから。近所の人がそういう思いで見てる，っていう風に想像しちゃうから。本当は知らないけど，そういう気持ちがあるから出て行けない。日本人に独特なのかわからないが，独特なのかな。恥の意識かな” “①視線がわかるわけですよ。「あぁ，あそこのうちの旦那は失業してるな」とか。何も言わないんだけど，無言のうちに圧力がかかってくるんだよね” 「社会の目」“⑤40代50代は働き盛りだからね，隣の旦那さん何やってるんだろと” “④社会の目が嫌だった”
	社会的に孤立する	「孤立感」“⑥全くあれだね。男ってもんはつまんないもんだね，何のあれもないわけだよね，社会との接点が” 「閉じこもる」“①だから出なかったもん，全然。締め切って” 「見捨てられ不安」“⑥行く場所もないし，本当に社会から捨てられるんじゃないかという感覚がある” 「社会に居場所を求める」“⑦新聞かなんかに（NPOの）記事が出ていた。仕事を辞めた頃に。どういうのかなぁと”
Ⅱ―②社会からの経済的支援の喪失	経済的問題に直面	「経済的に追い詰められる」“③泰然自若と構えているものもいるが，失業保険が切れる切れないの時に初めてその人の地が出る” “①失業保険が切れるときだね。切れると本当にお金が一銭も入ってこないから，働かないとだね”
	再就職意欲の高まり	「仕事をしなくてはならない」“③失業保険が切れて「貴方どうしてくれるの？」っていう話に” 「仕事がしたい」“⑧生活のリズムが狂っちゃって時間をもてあましてきた” “①取り残されないように。何かやってなきゃ。” 「仕事をするべき」“④身内からも，やっぱり男は仕事しなきゃいかんよねと”
	再就職活動の本格化	「なりふりかまわぬ活動」“⑤失業保険が切れる前から仕事は探しているんだけれど，○日に切れて，半月で16通履歴書書いた” 「就職への焦り」“①その頃はやっぱり，何か探さなきゃいけないなって気持ちになるけど，ない。結構参ってるときもあったね”
Ⅱ―③労働市場からの拒絶	厳しい現実に直面する	「年齢の問題を実感」“①（再就職先）ないよね。だいたい年齢制限に入っちゃうから，50過ぎちゃうと” 「スキルの問題を実感」“⑧昔は資格を持っていればといわれたけど，今は資格を持っていても駄目”
	再就職がうまくいかない葛藤	「プライドの傷つき」“③（面接で）会社時代のよきことばかりの話をするわけですよ。プライドがあるわけだから。そしたら貴方はウチで働けるような人じゃないですよといわれて。でもそれを社交辞令で言ってんだなと思って期待していたわけですよ” 「社会への不満」“⑤我々が納めた失業保険でしょ･･･〈中略〉･･･仕事が見つかるまで保証してくれなきゃ”
	最悪の事態を予測する	「長期化の懸念」“①ずっとこのまま失業していて，すぐに就職があればいいけど，ないままずっと家に閉じこもってても精神的に悪いしなぁ，と思って” 「ホームレスの可能性の危惧」“⑤自殺しようとは思わなかったけど，段々段々マイナスマイナスに考えてっちゃうわけ。だから本当に失業して，失業保険切れて何にも収入なくなって，本当にホームレスになっちゃうかもしれない”

カテゴリー8概念からなる。失業によって，日々の活動や健康に変化が生じる（〈日常生活の変化〉）。失業当初は変化に〈仕事・会社からの解放〉を感じ，それを積極的に楽しむ人もいた。しかし一方で，会社からの解放は，「行き場と居場所の喪失」「人間関係の喪失」「生活のリズムの喪失」をも意味する。そのため，彼らは次第に〈生活の喪失に伴う苦痛〉を感じるようになる。このような苦痛は就労時の〈仕事中心の生活〉の反動と考えられる。Info. 5の“普通，小学校から，朝行って学校で勉強して帰ってくるんでしょ。会社行くと仕事をやって夕方家に帰ってくるわけだ。それがある日突然何もしなくなっちゃったら”という語りからは，失業によって最近の会社生活だけでなく，小学校にまで遡る日本の社会習慣に染み付いた生活のリズムも失ったことが示唆される。

以上より，第Ⅰステージでは【Ⅰ-①会社への没入】が大きく影響したと考えられる。

『第Ⅱステージ：社会からの度重なる疎外体験』「失業により生活の諸相において社会から疎外される体験を重ねること」と定義され，3つの上位カテゴリーからな

Table 4 『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』のカテゴリーと発話例

上位カテゴリー	カテゴリー	概念と発話例〈(　　)は著者が意味を損なわないよう内容を補足したもの，文頭の番号は，Info.Noを示す〉
Ⅲ―①新たな働き方	働くことの意味の変化	「働ける喜び」“①何もぼけっと家にしていないで，働けるっていうだけの。仕事してるから，やっぱり後ろめたさがないじゃない。精神的なもんでしょうね，仕事してる”“⑨いくら自分が本当に好きなことではないにしても，それでもやっていないことに比べれば楽しい感じ。収入も当然あるということと，ある程度は心の安らぎがあるということ” 「収入のありがたみを感じる」“③貯金というのはこれしかない。私が毎月働いているアルバイト代。ばかにならないわけですよ，これは。一つはそういう経済的な安心感” 「生活のリズムの回復」“④リズム，拘束されている時間がいい。何時から何時までいましょうという。家にじっとしていると何もないですよね。何かしないといかん，何かに拘束されていないといけない。だから働こうというか，働けばそういう環境になる” 「社会における居場所の再獲得」“⑥ただもう全然お金は安いよ。とても食っていけるお金じゃないけど。でも，毎日行くところがあるってことは，つくづく必要なことだなーと思いますよね” 「仕事による健康維持」“⑤体を動かして何かをしていると時間も早く過ぎるし。だって，70や80のおじいさんじゃないから，何にもしないとね。体動かしてないと。まだボケっていうには早いからね”
	仕事ならではの意味	「仕事ならではの意味の実感」“⑦やっぱり人間って，働くってことをしてないと駄目だなと。働きと遊びってバランスよくて，人生って自分にとって良かったと思えるんだろうけど。だから遊びだけでも働きだけでも駄目，やっぱりやりたいことがあった方がいい，仕事がないとどうもやる気がない”
	会社との距離を保つ	「仕事として割り切った満足感」“④皆臨時従業員ですから，同じ給料だから。で，ボーナスも同じ。そうなると給料が同じレベルで，年だけが違うだけであって，そういう意味でも明るくなっちゃうんでしょうな”“⑧ノルマがないから精神的にすごく楽” 「会社との距離」“⑥今までバリバリやってきたのが，ある意味じゃ，だまされたわけじゃないけど，それほど会社を信用しないというか。今まではある意味会社を信用するとか，何かあれば会社を守るというのがあったけど，今はそれが裏切られた。そうなるとそこまで会社にくっつく必要もないと。仕事してればそれでいいんだと”
	前職意識の残存	「愛社精神の維持」“④＜会社のアイデンティティ？＞持ってます。愛社精神じゃないけど。＜よい感じ？＞愛社，だったね。今でも仲間同士集まっても会社を恨んでいる話はほとんどないですよ。たいした会社だと思ってるんですよ。立派な会社だと” 「プライドの持続」“③本当に俺はこんな様な仕事をしなきゃならないってどういうことなの？って思いましたよ。作業着を着ていただけますか？と言われたときには，「いや，いいです」って断ったんです” 「会社への未練」“②失業は確かにあったんだけどできればあと３年くらい会社が持ってくれたらもう最高に良かった”
	仕事の不安の継続	「失業不安の継続」“⑦常に不安はありますよ。常に考えてますよ。次何をするか。今のが駄目になったらどうするか” 「再就職を繰り返す」“①2年前に病気になったんで。そこはクビになって”
Ⅲ―②失業による気付きと社会との多面的な繋がり	失業経験によって得られた気付き	「他者の痛みを理解する」“①ホームレス見ても，昔だったら「なんだこの野郎」って思ったけど，今だったら「あぁいろんな人がいるんだなー」と思うようにはなったしね。どうしてなったのかなっていうことを考えられるようになった。ずっと順調だったらさ，そんなこと考えないじゃない” 「自己理解が進む」“⑨失業して嫌なんだけども，自分を振り返る，自分の考え方や過去の悪かった点とかを考えさせられた” 「価値観の変化」“⑦失業してみて，自分にとって趣味，自分にとってボランティア，自分にとって仕事，自分にとって家事って何なんだと言うことを考えるきっかけになった，考えることによって，今まで考えたことなかったけど，それはこうやってバランスが取れることによって軸が取れることがわかった”“④経済的な意味を減らしてもいいから生きがいの方に方向転換する。どうやって楽しんだらいいのかと方向転換する年代。辞めたときはそんなこと全然思わなかった。この年になると身近なものがなくなる。50代，60代で，そこにおける見方というのが多少見方が変わってくる人が多いんじゃないですかね。失業中でありながらね” 「失業経験を生かす」“①（失業は）いい経験はいい経験したと思うけど，皆に同じ経験はしてほしくないからNPOに参加している。自分はしちゃったから，こういうのを皆に体験して欲しくないから”
	幅広い社会を持つ	「人の役に立つ喜び」“④何か社会のためにまだ繋がりを持っていたい。一人でもいいから誰かのために助けてあげたい” 「家族関係の変化」“⑥変な話だけど，女房にはある意味で頭が上がらなくなる・・・＜中略＞引け目というか，負い目を感じる” 「NPO（失業仲間）との関係」“⑥同類相憐れむみたいな，そういう立場を知っている人だから” 「親戚関係の充実」“②姪っ子の子どもたちにたまにお菓子や本を贈ってあげて，それで電話が来る。それが楽しい” 「前職の同僚との関係性」“④全員が全員ハッピーじゃなかったけど，いまだに皆付き合ってますよ” 「新しい仕事の同僚の獲得」“④（新しい職場で）新しいリストラ仲間じゃないけどね，そういう話ができる”
	現在の生活の満足感	「会社時代にはできなかったことをする」“②仕事をしているときはあんまり家庭のことはやらなかったもんね。今は家庭のことができるからそういう点ではいいんじゃないんですか”“⑤会社辞めると時間に余裕ができる。その間に趣味をやったりボランティアをやったりできる。それは収入のためじゃないからね” 「自分なりの満足感」“②立派なものじゃなくて，贅沢じゃなくても，そういう生活自体に満足” 「下方比較」“⑤我々はまだ50過ぎているから失業したってあれだけど，今の30代40代は大変だと思うよ”

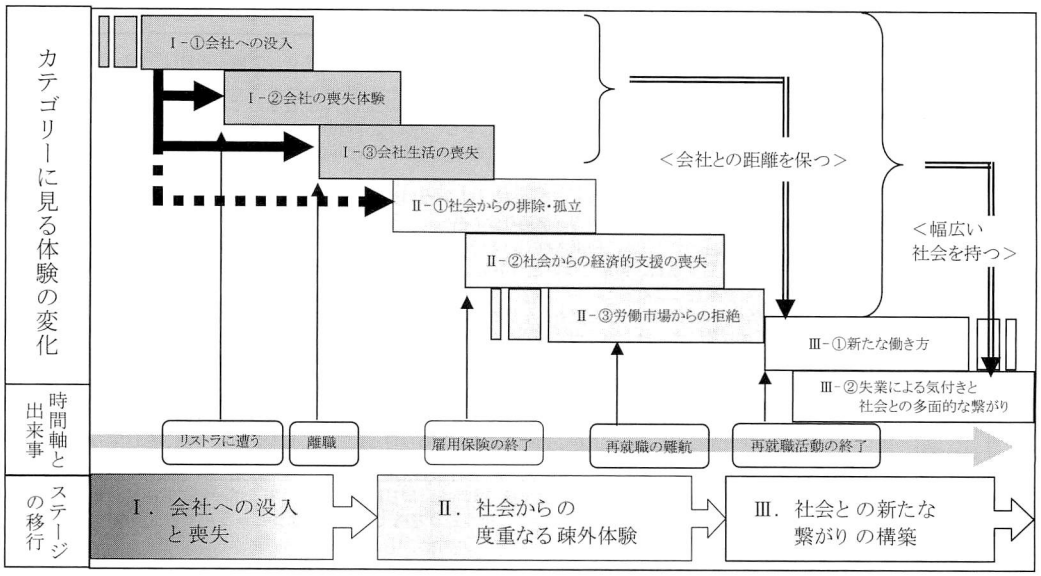


Figure 1　*中高年男性の失業の体験過程の仮説モデル*（□はカテゴリー，＜　＞は概念を示す）

る。【Ⅱ-①社会からの排除・孤立】は「失業者として社会から排除され，孤立する体験」と定義され，3カテゴリー10概念からなる。社会が信用するのは個人ではなく所属する会社であるという現実に直面し，「社会システムの再認識」をする。失業者になった途端に冷たくなる社会に〈社会システムからの排除〉を感じ，「社会への怒り」を覚える。“一般企業の源泉徴収票がすごい価値観があるんですね。不思議な世界ですね（Info. 4）”“失業者というだけで自分のすべてが否定されるような。社会的に見ても自分が認められないような（info. 3）”からは，これまで信用してきた社会をも失ったショックが窺われる。これも【Ⅰ-①会社への没入】で会社に守られた状態で社会と接してきたことが影響していよう。そして，彼らは失業していることに「罪と恥の意識」を持ち〈社会の目を意識する〉。“近所の人はそういう思いで見てる，っていう風に想像しちゃう（Info. 7）”からは，失業者が感じる目は現実の社会の目でもあり，失業者自身が抱く失業者に対するネガティブな社会的意識の投影でもあることが窺われる。このような罪悪感から人目を忍んで生活するため，あるいは罪悪感はなくとも仕事関係以外に話し相手がないために〈社会的に孤立する〉。

【Ⅱ-②社会からの経済的支援の喪失】は，「雇用保険の終了に伴い，社会からの経済的支援を失う体験」と定義され，3カテゴリー6概念からなる。再就職への猶予期間は，雇用保険の終了によって終わりを迎える。これまでも就職活動はなされてきたが，この段階でいよいよ〈経済的問題に直面〉し，「仕事をしなくてはならない」意識と，長期化によって生じる「仕事がしたい」気持ちと，「仕事をするべき」という意識が強くなる。このような様々な意味で〈再就職意欲の高まり〉が生じ，〈再就職活動の本格化〉に至る。

【Ⅱ-③労働市場からの拒絶】は，「再就職活動がうまくいかず，労働市場から拒絶される体験」と定義され，3カテゴリー6概念からなる。再就職活動では改めて〈厳しい現実に直面する〉。また，活動の中で「プライドの傷つき」や「社会への不満」など〈再就職がうまくいかない葛藤〉を抱く。そのような葛藤状態が長引くと，次第に失業の「長期化の懸念」や「ホームレスの可能性の危惧」など〈最悪の事態を予測する〉ようになる。

第Ⅱステージでは，先述のように【Ⅱ-①社会からの排除・孤立】には就労時の【Ⅰ-①会社への没入】の影響が見られるものの，【Ⅱ-②社会からの経済的支援の喪失】【Ⅱ-③労働市場からの拒絶】ではより社会的な次元の困難が生じていたと考えられる。

『第Ⅲステージ：社会との多面的な繋がりの構築』

「会社での就労にかかわらず，これまでとは違った働き方により，社会と多面的に繋がりを持つこと」と定義され，2つの上位カテゴリーからなる。【Ⅲ-①新たな働き方】は，「会社での就労にかかわらず，これまでと違った働き方をすること」と定義し，5カテゴリー13概念からなる。失業によって引退者も再就職者も〈働くことの意味の変化〉が生じていた。再就職者は改めて〈仕事ならではの意味〉を実感していたが，第Ⅰステージでの会社の喪失体験をもとに今度は〈会社との距離を保つ〉よ

うになっていた点が特徴的である。しかし，一方では思い通りの職につけない葛藤や屈辱感，あるいは前職への未練や愛着も見られ，これらの意識には〈前職意識の残存〉があると思われた。なお，今後についても〈仕事の不安の継続〉が窺われた。

【Ⅲ-②失業による気付きと社会との多面的な繋がり】は，「失業体験による気付きをもとに，仕事を生活の一部とし多面的な人間関係を持つ体験」と定義され，3カテゴリー13概念からなる。第Ⅰ・Ⅱステージの〈失業経験によって得られた気付き〉をもとに，仕事だけではない〈幅広い社会を持つ〉ようになっており，新たな社会との多面的な繋がりの中で多くの人が〈現在の生活の満足感〉を語っていた。

第Ⅲステージでは，第Ⅰ・Ⅱステージの体験を基にした新たな生活が始まっていた。

討　　論

失業の困難はなぜ生じるのか

日本の中高年者男性の失業の困難が生じる要因として，第Ⅰ・Ⅱステージから以下の4点が指摘できる。第1に，前職の会社との繋がりの強さである。前職の会社との距離が近いことによって，離職時の会社への愛憎が強くなっていた。それは，小此木（1979）のいう「対象喪失」として説明しうるであろう。所属集団を失うことの重要性はKets & Balazs（1997）など海外の研究者も指摘しているが，本研究では集団主義的経営を特徴とする日本の企業社会で（間，1971），企業依存型の帰属意識が高い中高年者（関本，1992）に起こった失業，という日本の企業文化が影響したと考えられる。

第2に，失業による会社生活の喪失が挙げられる。本研究では会社とある程度の距離を保ってきた人でも失業の影響は決して小さくはなかった。彼らは，失業によって社会における居場所や人間関係，そして会社生活のリズムだけでなく幼い頃から体に染み付いた生活のリズムを失っていた。このような失業による雇用の潜在的機能の喪失をJahoda（1982）は失業の剥奪理論として論じているが，現代日本にも同様の影響が見られたといえよう。

第3に，社会からの排除と孤立が挙げられる。失業者は無職者を信用しない社会システムおよび社会の目に疎外感を感じ，社会からの排除を経験していた。中高年になって初めて直面した社会の厳しい現実は，彼らの社会観を揺るがすものとなっていた。また，隣近所に失業を悟られないよう家に閉じこもる姿からは，失業者自身が失業について罪や恥の意識を持っていることが窺われた。この背景には失業に不名誉な烙印を押すスティグマがあると思われる。海外でも，1930年代には失業者は恥の意識から社会的に引きこもる傾向が指摘されていたが（Eisenberg & Lazarsfeld, 1938），1980年代には失業のスティグマの減少により失業後にも隣人や友人とより多くの時間を過していたことが報告されている（Warr & Payne, 1983）。しかし，本研究からは日本には依然として社会や個人の意識に失業のスティグマがあり，それが社会からの排除や孤立の一因となっていたと考えられる。

第4に，社会との繋がりの段階的な喪失が挙げられる。失業者は時間の経過と共に，上述の社会からの排除・孤立に加え，雇用保険の終了による経済的な公的支援の喪失，再就職の困難による社会からの疎外を重ねて体験していた。公的支援の施策や労働市場の状況は国によって異なるが，日本のこれらの現状は失業者の困難に大きく影響していた。このような厳しい社会の現実への段階的な直面が困難を高める要因となっていたと考えられる。

失業の困難の体験がその後の生活に及ぼした影響

第Ⅰ・Ⅱステージで体験する困難のうち，上述の第1～3の要因には就労時の会社への没入が影響していると考えられる。第Ⅲステージでは，第Ⅰ・Ⅱステージでの困難の体験を基に，会社への没入を反面教師とした生活が展開していた。その一つが，生活のすべてを会社に依存しない会社との距離を保った職業観であり，働き方である。再就職ではより気楽な仕事に就き，会社と意識的に距離を保つ人が見られた。ただし，経済的事情や家族背景によっては非正規雇用で就労せざるを得ず，会社との関係自体が不安定となる実情もあり，会社との距離には主体的な一面と受動的な一面があると考えられる。もう一つは，家族や友人など既存の関係を再認識したり，ボランティアや趣味，失業者仲間，新しい職場の人間関係など，会社以外に幅広い社会を持つライフスタイルの獲得である。対象者の多くは失業によって新たに失業者仲間を得ていたが，より多面的な繋がりのバランスの中で自分なりの満足を得る人も見られた。

本研究の意義と今後の課題

本研究は，海外の研究に見られた失業後の反応だけではなく，中高年男性の失業の体験過程を，失業前後の変化も含めて一連の文脈の中で仮説モデルとして提示した。また，モデルを生成する際に，会社および会社との繋がりという視点を持つことで，失業の困難の要因を整理し，失業後の生活の変化を描き出すことができた。

ただし，本モデルは失業の一般的な仮説モデルではない。本研究の調査対象者はNPOの会員が中心であり，多くの対象者が何がしかの形で失業者仲間と繋がっていた。また，少なくとも第Ⅲステージに移行し，調査に協力できる状態にあったと考えられる。しかし，実際にはうまく移行できないケースや，どこかの段階で自殺に至るケースもあるであろう。本研究では紙幅の都合で論じることができなかったが，今後は自殺対策の一環として

も，個人差に注目した分析や，移行要因およびサポートについても検討していく必要がある。また，今回は1990年代後半の失業体験者を対象としたが，経済・雇用情勢は刻々と変化している。本研究が示唆したように，失業体験は時代背景や社会背景の影響を大きく受けるため，今後も時代の変化と共にモデルの改変を重ねていく必要があるであろう。

文　献

Borgen, W.A., & Amundson, N.E. (1987). The dynamics of unemployment. *Journal of Counseling and Development*, **66**, 180-184.

Eisenberg, P., & Lazarsfeld, P.F. (1938). The psychological effect of unemployment. *Psychological Bulletin*, **35**, 358-390.

Ezzy, D.M., (1993). Unemployment and mental health: A critical review. *Social Science & Medicine*, **38**, 41-52.

Fryer, D. & Payne, R.L. (1986). Being unemployed: A review of the literature on the psychological experience of unemployment. In C.L. Cooper, & I. Robertson (Eds.), *International review of industrial and organizational psychology* (pp. 235-278). Chickster: John Wiley & Sons.

間　宏. (1971). *日本的経営*. 東京：日本経済新聞社.

Hepworth, S.J. (1980). Moderatingfactors of the psychological impact of unemployment. *Journal of Occupational Psychology*, **53**, 139-145.

Hill, J. (1978). Psychological impact of unemployment. *New Society*, **43**, 118-120.

廣川　進. (2006). *失業のキャリアカウンセリング――再就職支援の現場から*. 東京：金剛出版.

久田　満・高橋美保. (2003). リストラ失業が失業者および現役従業員の精神健康に及ぼす影響. *日本労働研究雑誌*, 516, 78-86.

Jahoda, M. (1982) *Employment and unemployment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kaufman. H.G. (1982). *Professionals in search of work*. Chickster: John Wiley & Sons.

警察庁生活安全局地域課. (2006). *平成17年度中における自殺の概要資料*.

Kets, de Vries R.F.M., & Balazs, K. (1997). The downside of downsizing. *Human Relations*, **50**(1),11-50.

木下康仁. (2003). *グランデッド・セオリー・アプローチ－の実践【質的研究への誘い】*. 東京：弘文堂.

Little, C.B. (1976). Technical-proffesional unemployment: Middle-class adaptability to personal crisis. *Sociological Quarterly*, **17**, 262-274.

Mckee-Ryan, F.M, Song, A., Wanberg, R.C., & Kinichi, J.A., (2005). Psychological and physical well-being duaring unemployment: A meta-analytic study. *Journal of Applied Psychology*, **90**, 53-76.

内閣府経済社会総合研究所・京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター. (2006). *自殺の経済社会的要因に関する調査研究報告書*. 京都：京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター.

野口悠紀雄. (2002). *1940年体制　さらば戦時経済*. 東京：東洋経済新報社.

OECD. (2007). OECD *Factbook 2007: Economic, environmental and social statistics*. Paris:Organization for Economic.

岡本祐子. (1997). *中年からのアイデンティティ発達の心理学*. 京都：ナカニシヤ出版.

小此木啓吾. (1979). *対象喪失　悲しむということ*. 東京：中央公論新社.

小此木啓吾. (1983). 中年の危機. 飯田 眞（編），*岩波講座精神の科学6　ライフサイクル* (pp.211-254.). 東京：岩波書店.

坂爪洋美. (2000). 会社コミュニティにおけるサポート 非自発的失業者の再就職プロセスにおける課題とその支援――早期退職制度による退職者の事例から. *コミュニティ心理学研究*, **4**, 45-62.

Schlossberg, K.N., & Leibowitz, Z. (1980). Organizational support system as buffers to job loss. *Journal of Vocational Behavior*, **17**, 205-217.

関本昌秀. (1992). 企業帰属意識の変化. *法学研究*, **65**, 287-312.

総務庁統計局. (2006). *労働力調査年報*.

高橋祥友. (2006). *自殺の危険　臨床的評価と危機介入*. 東京：金剛出版.

Warr, P.B., & Payne, R.L. (1983). Social class and reported changes in behavior after job loss. *Journal of Applied Social Psychology*, **13**, 106-122.

付記

1　本研究にご協力いただきました失業経験者の皆様に心より御礼申し上げます。また，ご指導いただきました東京大学大学院下山晴彦先生およびご助言をいただきました東京大学大学院能智正博先生に深謝いたします。

2　本研究は，財団法人三菱財団より平成17年度三菱財団社会福祉助成金の助成を受けて行われました。

Takahashi, Miho (The University of Tokyo). *Difficulties of Unemployed Middle-Aged Men in Their Company and Societal Connections.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 132-143.
This study investigated why middle-aged Japanese men face so many difficulties with unemployment. In-depth individual interviews and a group interview were conducted to examine the experiences of unemployed middle-aged men. The study focused on their connections to companies and society. Based on qualitative analyses, a process model of unemployment was created which consisted of 3 stages: (1) absorption into the company and consequent loss after termination, (2) a succession of alienations from society, and (3) reconnection to society in many areas. These findings suggested four reasons why unemployed middle-aged Japanese men experience difficulties: (1) too much dependence on the company, (2) loss of company life, (3) exclusion and isolation from society, and (4) gradual loss of connection to society occurring in various phases. The study concluded with a discussion of the effects of difficulties due to unemployment on men's later lives.
【Key Words】 Unemployment, Alienation, Middle-aged men, Middle adulthood, Process model

2006. 9. 27 受稿, 2008. 3. 12 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，144-156

原　著

中年期の時間的展望と精神的健康との関連：40歳代，50歳代，60歳代の年代別による検討

日潟　淳子[1)]
（広島大学大学院教育学研究科）

岡本　祐子
（広島大学大学院教育学研究科）

中年期は人生の後半へと向かい，老いや自己の有限性の自覚など負の要因に直面する時期であるとされ，臨床的な問題もこのような状況の変化によって過去から未来への連続した自己の展望が持てないことによるものが多い。本研究では中年期を対象に，どのように自己の過去・現在・未来を展望し，現在の自己を意味づけているのかということに注目し，精神的健康との関連から，中年期の時間的展望の様相を，量的な側面と質的な側面からとらえた。その結果，40歳代では未来志向であり，50歳代に現在志向への転換が見られることが示された。精神的健康との関連では，40歳代では現在の充実感，50歳代では過去の受容と現在の充実感，60歳代では，現在の充実感と，未来への希望が，精神的健康と関連することが示唆された。それらの様相を，半構造化面接による語りから質的に分析した結果，中年期の身体的心理的変化の気づきや受容に伴って，40歳代では過去を土台としてとらえ，50歳代では未来を志向する中で過去の出来事に対する必然感が生じ，それに続く現在として現在の出来事に深くコミットし，60歳代では，作り上げたものとしての自己を受容し，それを表現する場としての未来を志向していることが示された。

【キー・ワード】 時間的展望，精神的健康，中年期，時間的志向性

問題と目的

人間の行動は現在の状況のみに規定されるのではなく，過去や未来を意識し，見通すことで変化する。また，未来に希望を抱いたり，目標を設定することにより現在の行動が動機づけられたり，過去の出来事を意味づけることにより現在の状況に対する意識が変化することもある。このような過去や未来を見通す行為を時間的展望としてLewin（1942/1954，1951/1979）が「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体」と定義づけた。その後，未来展望が重視されるようになったことなどから，時間的展望研究は主に青年期を対象に進められてきた。近年では高齢化社会への移行にともない，人生をどのようにまとめ，現在を充実して過ごすかという視点から高齢者を対象にした時間的展望研究もなされるようになってきた（柏尾，2007）。しかし，人生の折り返し地点としての中年期を対象とした時間的展望の研究はまだ数が少ない。

従来の中年期に関する時間的展望研究は主に，青年期から老年期までの生涯発達的な視点からとらえたものと，中年期を対象に未来展望の内容を中心としてとらえたものの2つに分けられる。生涯発達の視点からは，50歳代ぐらいまでは未来の評価が過去の評価より高く，60歳代でほぼ等しくなり，70歳以上は過去の評価の方が未来よりも高くなること（Bortner & Hultsch, 1972）や，年齢とともに未来志向から過去志向（Cameron, Desai, Bahador, & Dremel, 1977-1978；Hultsch & Bortner, 1974；落合，1981），あるいは現在指向（白井，1991）へと変化することなどが示されており，中年期は時間的志向性の転換期であることが示唆されている。また，過去，現在，未来に対する時間的態度においては青年よりも中年がポジティブであるとされる（白井，1997；谷田，2005）。中年期の時間的展望の内容に関する研究では，将来の目標や心配事が統制しにくい自分の健康や子どもの人生といった領域に関心が向くようになること（五十嵐・氏家，1999；Nurmi, Pulliainen, & Salmela-Aro, 1992）などが示されている。

このような先行研究などから，中年期の時間的展望は過去，現在，未来に対する志向性や，過去，現在，未来に対する精神的な姿勢や身構えである時間的態度（都筑，2007）に転換が生じることや，未来の展望に質的な変化が起こることが明らかとなっている。しかしながら，時間的展望の変化が，中年期のいつごろに起こり，また，どのように過去，現在，未来を展望することにより生じているのかということは明らかにされていない。長尾（1990）は中年期危機状態を40歳代から50歳代にかけて，身体や社会的役割などの外的な変化とともに，自らの体力や諸能力の限界の認識と永遠の自己拡散欲求との心的葛藤が生じ始め，それまでの自分の生き方の後悔や反省の執着や一時的に時間的展望が希薄になる状態

1）現所属：神戸大学大学院人間発達環境学研究科

と定義している。このような状況変化への対応において，人生前半の態度を変容することには困難性がともない，過去への固着により本来の人間の持つべき自由性が疎外されることが中年期におけるうつ病などの精神的病の発症要因となることも示されている（大森，1977；乾・頼藤・村上・辻，1979）。また，堀内（1993）は，身体的心理的変化の気づきにともない，中年期には老いと死への不安・希望の喪失・職業的な限界への懸念といった時間的展望の危機が生じるとしている。さらに，若年や高齢者よりも中年期に身体不調感と将来展望の関連が顕著に見られることも報告されている（三宅，2005）。アイデンティティの視点からは，中年期に生じる身体的心理的な負の変化への気づきにともなって過去への振り返りが始まり，アイデンティティの再体制化が生じるとされる（岡本，1985）。これらのことから，人生の折り返し地点である中年期において，どのように過去をとらえ，未来を見据えて，現在を適応的に過ごしているのかという視点にたって，中年期の時間的展望をとらえることは，中年期危機に直面し，時間的展望が希薄になった状態にある者に対し，有用な知見を得るものであると考える。

中年期の時間的展望と精神的健康の関連に影響を与える要因を考えると，まず，守屋（1994）の時間的自我があげられる。時間的自我とは未来，および現在から過去を意味づける自我である。生きてきた自己の価値を実感し，現在の自己から意味ある未来を展望することで時間軸における連続的な自己が意識され，再び時間的展望が保たれることが示唆される。また，Neugarten（1968，1979）は，誕生からの時間より，生きられる時間として再構成することを中年期の特徴としてあげ，より成熟し，現実をよく把握しているという知覚が中年期になることをもっとも安心させ，自己の過去の経験から学び，自己利用（Self-utilization）と呼ばれる自分の目標を達成させるための道具としての自己の感覚をもつことが心的特徴であると述べている。したがって，自己の経験としての過去や目標としての未来を，現在を過ごす上で資源として活用しているかという視点も中年期の時間的展望をとらえる上で重要となることが示唆される。さらに，五十嵐・氏家・佐藤（2001）は，中年期以降において，過去をどのように統制するかは生きられる時間の適応の問題としても考えなければならないと述べており，中年期の適応的な時間的展望をとらえる上で，過去への意識も重要な視点であることが示唆される。

以上のような視点にもとづき，本研究では転換期であるとされる中年期の時間的展望をとらえ，精神的健康との関連から中年期の適応的な時間的展望をとらえることを目的とする。具体的には，研究1において質問紙調査を実施し，時間的志向性と時間的態度に加えて，前述したように時間を資源として使用する意識（以下，時間資源意識とする）も中年期の特徴であると考えられるため，時間資源意識もとらえ，中年期の時間的展望の特徴を明らかにする。さらに，精神的健康度を指標に中年期の適応的な時間的展望をとらえることを試みる。分析に際しては，中年期は時間的展望の転換期であり，40歳代，50歳代，60歳代では時間的展望の様相が異なることが推測され，それらの違いをとらえるために，40歳代，50歳代，60歳代に分けて中年期の時間的展望をとらえることを試みる。次に，研究2では，半構造化面接を実施し，各年代において過去，現在，未来へのポジティブな態度，あるいはネガティブな態度が，過去，現在，未来に対するどのような意味づけ，あるいはどのようなイメージから生じているのかという具体的な側面をとらえることを試みる。また，先行研究から，中年期の時間的展望の転換が中年期の身体的心理的変化への意識と関連することが示唆されるため，過去，現在，未来への時間的態度が生じたきっかけをたずね，それらの関連から各年代の時間的展望の特徴をとらえる。なお，本研究では過去，現在，未来に対して心が向かう動きを時間的志向性，過去，現在，未来の重要性の順序づけを時間的指向性（白井，1997），過去，現在，未来に対する感情をともなう精神的な姿勢や構えを時間的態度として定義づけ，使用することとする。

研　究　1

目　的

質問紙調査よって，中年期の時間的展望を40歳代，50歳代，60歳代に分けて，時間的志向性，時間的態度，および時間資源意識の側面からとらえ，中年期の各年代における時間的展望の特徴を明らかにする。また，時間的態度と精神的健康との関連から，中年期の各年代における適応的な時間的展望のあり方をとらえることを試みる。

方　法

1）調査対象者　40歳代57名（男性25名，女性32名，平均44.61，$SD=2.95$），50歳代83名（男性22名，女性61名，平均54.34歳，$SD=2.68$），60歳代85名（男性29名，女性56名，平均64.20歳，$SD=2.50$）。全体平均55.60歳，$SD=8.16$（男性平均54.84歳，$SD=9.56$，女性平均年齢55.99歳，$SD=7.34$）。質問紙は以下のように配布し回収した。郵送回収（切手を貼った封筒に質問紙を入れ，知人等に依頼し，主に近畿圏に住む35歳以上の者に配布し，郵送により回収。回収率：64.2％），中国地方で開かれた文系学習講座（後日回収，回収率：62.5％），および文系教育講座（即日回収，回収率：100.0％）の受講生に配布し回収した。このうち40歳以上69歳以下の者を分析の対象とした。年代別の基本属性，および回収状況をTable 1に示す。

Table 1　*調査対象者の基本属性*

年代		40歳代	50歳代	60歳代
人数		n=57	n=83	n=85
婚姻暦	既婚	49	79	84
	未婚	5	1	1
	その他	3	2	0
	未記入	0	1	0
子	有	48	79	73
	無	9	4	12
孫	有	0	17	53
	無	57	66	32
最終学歴	大卒以上	33	46	31
	専門・短大	17	17	12
	高卒	7	20	39
	中卒	0	0	2
	未記入	0	0	1
職歴	有	57	82	79
	無	0	1	6
回収法	郵送回収	16	46	73
	学習講座	22	33	12
	教育講座	19	4	0

2）実施期間　2006年6-9月。

3）質問紙内容および分析手続き　①時間的志向性の測定：サークルテストを使用する。都筑（1993）を参考に，「現在・過去・未来がそれぞれ円で表せると仮定して，あなた自身の過去・現在・未来の関係について，あなたが感じていることをもっとも表すように3つの円を描いてください。描き方は自由です。異なる大きさの円を使っても構いません。描き終わったら，どの円が過去・現在・未来かがわかるように書き入れてください。」と表記し，1辺12cmの正方形の中に記入してもらった。②時間的態度の測定：時間的展望体験尺度（白井，1994，1997）。下位尺度は「過去受容」（4項目），「現在充実」（5項目），「目標指向性」（5項目），「希望」（4項目）で，「とても当てはまる」（5点）から「全く当てはまらない」（1点）とする。逆転項目は補正して得点を与え，各下位尺度の平均値を各得点とする。得点が高いほど肯定的な時間的態度を示す。③時間資源意識の測定：個人の過去や未来の出来事を現在の状況に利用しているかについて問う項目を自作した。「現在の生活で困ったことが起こったとき，過去の自分の体験を振り返ることがある」（以下「過去を想起する」項目とする），「今（現在）努力することは将来に役立つと思う」（以下「今の努力は未来のため」項目とする），「私は，将来の目標をもちたいと思う」（以下「目標をもちたい」項目とする）。「生活する中で悩み事が生じると，今後（未来や将来）のことを考えることによって乗り越えられることがあると思う」（以下「将来のことを考える」項目とする）の4項目で「とても当てはまる」（5点）から「全く当てはまらない」（1点）とする。④精神的健康度の測定：日本版GHQ28精神健康調査票（中川・大坊，1985）。4件法（0-3点）で得点が高いほど精神的健康度は低いことを示す。

Table 2　*サークル・テストの優位性の年代別の割合と χ^2 検定による残差分析の結果*

年齢	40歳代 n=54	50歳代 n=71	60歳代 n=75
未来	29(53.7)**	22(31.0)	9(12.0)**
現在	11(20.4)**	29(40.8)	40(53.3)**
過去	8(14.8)	14(19.7)	20(26.7)
同じ	6(11.1)	6(8.5)	6(8.0)

注．数字は人数，（　）は%を示す。**p<.01

結果と考察[2)]

1）年代別による時間的展望の様相

①サークルテストによる時間的志向性の検討（Table 2）：本研究では時間的志向性に注目し，時間的志向性を示すとされる（Cottle, 1967；高橋，1985；田中，1974；都筑，1984）優位性（一番大きく描く円）のみを分析する。一番大きく描かれている円により「未来」，「現在」，「過去」，すべて同じ大きさの円であるものを「同じ」として分類し，それらを分析の対象とした。なお，調査対象者の主観的イメージを重視するため，顕著に大きさが異ならないものを「同じ」として判定した。未記入の者や判定不能者を除いた調査対象者は40歳代54名，50歳代71名，60歳代75名であった。「過去」，「現在」，「未来」，「同じ」の4グループにおいて年代別の χ^2 検定を行った結果，人数の偏りは有意であった（$\chi^2(6)=29.3$, p<.001）（Table 2）。残差の検討を行ったところ，40歳代では未来を最も大きく描く割合が高く（残差＝4.4），60歳代の割合は低かった（残差＝-4.3）。現在を最も大きく描く割合は60歳代が高く（残差＝3.0），40歳代は低かった（残差＝-3.4）。40歳代は未来への志向が高く，50歳代では現在，未来，過去へと分散し，60歳代では現在への志向が高まることが示された。

②時間的態度，時間資源意識の分散分析の結果（Table 3）：年代別と性差による2要因の分散分析を行った。時間的展望体験尺度では下位尺度には有意な差は見られず，過去，現在，未来に対する時間的態度には年代，および性差による違いは見られなかった。時間資源意識においては「将来のことを考える」以外で有意な差が見られた。多重比較（Tukey法）を行ったところ，「過去を想起する」では50歳代が60歳代よりも有意に高く，有意な差は見られなかったものの40歳代の「過去を想起す

2）統計ソフトはSPSS12.0Jを使用した。

Table 3　*年代別，性別の時間的展望体験尺度，時間資源意識の平均値(SD)と分散分析の結果*

			40歳代 (男＝25 女＝32)	50歳代 (男＝22 女＝61)	60歳代 (男＝29 女＝56)	*F* 値 年代別	性別	交互作用
時間的展望体験尺度	過去受容	男	3.72(0.65)	3.71(0.55)	3.93(0.78)	1.62	0.52	0.73
		女	3.83(0.74)	3.55(0.77)	3.77(0.69)			
	現在充実	男	3.64(0.68)	3.69(0.58)	3.95(0.70)	2.12	0.04	0.70
		女	3.79(0.72)	3.60(0.81)	3.82(0.67)			
	目標指向性	男	3.43(0.70)	3.62(0.70)	3.16(0.84)	2.26	0.09	0.86
		女	3.44(0.67)	3.38(0.88)	3.28(0.89)			
	希望	男	3.42(0.66)	3.33(0.68)	3.34(0.57)	1.65	0.78	0.70
		女	3.46(0.63)	3.26(0.74)	3.12(0.64)			
時間資源意識	過去を想起する	男	3.92(1.19)	3.68(0.95)	3.48(1.18)	2.93†	0.001	0.49
		女	3.77(0.79)	3.89(0.97)	3.41(1.14)	a)50歳代＞60歳代		
	今の努力は未来のため	男	4.68(0.56)	4.18(1.10)	3.93(0.96)	4.73**	0.92	3.91*
		女	4.34(0.70)	4.48(0.62)	4.29(0.71)	b)男：40歳代＞60歳代 b)60歳代：女＞男		
	目標をもちたい	男	4.52(0.65)	4.14(0.83)	3.93(0.96)	6.24**	0.22	1.13
		女	4.25(0.67)	4.31(0.81)	3.86(0.90)	a)40歳代・50歳代＞60歳代		
	将来のことを考える	男	3.80(1.04)	3.85(0.64)	3.76(0.95)	0.28	0.24	0.15
		女	3.72(0.96)	3.82(0.96)	3.67(0.99)			

注．多重比較はTukey法を用い，有意水準は.05とした。$^{**}p<.01$　$^{*}p<.05$　$^{\dagger}p<.10$
*F*値の下段は多重比較の a)年代別，b)交互作用の結果を示す。

る」の得点も高かった。40歳代，50歳代では過去の経験を現在の出来事を乗り越えるための資源として使っていることが推測された。「今の努力は未来のため」では交互作用が見られ，男性で40歳代が60歳代よりも有意に高く，60歳代では男性よりも女性が有意に高かった。今に対する意識が性別により異なることが示唆された。「目標をもちたい」では40歳代，50歳代が60歳代よりも有意に高かった。目標を希求し，未来のために努力する意識が40歳代で高く，他の年代よりも未来に目を向けていることが示唆され，50歳代でも目標の希求の意識が生じていることが示された。それに対して60歳代は目標を志向する意識は低く，「過去を想起する」においても他の年代よりも低かった。60歳代では時間を資源として活用する意識が低いことが示された。60歳代では物理的な未来の時間が狭まるため，未来を資源として使う意識が弱まることが推測されるが，60歳代では過去の蓄積が高まるにもかかわらず過去を資源として使う意識が40歳代，50歳代よりも低かった。

2）時間的態度と精神的健康の関連（Table 4）

時間的展望体験尺度を独立変数，GHQ28を従属変数として，年代別で重回帰分析（強制投入法）を行った。40歳代では「過去受容」，50歳代では「過去受容」と「現在充実」がGHQ28に負の影響を与え，60歳代では，「現在充実」と未来展望の「希望」には負の有意な影響，「目標指向性」は正の有意な影響が見られた。岡本（1985）は身体的な衰えや社会的役割の変化への気づきから，自己の半生への問い直し，将来へ向けての生活，価値観などの修正が行われ，アイデンティティが再体制化されるとしている。本研究において40歳代では過去を肯定的にとらえることが心理的な安定を生み，50歳ではそれに加えて現在に充実感を感じていること，さらに60歳代では未来へ希望を抱くことが精神的健康に関連したことは，アイデンティティの再体制化を支持するものであるとも考えられる。中年期では年齢とともに過去から未来への時間的な広がりのある肯定的な時間的態度が精神的健康に影響を与えることが示唆された。

Table 4　*年代別の時間的展望体験尺度とGHQ28の重回帰分析の結果*

	40歳代	50歳代	60歳代
	β	*β*	*β*
過去受容	-.31*	-.32**	-.21†
現在充実	-.22	-.27*	-.35**
目標指向性	-.17	.16	.28*
希望	-.02	-.19	-.34**
R^2	.29**	.30***	.36***

注．*β*：標準回帰係数
$^{***}p<.001$　$^{**}p<.01$　$^{*}p<.05$　$^{\dagger}p<.10$

3）まとめ

中年期の時間的展望を年代別にとらえたところ，時間的態度において年代別の違いは見られなかったが，時間的志向性や，時間的態度と精神的健康との関連には年代

別の違いが見られた。40歳代では未来への志向が強く，その一方で，時間的態度としては過去の受容が精神的健康に影響を与えていることが示唆された。50歳代では目標は希求するが未来への志向性は40歳代よりも弱まっていることが推測された。また，精神的健康との関連からは過去の受容に加えて，現在の充実感が精神的健康に影響を与えていることが示された。60歳代では現在への志向の強まりが見られ，時間的態度では過去の受容よりも，現在の充実感と未来への希望が精神的健康に影響を与えた。過去のことを想起する傾向も低く，過去への態度が40歳代，50歳代とは異なることが示唆された。

研究1の結果，時間的志向性や，時間的態度と精神的健康との関連には年代による違いがあることが明らかとなった。しかし，その違いがなぜ生じるのか，さらには，時間的態度としての過去受容が，どのような意味での受容なのか，あるいは指向している目標がどのようなものであるのかという具体的な内容をとらえることは転換期である中年期の適応的な時間的展望をとらえる上で重要な視点であるため，研究2では半構造化面接により，それらの年代別の違い，および具体的な内容をとらえる。

研究 2

目的

半構造化面接を実施し，過去をどのようなものとして意味づけているのか，あるいは，現在，未来に対してどのようなイメージを抱いているのかということを，時間的展望の変化の起因とされる中年期の身体的心理的変化への意識とともにとらえ，時間的志向性や，時間的態度と精神的健康との関連における年代による違いの要因，および各年代による適応的な時間的展望の特徴をとらえることを試みる。

方法

1）面接調査対象者　研究1の質問紙上で面接調査への承諾を得た40歳代10名（男性2名），50歳代6名（男性1名），60歳代10名（男性4名）。各対象者番号は40歳代，50歳代，60歳代に分け，GHQ28の得点が低い順番，すなわち精神的健康度が高い順番に40歳代は40-A，40-B，・・・，50歳代は50-A，50-B，・・・，60歳代は60-A，60-B，・・・とした。GHQ28の得点においてカットオフポイントを超えたのは40-Jのみであった。

2）実施期間　2006年7-10月。

3）調査手続き　個別の半構造化面接を1回行った。所要時間は約40-210分であった。面接調査の実施に際し某大学大学院の倫理審査委員会の承認を得た。調査対象者に対しては面接実施前に，本研究の目的，面接中の記録の承諾やプライバシー保護等に関する説明を行い，面接承諾書に署名を得た。面接場所は対象者の自宅，公民館の1室，大学の研究室等であった。

4）半構造化面接質問項目　略歴と①未来の目標：「将来の目標はなにか。きっかけ。」，②現在の生きがい，③人生の前半と後半のとらえ方：「変化はあるか。」，④時間的指向性（白井，1997）：「過去・現在・未来の中で今，大切だと思う時期はいつか。なぜそう思うのか。」を質問し面接調査対象者の自発的な語りに任せた。

5）分析手続き　面接調査の分析は以下の手順で行った。①面接の録音記録（録音を拒否された3名（40-A，40-G，60-G）は筆記記録）を逐語記録として書き起こした。②過去，現在，未来の時間的態度をとらえるために，略歴と面接の質問項目に対する語りから，時制ごとにそれぞれ過去，現在，未来に対する語りを意味を成すまとまりで抜き出し（1-3文），それを発言数とした。その後，各時制に対する発言を同じ意図を示すと思われる内容でグループ分けし，その意図を的確に表す言葉をラベリングして，それをカテゴリ名とした。③中年期の身体的心理的な特徴の発言をとらえるために，「中年期の身体的心理的変化の意識」について岡本（1985），田中（1997）などをもとに，Table 8左欄のカテゴリ名のもとになる分析マニュアルを作成した。マニュアルにもとづいて，逐語記録から「中年期の身体的心理的変化の意識」に関する語りを意味を成すまとまりで抜き出し（1-3文），それを発言数として，内容によるグループ分けを行った。その内容を示す用語をラベリングして，それをカテゴリ名とした。④各グループ内容とカテゴリ名について，心理学を専攻する大学院生3名に評定を依頼した。筆者との評定者間一致率は，「過去への時間的態度」：内容94.0％，カテゴリ名90.0％，「現在への時間的態度」：内容95.9％，カテゴリ名91.7％，「未来への時間的態度」：95.4％，カテゴリ名88.9％，「中年期の身体的心理的変化の特質」：内容88.6％，カテゴリ名85.7％で，全体では内容92.8％，カテゴリ名88.9％であった。意見が異なるものについては評定者間で協議し，合意のもとに決定した。

結果と考察

GHQ28の得点から，本研究の調査対象者は40-Jを除いて精神的健康度が高かったことから，40-Jを除く調査対象者の語りを適応的な時間的展望として考え，それらの特徴をとらえた。なお，発言者の分布状況から判断し，発言内容が各世代の50％以上の者に見られたもの，あるいは，他の年代には見られないものを各年代の特徴としてとらえた。面接対象者の語りを〈　〉で示す。

1）過去・現在・未来への時間的態度の各年代の特徴

各時制の時間的態度を内容によりグルーピングした結果，「過去の時間的態度」は10カテゴリ，「現在の時間的態度」は12カテゴリ，「未来の時間的態度」は9カテ

ゴリに分類された。カテゴリ名と内容，発言例，年代別の発言数，発言者，発言者の割合をTable 5，Table 6，Table 7に示す。

①過去の時間的態度（Table 5）：40歳代では，〈過去があるから今がある〉〈過去は土台〉のような「基礎・土台・原点」とする意識が見られた。過去の体験を現在から意味づけてとらえ直す発言（〈40-B：良いことも悪いことも含めて大事にしたい。〉）や，〈40-A：だめでも次がある。そうやって今まで生きてきた。〉などの「経験からの学び」を過去から得ている発言も見られた。50歳代の特徴としては，「基礎・土台・原点」とする発言に加えて，「必然的なもの（必然感）」，「自分を形成したもの」としてとらえる態度が見られた。その一方で，過去を「評価」の対象として距離を置いてとらえる発言も見られた。また，40歳代と同じく，「経験からの学び」や「とらえ直し」の発言もあった。60歳代では，〈60-B：過去は思い出，あまり過去にはとらわれない。〉〈60-C：会社を出れば過去の人，一線を退いたらすっきりと。〉など「区切り」をつけたという発言，「経験からの学び」や「とらえ直し」も見られた。また，〈よくがんばった〉など評価する語りがすべての人に見られた。

過去の時間的態度では，すべての年代に「経験からの学び」や「とらえ直し」という態度が見られた。五十嵐（1996）は老年期において中年期のさまざまなライフイベントへの対応とその意味づけが人生吟味にかかわるとしている。中年期でも自分の経験を実感したり，とらえ直すことで過去を現在に意味づけていることが示された。また，「基礎・土台・原点」の意識は各年代に見られたが，50歳代では必然的なこと，自己を形成したものする意識が見られた。さらに50歳代から60歳代にかけては過去を評価する態度が高まった。守屋（1998）は人生目標以前の人生では未来から現在を意味づけるものであるが，人生目標以後の人生では現在から過去を意味づけ直し始めると述べており，「土台」，「必然的なもの」，「評価の対象」など，過去の意味づけの年代による違いが特徴として見出された。

②現在の時間的態度（Table 6）：40歳代では，〈40-F：自分探しをしている状態〉〈40-C：なんとなくやりたいことがわかってきた。〉など，今の状態として自己理解や方向性を求める発言や気づきの発言があった。また「未来に向けての今」（〈40-H：今にベストを尽くしたら未来もいいような気がする。〉）の語りも見られた。50歳代では，「自己理解・方向性の気づき」や「自己理解・方向性の確信」が語られた。また，過去の出来事に対する必然感から，現在生じている出来事を必然的なこととしてとらえる流れが見られた。40歳代と同様に「経験の蓄積感」の語りと，〈50-D：今ちゃんとして夢を膨らます。〉などの「未来に向けての今」の発言もあった。60歳代の特徴としては，〈60-I：自分の置かれた立場，私のすべきことをしっかり果す。〉という「自己理解・方向性の確信」，〈60-G：継続は金なりと最近思う。〉などの「経験の蓄積感」，〈60-G：無事にここまで生きてきた。〉などの「到達感」が語られた。

中年期はアイデンティティの成熟の第一の山のピークであるとともに，第二の山への移行期であり，主体的に自己の生き方を考えられることが，心の成熟には不可欠の条件である（岡本，1991）。現在の時間的態度には中年期を迎えた自己に対して，再度，主体的に自己の理解や方向性を求め，取り組んでいる語りが得られた。また，現在の行動が未来につながるという意識がすべての年代に見られた。中年は青年よりも現在を重視するとともに未来のために今努力するという満足遅延の意識も高いとされる（白井，1991）が，現在の充実が未来の充実を生むという意識が強いことが示された。50歳代では経験が蓄積していることを実感し，60歳代ではそれに加えて，到達感の語りが見られ，そのような態度が現在と過去を連続あるものにしていることが示唆された。

③未来の時間的態度（Table 7）：40歳代では，目標を希求する発言（〈40-B：自分の目標として資格を設定したい。〉）や未来に対しての期待（〈40-C：年齢とともに世界は広がっているイメージ。〉）も多く語られた。しかし，その一方で，未来に対する不安（経済的，健康，孤独感など）を語る割合も高かった。50歳代にも〈50-D：ライフワークを深く広く知識を持って進める。〉といった目標や期待を示す発言があった。「自分磨き」という態度は50歳代にのみ見られた。さらに〈50-E：自分のやりたいことをする。〉という「自分のために使用」するという語りも見られた。60歳代では，〈60-C：できる範囲で目標を作ってやっていく。〉という態度や，〈60-B：いらないものを処分する〉といった「死」を意識した発言，〈60-I：60歳ぐらいから自分のためにも生きようという思いが出てきた。〉などの「自分のために使用」する時間としての発言があった。

未来の時間的態度としては，40歳代では目標を設定し，チャレンジしていくとする姿勢が強いが，その一方で，不安も生じていた。40歳代では他の年代よりも未来に対する時間的な広がりがあり，このような2面性をもつ未来への態度が見られたと考えられる。それに対して50歳代，60歳代ではそろそろ未来は自分のために使ってもよい時間であり50歳代では自己の内面を成長させる時間，60歳代では，今まで作り上げてきた自己を表現する場として意識している態度が見られた。さらに，60歳代では死への準備といった意識も語られた。小野・五十嵐（1988）は成人期は過去はおおむね客観視できる記念碑，未来も死という目標が見えてくるだけに，そこに至るおよその道程を見渡すことが可能になるとしてい

Table 5 *過去の時間的態度のカテゴリ名，内容，発言例，年代別の発言数，発言者，発言者の割合*

カテゴリ名	内容	発言例	発言数			発言者，発言者の割合		
			40歳代	50歳代	60歳代	40歳代	50歳代	60歳代
基礎・土台・原点	過去は自分の土台となっているという意識，過去があるから今の自分があるという思い。	〈40-B：過去があっての今だし。〉 〈60-C：ベースは過去でしょうね。今ある私は過去による〉	7	4	6	40-A, B, C, F, G, H, I **70.0%**	50-B, D, E **50.0%**	60-B, C, I, J 40.0%
必然感	過去に起こったことは必然的に起こったことであった，運命だったという思い。	〈40-E：今にして思えば必然的な時期だったのかもしれない〉 〈50-B：全部必然性があると思う。全部ばらばらにやってきたことがね〉	2	5	4	40-E 10.0%	50-B, D, E **50.0%**	60-B, I 20.0%
自分を形成したもの	過去の出来事によって自分が作られたという思い。	〈50-B：一つのものが合わさって自分というものを，自分が自分の人生というものになった〉 〈50-D：過去の体験が良い意味でも悪い意味でも自分を作っていると思う〉	1	3	0	40- J 10.0%	50-B, D, E **50.0%**	0 0.0%
評価	自分はよくやってきた，一生懸命過ごしたという思い。	〈50-C：ただ生活のために働いてきたけどそれでよかったと思う〉 〈60-J：今まで，もうがんばったんだから〉	3	10	18	40-D, F, G 30.0%	50-A, B, C, E, F **83.3%**	60-A, B, C, D, E, F, G, H, I, J **100.0%**
区切り	過去は過ぎたことなのでしょうがない，とらわれない，過去のこととして区切りをつけたという意識。	〈40-E：あのときどうだったからとは思わない。それはそれでしょうがない〉 〈60-H：定年と共に自分のたな卸しは終わった〉	4	3	9	40-A, E, H, I 40.0%	50-A, F 33.3%	60-A, B, C, E, H **50.0%**
経験からの学び	経験したことから感じたことや学んだこととしての考えがあることの実感	〈40-A：だめでも次がある進学がダメでも他があったし，そうやって今まで生きて来た感じ〉 〈60-C：努力して報われてきたから，逃げて得たものはない〉	8	4	7	40-A, B, D, F, G **50.0%**	50-B, D, F **50.0%**	60-A, C, D, H, J **50.0%**
とらえ直し	起こった当時はネガティブな思いを感じたが，今から考えるとよかったと思える体験。	〈40-C：のんびりしてきたことも，いまやらなきゃっていう意識につながっているのかもしれない〉 〈50-B：母が倒れたことが踏ん切りとなり，よいきっかけをくれたんだと思う〉	12	10	7	40-A, C, D, E, G, H **60.0%**	50-A, B, D, E **66.7%**	60-A, G, H, I, J **50.0%**
後悔・反省	過去の出来事を後悔，あるいは反省し続けている。	〈40-I：いい加減に子育てをしてきた。反省しきりです〉 〈60-J：今振り返ると，私には特技が何も無い。人に分けてあげるものがないっていうのが一つ残念です〉	6	3	5	40-A, D, I 30.0%	50-F 16.7%	60-E, G, J 30.0%
とらわれ	過去の体験，出来事に対して今もそれを引きずった思いがある。	〈40-J：母の気持ちがわかったからといって母との関係も，それは自分の救いにはならない〉 〈60-G：大学に失敗したので過去は振り向かない〉	8	1	8	40-A, J 30.0%	50-E 16.7%	60-F, G, I, J 40.0%
今によって変わるもの	今を変えることによって過去は変わっていくという意識。	〈40-E：今を変えていけば昔も変わるのかな〉	2	0	0	40-E, H **20.0%**	0 0.0%	0 0.0%
			53	43	64			
		合計			160			

注．**太字**は特徴として取り上げたものを示す。

Table 6　*現在の時間的態度のカテゴリ名，内容，発言例，年代別の発言数・発言者，発言者の割合*

カテゴリ名	内容	発言例	発言数 40歳代	発言数 50歳代	発言数 60歳代	発言者，発言者の割合 40歳代	発言者，発言者の割合 50歳代	発言者，発言者の割合 60歳代
自己理解・方向性の希求	自分を知ることを求め，自分が何をすべきかを模索している。	〈40-B：あくまでも自分を知ると言うことが動機で勉強してみようかなって思い始めました〉 〈60-J：でも自分のしたいことが何っていわれたら何かな〉	9	0	5	40-C, F, I, J **40.0%**	0 0.0%	60-F, J 20.0%
自己理解・方向性の気づき	自分のことがわかり始め，漠然と自分のしたいことがわかり始める。	〈40-C：自分の好きなことがわかってきた〉 〈50-F：なんか生きがいのある仕事がずっとできたらいいなって，なんかやっぱり精神的ななんとなくそっちの方へ興味がある〉	20	4	5	40-B, C, E, H, I 50.0%	50-B, C, E, F **66.7%**	60-B, E, J 30.0%
自己理解・方向性の確信	自分のことがわかり，自分の進む道がはっきりとわかっている。	〈40-E：当面はこのままでいくんですけど，生き方はこれでまっすぐきまっているんですけどね〉 〈60-H：人生最後のステージを少年野球にかけようと思った〉	8	7	5	40-A, D, E, G 40.0%	50-A, B, D, E, F **83.3%**	60-B, C, G, H, I **50.0%**
充実感	現在が充実していると感じている。	〈40-B：例えば山を登って降りるとしたら，今山頂のあたりかなって思う〉 〈50-E：今はすごく充実している〉	2	3	1	40-B, G 20.0%	50-E, F 33.3%	60-G 10.0%
経験の蓄積感	今までの経験が今にいかされている，役立っているという意識。	〈40-E：人と関わることによって改善されているというのがわかってきた。人に関わることで勉強できているのかって思った〉 〈50-C：ちょっとしたところだけど，今までの仕事が役立っていると思う〉	2	7	7	40-C, E 20.0%	50-A, B, C, E **66.7%**	60-A, B, C, F, G, I **60.0%**
到達感	ここまで生きてた，もう戻りたくないという思い。	〈40-A：せっかくここまできたのに〉 〈60-B：今まで一生懸命やってきて，ここまできたのに，後に戻って同じ苦労をするのはいやだわ〉	2	0	6	40-A, D 20.0%	0 0.0%	60-A, B, F, G, I **50.0%**
必然感	今起こっていることは自分にとって必要なことであるという意識。	〈50-E：今起こっていることは私に足りないものを私に勉強しなさいと教えてくれているんだろうなって思う〉	0	4	0	0 0.0%	50-B, E **33.3%**	0 0.0%
未来に向けての今	現在を一生懸命過ごせば未来が開けるという意識。未来のために現在をしっかり生きる。	〈40-C：現在が充実していれば未来も〉 〈50-B：逃げないでそのとき出来る範囲で無理はしないで，出来る範囲でやれば，道は開けてくる〉	5	7	4	40-A, B, C, E, H **50.0%**	50-A, B, D, E, F **83.3%**	60-B, D, E, I 40.0%
過去作り	現在を一生懸命過ごすことによってより良い過去が作られる。現在は過去に含まれる。	〈40-D：今この瞬間を大切に自分なりに一生懸命悔いなく生きるということが結果的に過去である〉 〈60-H：過去も含めた全体が今〉	1	0	2	40-D 10.0%	0 0.0%	60-C, H 20.0%
空虚感・不安	充実感が得られておらず，もの足りなさや，不安を感じている。	〈40-F：やる気がでず，朝起きてから目が覚めない感じで活力がわかない〉 〈60-F：充実しているとはいえない。やっぱり今まで外へ出ていたのが，出ないということについてはもんもんとするものがある〉	5	0	11	40-F, J 20.0%	0 0.0%	60-E, F, J 30.0%
閉塞感	過去や未来へのポジティブな志向がなく，今を生きるしかないという閉塞的な状況。	〈40-F：未来に夢をもちたいけどないので，今を一生懸命過ごすしかない〉 〈50-C：毎日，目の前のことをクリアーしているだけ〉	3	1	0	40-F, I, J 30.0%	50-C 16.7%	0 0.0%
自分のために使用	自分のために時間を使っている。	〈60-A：遊ぶことを一番優先しているんです，今は〉	0	0	3	0 0.0%	0 0.0%	60-A, C **20.0%**
			57	33	49			
		合計			139			

注．太字は特徴として取り上げたものを示す。

Table 7 *未来の時間的態度のカテゴリ名，内容，発言例，年代別の発言数・発言者，発言者の割合*

カテゴリ名	内容	発言例	発言数			発言者，発言者の割合		
			40歳代	50歳代	60歳代	40歳代	50歳代	60歳代
チャレンジ	未来に目標を持ち，それに向けての努力をしていったり，チャレンジして未来に向かって進もうという意識がある。	〈40-A：楽だけでもいけないし，新しいことにもチャレンジしたい〉 〈50-F：自分の好きなこと，関わりたいこと，行きたいとことかを我慢しないで，なるべくチャレンジしていきたい〉	13	9	6	40-A, B, C, D, E, F, G, H	50-A, C, D, E, F	60-B, C, D, E, G, H
						70.0%	**83.3%**	**60.0%**
期待・楽観視	未来へのポジティブなイメージがある。	〈40-C：未来はわからないから，よくなっているだろうって感じ〉 〈50-A：年はとっても心は成熟していくという気持ちはあるんですがね〉	10	4	6	40-A, B, C, D, H, I,	50-A, C, E, F	60-D, H, I
						60.0%	**66.7%**	30.0%
自分磨き	未来に向けて，自分を内面を磨いていきたいという思い。	〈50-D：自分を磨こうと思い出した〉 〈50-E：自分がさびないように磨いていこうかなって〉	0	2	0	0	50-D, E	0
						0.0%	**33.3%**	0.0%
現状維持	未来に対して出来る範囲での，現状維持を望んでいる。	〈40-I：ぼちぼち生きていきたい。欲は無く〉 〈60-E：健康であれば〉	5	2	3	40-A, I	50-C	60-A, E
						20.0%	16.7%	20.0%
割り切り	未来のことはわからないので，心配してもしょうがないという意識。	〈40-A：起きていないことを心配してもしょうがない〉 〈60-G：取り越し苦労はしなくない〉	2	2	3	40-A, G	50-B, C	60-A, G, I
						20.0%	33.3%	30.0%
自分のために使用	自分の好きなことなどをして，自分のために使いたいという思い。	〈40-G：子育てを終えてから楽しい時間を過ごしているときには母は何もいわないのだろうなって思っているので，そのときは思いっきりやれるかなって〉 〈60-B：今度は自分が楽しむという段階に入ってもいいかなって〉	3	3	9	40-B, G, I	50-C, E, F	60-B, C, F, G, I, J
						30.0%	**50.0%**	**60.0%**
死の準備・死に向けて	死に向けての準備をする時間としての意識。	〈60-B：今は将来のために，いらないものを処分する，残されたものがどんなに迷惑をするか〉 〈60-D：どういう風に人生を終えるか〉	0	1	4	0	50-F	60-A, B, D
						0.0%	16.7%	30.0%
不安	未来に対して感じる不安。	〈40-D：子どもが成人できるまで自分が元気でいられるかなというのが不安〉 〈60-F：いつまでいきるかわからないものね。最終的に得た資金をいつまで使えるかというのがちょっと不安だな〉	8	0	2	40-D, F, G, H, J	0	60-F, G
						50.0%	0.0%	20.0%
消化・あきらめ	未来に希望が無く，消化としてとらえている。	〈40-J：未来には負のイメージしかないですね〉 〈60-F：残りの人生は消化だけだから〉	3	0	4	40-F, J	0	60-F, J
						20.0%	0.0%	20.0%
			44	23	37			
		合計			104			

注．太字は特徴として取り上げたものを示す。

るが，本研究では50歳代，60歳代にこのような時間意識の高まりが見られた。

2）年代別の中年期の身体的心理的変化への意識と過去，現在，未来の時間的態度の関連

「中年期の身体的心理的変化の意識」に関するカテゴリ名と内容，発言例，年代別の発言数・発言者，発言者の割合をTable 8に示す。

①40歳代：未来の目標を語る中で，そのきっかけとして，中年期の身体的心理的変化を語る流れが見られた。例えば40-Aは目標として以前は仕事の拡大を考えていたが，今は現状維持でいいとした。その変容の要因として，体力の衰えとともに，健康などもっと大事なものを大切にしたいという気持ちが芽生え，自分の容量をしらないといけない，自分の気持ちが楽であることがいいと思うようになったことをあげている。また，40-Dや40-Gは目標として次世代の子どもたちを育てると語り，その要因に40-Dは体力の限界を感じ，指導者としての役割に新たな価値を見出したことをあげ，40-Gは自分の子ども以外への視野の広がりをあげている。40歳前後で身体的心理的な変化を感じ始め，これらの気づきが未来に対する態度の質的な変化を生じさせていることが示唆された。その中で，〈40-C：形を残すことより，何かに対して自分の全霊を傾けて充実していることがいい。〉など目標達成よりもその過程に価値を見出す発言もあった。また，〈40-B：内面的な意味では今の方がいい。〉や〈40-I：人との関わりの中で自分が作られていくのを意識するようになった。〉といった「自己の確立感や成熟感」の語りも見られた。その一方で，一番精神的健康度の低い40-Jは〈自分の好きなことがわからない〉〈高校生や大学生のときに自分自身を作れなかった〉と話し，過去を土台として意識できないことを語っている。若本・無藤（2006）は加齢にともない老いが進行するにもかかわらず，自己評価などのwell-beingの水準は上昇・維持する現象をとらえ，老いの肯定面である“余裕と成熟”がそれらに関係することを示している。本研究においても，過去を「基礎・土台・原点」と意識し，現在の自己の成熟感を感じることで心理的な安定を得ていることが示唆された。

②50歳代：目標に対するきっかけとして，「衰えの気づき」や「葛藤」の発言は見られず，自分を知ることの大切さを述べる「自分の容量の自覚」の発言や，〈50-D：自分の感情を大切に，素直な生き方をしてきたい。〉という「あるがままの受容」の発言が語られた。例えば，50-Aは，自分を大切にしないといけない，素直になれるようになったという意識の変化をのべ，さらに未来に向けて心の成長をしていきたいと思うようになったと語った。また，50歳代では〈50-E：今勉強していることが，孫を育てることに役立てばそれでいい。〉など「限界の意識による柔軟な思考」や〈50-A：人との出会いが大切だと思う。〉〈50-B：自分の存在で周りが成長するというのもその人の成長である。〉などの「新たな価値の気づき」が社会や人との関わりによって生じていた。そのような気づきから，社会との関わりの中で未来に対して「自分磨き」や〈50-A：生涯学習を続け成長したい〉，〈50-D：ライフワークを深めたい〉という内面の充実を目指す語りが見られた。また，過去に対しても自己を形成したものとしての過去の受容が見られ，50歳代には自己形成としての時間的態度が強いことが示された。

③60歳代：未来への時間的態度をたずねる中で，50歳代では見られなかった「衰えの気づき」が再び語られた（〈60-J：今からこうやりたいとか思っても体力的に無理かな〉）。それをきっかけとして，未来に対して「死の準備」をしなければという意識が生じている者もいた（60-B，60-D）。他の年代と同様に自己の容量を知らないといけないという発言や，〈60-G：自分の好きなものに囲まれて過ごせればよいと思う。〉など「あるがままの受容」の発言が見られたが，40歳代ではその意識から新たな未来を志向していたが，60歳代ではその状態の維持，あるいは生活面での快適さなどが未来の目標として語られた。60歳代では身体的な衰えを自覚することにより，未来の長さが狭まって意識されることが推測され，それにより，過去の振り返り，過去に対して区切りをつける意識や，現在の自己の状態を把握した上で，そろそろ自分のために時間を使ってもよいという未来へのポジティブな態度が生じていることが示唆された。

総合考察

中年期の各年代における時間的展望の特徴，および適応的な時間的展望をとらえた。40歳代では未来への志向性が高いが，未来の目標は，身体的な衰えや自己の有限性に気づくことにより，従来の目標から自分が納得できる形の目標へと変化が生じていた。また，現在には自己理解を模索し，希求する姿が見られた。時間的態度としては過去の受容が精神的健康に影響を与え，精神的健康度が高い者は，過去のネガティブな体験をとらえ直し，過去を土台として受容していることが示唆された。

50歳代では，未来への志向性が40歳代よりも弱まり，過去や現在に対する志向の分散が見られ，50歳代では過去の受容と現在の充実が精神的健康に影響を与えた。中年期の適応的な指向性は未来につながった“ポジティブな現在指向”であるとされている（白井，1991）。本研究では，未来を志向する中で，50歳代に身体的心理的変化から自分を知ることへの意識が高まり，過去の体験は現在の自己を形成する上で必然であり，自己形成過程として現在の出来事にも必然性を感じて深くコミットし，それが未来の充実につながると語る者が見られた。このよ

Table 8 *中年期の身体的心理的特質のカテゴリ名，内容，発言例，年代別の発言数・発言者，発言者の割合*

	カテゴリ名	内容	発言例	発言数 40歳代	発言数 50歳代	発言数 60歳代	発言者，発言者の割合 40歳代	発言者，発言者の割合 50歳代	発言者，発言者の割合 60歳代
身体的心理的変化の気づき	衰えの気づき	体力の衰え，容姿の衰え，体調の変化の気づき。	〈40-A：体力的にも衰えるし，特に容姿は目にみえるから実感する〉 〈60-B：60歳になって風邪をひいて，今までは1日とかで治っていたのが治らなくって。〉	9	0	6	40-A, B, D, F, H 50.0%	0 0.0%	60-A, B, C, D, F, J 50.0%
	自己の有限性の自覚	限り有る命であることを意識する。余生の自覚。	〈40-C：これまで過ごしてきた分しかないんだっていう感覚はあって，後なにができるかって思ったりはするんですけど〉 〈50-C：私は死なないと思っていたんだけど，私も死ぬんだなって最近思うようになった〉	5	4	4	40-B, C,F, H, I 50.0%	50-C, F 33.3%	60-A, D, I 30.0%
	葛藤(限界の意識)	何かをやりたいと思う意識と，限界を感じることの葛藤。	〈40-C：できるところまでやってみたいというのはあるかもしれないけど，でもこの年でみたいな感じもある〉 〈60-J：目標がないのは寂しいけど，今更努力してという目標は立てられない〉	4	0	1	40-C, E,F, I 40.0%	0 0.0%	60-J 10.0%
身体的心理的変化への対応	衰えの受容	体力の衰え，容姿の衰え，体調の変化を受け入れなければという意識。	〈40-B：眼鏡もあるんだから，合わなくなったら，合わせてくださいっていけばいいかな〉 〈50-A：体力的にも限界が感じられることがあるから，老年期の準備をしていかないと〉	8	1	0	40-A, B, D, F 40.0%	50-A 16.7%	0 0.0%
	自分の容量の自覚	自分のことや能力を自覚し，自分にも限界があることを受け入れる。	〈40-D：中学生や高校生と張り合おうという気はないですね〉 〈50-D：自分は何かに一生懸命になってしまうタイプだから，自分でコントロールしながら，未来に向けて進んでいかないと〉	8	8	8	40-A, B, D, I 40.0%	50-A, B, D 50.0%	60-A, B, C, H 40.0%
	あるがままの受容	自然体の，等身大の自分でいいと思う。	〈40-A：自分の気持ちが楽であることがいいかなと思うようになった〉 〈60-G：がんばらなくてもいいと思うようになった〉	3	5	6	40-A, I 20.0%	50-A, D, F 50.0%	60-B, C, G, J 40.0%
	限界の意識による柔軟な思考	限界を意識する中で，自分に対して柔軟な思考ができるようになる。	〈40-B：途中でこれはなんか無理だなと思いながら，だめなときはだめでとりあえず続けてみようかなと思っている〉 〈60-C：体力と気力で調整ながら楽しめればいい〉	9	4	2	40-B, C, D, E, F, H, J 70.0%	50-A, D, E 50.0%	60-B, C 20.0%
	経験による新たな価値の気づき	経験によって今まで価値をおいていたものからそれとは違うものに価値を感じる。今までとは違うものの見方が生じる。	〈40-E：今の社会は答えが一つと考えているけど，答えは一つではないと思うんです〉 〈60-A：生きがいを決めたってそれがどうなるかわからないし，それに縛られたくない。来年桜が見れたらそれでいい〉	29	23	26	40-A, B, C, D, E, G, H, I, J 90.0%	50-A, B, C, D, E, F 100.0%	60-A, B, C, D, E, F, G, H, I, J 100.0%
	自己の確立，成熟感	以前よりも内面的な成熟感や自己が確立されていることを実感する。	〈40-I：人とのかかわりの中で自分が作られていくというのを意識するようになった〉 〈50-E：やっと親から離れて自立できたかな〉	6	2	0	40-A, B, H, I 40.0%	50-B, E 33.3%	0 0.0%
	世代性	先代から受け継ぎ，次の世代に伝えたいという意識。	〈40-D：自分がやってきたことを受け継いでやりたいし，自分の姿を見て，子どもたちががんばろうと思ってくれたら〉 〈50-D：子どもに良い体験をさせてあげたい〉	8	2	6	40-A, C, D, G 40.0%	50-D 16.7%	60-C, D, H, J 40.0%
	過去の問題への取り組み	人生を振り返り，やり残していたことをやりとげたいという意識。	〈50-F：人との関わり方を自分なりに見直していこうかな〉 〈60-C：ゴルフでもやり残していたものがあった。やはり人生の目標だったんですかね〉	0	2	4	0 0.0%	50-F 16.7%	60-C, I, J 30.0%
	夫婦関係のとらえ直し	今までの夫婦のあり方をもう一度見直す。	〈40-B：まず，夫婦でコミュニケーションがとれて，まず二人の単位が基本だろうと私が最近，ここ数年強く感じるようになった〉 〈40-E：一番大事なのは夫婦間だと思った〉	4	1	2	40-A, B, D, E 40.0%	50-B 16.7%	60-B, F 20.0%
				93	52	65			
			合計			210			

うなプロセスが中年期に“ポジティブな現在指向”を生じさせる要因となることも考えられる。

60歳代では再び身体的な老化への気づきが始まり，それとともに未来の時間が狭まって意識され，現在への志向が強まることが示された。その中で過去を評価し，納得した形で区切りをつける姿が見られた。国谷（1996）は，中年期はある意味ではさまざまな「さようなら」を言う時期であり，その言い方が上手にできるかどうかによって中年期の過ごし方が変わってくるとしている。同様に，矢野（2000）は人生において忘却をすることは，健康な人間の徳であるとしている。60歳代では過去に区切りをつけ，現在に過去の人生に対する経験の蓄積感や，到達感を抱きながら，自分らしさを表現する場としてのポジティブな未来を意識する時間的態度が心理的な安定と関連することが示唆された。

本研究において，中年期における各年代の時間的志向性の変化，および年代による過去，現在，未来の時間的態度の特徴がとらえられ，中年期の年代別による適応的な時間的展望の様相が示された。しかし，対象者の性別や抽出に偏りが見られること，年代的なコホートの要因を考慮していない点などは検討の余地があり，今後，調査対象者の幅を広げ，状況要因などを考慮してとらえることが必要である。また，中年期の身体的心理的特質との関連から個人内プロセスに焦点をあて，中年期の時間的展望の変化の過程をとらえることも，今後の課題である。

文　献

Bortner, R., & Hultsch, D. (1972). Personal time perspective in adulthood. *Developmental Psychology*, **7**, 98-103.

Cameron, P., Desai, K.G., Bahador, D., & Dremel, G. (1977-1978). Temporality across the life-span. *International Journal of Aging and Human Development*, **8**, 229-259.

Cottle, T.J. (1967). The circles test: an investigation of perception of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **31**, 58-71.

堀内和美．(1993)．中年期女性が報告する自我同一性の変化：専業主婦，看護婦，小・中学校教師の比較．*教育心理学研究*，**41**，11-21.

Hultsch, D., & Bortner, R. (1974). Personal time perspective in adulthood: A time-sequential study. *Developmental Psychology*, **10**, 835-837.

五十嵐敦．(1996)．高齢者の人生展望とその評価　*日本教育心理学会第38回大会発表論文集*，52.

五十嵐敦・氏家達夫．(1999)．中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究：中年期の目標・希望からみた時間的展望の様相についての分析．*生涯学習教育研究センター年報第4巻*，福島大学，福島，27-37.

五十嵐敦・氏家達夫・佐藤華代．(2001)．中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究：人生の絶頂期と底についての意識．*生涯学習教育研究センター年報第6巻*，福島大学，福島，37-44.

乾　正・頼藤和寛・村上光道・辻　悟．(1979)．青春期と初老期のうつ病に関する考察．*精神医学*，**21**，953-961.

柏尾眞津子．(2007)．老年期．都筑　学・白井利明（編），*時間的展望研究ガイドブック*(pp.60-68)．京都：ナカニシヤ出版.

国谷誠朗．(1996)．中年期男性の危機と発達．*教育と医学*，**44**，908-914.

Lewin, K. (1954). *時間的展望とモラール*（末永俊郎，訳）．東京：東京創元社．(Lewin, K. (1942). *Time perspective and moral*. New York: Houghton Mifflin.)

Lewin, K. (1979). *社会科学における場の理論*（猪俣佐登留，訳）．東京：誠信書房．(Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. New York: Harper & Brothers.)

三宅俊治．(2005)．不安に及ぼす身体不調感と将来展望の影響：若年・中年・高齢者の比較．*心身医学*，**45**，923-932.

守屋國光．(1994)．*老年期の自我発達心理学的研究*．東京：風間書房.

守屋國光．(1998)．*未来分析：健全に苦悩するために*．京都：ナカニシヤ出版.

長尾　博．(1990)．アルコール依存症者と健常者との中年期の危機状態の比較．*精神医学*，**32**，1325-1331.

中川泰彬・大坊郁夫．(1985)．*日本版GHQ精神健康調査票《手引き》*．東京：日本文化科学社.

Neugarten, B.L. (1968). The awareness of middle age. In B.L. Neugarten (Ed.), *Middle age and aging* (pp.93-98). Chicago: University of Chicago Press.

Neugarten, B.L. (1979). Time, age, and the life cycle. *The American Journal of Psychiatry*, **136**, 887-894.

Nurmi, J.E., Pulliainen, H., & Salmela-Aro, K. (1992). Age differences in adult's control beliefs related to life goals and concerns. *Psychology and Aging*, **7**, 194-196.

落合幸子．(1981)．人生の転換期における心理（Ⅱ）．*筑波大学心理学研究第3巻*，筑波大学，茨城，39-50.

岡本祐子．(1985)．中年期の自我同一性に関する研究．*教育心理学研究*，**33**，295-306.

岡本祐子．(1991)．生涯発達からみた中年期の意味：アイデンティティの危機と成熟．*教育と医学*，**39**，

841-847.

大森健一. (1977). 初老期, 老年期のうつ病：特にその発病状況と役割意識をめぐって. 宮本忠雄(編), *躁うつ病の精神病理2* (pp.153-188). 東京：弘文堂.

小野直広・五十嵐敦. (1988). 青年期の時間的展望：TP-SCTによる考察. *福島大学教育学部論集（教育・心理部門）第44号*, 福島大学, 福島, 1-13.

白井利明. (1991). 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連. *心理学研究*, **62**, 260-263.

白井利明. (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. *心理学研究*, **65**, 54-60.

白井利明. (1997). *時間的展望の生涯発達心理学*. 東京：勁草書房.

高橋君江. (1985). 時間的展望の測定技法に関する研究：Circles Testの妥当性と信頼性について. *共栄学園短期大学研究紀要第1号*, 共栄学園短期大学, 埼玉, 165-176.

田中信市. (1997). 中年期. 馬場禮子・永井　撤（共編), *ライフサイクルの臨床心理学* (pp.172-188). 東京：培風館.

田中良子. (1974). サークルテスト：過去・現在・未来に対する認知とパーソナリティ. *日本心理学会第38回大会発表論文集*, 518-519.

谷田恵美子. (2005). 高齢者・若者・中年のもつ人生観：共分散構造分析による比較. *看護・保健科学研究*, **5**, 1-11.

都筑　学. (1984). 青年の時間的展望の研究. *大垣女子短期大学研究紀要第19号*, 大垣短期大学, 岐阜, 57-65.

都筑　学. (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望. *教育心理学研究*, **41**, 40-48.

都筑　学. (2007). 時間的展望の理論と課題. 都筑学・白井利明(編), *時間的展望研究ガイドブック* (pp.11-28). 京都：ナカニシヤ出版.

若本純子・無藤　隆. (2006). 中高年期のwell-beingと危機：老いと自己評価の関連から. *心理学研究*, **77**, 227-234.

矢野智司. (2000). 生成する自己はどのように物語るのか：自伝の教育人間学序説. やまだようこ(編), *人生を物語る* (pp.251-278). 京都：ミネルヴァ書房.

Higata, Atsuko (Graduate School of Education, Hiroshima University) & Okamoto, Yuko (Graduate School of Education, Hiroshima University). *The Relationship between Time Perspective and Mental Health in Middle Age.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 144-156.

The results of a questionnaire survey indicated that the time perspective of people in their 40s was oriented toward the future, whereas people in their 50s were oriented to the present. The relationship between time perspective and mental health indicated the need to maintain a broad time orientation, in order to maintain positive mental health during middle age, The interview data suggested that feelings regarding the past, present, and future differed between people in their 40s, 50s and 60s. These group differences were related to time orientations and to the relations between time perspective and mental health. Finally, the results of this study suggested differences in the quality of acceptance of the past, satisfaction with the present, and goal directedness and hope in each age group.

【Key Words】 Time perspective, Mental health, Middle age, Time orientation, Middle adulthood

2007. 3. 29 受稿, 2008. 3. 13 受理

発達心理学研究
2008, 第19巻, 第2号, 157-170

原　著

ビデオ映像の表象性理解は幼児にとってなぜ困難か？：写真理解との比較による検討

木村　美奈子
(愛知県立大学非常勤講師)

本研究は5, 6歳児を対象に，映像と現実との相互作用の可能性の認識を指標として，ビデオ映像と写真の表象性理解の発達プロセスを探ることを目的としている。そのためまず，先行研究を踏まえて，実在視から表象性理解へと至る3段階の発達モデルを提起し，そのモデルの妥当性を実験的に検討した。実験では，映像の人物が息（風）を吹いたらモニターの前に置いた紙人形が倒れるか否か，また，子どもが指示対象についての質問と誤解している可能性を考慮して，モニター画面に注意を向けさせ，そこから「風」が出てくるのか否かの二種類の質問を行った。なお，現実と映像の相互作用を仲介する物質としては，可視的でない「風」の他に，実体感のある「ボール」を使用し，その違いの効果についても調べた。その結果，子どもは，写真ではしばしば質問を指示対象について尋ねられていると誤解して誤答する場合があるが，ビデオでは映像について尋ねられていると理解していても，実在視的な反応が現れることが明らかになった。しかし発話を分析すると，この子どもたちは，映像を実物と間違えているわけではなく，表象であると十分に理解できているわけでもない移行段階に位置づくことが明らかになり，表象性理解の3段階モデルの妥当性が示唆された。なお，仲介物質の違いについては結果に違いは見られず，現象の違いにかかわらず，ビデオ映像の表象性理解は幼児期後期まで困難であることが示された。

【キー・ワード】 ビデオ映像理解，写真，幼児期，表象性理解，認知発達

問　題

これまでの写真やテレビ映像などの図像的表象の理解に関する研究では，子どもは初めに図像的表象を実物のように扱い，その後にシンボルとして理解するようになることがわかっている。前者の例としては，9ヶ月の乳児が写真に描かれた対象をつかもうとすることが報告されている（DeLoache, Pierroutsakos, Uttal, Rosengren, & Gottlieb, 1998; Pierroutsakos & DeLoache, 2003）。しかし，後者のシンボルであるという理解の達成時期については，必ずしも一致した結果は得られていない。例えばDeLoache, Pierroutsakos, & Uttal (2003) は，生後19ヶ月になると，写真への直接的行為は減り，代わって指差し，名づけなどの参照的行為が増えることから，この時期に写真をシンボルとして理解するようになると述べている。このような発達的傾向は，ビデオ映像でも同様であるとする報告がある（Pierroutsakos & Troseth, 2003）。一方で，Flavell, Flavell, Green, & Korfmacher (1990) の実験では上記と矛盾する結果が得られている。彼らは，テレビや写真をひっくり返すと，ビデオ映像や写真に写ったコップの中の牛乳はどうなるかと子どもに尋ねたところ，4歳児は「そのまま」と正答できるのに，3歳児は「こぼれる」といった映像を実在視する反応をすることがわかった。Flavell et al. (1990) はこの事実を次のように解釈している。3歳児は行動的な水準で写真やビデオ映像と実在物との区別がつかないわけではない。しかし，言語的な質問に答える段になると，概念的な水準で両者の区別がつかないため指示対象について問われた質問と受け取り，その結果，実在視的反応となってしまう。ところが4歳になると，概念的水準で両者の区別が可能になるため，映像をシンボルとして扱う反応が現れる。

しかし，上記のFlavell et al. (1990) の解釈では説明できない結果が，木村・加藤（2006）の研究によって示された。彼らは，映像の人物がフーッと息を吹いたらビデオ映像の前に置かれた現実の紙人形が倒れるか否かを4～6歳児に尋ねたところ，6歳でも「倒れる」と答える子どもが多数いることを見出した。さらに木村・加藤（2006）は，この子どもたちに実際に映像の紙人形に向かって息を吹きかけるよう求めたところ，ほとんどの子どもが躊躇なく息を吹きかけ，その結果，紙人形が「倒れない」とわかると困惑する反応を示した。Flavell et al. (1990) の言うように，もし，「倒れる」と答えた子どもたちが単に映像が指す指示対象について答えていたとするなら，実際に映像に向かって息を吹きかけたりはしなかっただろう。この子どもたちは本当に映像の紙人形が「倒れる」と期待して，息を吹きかけているようであった。したがって映像に対する実在視的反応はFlavell et al. (1990) が示した年齢よりさらに遅くまで生じ，その事実を彼らの解釈では説明できないことがこの結果か

ら示唆された。なお，木村・加藤(2006)の実験は映像への働きかけ，映像からの働きかけという映像の志向性[1)]に注目しているが，その志向性の強弱が与える影響については検討課題として残されている。さらに，彼らの結果は，映像世界と現実世界を媒介する現象として目に見えない息（風）を取り上げた場合に生じたものであり，より実体感のある媒介物を用いた場合でも同様の結果が生ずるか否かについても検討が必要である。

上記の議論から明らかなように，実在とは区別されてシンボルが理解されていくプロセスについて，先行研究の一見矛盾するさまざまな結果を首尾一貫して説明できるような発達モデルが求められている。そこで本研究ではまず以下に詳しく示すような図像的表象理解の発達モデルを提案し，続いてその妥当性について示唆を得るための実験を行う。

まず本稿では，図像的表象とはそれが指し示す対象との類似性が高い表象を指し，［シンボル，シンボル媒体，指示対象］の三つの要素から構成されるとする。ここでの［シンボル］とは図像的パタン，［シンボル媒体］とは図像的パタンを作り出す物質的基体（material entity），［指示対象］とは［シンボル］が指し示している対象のことである。その関係性をみると，［シンボル］は［指示対象］の視覚的特徴のある様相を映像装置や画材などの［シンボル媒体］によって再現していると考えることができる。つまり，［シンボル］は［シンボル媒体］と［指示対象］とが重なった部分として図示することができる（Figure 1，表象性理解段階）。この図は，Gibson（1979/1985）のいう図像的表象の持つ二重性という特徴（絵や写真はその表面上の性質――例えば絵なら紙――とは別に，何か別のもの――紙に描かれた絵の内容――を表す

1）志向性とは，映像の対象が，別の映像の対象もしくは映像を見ている観察者自身に向かって働きかけてくると感じられる性質のことで，動画は動きを持つために，特に観察者は志向性を感じやすいと木村・加藤(2006)は述べている。

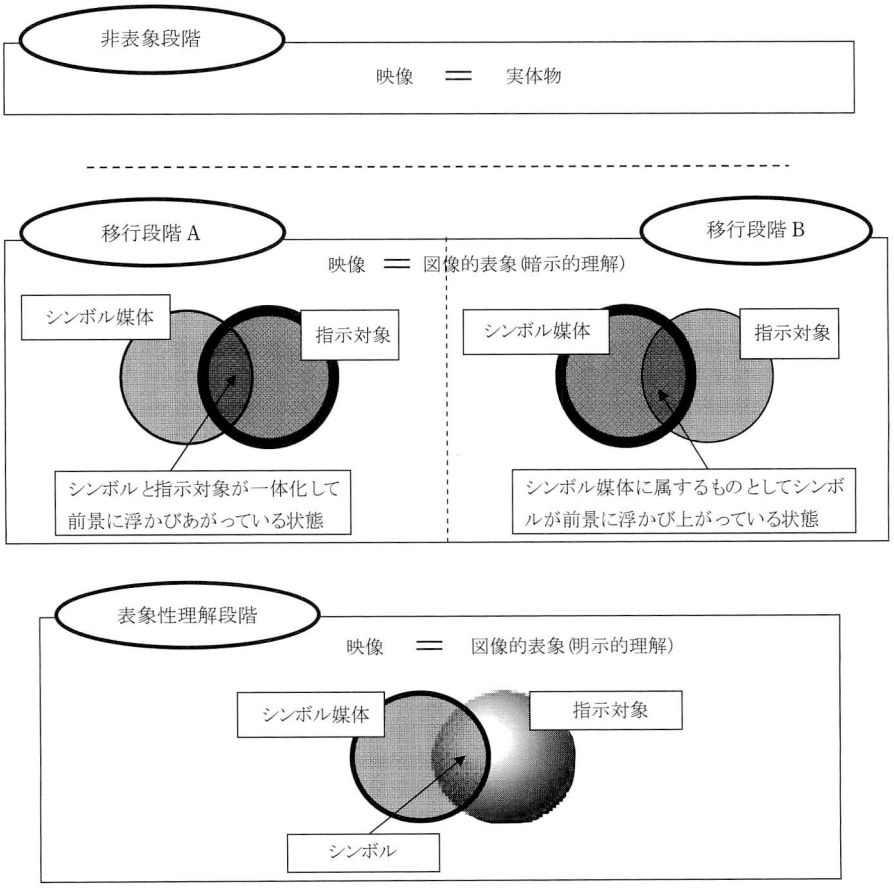


Figure 1　*映像理解の発達モデル*

機能を持っている）をよく表現している。当然ではあるが，［シンボル］は［シンボル媒体］に属し，［シンボル媒体］なしでは存在しえない。したがって，［シンボル］自体が持つ属性は［シンボル媒体］により規定されることになる。また，これら三要素が識別されないとき，図像的表象はそれとして認識されないといえる（例：等身大のポスターを実在の人と見間違えた場合）。

次に，これら三要素の関係性理解の変化からなる三段階の発達モデルを提案する（Figure 1）。まず，表象性理解とはどのようなことを指すのか。図像的表象を見ているとき，普通，私たちは［シンボル］を通して［指示対象］を見ている（Figure 1，表象性理解段階）。これをLiben（1999）は「透明な理解（“transparency” interpretation）」と呼んだ。［シンボル媒体とシンボル］は限りなく「透明」になり，［指示対象］の心的表象のみが心に浮かんでいる。例えば，りんごの写真を見てその味について考えるとき，私たちは［シンボル媒体］自体の味（赤インクの味）について考えているのではない。その際，［シンボル媒体とシンボル］自体は完全に「透明」になり，［シンボル］が指す，ここにはない［指示対象のりんご］の味について考えている。［シンボル媒体とシンボル］が「透明化」してこそ，図像的表象はその本来の役割を果たしているのである。しかし，いつも［シンボル媒体とシンボル］に目を向けないわけではない。例えば写真を見て，最近のプリンターの色の再現力に驚いたりすることもある。大人はこの二つの見方を自由に選択することができる。この二重の見方は，まず映像を実物とは別のものとして認識し，なおかつ［シンボル］と［指示対象］は写像的関係にあること，また，［シンボル］は［シンボル媒体］によって実現しているという依存的関係にあること，の明示的な理解を前提にして可能となる。図像的表象の三つの要素の関係性を正しく認識し，二重の理解を自在に混乱することなく示せることが表象性理解段階の特徴である。

では，このような理解に至るまでに，どのような過程があるのか。先述の9ヶ月児の例をみると，写真が“実体物”として扱われており，図像的表象の三要素が認識されていないと考えられる。これを最も初期の段階と考え，「非表象段階」と呼ぶ（Figure 1，非表象段階）。Werner & Kaplan（1963/1974）が示した，［シンボル］と［指示対象］を同質として扱う段階である。この段階を脱却して表象性理解段階に至る時期については既に述べたように矛盾する研究結果が存在するが，そうすると，これらをどのように説明したらよいのだろうか。

上述したように19ヶ月になれば映像に対する直接的な行為は消失することから，この時期からは子どもは非表象段階を脱し，実在物と映像の対象とを区別するようになり，図像的表象としての理解への第一歩を踏み出すと考えられる。しかし，区別できるようになったからといって，映像の表象性を理解しているわけでないことは，Flavell et al.（1990）や木村・加藤（2006）の結果から明らかである。図像的表象に対して実在物とは異なる反応を示したり，またときに実在視的反応を示すこの時期の子どもたちは映像をどのように理解しているのだろうか。この子どもたちは表象性理解段階に至っておらず，その移行段階にあると考えられる[2)]。すなわち，［シンボル］は［指示対象］に限りなく近いリアリティを持つが，実在物と間違えているわけではない段階である（暗示的理解）。これを図示するとFigure 1の移行段階のようになる。この段階では映像を図像的表象として捉えることが（三要素が分化しているという意味で）可能だが，三要素のそれぞれが何であるのか，またその関係性がどのようなものなのかという明示的な理解がないと推測される。そのため，テレビや映画を集中して見ているときのような［シンボル］に注目する状況では，［シンボル媒体］は背景に沈み，本来は［シンボル媒体］に属するはずの［シンボル］が，［指示対象］と一体化して，同一のものとして意識の前景に浮かび上がる（移行段階A）。このような一体化が起こりやすい理由は，映像の場合，両者の類似性が高いためであると考えられる。特にビデオ映像は動画であり，指示対象の動きも再現しているので，［指示対象］と同様の志向性を［シンボル］にも感じてしまう。木村・加藤（2006）の実験で誤答する子どもは，移行段階Aの状態であると考えられる。彼らの課題では［シンボル］である映像の対象そのものに働きかけたり，働きかけられたりする場合を問題とし，［シンボル］に対する注目を促していると考えられる。すると子どもは［シンボル］と［指示対象］を分離して考えることができず，その結果，子どもはシンボルに対して［指示対象］に向けるのと同じ行動をしてしまうのである。

一方，［シンボル媒体］に注目する状況では，［シンボル］は［シンボル媒体］の一部として認識されることもある（移行段階B）。このような場合，［シンボル］を成立させている［シンボル媒体］の表現特性（写真なら紙，テレビなら画面）が意識の前景に浮かびあがるので，結果として［指示対象］が背景に沈み，もはや［指示対象］そのものに対するような実在視的反応は起こらない。しかしだからといって，［シンボル］と［シンボル媒体］の関係性や［シンボル媒体］に固有な性質が子どもに正しく理解されているわけではない。上述のFlavell et al.（1990）の実験結果は移行段階Bの反応として解釈できる。なぜなら，彼らの課題では直接［シンボル媒体］

2）以下の展開は愛知県立大学加藤義信先生との議論が参考になった。

である写真やテレビ自体に働きかけた場合を尋ねており，［シンボル媒体］に注目しやすいからである。加えて，動きのない対象（コップの牛乳）の映像を刺激としているので，観察者は映像に［指示対象］と同様の志向性を感じにくく，それによっていっそう［指示対象］を離れて［シンボル媒体］に注目することになる。その結果，低い年齢でも，［シンボル］に対する実在視的反応は見られなくなる。移行段階にある子どもが，映像を見てAかBのどちらの状態になるかは［シンボル媒体］に注意を向けられるか否かに依存すると考えられる。

さて，ここまで写真とビデオ映像をひと括りにして論を進めてきた。実際，これまでの写真とビデオ映像を扱った研究では，両者の違いに焦点を当てることはなかった。しかし，表象性理解には［シンボル］と［シンボル媒体］の依存的関係の理解が重要だとすれば，写真とビデオ映像の媒体による質的な違いは注目に値するはずである。ビデオ映像は写真と比較して，非常に複雑な媒体である。写真は，その生成までのメカニズムや媒体が持つ属性について尋ねられたとき，即座に答えられるが（カメラで撮影され，紙とインクで表現されているなど），ビデオ映像についてはすぐに答えるのは困難である。それでも大人は，ビデオ映像は写真と同様，カメラ等によって撮影された対象の単なるイメージ（光のパタン）に過ぎないことを知っている。だが，幼い子どもがそのような理解に至るのは容易ではないだろう。先行研究では写真とビデオ映像の理解は同時期に達成されると考えられてきたが，［シンボル］が［シンボル媒体］に属するという理解に達するためには媒体の基本的な知識が必要であるとすれば，両者の理解に年齢的な差が見出されることが考えられる。

以上の理論的考察を踏まえて，本研究では木村・加藤（2006）が用いた課題を利用し，以下の四点を調べる。目的1：志向性によって［シンボル］と［指示対象］の一体化が強化されるとすると，ビデオ映像の動きによる志向性の強弱を操作することで，移行段階Aの状態になるか否かが異なってくる可能性がある。そこで，映像から子どもへの働きかけのある志向性強条件と，ない志向性弱条件を設定する。映像が観察者に話しかけてくるように感じられる志向性強条件では，働きかけのない志向性弱条件より，移行段階Aの状態である実在視的反応が増加すると予想される。目的2：木村・加藤（2006）の実験では「風」という目に見えない物理的現象を介する映像世界と現実世界の相互作用をみていた。したがって，実験の結果はこの特定の現象に特殊であり一般化できない可能性も残されている。しかし，映像の表象性理解の一般的モデルとして提起した本稿のモデルによれば，移行段階にある子どもが［シンボル］に注意を向けた場合には，移行段階Aのタイプの実在視的反応が現象の性質によらず現れることが期待される。よって，木村・加藤（2006）で確かめられた子どもの実在視的反応が，「目に見えない」風ばかりでなく，目に見える実体的な対象，具体的にはボールを媒介として用いた現象でも同じく得られるか否かを調べる。目的3：本稿のモデルから，表象性理解段階に至るには，［シンボル］と［シンボル媒体］の依存関係の理解が必要であり，そのためには［シンボル媒体］の理解が重要であることは先にも述べた。もし，このモデルが妥当であれば，媒体に関する知識獲得の困難度が異なる［シンボル媒体］を刺激に用いれば，表象性理解段階に至る時期に差が出てくることが考えられる。先行研究ではビデオ映像と写真の表象性理解は同時期に達成されると考えられてきたが，媒体に関する理解が困難なビデオ映像の方が写真の理解より遅れて達成されると推測される。よって，ビデオ映像，写真に対して同一の質問を行い，理解達成時期を比較する。目的4：本稿のモデルでは，実在と同一視する段階から表象性を理解する段階までの間に，［シンボル］に注目するか，［シンボル媒体］に注目するかによって実在視的反応が変わる中間的なゆらぎの段階を仮定している。もしこのような段階が存在するとすれば，映像と指示対象とを区別できているように見える子どもであっても，［シンボル］に注目する質問を行えば，実在視的反応を示す子どもが出現するであろう。しかしこのような子どもの中には，Flavell et al.（1990）の主張のとおり表象性理解段階に達しているのに，質問を［指示対象］に対する質問と誤解したため，あたかも映像を実在視しているかのような反応になってしまった子どもが含まれている可能性がある。こうした子どもの場合，質問が［指示対象］でなく［シンボル］に向けられていると分かれば，実在視的反応は消失するはずである。そして，いったん誤解が解ければ，再度［シンボル］に注目する質問を行っても，誤答することはないだろう。以上から，Flavell et al.（1990）の課題を達成できる年齢の5, 6歳児を対象に，写真とビデオ映像の両者でまずシンボル注目質問を行い，［シンボル］を実在視するかのような反応が出現するか否かを調べる。そのうえで次に，表象性理解段階に達していながら質問を誤解したため誤答になった子どもを峻別するために，誤解脱却質問を行う。前者のシンボル注目質問とは，［シンボル］に強く注目させた上で，［指示対象］の持つ志向性を想起させる質問である（以下，S質問と呼ぶ）。具体的には，映像の人物が息をフーっと吹いたら，映像（テレビモニタ，写真）の前に置かれた紙人形はどうなるか（紙人形課題），また，映像の人物がボールを投げたら映像の前に置かれたカゴの中に入るか否か（ボール課題）を子どもに尋ねる。後者の誤解脱却質問とは，そこには存在しない［指示対象］についての質問と誤解しないように，［シンボル媒体］

に注目させ，［シンボル］が［シンボル媒体］と一体であることを強調した質問である（以下，C質問と呼ぶ）。具体的には，実際にモニタ画面や写真の表面に触れ，相互作用の媒介となる「風」や「ボール」がその表面から出てくるか否かを尋ねる。その後，再度，前と同じシンボル注目質問を行い，実在視的反応がそれでもなお出現するか否かを調べる。もし，［シンボル］は［シンボル媒体］に属しているという理解があって誤解が解ければ，正しい解答に変わるはずである。このように繰り返し質問を行ってもなお，［シンボル］に対する実在視的反応が生ずるとすれば，その子どもは表象性理解段階に達しておらず，その前の移行段階にあると考えられる。

方　　法

実験参加児　名古屋市内の幼稚園児84名。内訳は，年中児42人（男児21人，女児21人，平均年齢5歳5ヶ月，年齢範囲4歳11ヶ月～5歳11ヶ月），年長児42人（男児24人，女児18人，平均年齢6歳5ヶ月，年齢範囲5歳11ヶ月～6歳11ヶ月）である。この二つの年齢群をそれぞれ二つに分け，志向性強条件（年中児：男児11人，女児11人，平均年齢5歳5ヶ月，年長児：男児11人，女児9人，平均年齢6歳5ヶ月），志向性弱条件（年中児：男児10人，女児10人，平均年齢5歳5ヶ月，年長児：男児13人，女児9人，平均年齢6歳4ヶ月）に当てた。

実験材料・機器　8cm×4cmのハム太郎の紙人形，直径10cmのビニールのボール，ボールを入れるカゴを使用した。回答選択シートとして，人形課題用2枚（紙人形が倒れている写真と立っている写真を一枚のシートに横に並べて掲載。もう一枚のシートは写真の並び順を逆にしたもの。参加児にはいずれかのシートを試行毎にランダムに呈示），ボール課題用2枚（ボールがカゴに入っている写真とカゴだけの写真を一枚のシートに横に並べて掲載。もう一枚のシートは写真の並び順を逆にしたもの）を用いた。映像刺激の提示には，DVDプレイヤー，薄型液晶テレビ14インチ型を使用した。実験場面の記録のためにビデオカメラ2台を参加児の正面と横に設置した。映像刺激としては，ビデオ映像4種，すなわち志向性強条件紙人形課題用，志向性強条件ボール課題用，志向性弱条件紙人形課題用，志向性弱条件ボール課題用，および写真2種，紙人形課題用（実験補助者の上半身），ボール課題用（ボールを手に持った実験補助者の上半身）を使用した。写真はA3サイズである。

実験計画　実験は導入課題と本課題から構成された。導入課題では，参加児に現実の二場面を呈示し，それぞれの場面で生ずる物理的な事象の理解ができていることを確認した。すなわち，第一の場面では，実物の紙人形に実験者が息を吹きかけるとどうなるか尋ね，実際に紙人形が息を吹くことで倒れる場面を参加児に見せた。第二の場面では，実験者がボールをすぐ前に置いたカゴに向かって投げるとどうなるかを尋ね，実際にボールを投げてカゴに入れる場面を参加児に見せた。また，両場面において参加児にも実験者と同様のことを行わせ，紙人形が容易に倒れることや，ボールが容易にカゴに入ることを確認させた。本課題では，ビデオ映像，写真ともに，刺激として，木村・加藤（2006）の研究で特に理解が困難であった「人」の映像を呈示し，S（シンボル注目）質問，C（誤解脱却）質問（シンボル媒体に注目させる質問），再度S（シンボル注目）質問の順で行った。ただし，ビデオ映像については参加児を二群に分け，志向性強条件と志向性弱条件に割り当てた。

手続き　参加児は，モニタテレビを置いた机の前に実験者と並んで座った。参加児全員が導入課題に適切に反応できることを確認後，本課題に入った。本課題ではビデオ映像と写真を呈示し，それぞれ紙人形課題，ボール課題を行った。紙人形課題，ボール課題の試行順序はカウンターバランスした[3]。初めに，ビデオ映像の二課題，写真の二課題の計四試行で，S質問（以下，S質問1と呼ぶ）を行った。質問への回答は，回答選択シートを提示し子どもに指差させた。その後，S質問1のときと同じ順で課題毎にどうしてそう思うか等，理由質問を行い，続いてC質問，C質問の反応に対する理由質問を行った。そして最後にもう一度S質問（以下，S質問2と呼ぶ），それに対する理由質問を行った。すなわち，一人の子どもが，映像2種類（ビデオ映像・写真）×課題2種類（紙人形・ボール）×質問3種類（S質問1・C質問・S質問2）の計12試行行った。フィードバックによる学習が成立しないよう，すべての課題は正誤のフィードバックなしで実施した。各試行の手続き，提示映像，質問の詳細はTable 1に示した。なお，子どもの行動はすべて二台のビデオカメラで録画した。

結果と考察

1. 正答率からみた三つの質問における反応分析

まず，S（シンボル注目）質問1，C（誤解脱却）質問，S（シンボル注目）質問2における反応の正誤に焦点を当て分析した。S質問では人形は「倒れない」，映像のボールは「入らない」を正答とし，C質問では画面から風は「出てこない」，ボールは「出てこない」を正答とした。

本研究では，年中児，年長児を対象に実験を行ったの

3）本研究では課題の順序をビデオ映像課題と写真課題の順に固定して行ったため，写真課題の結果に順序効果がみられた可能性を指摘することもできる。しかし，①フィードバックを行っていないこと，②S質問1の中でビデオ映像と写真の間に困難度に差がなかったこと，の二つの理由から，この可能性は小さいと思われる。

Table 1　*実験手続き，映像内容および質問内容の詳細*

	ビデオ映像				写真	
	紙人形課題		ボール課題		紙人形課題	ボール課題
実験手順	実験者はモニターの前に紙人形を置き，子どもに以下の映像を呈示した。映像が終わる直前に，実験者は映像を消した。その後質問を行い，回答選択シートを呈示し，子どもに指させた。すべての質問毎に同様の手順を行った。		実験者はモニターの前にカゴを置き，子どもに以下の映像を呈示した。映像が終わる直前に，実験者は映像を消した。その後質問を行い，回答選択シートを呈示し，子どもに指させた。すべての質問毎に同様の手順を行った。		実験者は写真を机の上に立て，その前に紙人形を置いた。その後質問を行い，回答選択シートを呈示し，子どもに指させた。すべての質問毎に同様の手順を行った。	実験者は写真を机の上に立て，その前にカゴを置いた。その後質問を行い，回答選択シートを呈示し，子どもに指させた。すべての質問毎に同様の手順を行った。
提示する映像	志向性強条件	志向性弱条件	志向性強条件	志向性弱条件	ビデオ・紙人形課題で用いた実験補助者の上半身映像の一部分を抜き出しA3サイズに印画したもの。	ビデオ・ボール課題で用いた実験補助者の上半身映像の一部分を抜き出しA3サイズに印画したもの。
	画面の正面を向いてイスに座っている実験補助者の全身が映っている。顔は前を向いているがぼんやりとどこかを見ている。だんだんと上半身だけにズームアップすると，カメラを見てきちんと座りなおし，「こんにちは。○○先生(実験者)のお友達の△△先生です。△△先生も(自分を指差す)，○○先生がやったみたいにフーッってしてみるよ。じゃ，やるよ。」と言って息を思い切り吸い，前に乗り出し，口を尖らせて息を吹く寸前でとめる。	正面を向いてイスに座っている実験補助者の全身が映っている。顔は前を向いているがぼんやりとどこかを見ている。だんだんとズームアップして上半身のみが映るが，視線は最後までどこか遠くに向けられている。	面の正面を向いてイスに座っている実験補助者の全身が映っている。顔は前を向いているがぼんやりとどこかを見ている。だんだんと上半身だけにズームアップすると，カメラを見てきちんと座りなおし，「また，△△先生だよ。△△先生も○○先生がやったみたいにボールをポイってなげるよ。じゃ，やるよ。」と言ってボールを投げようとする。その投げる寸前に動きを止める。	正面を向いてイスに座っている実験補助者の全身が映っている。実験補助者はボールを手に持っている。顔は前を向いているがぼんやりとどこかを見ている。だんだんとズームアップして上半身のみが映るが，視線は最後までどこか遠くに向けられている。		
S質問1と2	「(モニターを指しながら)このテレビの中の△△先生がフーッとしたら，(モニター前に置かれた紙人形を指差し)このテレビの外のハム太郎の人形はどうなるかな？」		「(モニターを指しながら)このテレビの中の△△先生がボールをぽいっと投げたら，(モニター前に置かれたカゴを指し)このテレビの外のカゴに入るかな？」		「(写真を指しながら)この写真の△△先生がフーッとしたら，(紙人形を指差し)この写真の前のハム太郎の人形はどうなるかな？」	「(写真を指しながら)この写真の中の△△先生がボールをぽいっと投げたら，(カゴを指し)この写真の前のカゴに入るかな？」
C質問	「(テレビモニターの面面に触れ)△△先生がフーッとしたら，テレビのここ(画面)から風が出てくるのかな？」		「(テレビモニターの面面に触れ)△△先生がボールをぽいっと投げたら，テレビのここ(画面)からボールが出てくるのかな？」		「(写真の表面を指し)△△先生がフーッとしたら，写真のここ(表面)から風が出てくるのかな？」	「(写真の表面を指し)△△先生がボールをぽいっと投げたら，写真のここ(表面)からボールが出てくるのかな？」

で，まず，すべての条件，課題について正答率に年齢差があるか否かを χ^2 検定によって調べた。その結果，いずれにおいても差は見出されなかった(《ビデオ志向性強条件》[紙人形課題]；S質問1，C質問，S質問2の順に(以下同様)：$\chi^2(1)=0.10$，$\chi^2(1)=0.76$，$\chi^2(1)=1.37$，すべて*n.s.*，[ボール課題]；$\chi^2(1)=0.38$，$\chi^2(1)=0.41$，$\chi^2(1)=0.94$，すべて*n.s.*，《ビデオ志向性弱条件》[紙人形課題]；$\chi^2(1)=0.09$，$\chi^2(1)=0.31$，$\chi^2(1)=0.04$，すべて*n.s.*，[ボール課題]；$\chi^2(1)=1.44$，$\chi^2(1)=0.31$，$\chi^2(1)=0.29$，すべて*n.s.*，《写真》[紙人形課題]；$\chi^2(1)=0.00$，$\chi^2(1)=0.00$，$\chi^2(1)=0.19$，[ボール課題]；$\chi^2(1)=0.09$，$\chi^2(1)=0.00$，$\chi^2(1)=0.03$，すべて*n.s.*)。よって，以後の分析は年齢を込みにして行う。また，以下，比率で示す数字は84人中の人数の比率である。

(1) ビデオ映像の志向性強条件と志向性弱条件の比較　ビデオ映像のみに設定した志向性強条件群と弱条件群の正答人数の差を χ^2 検定により調べたところ，S質問1，C質問，S質問2のいずれにおいても有意差はなかった([紙人形課題]；S質問1，C質問，S質問2の順に(以下同様)：$\chi^2(1)=0.00$，$\chi^2(1)=0.06$，$\chi^2(1)=0.00$，すべて*n.s.*，[ボール課題]；$\chi^2(1)=0.77$，$\chi^2(1)=0.08$，$\chi^2(1)=0.00$，すべて*n.s.*)。すなわち，目的1の仮説とは異なる結果となった。志向性条件の強・弱による差がみられなかったため，以後の分析は両群をまとめて行った。

(2) 紙人形課題とボール課題の比較 三つの質問毎に映像・課題別の正答・誤答の人数と比率をTable 2に示した。ビデオ映像および写真における紙人形課題とボール課題の正誤パタンの分布を，McNemarの検定によって比較したところ，有意な差は見出されなかった（《ビデオ映像》；S質問1，C質問，S質問2の順に（以下同様）：$\chi^2(1)=0.05$，$\chi^2(1)=2.03$，$\chi^2(1)=2.50$，すべて*n.s.*，《写真》；$\chi^2(1)=0.31$，$\chi^2(1)=0.00$，$\chi^2(1)=0.25$，すべて*n.s.*）。すなわち目的2については，［シンボル］に注目させた場合，媒介物の可視・不可視にかかわらず，実在視的反応の起こることが確かめられた。

(3) ビデオ映像と写真の比較 まずS質問1での正答率は，ビデオ映像では，紙人形課題で52.4％（44人），ボール課題で54.8％（46人），写真では紙人形課題で58.3％（49人），ボール課題で61.9％（52人）であった（Table 2）。ビデオ映像および写真の正誤パタンの人数分布の比較をMcNemarの検定を用いて行ったところ，紙人形課題，ボール課題のいずれにおいても困難度に有意な差は見出されなかった（［紙人形課題］：$\chi^2(1)=0.59$，*n.s.*，［ボール課題］：$\chi^2(1)=1.79$，*n.s.*）。1回目のS質問では，4歳以上の子どもであっても，ビデオ映像でも写真でも，同じように半数近くが実在視的反応を示すことがわかった。

一方，誤解を脱却させるために行ったC質問の結果をみると，ビデオ映像では，紙人形課題で75.0％（63人），ボール課題で82.1％（69人）が正答した。写真では，紙人形課題で95.2％（80人），ボール課題で97.6％（82人）が正答であった。McNemarの検定を用いてビデオ映像と写真の正誤パタンの人数分布を比較したところ，紙人形課題でもボール課題でも写真の方がビデオ映像より正答する子どもが有意に多いことがわかった（［紙人形課題］：$\chi^2(1)=13.47$，$p<.001$，［ボール課題］：$\chi^2(1)=11.08$，$p<.001$）。

また，S質問2の正答率は，ビデオ映像では，紙人形課題71.4％（60人），ボール課題78.6％（66人），写真では，紙人形課題95.2％（80人），ボール課題96.4％（81人）であった。C質問同様，McNemarの検定によりS質問2でのビデオ映像と写真の正誤パタンの人数分布を比較したところ，紙人形課題，ボール課題とも写真の方がビデオ映像より正答人数が多いことがわかった（［紙人形課題］：$\chi^2(1)=16.40$，$p<.001$，［ボール課題］：$\chi^2(1)=13.07$，$p<.001$）。

以上により，S質問1ではビデオ映像と写真とで困難度に差がなかったものの，C質問およびS質問2では，ビデオ映像の方が写真より課題が困難であることがわかった。

(4) 移行レベルの存在── S質問1，C質問，S質問2の3つの課題を通して (3)で分析したとおり，S質問1にはビデオ映像も写真も同じように半数近くの子どもが誤答するという結果が得られた。しかし問題でも述べたように，S質問1では実在の指示対象についての質問と誤解している可能性があるため，C質問およびS質問2を行った。その結果，C質問，S質問2の両者において，ビデオ映像でも写真でも正答率が上がった（《ビデオ映像》［紙人形課題］；S質問1，C質問，S質問2の順に（以下同様）：52.4％，75.0％，71.4％，［ボール課題］：54.8％，82.1％，78.6％，《写真》［紙人形］；58.3％，95.2％，95.2％，［ボール課題］：61.9％，97.6％，96.4％）。

Table 2 *シンボル注目(S)質問1，誤解脱却(C)質問，シンボル注目(S)質問2の映像・課題別の正答・誤答の人数と比率*

シンボル注目(S)質問1				
	ビデオ映像		写真	
	紙人形	ボール	紙人形	ボール
正答	44(52.4%)	46(54.8%)	49(58.3%)	52(61.9%)
誤答	40(47.6%)	38(45.2%)	35(41.7%)	32(38.1%)
誤解脱却(C)質問				
	ビデオ映像		写真	
	紙人形	ボール	紙人形	ボール
正答	63(75.0%)	69(82.1%)	80(95.2%)	82(97.6%)
誤答	21(25.0%)	15(17.9%)	4 (4.8%)	2 (2.4%)
シンボル注目(S)質問2				
	ビデオ映像		写真	
	紙人形	ボール	紙人形	ボール
正答	60(71.4%)	66(78.6%)	80(95.2%)	81(96.4%)
誤答	24(28.6%)	18(21.4%)	4 (4.8%)	3 (3.6%)

Table 3は，これら3つの質問における正誤パタンの人数分布を表に示したものである。まず，S質問1に正答した子どもについてみると，その後のC質問およびS質問2でも一貫して正答する子どもが多かった。次に，S質問1で誤答の子どもに注目し，その後のC質問の正・誤答とS質問2の正・誤答の反応の関係について2×2のχ^2検定を行ってみると，人数の偏りは有意であった。残差分析の結果，C質問で誤答の場合S質問2でも誤答する子どもが有意に多く，C質問で正答の場合，S質問2でも正答する子どもが有意に多かった（《ビデオ映像》［紙人形課題］：$\chi^2(1)=29.57$, $p<.01$, ［ボール課題］：$\chi^2(1)=20.00$, $p<.01$；《写真》［紙人形課題］：$\chi^2(1)=35.00$, $p<.01$, ［ボール課題］：$\chi^2(1)=20.62$, $p<.01$）。この結果からは二つの解釈が考えられる。第一に，S質問1では質問を誤解していた子どもが存在し，そういう子どもはC質問により誤解が解かれると正答に転じ，その後のS質問2でも正しく答えられるようになったという可能性である。特に写真で誤答する子どものほとんどは，そのような反応パタンを示した。この子どもたちは，表象性理解段階にありながら質問を誤解したため，S質問1では誤答してしまったと考えられる。一方，ビデオ映像では，S質問1，C質問，S質問2のすべてに誤答した子どもが，紙人形課題で20.2％（17人），ボール課題で13.1％（11人）いた。このように繰り返し質問を行っても誤答する子どもたちは，S質問1を実在の指示対象についての質問と誤解したわけではなく，［シンボル］について答えていたと推測される。したがって，この子どもたちはいまだ表象性理解段階に達しておらず，移行段階にあると考えられよう。

第二に，S質問2で正答の子どもは，誤解からの脱却によるのではなく，質問課題の反復によって何らかの学習が成立し，正答に至った可能性である。この場合，二つのことが考えられる。一つは，質問の反復によって実験者は前とは異なる答えを求めていると子どもが推測し，反応を変えたという可能性である。そうだとすれば，C質問で反応を変えた子どもの中に再度S質問2で反応を変える子どもがいるはずである。しかし，そのような子どもはほとんどいなかったことから，この可能性は低いと考えられる。二つ目に，課題の反復によって移行段階から表象性理解段階に至った可能性である。もし課題の繰り返しによって学習が促進されるのであれば，C質問で正答に至る子どもばかりでなく，前の二課題には誤答して，その後のS質問2で正答に至る子どももいるはずであるが，そのような子どもは一人もいなかった。よってこの可能性も低いと考えられる。いずれにせよ，学習の可能性の有無を明白にするには，課題の反応に対する発話の分析が有効であると思われる。

以上により，移行段階の存在が示唆され，またビデオ映像と写真とではその表象性理解の発達にずれがあることが確かめられた。また，S質問1では誤解によって誤答していた子どもの存在が示唆された。そこで次に，以下の3点を明らかにするために，理由質問への子どもの回答を分析する。1. 実際に誤解が生じたのか否か，2. 表象性理解段階に達している子どもと移行段階の子どもとでは，映像の理解にどのような違いがあるのか，3. ビデオ映像と写真とでは異なる理解の仕方をしているのか，である。

2. 子どもの発話分析

ここでは，S質問2に対する理由質問を分析した。まずS質問2（紙人形課題1点，ボール課題1点の2点満点）の結果から，すべての子どもを映像の種類別に，A，Bの二つのグループに分類した。AはS質問2で2点満点の子ども，Bは0～1点の子どもである。さらにグループAは，A①（S質問1でも2点満点の子ども）とA②（S質問1では0～1点の子ども）の二つのグループに分けた。A②はS質問1で誤答したがS質問2では正答に転

Table 3　*シンボル注目(S)質問1，誤解脱却(C)質問，シンボル注目(S)質問2の関連*

ビデオ紙人形課題		S質問2		写真紙人形課題		S質問2	
S質問1	C質問	正答(60人)	誤答(24人)	S質問1	C質問	正答(80人)	誤答(4人)
正答	正答(40人)	39人	1人	正答	正答(46人)	46人	0人
(44人)	誤答(4人)	1人	3人	(49人)	誤答(3人)	0人	3人
誤答	正答(23人)	20人	3人	誤答	正答(34人)	34人	0人
(40人)	誤答(17人)	0人	17人	(35人)	誤答(1人)	0人	1人
ビデオボール課題		S質問2		写真ボール課題		S質問2	
S質問1	C質問	正答(66人)	誤答(18人)	S質問1	C質問	正答(81人)	誤答(3人)
正答	正答(43人)	42人	1人	正答	正答(52人)	52人	0人
(46人)	誤答(3人)	1人	2人	(52人)	誤答(0人)	0人	0人
誤答	正答(26人)	22人	4人	誤答	正答(30人)	29人	1人
(38人)	誤答(12人)	1人	11人	(32人)	誤答(2人)	0人	2人

じた子どものグループである。また，Bは繰り返しの質問にもかかわらず誤答し続けたグループである。各グループに当てはまる子どもの人数は，ビデオ映像ではAが60人（71.4％）（内訳A①34人，A②26人），Bが24人（28.6％），写真ではAが79人（94.1％）（内訳A①43人，A②36人），Bが5人（5.9％）であった（比率で示す数字は，84人中の人数の比率である）。それぞれのグループ毎に理由質問の回答にどのような回答があるかを調べた。グループAは「倒れない（カゴに入らない）」理由，グループBは「倒れる（カゴに入る）」理由である。

（1）「紙人形は倒れない（ボールはカゴに入らない）」理由　グループAの子どもはS質問2で正答しているので，「どうして紙人形は倒れない（ボールはカゴに入らない）のか」を尋ねた。問いに対する全発話をプロトコルとして起こし，類似の発話を群分けし，さらにより抽象度の高いカテゴリにまとめた。最終的には表象性理解に関わる5つの発話カテゴリ，すなわち①「表象性に言及」，②「媒体の物質性に言及」，③「異空間性に言及」，④「シンボルの動性あるいは不動性に言及」，⑤「媒体に関する経験的知識に言及」を抽出した。①「表象性に言及」とは，図像的表象の三要素の関係性を理解していると受け取れる発話であり，例えば，［シンボル］と［指示対象］の写像性や，［シンボル］が生成されるプロセスやメカニズムに関する言及，②「媒体の物質性に言及」とは，［シンボル・シンボル媒体］が何でできているか，およびその属性に関する言及，③「異空間性に言及」とは，映像世界と現実世界が異なる空間であることを意識した言及，④「シンボルの動性あるいは不動性に言及」とは［シンボル］の動きに注目した言及，⑤「媒体に関する経験的知識に言及」とは「テレビ（写真）だから」という言及である。なお，④「シンボルの動性あるいは不動性に言及」は写真に特有の発話であり，ビデオ映像では出現しなかったので，ビデオ映像の発話分析からは除く。これらのカテゴリの出現の有無について著者を含む2名の評定者間の一致率をみたところ，ビデオ映像では①94.0％，②95.2％，③96.4％，⑤97.6％，写真では①96.4％，②98.8％，③97.6％，④97.6％，⑤98.8％であった。不一致に関しては協議のうえ合意に達した判断を最終的に採用した。グループ毎の発話カテゴリの人数分布をTable 4に，カテゴリ毎の主な発話内容はTable 5にまとめた。発話カテゴリに相互背反性はない。

まず，グループA全体のビデオ映像での回答では，CochranのQ検定により，各発話カテゴリの子どもの人数分布に有意な偏りがみられた（$\chi^2(3)=13.14$，$p<.01$）。最も多くの子どもに採用されている理由は③「異空間性の言及」（23人）であり，次に多いのが②「媒体の物質性に言及」（17人）であった。次に写真での回答を見ると，ビデオ映像と同様に各発話カテゴリの子どもの人数分布に有意な偏りがみられた（$\chi^2(4)=13.32$，$p<.01$）。最も多く採用されている理由は⑤「媒体に関する経験的知識に言及」（24人）という理由であり，次に多いのが④「シンボルの動性あるいは不動性に言及」（21人）であった。

発話カテゴリ毎に注目すると，まず①「表象性に言及」は，ビデオ映像及び写真の両者において，グループA①とA②に同数の子どもがいた。参加児はフィードバックなしで課題を繰り返すので，遂行中に表象性について学習したとは考えにくいことから，A②の表象性に言及できる子どもは，S質問1は誤解によって誤答し，後に誤解が解けて正答に転じたと解釈できる。次に②「媒体の物質性に言及」に注目すると，ビデオ映像と写真とでは発言内容に質的違いが見られた（Table 5）。写真では紙という属性に焦点が当たった発言だが，ビデオ映像ではモニタ表面に「ガラス」があり，あたかも映像空間と現実空間がそれによって分けられていると認識しているような発言であった。ビデオ映像では特に，このカテゴリの発言をする子どもが多かった。これは，ビデオ映像の媒体理解が写真と比べ困難であることの反映と考えられる。また，ビデオ映像では③「異空間性に言及」も多く採用されている理由だが，「テレビの中だから」と答える子どもの中には，やはり映像空間が現実空間と同じようにテレビの中に実在しているように考えている子ども

Table 4　*正答に対する理由質問の発話カテゴリーの人数分布（グループA）*

正答の理由	ビデオ映像			写真		
	グループA（人数，$n=60$人）			グループA（人数，$n=79$人）		
	A①（34人）	A②（26人）	A全体（60人）	A①（43人）	A②（36人）	A全体（79人）
①表象性に言及	4（11.8％）	4（15.4％）	8（13.3％）	6（14.0％）	6（16.7％）	12（15.2％）
②媒体の物質性に言及	11（32.4％）	6（23.1％）	17（28.3％）	3（7.0％）	4（11.1％）	7（8.9％）
③異空間性に言及	14（41.2％）	9（34.6％）	23（38.3％）	13（30.2％）	5（13.9％）	18（22.8％）
④シンボルの動性あるいは不動性に言及	0（0.0％）	0（0.0％）	0（0.0％）	13（30.2％）	8（22.2％）	21（26.6％）
⑤媒体に関する経験的知識に言及	6（17.6％）	2（7.7％）	8（13.3％）	14（32.6％）	10（27.8％）	24（30.4％）

Table 5　*グループA における正答（「紙人形は倒れない，ボールはカゴに入らない」）の理由の発話例*

①表象性に言及	
ビデオ映像	ビデオに最初に映しちゃってからテレビに映してるから。 テレビの中だから，電源で動いている。ビデオで映してる。 鏡と一緒なんだよ。 テレビは見るだけだから。（風は）カメラに当たって向こう行っちゃう。
写　真	写真に写すから，そこにあるのはもう偽者だから。 だって写真だから写したものがフーってやるわけない。 フーってなる前にカメラに撮ったから。 写真はカシャってして，ウィーとして，忘れないようにこうやって（写真を手に持ち）見るものだもの。 写真だと写っただけだから，パチってどっかで誰か（シャッターを押す身振り）こうやってやってるから，フーってしても倒れない。テレビだったら倒れるけど。
②媒体の物質性に言及	
ビデオ映像	（テレビモニターに）ガラスがついてるから跳ね返る （ボールは）ここ（画面を指し）にぶつかっておんなじ所に転がる。 （映像の人が）ボールを思いっきり投げると，ここ（画面）が割れちゃうから。 風はガラスに当たって違うところに行く。 テレビの中はここ（画面を指し）が硬いから風がこない。 だってこういうところ（画面）にぶつぶつ（スピーカーの穴）がないから。
写　真	紙だから（ボールを）投げれない。 写真は紙になってるから。 写真は，そのまま絵みたいになってるから。
③異空間性に言及	
ビデオ映像	違うところにいるから。 （ボール）は違うところにあるから，（投げると）外に行く。 テレビの中にいるから。 ハム太郎が外だから，フーってしても倒れない。
写　真	写真の中にいるから。
④シンボルの動性あるいは不動性に言及	
写　真	写真は動けれないから。 （ボールが）カチって固まったまんまなの。 だって写真かなんかを貼って，写真は投げてもびくともしない。 写真の中の人は息を吸わないから。
⑤媒体に関する経験的知識に言及	
ビデオ映像	テレビだから
写　真	写真だから

が含まれていると考えられる。

（2）「紙人形は倒れる（ボールはカゴに入る）」理由

グループBの子どもはS質問2に誤答しているので，「紙人形は倒れる（ボールはカゴに入る）」理由を尋ねた。問いに対する全発話をプロトコルとして起こし群分けしたところ，すべての発話は二つのカテゴリに分類できた。一つは実在の指示対象に対するのと全く同じ反応を示す①「現実視的言及」であり，他は「わからない」，無反応，その他の発言を含む②「その他」のカテゴリである。さらに「現実視的言及」をする子どもの中には，画面から紙人形やカゴまでの距離を意識した発言がみられたので，①'「画面を意識した言及」という下位カテゴリを設けた。これらのカテゴリの出現の有無について著者を含む2名の評定者間の一致率を求めたところ，ビデオ映像でも写真でも①，①'，②のすべてにおいて100％であった。各グループの発話カテゴリの人数分布をTable 6に，カテゴリ毎の主な発話内容をTable 7にまとめた。その結果，①「現実視的言及」をする子どもが最も多く，16人に上った。これは，これらの子どもたちが［シンボル］と［指示対象］を一体化してとらえる移行段階にあることを示唆している。また，これらの「現実視的言及」を行う子どもの中でも7人が①'「画面を意識した言及」をしており，［指示対象］についての質問と誤解しているわけではないことが示された。興味深いのは，「画面を意識した言及」をした中の3人の子どもが，画面から紙人形やカゴまで放物線を手で描き，画面からの距離を測

Table 6 *誤答に対する理由質問の発話カテゴリーの人数分布（グループB）*

	ビデオ映像	写真
誤答の理由	グループB（人数，n=24人）	グループB（人数，n=5人）
①現実視的言及	16(66.7%)	3(60.0%)
①'(画面を意識した言及)	[7(29.1%)]	[1(20.0%)]
②わからない・その他	8(33.3%)	2(40.0%)

Table 7 *グループBにおける誤答（「紙人形は倒れる，ボールはカゴに入る」）の理由の発話例*

①現実視的言及	
ビデオ映像	息をかけると軽いと倒れる。 強い風が吹くとパタンと倒れるもん。 ポイットするとこの中に入るもん。
写　真	空気がすごいから。
①' 画面を意識した言及	
ビデオ映像	(手で自分の後ろを指しながら) 強く投げると入らないけど，(今度はかごを指し) やさしくやるとここに入る。 (手でテレビからかごまで放物線を描きながら) ここからポイっと投げるとピットはいると思うもん。 強く投げるとテレビが壊れて出てくる。
写　真	紙だから（ボールを) 投げれない。 写真は紙になってるから。 写真は，そのまま絵みたいになってるから。
②わからない・その他	
ビデオ映像	わからない 無回答 普通のテレビとか見てたら出てきた。
写　真	わからない 無回答 中だから。

る動作をしたことである。そのような子どもたちに，画面から紙人形やカゴを離して置いて再びS質問をすると，「倒れない（入らない)」と回答を変えたのである。

次に写真では，グループBに該当する子どもは5人のみであったが，3人が①「現実視的言及」を行った。

3. 画面の「ガラス」をとったら風（ボール）は出てくるか？

グループAのビデオ映像で「媒体の物質性に言及」した17人中，風やボールはガラス，画面に当たり出てこないといった子どもは10人いた。そこで試みに[4]，グループAの子ども60人中31人に実験の最後に「(テレビ画面の）ガラスをはずしたら，風やボールは出てくるかな？」と質問した。その結果，31人中23人（グループA①19人中13人，グループA②12人中10人）の子どもが「出てくる」と答え，χ^2検定の結果，「出てこない」と答えた子どもより有意に多かった（$\chi^2(1)=8.53, p<.01$)。グループ間の差はなかった（$\chi^2(1)=0.85$，*n.s.*)。

4) これは，理由質問で「ガラスがあるから風(ボール)は出てこられない」と答える子どもが多数いたためで，実験実施期間の後半に導入した。よって，全参加児に実施できなかったため，補足資料にとどめる。

総合的考察

本研究は，5，6歳の子どもを対象に，ビデオ映像の表象性理解がなぜ困難であるかを，写真との比較において実験的に探った。

まず目的1では，志向性の強弱がビデオ映像の表象性理解に及ぼす影響をみたが，その効果は認められなかった。これは，設定した二水準が十分な志向性の強弱の差を作り出していなかったためと考えられる。つまり「人」の映像であれば，アイコンタクトの有無や働きかけの有無にかかわらず，子どもは一定の志向性を感じてしまうのかもしれない。

次に目的2についてだが，木村・加藤（2006）で確かめられた映像の表象性理解の欠如を示唆する子どもの反応が，現実世界と映像世界を結ぶ媒介物の可視・不可視

に影響されるか否かを確認するために，紙人形課題に加えボール課題を行ったところ，両者に困難度の差はなかった。「風」のような目に見えない現象ばかりでなく，「ボール」のような実体性のある対象を含む現象においても実在視的反応の生ずることがわかった。このように現象間の差異によらず実在視的反応が起きるという事実は，人が固有に持つ図像的表象理解の能力を考える上で大きな意味を持つと思われる。というのも，図像的表象は単に二次元的に表現された偽物に過ぎないのだが，大人ですらそこに表現されている以上の指示対象の属性を感じずにはいられない。例えば，恐怖映画を見てのけぞったり，恋人の写真を大切に扱ったりする。Figure 1で示した表象性理解段階に達していても，実在視的反応から完全に逃れられるわけではないのである。逆に言えば，図像的表象に対しこのような感覚を持てることこそが，その理解能力の本質的な部分であるとも言えよう[5)]。

目的3ではビデオ映像と写真の表象性理解達成時期が異なるか否かを調べた。その結果，写真よりビデオ映像の方がその理解が困難であることがわかった。両者には，映像そのものが持っている性質とそれを取り巻く社会的な文脈に大きな違いがある。まず性質については，ビデオ映像には動きがあること，その結果、観察者はそれに志向性を感じるということがある（木村・加藤，2006）。また，普段，私たちが見ているテレビは，様々な映像が次々と現れその時間を統制できないため，観察者が映像世界に一方的に巻き込まれていく感がある。このことは［シンボル媒体］の存在に注意を向けにくくする要因になると考えられる。次に，文脈的条件として考えられるのは，写真とビデオ映像の社会的機能の違いである。例えば写真は初めから大人との間で経験を共有するコミュニケーションのツールとして子どもの前に呈示されることが多いし（Werner & Kaplan, 1963/1974），また，その扱い方についても「紙だから大切に扱うよう」大人から教えられる経験を積んでいる（Liben, 1999）。一方，ビデオ映像は時間的側面を外から自在に統制できないため，コミュニケーションのツールになりにくいし，大人ですらテレビ映像が映し出される仕組みを知らないことが多いので，それについて会話することはほとんどない。よってビデオ映像について学習する機会は少なく，結果として表象性理解が写真より遅れると考えられる。実験の中でも，写真の生成までの過程は詳述できるのに，ビデオ映像では実在視的反応を見せる子どもがいた。このことは映像理解がメディア依存的で，個別の知識を必要とすることを示唆している。

5）ただし，本実験では紙人形，ボールの両課題とも主体が対象に（風やボールによって）間接的に働きかける現象を扱っているので，直接的に働きかける（手で人形を倒すなど）相互作用についても検討する必要がある。

目的4では，表象性理解段階に達するまでに，移行段階が存在する可能性を調べた。実験の結果，S質問1，C質問，S質問2に対し，常に実在視的反応を行う子どもの存在が確かめられ，特にビデオ映像ではこのような子どもが多くいた。この子どもたちの中には，画面からカゴまでの距離を手で測り「強く投げたらカゴに入らないけど，弱く投げたら入る」というように答える子どももおり，シンボル自体について問われていると理解した上で答えていることが窺える。また，この年齢では映像経験も十分に積んでいると推測され，知覚的に実物と見間違えているとも考えにくいことから，これら三つの課題のすべてに誤答した子どもたちは表象性理解段階に達しておらず，移行段階Aにあると考えられる。

一方，表象性理解段階に達しながらも課題に誤答する場合があることも示唆された。そのような誤答は，課題の質問が［シンボル］についての質問と受け取られず，［指示対象］についての質問と誤解された場合に生じた。S質問1で誤答しながらも，最終的に正答に転じた子ども（グループA②）の中にそのような子がおり，特に写真では多くみられた。Flavell et al.（1990）の課題では4歳児はほとんど正答であったのに比べ，本研究のS質問1で誤解による誤答が多かった理由は，［シンボル媒体］を含まない質問であったためと考えられる。先述のように写真はコミュニケーションを成立させるツールとしてよく用いられるので，それが表す現実の指示対象のことについて語り合う経験を子どもは幼い頃から積んでいる。したがって，日常生活でも写真について質問されれば，まずその指示対象が現実世界でどうであるかを答えるのが一般的である。本課題でもグループA②の子どもの多くはそのように答えたと考えられる。一方，Flavell et al.（1990）の課題では，［シンボル媒体］を含む質問であったため，［指示対象］についてではなく［シンボル］について問われていると容易に理解できたと推測される。誤解が解けた後のS質問2の結果はFlavell et al.（1990）の課題の結果と齟齬がない。実際，S質問1で誤答し後に正答に転じた子ども（グループA②）の中にも，理由質問で表象性に言及した子どもが6人いた。この子どもたちは表象性理解段階にありながら誤解した典型例といえるだろう。

では，ビデオ映像でも写真と同様の誤解が多く生じたのだろうか。筆者は以下の理由から，写真に対する質問で起きたような誤解はビデオ映像に対しては起こりにくく，よってグループA②の多くは移行段階にありながら見かけ上正答に変化したと考える。先述したようにビデオ映像はその特性ゆえに，映像が表現している指示対象について大人と語りあう機会が写真より少なく，語り合ったとしても写真の場合のように［指示対象］が現実世界でどうであるかより，［シンボル］（例えばドラマの

主人公）がテレビのストーリーの中で（映像世界で）どうであるかに言及していることが多い。これは，大人でさえ写真は現実世界の切り取りとして見ていて，写真の世界と現実世界との対応関係を意識化しやすいのに比べ，テレビはその中で完結した閉じた世界として見ていて，［シンボル］に対応する現実世界の対象を意識化しにくいことが原因と考えられる。したがって，子どもはビデオ映像について問われたときは［シンボル］そのものについて問われていると容易に受け止めると推測される。誤解していないにもかかわらずC質問によって正答に転じた理由は，C質問を行うことで結果的に［シンボル媒体］に焦点が当たり，移行段階Bの状態になったためであると考えられる。その証拠に，S質問2で正答に転じた子ども（グループA②）3人は「倒れない（ボールが出ない）」理由に，テレビモニタの画面や「ガラス」によって風やボールが遮られることを述べており，また「（テレビ画面の）ガラスをはずしたら，風やボールは出てくるかな？」という質問をするとグループA②の12人中10人が「出てくる」と答えていた。ここから，見かけ上正答であっても，表象性理解段階に達していないといえるだろう。

同様に，ビデオ映像では三つの質問に一貫して正答する子ども（グループA①）の中にも，表象性理解段階に達していない子どもが含まれることがわかった。これらの子どもの中には，グループA②と同様，テレビのスクリーンや「ガラス」が風やボールを遮ると説明する子どもが7人おり，また「（テレビ画面の）ガラスをはずしたら風やボールは出てくるかな？」という質問に19人中13人が「出てくる」と答えていたことから，このことがいえる。

一方，ビデオ映像のグループAの中には，もちろん表象性理解段階の子どももいる。グループA①で少数ながら理由質問で明示的に表象性に言及している子どもがその典型である。また，グループA②にも，誤解して最初の指示対象焦点化質問に誤答したが，誤解が解けて正答に転じた子どものいる可能性がある。やはり理由質問で，表象性に言及していた子どもがその典型といえるだろう。

上記から，グループAの中でどの子どもが表象性理解段階に達し，どの子どもが移行段階であるかを，本研究の実験手続きで明確に区別するには限界があったといえる。しかし本研究では，従来の研究によっては明らかにされ得なかった映像理解のグレーゾーンの領域，すなわち移行段階の存在をモデル化し，そのモデルの妥当性を示唆することができた。また，映像媒体によって表象性理解の達成時期が異なることもわかった。特に，ビデオ映像の表象性理解の達成には写真と比べて複雑な過程が含まれていることが示唆された。

今後の課題として，二点挙げる。第一に，本研究によって，写真とビデオ映像とでは表象性理解の達成に時間的ズレがあり，ビデオ映像の場合はいっそうその達成過程に複雑な要因が含まれることが示唆された。よって今後，ビデオ映像の表象性理解を促進したり阻害したりする諸要因を具体的に明らかにしていく必要があろう。今回の実験でも，その要因の一つと考えられる志向性の効果を取り上げたが，上述したとおり，明瞭な結果は得られなかった。今後は，志向性の内容をより吟味して強弱の差を明瞭に設定した実験を行う必要がある。第二に，上記で一部論じた，映像の表象性理解に及ぼす社会的な要因の影響についても，子どもの生活場面でのテレビ視聴が大人とのどのようなコミュニケーションのもとで行われているかを調べることを通じて，明らかにしていくことが期待される。

文　献

DeLoache, J.S., Pierroutsakos, S.L., Uttal, D.H., Rosengren, K.S., & Gottlieb, A. (1998). Grasping the nature of pictures. *Psychological Science*, **9**, 205-210.

DeLoache, J.S., Pierroutsakos, S.L., & Uttal, D.H. (2003). The origin of pictorial competence. *Current Directions in Psychological Science*, **12**, 114-118.

Flavell, J.H., Flavell, E.R., Green, F.L., & Korfmacher, J.E. (1990). Do young children think of television image as pictures or real objects? *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, **34**, 399-419.

Gibson, J.J. (1985). *生態学的視覚論*（古崎　敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬　旻，訳）．東京：サイエンス社．（Gibson, J.J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mufflin.）

木村美奈子・加藤義信．(2006)．幼児のビデオ映像理解の発達：子どもは映像の表象性をどのように認識するか？．*発達心理学研究*，**17**，126-137.

Liben, L.S. (1999). Developing an understanding of external spatial representations. In I.E. Sigel (Ed.), *Development of mental representation* (pp.297-321). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Pierroutsakos, S.L., & DeLoache, J.S. (2003). Why do infants grasp pictured objects? *Infancy*, **4**, 141-156.

Pierroutsakos, S.L., & Troseth, G.L. (2003). Video Verité: Infants' manual investigation of objects on video. *Infant Behavior & Development*, **26**, 183-199.

Werner, H., & Kaplan, B. (1974). *シンボルの形成*．（柿崎祐一・鯨岡峻・浜田寿美男，訳）．京都：ミネルヴァ書房．（Werner, H. & Kaplan, B. (1963). *Symbol formation: an organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. New York: Wiley.）

付記

本実験の計画にあたって貴重なご助言をいただきました名古屋大学の藤村宣之先生に心より感謝申し上げます。また，実験に協力してくださいました享栄幼稚園の園長杉山榮子先生，園児の皆様，諸先生方，ならびに実験実施にご助力いただいた瀬野由衣さん，加藤弘美さんに深く御礼申し上げます。

Kimura, Minako (Aichi Prefectural University). *What Makes it Difficult for Young Children to Understand the Symbolic Nature of Video Images?: A Comparative Analysis of Picture Understanding.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 157-170.

This study investigated how younger children come to understand the representational nature of video images and pictures. The validity of a model consisting of three stages (non-representational, transitional, representational) was tested by an experiment. Five- and six-year old children were asked whether the actions of a person appearing on a television screen or in pictures could influence the real world, and whether the image-objects could come out of the television or picture's surface. The latter question was included to verify whether children misunderstood the first question as being asked about the referent in the images. The results showed that children often responded as if they considered images to be real in both picture and video conditions. In fact, children knew the picture was not real, but only misunderstood the question as being asked about the referent. In the case of video-images, children's responses were interpreted as typical of a transitional stage. Children in this stage could distinguish real objects from images but did not fully understand the symbolic nature of the images.

【Key Words】 Video images, Picture, Early childhood, Representational status, Cognitive development

2006. 5. 25 受稿，2008. 3. 18 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，171-182

原　著

幼児における「心の理論」と実行機能の関連性：ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に

小川　絢子
（京都大学大学院教育学研究科）

子安　増生
（京都大学大学院教育学研究科）

幼児が他者の誤った信念を理解するためには，実行機能の発達が必要不可欠であることが，最近の「心の理論」研究から明らかにされてきている（Carlson & Moses, 2001; Perner & Lang, 1999）。実行機能の中でも，ワーキングメモリと葛藤抑制の機能が「心の理論」と特に関連することが示されている。しかしながら，日本において実行機能と「心の理論」の関連を検討した研究はほとんどみられない。本研究の目的は，実行機能と「心の理論」が，日本の幼児において関連するのかどうかを検討し，関連があるのであれば，実行機能の下位機能のうち何が「心の理論」と関連するのかを，因子分析を用いて下位機能の因子間の関連性および独立性を考慮した上で検討することであった。3歳から6歳児70名を対象に，「心の理論」2課題，実行機能6課題，および語彙理解テストを実施した。その結果，年齢と語彙理解テストの成績を統制しても，ワーキングメモリ課題の成績と「心の理論」課題の成績との間に有意な相関がみられた。加えて，ワーキングメモリと葛藤抑制の因子間相関は非常に高かった。これらの結果から，幼児期においては，葛藤抑制の機能の多くはワーキングメモリによって説明される可能性があり，1つの課題状況に対して，自己視点を抑制し，他者視点を活性化するといった操作を可能にするワーキングメモリ容量が，誤った信念の理解に必要であることが示唆された。

【キー・ワード】 心の理論，実行機能，ワーキングメモリ，葛藤抑制，検証的因子分析

問　題

他者や自己の心的状態に対する基本的な理解の発達に関して，「心の理論（theory of mind）」と呼ばれる，人間を含む動物がどのように他者や自己の心の働きを理解するのかを解明する様々な研究が行われている。「心の理論」とは，広義には自己や他者への心的帰属（Premack & Woodruff, 1978）であり，自己や他者の行動を予測したり，説明したりするための，信念，意図，願望，感情など様々な心的状態の推論を含む心の働きについての知識や原理のことである。発達研究における狭義の用法では，自分の考えとは異なる他者の誤った考え（誤信念）や行動を推測する能力のことを意味しており，幼児の誤信念理解の能力は，他者の心的状態を質問する課題を使用して検討されることが多い。幼児がどのような「心の理論」を持っており，またそれがどのように発達していくのかについて，主に「誤った信念課題」（Wimmer & Perner, 1983）や，「スマーティ課題」（Hogrefe, Wimmer, & Perner, 1986）を用いて検討がなされてきた。これらの課題では，課題状況や子ども自身の信念が変化した際に，それを知らない他者は，現在の状況ではなく，過去の状況や信念に基づいた誤信念を持っているということを子どもが理解できるかどうかを主に調べている。すなわち，課題状況における，他者や過去の情報を表象として扱うことが可能であるかが問題となる。

「心の理論」研究では，これらの課題に正答することが，他者の心的状態を理解していることの1つの指標であるとして検討が加えられてきた。その結果，3歳児は自己の現在の信念を他者にも帰属させ，現在の状況を答えてしまい，ほとんど正答できないのに対し，4歳以降，他者の誤信念や行動について正しく推測できる子どもが増えてくることが示されている（子安，1999；子安・木下，1997; Perner, 1991）。Wellman, Cross, & Watson（2001）は，「心の理論」課題を使用した178の研究を対象としたメタ分析を行い，課題中の様々な要因を操作した複数の研究において，幼児期の間に年齢が上がるにつれて他者信念質問に対する成績が上がるという一貫した発達変化がみられることを示している。この結果からWellman et al.（2001）は，3歳から5歳にかけて，心的状態や，そこから推測される人間の行動に関する概念が獲得されるとしている。

しかし，「心の理論」の発達に必要となるのは，心的状態に対する概念的知識の獲得のみではないということが，近年の研究から明らかになってきている。実際，「心の理論」課題に正答するためには，1つの課題状況に対して，自己と他者，現在と過去といった2つの相反する表象を切り離したり，関連づけたりするような表象操作の能力が必要となってくる。このような人の心的状態に対する概念的変化以外の表象操作の要因として，実行機能（executive function; EF）という認知機能との関連

が示されてきている（Perner & Lang, 1999）。実行機能とは，行為や思考のモニタリングやコントロールの役割を果たす高次の自己制御過程の総称である（Carlson, 2005）。「心の理論」と実行機能の関連については，どちらも幼児期の間に急激に発達する点や，「心の理論」課題に困難を示す自閉症者が，ウィスコンシン・カード分類課題（Wisconsin Card Sort Task; WCST）やハノイの塔（Tower of Hanoi; ToH）といった実行機能の課題にも困難を示すことが指摘されている（Carlson & Moses, 2001）。

近年の研究では，実行機能の下位機能のうち何が特に「心の理論」と特に関連するのかについて議論がなされてきた。特に関連が強いと考えられている下位機能として，1）抑制制御（inhibitory control），2）認知的柔軟性（cognitive flexibility），3）ワーキングメモリ（working memory）が挙げられる。

第1の抑制制御とは，子どもにとって優勢であるが不適切な表象やそれによってもたらされる反応を抑制する能力，すなわち不適切な優勢反応の抑制（inhibition of maladaptive prepotent response）の能力である。「心の理論」課題に正答するためには，子どもは，自己にとって目立った情報や反応を抑制し，他者についての表象を考慮するという，抑制制御の機能が必要となってくる。抑制制御は一般的に遅延抑制（delay inhibition）と葛藤抑制（conflict inhibition）という異なる機能に分けられている。遅延抑制が自分の順番を待つといった衝動的な反応の抑制であるのに対し，葛藤抑制は，優勢な情報や反応を抑制し，もう一方の情報や反応を活性化させることと考えられている（Carlson & Moses, 2001）。遅延抑制では，タワー課題（Tower Building; Kochanska, Murray, Jacques, Koenig, & Vandegeest, 1996）や，プレゼント遅延課題（Home Gift または Gift Delay; Kochanska et al., 1996）が代表的である。葛藤抑制の課題としては，クマ／ドラゴン課題（Bear and Dragon ; Kochanska et al., 1996）や，昼／夜ストループ課題（Day and night stroop task; Gerstad, Hong, & Diamond, 1994）が代表的である。従来の研究では，特に葛藤抑制の課題の成績と「心の理論」課題の成績の間に，年齢や言語能力を統制しても相関が残ることが示されてきた（Carlson & Moses, 2001; Carlson, Moses, & Breton, 2002; Carlson, Moses, & Claxton, 2004）。葛藤抑制と遅延抑制の相違点として，Carlson & Moses（2001）は，ワーキングメモリの存在を挙げている。葛藤抑制においては，2つまたはそれ以上の対立する思考や反応のうち，目立っており優勢である一方の情報を抑制し，他方の情報を活性化させる必要がある。このように複数の思考や反応の候補を頭の中で操作するためには，ある程度ワーキングメモリの容量が必要となる（Carlson & Moses, 2001）。Carlsonらの一連の研究では，ワーキングメモリの要因を統制しても，葛藤抑制は「心の理論」課題の成績を有意に予測することが示されている（Carlson et al., 2002, 2004）。

第2の認知的柔軟性とは，ある次元から別の次元へ思考を柔軟に切り替える（switching）能力といえる。「心の理論」課題に正答するために必要な推論システムは，判断の基準となる対立する視点のうち，一方の視点から推論を形成し，他方は無視するという，認知的に柔軟である能力としている。つまり，「心の理論」課題においては，現在の自分を基準とした思考から他者を基準とした思考へと柔軟に切り替えるという，認知的柔軟性の機能が必要となる。この認知的柔軟性を測定する課題としては，DCCS（Dimensional Change Card Sort; Frye, Zelazo, & Palfai, 1995）が挙げられる。これは，色と形という2つの次元の一方を基準としたカードの分類から，もう一方の次元を基準としたカードの分類への柔軟な切り替えが要求される課題である。年齢や言語能力を統制しても，DDCSの成績が「心の理論」課題の成績を有意に予測することがこれまでの研究から示されてきた（Frye et al., 1995; Müller, Zelazo & Imrisek, 2005）。DCCSは，初めに使用していた分類次元を抑制し，他方の次元を活性化させるという意味で，葛藤抑制の課題とも考えられている（e.g. Carlson & Moses, 2001）。

第3のワーキングメモリとは，入力される情報を処理しながら，一方で正確に保持しておき，必要なときに適切な情報を活性化させる能力である。従来の研究でワーキングメモリを測定するとされてきた課題のうち，「心の理論」課題と関連するものとしては，数逆唱スパン課題（Backward Digit Span; Davis & Pratt, 1995）や単語逆唱スパン課題（Backward Word Span; Carlson et al., 2002），数えとラベリング課題（Counting and Labeling task; Gordon & Olson, 1998）などが挙げられる。Davis & Pratt（1995）は，数逆唱課題と「心の理論」課題の成績の相関が高いことを示し，「心の理論」課題では，1つの課題状況やストーリーに対して，自己と他者，現実と誤信念といった複数の表象を保持しておく必要があるとしている。

しかし，日本においては，幼児期の実行機能の発達および「心の理論」と実行機能の関連性について検討した研究そのものが非常に少ない。新川（2004）は，実行機能の課題であるDCCSについて，欧米の研究結果と同様に，日本の幼児でも3歳児は最初の分類次元に固執し，分類次元を柔軟に切り替えることが困難であることを示した。実行機能と他者の心的状態推論の関連を検討した研究としては，子安・郷式・服部（2003）が，誤った信念課題に正答した幼児のほとんどが，4つの数字の順唱課題にも正答したという結果から，誤った信念課題はワーキングメモリを前提としているのではないかと考察

している。また，瀬野・加藤（2007）は，幼児が視覚的に目立った情報を抑制し，他者の知識について考慮することが困難であるということを「見ること―知ること」課題を用いて証明し，情報が目立たない状況においては，他者の知識を考慮することができるようになることから，目立った情報を抑制することが，年少の子どもにとって困難であるとしている。

ただし，「心の理論」課題と複数の実行機能の課題を同一の子どもに実施して関連を検討した研究はこれまでなく，日本においても「心の理論」課題の成績と実行機能の下位機能の間に，欧米と同様の関連がみられるかどうかについて検討がなされておらず，基礎的なデータを収集する必要がある。「心の理論」課題と実行機能の関連について，日本における基礎的なデータを収集する必要がある理由の1つに，近年，「心の理論」課題と実行機能の関連が，文化によらない普遍的なものであるのかを検討する研究が現れてきていることが挙げられる（Chasiotis, Kiessling, Campos, & Hofer, 2006; Sabbagh, Xu, Carlson, Moses, & Lee, 2006）。従来の研究から「心の理論」の能力は，言語能力やきょうだいの数，心的状態語の使用など実行機能以外の様々な要因からも説明されてきており，「心の理論」と実行機能との関連性が様々な文化においても頑健なものであるのかを検討することは，子どもの「心の理論」の発達を支える要因を明らかにしていく上で重要であるといえる。

Chasiotis et al.（2006）は，コスタリカ，カメルーンの子どもとドイツの子どもの「心の理論」と抑制制御の関連を検討し，カメルーンではドイツやコスタリカと比べて，葛藤抑制の成績と「心の理論」課題の成績が低いが，それぞれの文化において，両要因に強い関連がみられることを示した。また，中国の北京の子どもとアメリカの子どもの「心の理論」と抑制制御の関連を検討したSabbagh et al.（2006）では，中国の子どもは，アメリカの子どもと比較して，抑制制御課題の成績は高いが，「心の理論」課題の成績はアメリカの子どもと変わらないという異なった結果を示した。ただし，両国で「心の理論」と葛藤抑制との相関はみられており，関連の頑健さが示されている（Sabbagh, et al., 2006）。

近年，日本の幼児は欧米の子どもと比べて，「心の理論」課題に正答する年齢が遅れることが示されてきている（東山, 2007; Naito & Koyama, 2006; Wellman et al., 2001）。このような「心の理論」の文化差について，Naito & Koyama（2006）は，対人関係の文化差や，それぞれの文化において使用される言語の語用論的もしくは統語論的な違いから説明している。もし，日本の子どもの「心の理論」課題における成績の低さが，実行機能以外の社会的な要因の影響であるとするならば，日本の子どもの「心の理論」の発達に対する実行機能の役割が，欧米の文化とは異なる可能性があるとも考えられる。従って，「心の理論」と実行機能の関連がみられるのか，また関連があるのであれば，どのような下位機能が「心の理論」の発達に影響しているといえるのかを，日本の子どもを対象に検討することは意義深いと考えられる。

ところで，実行機能を測定するとされる課題は多岐にわたり，実行機能の下位機能について，概念的，機能的区分が明確ではなく，どの下位機能が「心の理論」と関連するのかについては，はっきりとした結論が得られていない（Perner & Lang, 1999）。郷式（2005）は，「心の理論」と実行機能の関係が明確にならないのは，実行機能も「心の理論」もいくつかの基本的な要素（下位過程）から成り立っているからではないかと指摘している。実行機能の各課題の中でも1つの課題に複数の下位機能が含まれる場合も多い。Carlson et al.（2002）においても葛藤抑制課題の成績とワーキングメモリ課題の成績との相関は年齢や知的能力などを統制しても有意であることが示されている。ただし，Carlson et al.（2002）の研究ではそもそも葛藤抑制とワーキングメモリは別の要因であるとして，各要因について複数の課題からそれぞれ得点を算出しており，葛藤抑制とワーキングメモリが区別可能な要因であるのかが検討されていない。従って，本研究では，実行機能の下位機能間の関連を検討するために因子分析を実施し，下位機能の独立性と関連性について検討した上で，「心の理論」との関連を検討していくこととする。

目　的

本研究の主要な目的は，これまで日本において検討されてこなかった，「心の理論」と実行機能の関連について，従来各下位機能の課題として用いられてきた複数の課題を行うことによって，検討することである。加えて，関連があるのであれば，実行機能の下位機能のうち何が「心の理論」と関連するのかを，因子分析を用いて下位機能の因子間の関連性および独立性を考慮した上で検討することである。

方　法

対象児

京都府内の保育園に通う幼児70名（男児42名，女児28名）を対象とした。内訳は，年少児24名（男児13名，女児11名；平均年齢3;10，範囲3;5-4;4），年中児22名（男児15名，女児7名；平均年齢4;11，範囲4;5-5;4），年長児24名（男児14名，女児10名；平均年齢5;10，範囲5;4-6;4）であり，実験参加の意思が確認できた幼児のみを対象とした。

手続き

実験は，実験者と記録者の2名で実施した。対象児に

は，保育園の一室に1人ずつ実験者と一緒に入室してもらい，実験者とは机をはさんで向かい合うように座ってもらった。最初に対象児の名前，年齢，誕生日を聞いて記録用紙に記入し，園での生活などについて話し，ラポールを形成した後，「心の理論」課題2課題，実行機能の課題6課題，言語能力を測定する課題としてWPPSI語彙理解テストを実施した。課題の実施順序は，対象児間でカウンターバランスをとった。1人あたりの所要時間は30～45分であった[1)]。各課題の終了後に，次の課題を続けてもよいかを確認し，了承が得られなかった場合はそこで実験を終了した。その結果，途中で終了した年少児1名と年中児1名は，後の結果からは省いた。

「心の理論」課題

誤った信念課題（Wimmer & Perner, 1983）　片手で動かせるライオンとゾウの人形，冷蔵庫と戸棚に見立てた2つの箱を使用し，ライオンが冷蔵庫（または戸棚）にブロックを入れて遊びに行くが，ライオンの不在中にゾウが戸棚（または冷蔵庫）にブロックを移し，その後ライオンが帰ってくるというストーリーを手人形で実演した。その後，以下の3つの質問を行った。他者信念質問：ライオンさんはまたブロックで遊びたいなと思っています。ライオンさんははじめにどこを探しますか。現実質問：ブロックは今どこにありますか。記憶質問：ライオンさんはお外に遊びに行くとき，どこにブロックを入れましたか。

スマーティ課題（Hogrefe et al., 1986）　子どもにポッキー（チョコレート菓子）の箱を呈示し，何が入っていると思うか予測してもらった。答えられない子どもには，ポッキーの箱であることを教えた。「開けてみるね」と言って箱を開けると，子どもの予測とは異なり中からペンが出てくるようになっていた。その後，ペンを箱に戻し，以下の3つの質問を行った。自己信念質問：はじめに箱を見たとき，〈対象児名〉ちゃんは何が入っていると思いましたか（正答はポッキー）。他者信念質問：ライオンさんはお外に遊びに行っていて箱の中に何が入っているのか見ていません。ライオンさんはこの箱を見たら何が入っていると思いますか（正答はポッキー）。現実質問：本当は何が入っていますか（正答はペン）。

実行機能課題

赤／青課題（白／黒課題（black-white（inhibitory）condition; Simpson & Riggs, 2005）を修正）　Gerstad et al.（1994）の昼／夜ストループ課題と類似の課題であり，葛藤抑制を測定する課題として選択した。子どもに赤色と青色の2枚の四角形のカードを紹介し，以下のように教示した。教示：「今からゲームをするよ。もし私が〈対象児名〉ちゃんに赤って言ったら，青いカードを指さしてね。もし，青って言ったら，赤いカードを指さしてね。用意はいいかな？」青5試行，赤5試行の計10試行をランダムに実施した。10試行中正しい反応を行った回数を得点とした。得点範囲は，0点から10点であった。

ハンドゲーム（Hughes, 1998）　ハンドゲームは葛藤抑制の機能を測定する課題として選択した。実験者が右手を使い，模倣試行，対立試行の順で実施した。模倣試行では，提示された2つのハンドアクションのうち1つを真似してもらうよう子どもに教示した。教示：「私がこんなふうにグーを出したら［実演］，〈対象児名〉ちゃんも同じようにグーを作ってください。私がこんなふうに指さしを出したら［実演］，〈対象児名〉ちゃんも同じように指さしをしてください。」模倣試行はグー3試行，指さし3試行の計6試行をランダムに実施した。模倣試行の後，対立試行として，子どもに今度は反対のハンドアクションを行うよう教示した。教示：「じゃあ，次は，私がグーを出したら，〈対象児名〉ちゃんは指さしをしてください。私が指さしを出したら，〈対象児名〉ちゃんはグーを作ってください。」グー5試行，指さし5試行を，ランダムに提示した。10試行中，正しい反応を行った回数を得点とした。得点範囲は0点から10点であった。

タワー課題（Kochanska et al., 1996）　タワー課題は遅延抑制を測定する課題として選択した。16個のブロックを子どもに提示し，子どもが実験者と交代でタワーを作るように教示した。教示：「今からブロックを使って，タワーを作りましょう。〈対象児名〉ちゃんのタワー，私のタワー，というふうに，それぞれがタワーを作ります。〈対象児名〉ちゃんと私が，ブロックを1つずつ順番交代に積んでいきます。じゃあ，先に〈対象児名〉ちゃんどうぞ。」子どもがブロックを置いても，実験者はすぐに交代せず，子どもが「先生の番」など言語的に交代する意思を示すか，10秒間ブロックを積まずに待つことができてから，交代した。子どもが実験者に順番を代わるごとに，1点とした。全ての実験者の順番を代わった場合，子どもの得点は8点であった。得点範囲は0点から8点であった。

DCCS（Frye et al., 1995）　DCCSは，認知的柔軟性または葛藤抑制を測定する課題として従来用いられてきた課題である。2枚のモデルカードを子どもに示した。1枚のカードには赤い花，もう1枚のカードには青い車が描かれていた。次に，実験者は2種類の分類カードを子どもに提示した。分類カードには，それぞれ赤い車と青い花が描かれており，モデルカードとは色と形の両次元で異なるカードであった。実験者はまず，子どもに6

1）WPPSI語彙理解課題において，年長児や年中児と比較して年少児のほうが質問数が多くなるため，年少児の実施時間のほうが長くなる傾向があったが，1人あたりの全所要時間はおよそ35分程度であったと考えられる。

枚のカードを1つの次元（色か形で，カウンターバランスをとった）に基づいて分類するように教示した。教示：「今からこのカードを形（または色）で分けてもらいます。（モデルカードを指さしながら）ここの形（色）と同じ形（色）の描いてあるカードを，それぞれ白い紙のところに置いてください。」

もし，子どもが6枚のカードを最初の分類次元に基づき正しく分類したら，分類次元を変えた。教示：「よくできました。じゃあ今度は色（形）でカードを分けてください。」

分類基準を切り替える前と後の両段階において，実験者はランダムにカードを選び，「これは赤い（車の）カードだよ」，「これは青い（花の）カードだよ」と，分類基準と関連する次元だけを言語化した。そして子どもに，「色（形）のゲームでは，このカードはどこへ行くかな」と質問しながらカードを渡した。子どもはスイッチ後の段階で8枚のカードを分類し，正しく分類したカードの枚数が得点となった。得点範囲は0点から8点であった。

単語逆唱スパン課題（Carlson et al., 2002） ワーキングメモリを測定する課題として選択した。実験者は，子どもに逆の順番で単語のリストを復唱するよう教示した。逆唱する単語と同じ数の紙片を机に置き，実験者は紙片のそれぞれを指さしながら，単語リストの単語を言った。リストを読み終えると，子どもは，逆の順番で紙片を指さしながら，実験者の言ったことを復唱するよう教示された。子どもの理解を確実にするために，ライオンの手人形を用い，ライオンに逆唱させる手本を示した後で，練習試行を実施した。教示：「これから私がここにある紙を指さししながら，〈対象児名〉ちゃんに言葉を言っていきます。〈対象児名〉ちゃんはその言葉を私とは反対の順番で言ってください。今から私（実験者）とライオンさんでやってみるので，見ていてください。後で，〈対象児名〉ちゃんもライオンさんがするみたいにしてもらいます。」といって，手本を示した。その後，練習試行に入った。手本と同様に「りんご，いぬ」の2単語を用い，練習を行った。子どもが間違えたり，無反応だった場合には，「この紙を指さしたときは『いぬ』，この紙を指さしたときは『りんご』って言いました。反対の順番で言ってみましょう。」と言って，練習を繰り返した。練習試行で子どもが正答したら，本試行へと進んだ。

本試行では2単語のリストを2試行，3単語を2試行，4単語を2試行……というように進めていった。単語リストの長さは2単語から5単語まであり，2試行のうち1試行に正答したら，単語数を増やしていった。課題で用いた単語をTable 1に示した。単語は，幼児が理解できると考えられるもので，かつ単語リストの中で，同じ範疇（動物・道具など）の単語が含まれないように選定した[2]。逆唱スパンの得点は，子どもが再生できる最大の単語数であり，範囲は1点（2単語に失敗）から5点であった。

Table 1 *単語逆唱スパン課題で使用した単語*

練習試行	りんご - いぬ
2単語	おふろ - たいよう
	ぶた - ほん
3単語	スプーン - ねこ - とけい
	いえ - テーブル - バナナ
4単語	えんぴつ - くま - でんしゃ - おもちゃ
	とら - くつ - コップ - ほし
5単語	て - ラジオ - ライオン - じてんしゃ - き
	くるま - さかな - ペン - まど - ボール

8ボックス課題（Diamond, Prevor, Callender, & Druin, 1997を修正） ワーキングメモリを測定する課題として選択した。色と模様が異なる8つの箱を子どもに提示し，以下のように教示した。教示：「ここにある小さい箱は，全部違う色で違う模様をしていますね。それぞれの箱の中にはシールが入っています。シールを見つけたら，そのシールは〈対象児名〉ちゃんのものになって，お家に持って帰れます。このゲームで，〈対象児名〉ちゃんは，シールの入っている箱を開けられるようにがんばってください。面白くなるように〈対象児名〉ちゃんが1回箱を開けるごとに，その後で〈対象児名〉ちゃんに目をつぶってもらって，私が箱を動かします。シールの入った箱を見つけてください。」

子どもが最初の箱を開けた後で，子どもに目をつぶってもらい，箱の位置を動かした。その後，次の試行に進んだ。箱のふたの色と模様は1つずつすべて違うものだった。子どもが箱を開けたときはいつでも，実験者は開けられた箱のふたを閉め，子どもが目をつぶっていることを確認してから箱を動かした。課題は，子どもが全てのシールを見つけるか，続けて5回空の箱を開けるまで続けた。先行研究に基づき，はじめの9試行のうちシールを見つけた試行数を得点とした[3]。得点範囲は，1点から8点であった。

2）単語逆唱スパン課題で使用した単語のうち，「おふろ」「たいよう」「いえ」「まど」の4単語を除く全ての単語は，幼児・児童の連想語彙表（国立国語研究所，1981）において，範疇または頭語から幼児が連想する語彙に含まれていた。「おふろ」「たいよう」「いえ」「まど」についても，実験者が単語を言った後に，対象児から意味を質問された単語はなく，幼児が日常よく接している単語であると考えられるため，選定は妥当であったといえる。

3）はじめの8試行中1試行のみ一度開けた箱を開けて失敗するという反応が多くみられ（68名中29名），その後，続いての9試行目で成功する子どもと，失敗し続ける子どもの2つの反応傾向に分かれた。ワーキングメモリ容量を測定する課題として，この2つの傾向を区別するため，はじめの9試行を対象とした得点化を行った。

WPPSI語彙理解テスト

4つの絵が描いてあるカードを子どもに呈示し，以下のように教示を行った。教示：「今から私がこの絵の中の1つの名前を言います。〈対象児名〉ちゃんはそれを指さして答えてください。」カードは全部で22枚あり，1枚目から先に進むにつれて，難易度が徐々に上がっていった。年齢によって，実施する枚数が異なっており，3歳児は，1枚目から，4，5歳児は6枚目から，6歳児は16枚目から実施した。4歳以降は，最初の2問を連続で正答しなかった場合，難易度の低いカードへ戻り2問連続で正答するまで，徐々に難易度を低くしていった。2問連続で正答すると，また難易度の高いカードに戻り，誤答したカードの次のカードから始めた。全てのカードを答え終えるか，5問連続で誤答するまでテストを続けた。得点範囲は，0点から22点であった。途中のカードから始めた年齢群の成績については，それ以前の難易度の低いカードには正答したものとして得点化を行った。

結　　果

「心の理論」課題の結果

「心の理論」課題2課題とも，子安・服部・郷式（2000）と同様に，他者信念質問，現実質問，記憶質問（スマーティ課題では自己信念質問）の3つの質問のすべてに正答した場合のみ，課題に正答したと考えた。これは，単に2つの選択肢（誤った信念課題なら冷蔵庫と戸棚，スマーティ課題ならポッキーとペン）のうち偶然いずれか一方を選ぶことで，他者信念質問に正答するという可能性を避けるためであった。

両課題における年齢群ごとの正答の人数を，Table 2に示した。誤った信念課題の正答率に発達的変化があるかどうかを調べるために，正答を1点，誤答を0点として，各年齢群における平均得点を算出し，分散分析を行った。その結果，年齢群による成績の差は有意であった（$F(2, 65) = 7.16, p<.01$）。ライアン法による多重比較の結果，年少児より年長児，年中児より年長児の成績が高かった（$t(65) = 3.66, p<.01, t(65) = 2.59, p<.05$）。

同様に，スマーティ課題も得点化し，分散分析を行った。その結果，年齢群間の差は有意ではなかった（$F(2, 65) = 1.61$, *n.s.*）。また，両課題とも性別による成績の差はみられなかった（誤った信念；$t(66) = 0.86$, *n.s.*，スマーティ；$t(66) = 1.50$, *n.s.*）。

実行機能課題等の結果

実行機能課題とWPPSI語彙理解テストの得点範囲，年齢群ごとの平均得点をTable 3に示した。各課題で，平均得点の発達的変化があるかどうかを調べるために分散分析を行った。その結果，赤／青課題（$F(2, 65) = 14.91$,

Table 2 *「心の理論」課題の正答人数（正答率）と年齢群差*

	年少児 (n=23)	年中児 (n=21)	年長児 (n=24)	合計 (n=68)	年齢群差 (F値)
誤信念	9 (39.13)	11 (52.38)	21 (87.50)	41 (60.29)	7.16**
スマーティ	2 (8.70)	5 (23.81)	7 (29.17)	14 (20.59)	1.61 *n.s.*

注．**$p<.01$

Table 3 *実行機能課題とWPPSI語彙理解テストの平均得点およびSDと年齢群差*

	得点範囲	年少児 (n=23)	年中児 (n=21)	年長児 (n=24)	年齢群差 (F値)	年齢群間の比較（t値） 年少<年中	年少<年長	年中<年長
赤／青課題	0-10	4.96 (3.98)	7.52 (2.13)	9.29 (1.02)	14.91**	3.11**	5.44**	2.17 *n.s.*
ハンドゲーム	0-10	7.26 (2.03)	8.05 (2.15)	9.00 (1.04)	5.33**	1.43 *n.s.*	3.26**	1.74 *n.s.*
DCCS	0-8	2.74 (3.40)	4.86 (3.83)	7.00 (2.65)	9.33**	2.08 *n.s.*	4.32**	2.12 *n.s.*
タワー課題	0-8	5.09 (3.24)	6.57 (2.40)	6.63 (2.66)	2.13 *n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*
単語逆唱	1-5	1.91 (0.88)	2.19 (0.79)	2.83 (0.80)	7.34**	1.09 *n.s.*	3.73**	2.55**
8ボックス	1-8	6.78 (1.02)	6.90 (0.97)	7.41 (0.70)	3.11†	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*
WPPSI	0-22	15.4 (2.08)	17.1 (2.23)	18.60 (1.93)	12.88**	2.66**	5.07**	2.27*

注．カッコ内は*SD*.
†$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$

Table 4　*課題間の相関係数および偏相関係数（$n=68$）*

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1．誤信念	—	.19	.31**	.14	-.08	.38**	.42**	.29*	.35**
2．スマーティ	*.07*	—	.24†	.04	.01	.13	.06	.21	.35**
3．赤／青課題	*.04*	*.08*	—	.48**	.29*	.48**	.45**	.27*	.48**
4．ハンドゲーム	*-.07*	*-.11*	*.29**	—	.02	.37**	.35**	.22†	.36**
5．タワー課題	*-.18*	*-.07*	*.24†*	*-.07*	—	.23†	.24*	.21†	.20†
6．DCCS	*.21†*	*-.00*	*.28**	*.21†*	*.18*	—	.30*	.30*	.36**
7．単語逆唱	*.25**	*-.17*	*.20*	*.16*	*.16*	*.08*	—	.27*	.53**
8．8ボックス	*.19*	*.07*	*.10*	*.09*	*.15*	*.20*	*.07*	—	.41**
9．WPPSI	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注．下半分のイタリックの数値は，月齢とWPPSI（言語能力）の成績を統制した際の偏相関係数。
†$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$

$p<.01$），ハンドゲーム（$F(2, 65)=5.33, p<.01$），DCCS（$F(2, 65)=9.33, p<.01$），単語逆唱スパン課題（$F(2, 65)=7.34, p<.01$），WPPSI語彙理解テスト（$F(2, 65)=12.88, p<.01$）では年齢群による成績の差は有意であった。ライアン法による多重比較の結果，赤／青課題と単語逆唱スパン課題では，年少児より年中児および年長児の得点が有意に高く，ハンドゲームとDCCSでは年少児より年長児の得点が高かった。WPPSI語彙理解テストでは，全ての年齢群間に差がみられ，年少児よりも年中児，年中児よりも年長児の成績が高かった。8ボックス課題では，年齢群による成績の差は有意傾向であった（$F(2, 65)=3.11, p<.10$）。タワー課題では，年齢群による成績の差は有意ではなかった（$F(2, 65)=2.02$, n.s.）。また，8ボックス課題でのみ，性別による成績差が有意であり，男児よりも女児の成績が高かった（$t(66)=2.08, p<.05$）。

各課題間の関連

各課題間の単相関と，月齢と言語能力（WPPSIの成績）を統制した際の偏相関をTable 4に示した。偏相関の結果，月齢と言語能力を統制しても，誤った信念課題との相関が有意だったのは，単語逆唱スパン課題であった。また，DCCSとの相関が有意傾向だった。実行機能課題間で，月齢と言語能力を統制しても有意だったのは，赤／青課題とハンドゲーム，DCCSの相関であり，赤／青課題とタワー課題，ハンドゲームとDCCSの相関は有意傾向であった。

実行機能の下位機能における独立性と関連性の検討

「心の理論」課題の成績と，実行機能課題の下位機能との関連を調べるために，はじめに実行機能の課題が，実際に従来の研究で想定されてきた下位機能に分かれるかどうかを検討した。実行機能の課題について，最尤法，プロマックス回転による探索的因子分析を行ったところ，タワー課題とそれ以外の課題（赤／青課題，ハンドゲーム，DCCS，単語逆唱課題，8ボックス課題）という2因子に分かれた。各課題の因子負荷量はTable 5の通りであった。第Ⅰ因子と第Ⅱ因子の因子間相関は，$r=.35$であった。

さらに，実行機能課題の下位機能の独立性および関連性を検討するために，Amos 5を使用したSEM（構造方程式モデリング）による検証的因子分析を行った。想定したモデル，および分析結果をFigure 1に示した。赤／青課題，ハンドゲーム，DCCSを「葛藤抑制因子」，単語逆唱スパン課題，8ボックス課題を「ワーキングメモリ因子」，タワー課題は，1課題のみであるが，「遅延抑制因子」と解釈した。このモデルは先行研究から想定される下位機能をもとに作成した。適合度の検定により，モデルの当てはまりは良いことがわかった（$\chi^2=5.57$, $df=7$, *n.s.*, GFI =.97, AGFI =.92, RMSEA =.00）。因子間の相関は，葛藤抑制と遅延抑制の間では$r=.30$，葛藤抑制とワーキングメモリの間では$r=.87$，遅延抑制とワーキングメモリの間では，$r=.41$となった。

「心の理論」と実行機能の下位機能との関連

Figure 1のモデルをもとに導出された因子負荷量から，葛藤抑制因子，ワーキングメモリ因子の因子得点を算出した。Figure 1の3因子の得点と，月齢，言語能力（WPPSIの得点）を説明変数，誤った信念課題とスマーティ課題の正答，誤答をそれぞれ目的変数として，ロジスティッ

Table 5　*実行機能課題の因子分析結果（プロマックス回転後の因子負荷量）*

	Ⅰ	Ⅱ	共通性
ハンドゲーム	.75	-.25	.49
赤／青課題	.75	.10	.60
DCCS	.57	.09	.37
単語逆唱	.52	.12	.33
8ボックス	.33	.15	.17
タワー課題	.01	.78	.62
因子寄与	1.92	.99	

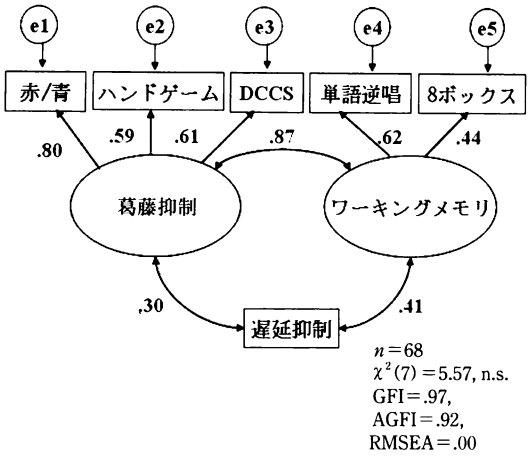


Figure 1 *実行機能課題の因子モデルおよび検証的因子分析の結果*

（タワー課題は1課題のみであったが，遅延抑制因子と解釈した。）

ク回帰分析を行った。その結果，ワーキングメモリ因子の得点が誤った信念課題の成績を有意に予測することが示された（係数＝5.11，オッズ比＝165.58, *Wald*＝5.02, $df=1, p<.05$）。また，WPPSIの得点が有意にスマーティ課題の成績を予測することが示された（係数＝0.54，オッズ比＝1.72, *Wald*＝5.68, $df=1, p<.05$）が，スマーティ課題においては，3因子との関連を見出すことができなかった。ただし，Figure 1に示したように，ワーキングメモリ因子と葛藤抑制因子の因子間相関が非常に高い（$r=.87$）ため，多重共線性があることが考えられる。そのため，葛藤抑制因子の得点を統制して，「心の理論」課題2課題と，ワーキングメモリ因子得点，単語逆唱課題，8ボックス課題との偏相関係数を算出した。結果，誤った信念課題と単語逆唱スパン課題の間にのみ有意な正の相関がみられた（$r=.24, p<.05$）。加えて，ワーキングメモリ因子の得点を統制して，「心の理論」課題2課題と，葛藤抑制因子得点，赤／青課題，ハンドゲーム，DCCSとの偏相関係数を算出した。結果，誤った信念課題やスマーティ課題と関連する変数はなかった。

考　　察

「心の理論」課題

誤った信念課題においては，3歳から6歳へと年齢が上がるにつれて，正答する子どもが多くなるという，従来の結果（Wimmer & Perner, 1983；子安，1997；子安ほか，2003）が追認された。年少児23名中5名，年中児21名中2名を除く全員が現実質問と記憶質問には正答できていたことから，誤った信念課題に正答できないのは，特に他者信念質問の難しさのためであると考えられる。年齢ごとの誤った信念課題の正答率は，4歳児で47.01％（17名中8名），5歳児で73.91％（23名中17名）であった[4]。Naito & Koyama（2006）によると，イギリスの子どもは3歳6ヶ月から4歳6ヶ月の間に正答率が急速に上昇し，4歳6ヵ月の時点で80％にまで到達することがわかっており，それと比較すると本研究の正答率はかなり低いといえる。これは，日本の幼児では6歳頃になるまで誤った信念課題に対して安定した反応が得られないというNaito & Koyama（2006）の結果と整合していると考えられる。

一方，スマーティ課題は年少児から年長児にかけて全体的に成績が低く，年齢群による成績の差はみられなかった。日本の先行研究でも同様に，年齢群による成績差がみられない研究が存在する（e.g.郷式，1999）。このような結果になった理由として，スマーティ課題特有の難しさが関係していると考えられる。第1に，スマーティ課題で使用したポッキーの箱について，箱を見せても「何が入っているかわからない」と答える子どもが多かったことが挙げられる[5]。この点については，東（1994）が指摘しているように，日本の子どもは相手の意図を推し量る傾向が強く，箱にポッキーの写真が入っているにもかかわらず，実験者に中身をたずねられたため，子どもが実験者の意図を図りかねて答えにつまっていたり，別のものが入っているということを実験者から察して「わからない」と反応した可能性がある。第2に，スマーティ課題においては，他者を誰とするかによって成績が異なってくる（遠藤，1997）という指摘がある。第3に，自己信念質問は，記憶質問とは異なる独特の難しさがあることが指摘されている（郷式，1999, 2000；Gopnik & Astington, 1988）。本研究でも，誤った信念課題との相関も低く（$r=.19$），スマーティ課題を実施する際には，手続き上の注意点や，日本の子どもの実験状況に対する認識を考慮した上で実施していかなければならなかったと考えられる[6]。

4）4歳児17名は，平均年齢4;5，年齢範囲4;1～4;11であり，5歳児23名は，平均年齢5;4，年齢範囲は5;0～5;10であった。

5）「わからない」と答えた子どもは，年少児23名中5名（21.74％），年中児21名中5名（23.81％），年長児24名中11名（45.83％）であり，年齢群間で差はみられなかった（$\chi^2(2)=3.91$, *n.s.*）。子安（1997）では，ポッキーの箱を見せ，「この中に何が入っていると思いますか」と質問した際，「ポッキー」や「チョコレート」と答えない子どもが年少児で11.8％，年中児で37.2％，年長児で28.2％存在した。このことから，先行研究においても，通常の中身以外の回答をする子どもがいることがわかる。

6）実験終了後に，対象児には「まだお話しをしていないお友達には，何をしたのかお話ししないようにして下さい」とお願いしていたが，先に実験を終えた対象児から，まだ実験を実施していない対象児に，ポッキーの箱の中身についての情報が伝えられていた可能性もある。このことが「わからない」と答える子どもを増やした可能性もあると考えられる。

実行機能課題

実行機能課題は，Table 3にあるように，ほとんどの課題で年齢が上がるにつれて成績が上昇した。特に，赤／青課題や，ハンドゲーム，DCCS，単語逆唱スパン課題は年少児から年長児にかけて年齢群による成績差がはっきりとみられた。この結果は，これらの課題の成績が3歳から5歳にかけて上昇するという欧米での先行研究（Carlson, 2005）ともほぼ一貫したものであり，日本においてもこれらの葛藤抑制やワーキングメモリの能力が幼児期の間に発達することが示唆された。これに対し，8ボックス課題では，年齢群による差は有意傾向であったものの，全体的に成績が高く，天井効果がみられた。8ボックス課題は，箱を置き換えるために目をつぶってもらう時間などが一定ではなく，遅延時間などを設けていなかったため，先行研究よりも容易な課題になっていた可能性がある。また，タワー課題は，年齢差よりも個人差が大きく，どの年齢群間でも得点に差はみられなかった。これは，3歳後半児と4歳前半児で成績に差がみられるとする先行研究（Carlson, 2005）とは異なる結果であった[7]。従って，日本の子どもの遅延抑制は，欧米の子どものように年齢による発達を示すのではなく，年少の子どもでも衝動的な反応の抑制に関して個人差が大きいことが示唆された。

また，実行機能の下位機能について，探索的因子分析の結果からは，タワー課題，つまり遅延抑制の因子と，それ以外の機能をまとめた因子という2つの因子にしか分かれず，ワーキングメモリや葛藤抑制といった下位機能を抽出することはできなかった。そこで，従来の研究に基づくモデル（Figure 1）を仮定し，検証的因子分析を行ったところ，モデルの適合度は高く，モデルの妥当性が示された。従って，実行機能は「葛藤抑制」，「遅延抑制」，「ワーキングメモリ」の少なくとも3つの下位機能に分類できることがわかった。各下位機能の関連として，遅延抑制とワーキングメモリ，葛藤抑制との間には中程度の関連がみられ，共通する機能では説明できない独自の機能があることが示唆された。一方，葛藤抑制とワーキングメモリの間の相関は非常に高く，2因子間には共通する機能が多く含まれていると考えられる。この関連に対して，Carlson & Moses (2001) は，葛藤抑制では複数の思考を頭の中で保持しておく能力が必要となるため，性質上，ワーキングメモリの容量を必要としている，としている。従って，1つの課題状況に対して，自己視点を抑制し，他者視点を活性化させる能力には，そのような複数の視点を1つの課題状況に対して同時に操作することを可能にするワーキングメモリ容量が必要であると考えられる。本研究の結果からは，幼児期の葛藤抑制の機能はその多くがワーキングメモリによって説明される可能性があることが示唆された。

「心の理論」と実行機能の関連

「心の理論」課題と実行機能の関連性について，結果から，スマーティ課題は実行機能とは関連がみられなかったため，以下では，誤った信念課題と実行機能の関連について考察する。偏相関およびロジスティック回帰分析の結果から，誤った信念課題とワーキングメモリ課題，特に単語逆唱スパン課題との関連が強いことが示された。この関連は，葛藤抑制因子の得点を統制しても残った。この結果は，Davis & Pratt (1995) の結果と一致するものである。では，なぜ誤った信念課題とワーキングメモリの能力が関連したのだろうか。誤った信念課題では，ストーリーを聞き，理解しながら，ストーリー中のさまざまな情報を保持したり，1つのストーリーの中に，過去と現在，自己と他者などの複数の情報を意識しておく必要がある。このような情報の保持と操作の役割を担っているのがワーキングメモリであり，この容量がある程度大きいことが，他者信念質問に正答するためには必要となると考えられる。

しかし，Carlson & Moses (2001) や Carlson et al. (2002, 2004) の一連の研究で示されてきたような誤った信念課題と葛藤抑制課題との強い関連はみられなかった。この点に関しては，2つの可能性が考えられる。1つは，日本の子どもにおいては，葛藤抑制が「心の理論」の発達と関連しないということである。Naito & Koyama (2006) は，欧米では個人を独立したものとしてとらえ，他者の行為を個人の内的な過程から推測しているのに対し，日本では，個人が他者によって様々に規定される相互依存的な対人関係の性質を重視し，他者の行為を状況や対人関係から推測している可能性について指摘している。誤った信念課題では，他者の「対象を見つけたい」という意図が明示されている。従って，日本の幼児は誤った信念課題を，自分は知っているが他者は知らないという「葛藤する」情報を扱う状況というよりも，対象の正しい位置という「他者と共有されるべき」情報を扱う状況として認識している可能性がある。もしそうであるならば，対象の正しい位置という情報は子どもにとって抑制する必要のないものになっているのではないだろうか。このように考えると，日本の子どもでは，自分と他者の考えや目的の差異がより明確に示されている課題のほうが，葛藤抑制の機能を働かせやすいのかも知れない。

2つ目の可能性としては，葛藤抑制との関連が実際にはあるが，本研究ではそれがワーキングメモリの能力で説明されてしまい，関連性を明らかにすることができなかったということが考えられる。実験における課題選択

7) タワー課題において，本研究の対象児である3歳後半児16名（平均年齢3;8，年齢範囲3;5～3;11）と4歳児17名（平均年齢4;5，年齢範囲4;1～4;11）の成績を比較しても，年齢による成績の差を見出すことができなかった（$t(31)=.41$, *n.s.*）。

や実施上の問題が影響して，葛藤抑制とワーキングメモリの要因を抽出することができていなかった可能性がある。もし仮に純粋に葛藤抑制のみを取り出すことができれば，自己視点を抑制し，他者視点を考慮するという抑制，および切り替えの能力が，日本の子どもの他者の誤った信念の理解に関連するかどうかを検証することが可能になるといえる。

問題と今後の課題

本研究では，日本においても欧米の先行研究と同様に他者の誤信念理解と実行機能の関連が示された。ただし，先行研究のように，抑制課題との高い相関を追認することはできなかった。この原因の1つとして，子どもに30～45分という長い時間をかけて多くの課題を一度に実施した点が挙げられる。Perner, Lang, & Kloo (2002) でも子どもに長時間課題を実施した場合，相関が弱くなることが示されている。本研究における実施時間は約35分であり，先行研究の時間と同程度であると考えられるが，本来であれば，一度の実施ではなく，2つのセッションに分けて実施するなどの工夫が必要であったとも考えられる。

今後の課題としては，まず，実行機能の下位機能と「心の理論」課題の関連についてより詳細に検討していくことが挙げられる。そのための方法として，「心の理論」課題の課題分析を行い，課題中のどの時点で，実行機能のどの下位機能を必要とするのかを検討していくことが挙げられる。別の方法としては，各下位機能について複数の課題を選定した上で，1つの下位機能と「心の理論」課題との関連を検討することが挙げられる。純粋な下位機能の能力を抽出しようとする場合，課題を遂行する際に，目的となる下位機能を必要とするが，反応の仕方などの手続きは大きく異なるような課題（例えば下位機能として抑制制御を抽出したいのであれば，遂行に抑制を必要とする課題であるが，反応の仕方は言語反応や指さし反応など異なる課題）を3課題程度行うことが妥当であると考えられる（Miyake, Friedman, Emerson, Witzki, Howerter, & Wager, 2000）。

文　献

東　洋．(1994)．シリーズ人間の発達12　*日本人のしつけと教育――発達の日米比較にもとづいて*．東京：東京大学出版会．

Carlson, S. M. (2005). Developmentally sensitive measures of executive function in preschool children. *Developmental Neuropsychology*, **28**, 595-616.

Carlson, S. M., & Moses, L. J. (2001). Individual differences in inhibitory control and children's theory of mind. *Child Development*, **72**, 1032-1053.

Carlson, S. M., Moses, L. J., & Breton, C. (2002). How specific is the relation between executive function and theory of mind? Contributions of inhibitory control and working memory. *Infant and Child Development*, **11**, 73-92.

Carlson, S. M., Moses, L. J., & Claxton, L. J. (2004). Individual differences in executive functioning and theory of mind: An investigation of inhibitory control and planning ability. *Journal of Experimental Child Psychology*, **87**, 299-319.

Chasiotis, A., Kiessling, F., Campos, D., & Hofer, J. (2006). Theory of mind and inhibitory control in three cultures: Conflict inhibition predicts false belief understanding in Germany, Costa Rica and Cameroon. *International Journal of Behavioral Development*, **30**, 249-260.

Davis, H. L., & Pratt, C. (1995). The development of children's theory of mind: The working memory explanation. *Australian Journal of Psychology*, **47**, 25-31.

Diamond, A., Prevor, M. B., Callendar, G., & Druin, D. P. (1997). Prefrontal cognitive deficits in children treated early and continuously for PKU. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **62**.

遠藤利彦．(1997)．乳幼児期における自己と他者，そして心――関係性，自他の理解，および心の理論の関連性を探る．*心理学評論*，**40**，57-77.

Frye, D., Zelazo, P.D., & Palfai, T. (1995). Theory of mind and rule-based reasoning. *Cognitive Development*, **10**, 483-527.

Gerstadt, C. L., Hong, Y. J., & Diamond, A. (1994). The relationship between cognition and action: Performance of children 3.5-7 years old on a Stroop-like day-night test. *Cognition*, **53**, 129-153.

Gopnik, A., & Astington, J. W. (1988). Children's understanding of representational change and its relation to the understanding of false belief and the appearance-reality distinction. *Child Development*, **59**, 26-37.

Gordon, A. C. L., & Olson, D. R. (1998). The relation between acquisition of a theory of mind and the capacity to hold in mind. *Journal of Experimental Child Psychology*, **68**, 70-83.

郷式　徹．(1999)．幼児における自分の心と他者の心の理解――「心の理論」課題を用いて．*教育心理学研究*，**47**，354-363.

郷式　徹．(2000)．数量化1類による自己信念変化課題の記憶質問正答率のメタ分析．*心理学評論*，**43**，456-475.

郷式　徹．(2005)．*幼児期の自己理解の発達*．京都：ナカニシヤ出版．

東山　薫．(2007)．"心の理論"の多面性の発達――Wellman & Liu尺度と誤答の分析．*教育心理学研究*，**55**，

359-369.

Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. (1986). Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, **57**, 567-582.

Hughes, C. (1998). Executive function in preschoolers: Links with theory of mind and verbal ability. *British Journal of Developmental Psychology*, **16**, 233-253.

Kochanska, C., Murray, K., Jacques, T. Y., Koenig, A. L., & Vandegeest, K. A. (1996). Inhibitory control in young children and its role in emerging internalization. *Child Development*, **67**, 490-507.

国立国語研究所. (1981). *幼児・児童の連想語彙表*. 東京：東京書籍.

子安増生. (1997). 幼児の「心の理論」の発達――心の表象と写真の表象の比較. *心理学評論*, **40**, 97-109.

子安増生. (1999). *幼児期の他者理解の発達――心のモジュール説による心理学的検討*. 京都：京都大学学術出版会.

子安増生・郷式　徹・服部敬子. (2003). 縦割り保育の幼稚園における「心の理論」および関連する能力の縦断的研究. *京都大学大学院教育学研究科紀要第49号*, 京都大学, 京都, 1-21.

子安増生・服部敬子・郷式　徹. (2000).「心の理論」獲得前後の他者の心の理解過程――事例分析による検討. *京都大学大学院教育学研究科紀要第46号*, 京都大学, 京都, 1-25.

子安増生・木下孝司. (1997). 〈心の理論〉研究の展望. *心理学研究*, **68**, 51-67.

Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, A. H., Howerter, A., & Wager, T. D. (2000). The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex "frontal lobe" tasks: A latent variable analysis. *Cognitive Psychology*, **41**, 49-100.

Müller, U., Zelazo, P. D., &, Imrisek, S. (2005). Understanding false belief and executive function: How specific is the relation? *Cognitive Development*, **20**, 173-189.

Naito, M., & Koyama, K. (2006). The development of false-belief understanding in Japanese children: Delay and difference? *International Journal of Behavioral Development*, **30**, 290-304.

Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: MIT Press.

Perner, J., & Lang, B. (1999). Development of theory of mind and executive control. *Trends in Cognitive Science*. **3**, 337-344.

Perner, J., Lang, B., & Kloo, D. (2002). Theory of mind and self control: More than a common problem of inhibition. *Child Development*, **73**, 752-767.

Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Science*, **1**, 515-526.

Sabbagh, M. A., Xu, F., Carlson, S. M., Moses, L. J., & Lee, K. (2006). The development of executive functioning and theory of mind: A comparison of Chinese and U.S. Preschoolers. *Psychological Science*, **17**, 74-81.

瀬野由衣・加藤義信. (2007). 幼児は「知る」という心的状態をどのように理解するようになるか？：「見ること―知ること」課題で現れる行為反応に着目して. *発達心理学研究*, **18**, 1-12.

新川貴紀. (2004). 幼児の実行機能の発達. *日本教育心理学会第45回総会発表論文集*, 352.

Simpson, A., & Riggs, K. J. (2005). Inhibitory and working memory demands of the day-night task in children. *British Journal of Developmental Psychology*, **10**, 1-17.

Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, **72**, 655-684.

Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

付記

実験にご協力いただきました保育園の先生方と園児の皆様に心より御礼申し上げます。また，実験調査の補助をしていただきました京都大学大学院教育学研究科の院生の方々に深く感謝いたします。

Ogawa, Ayako (Graduate School of Education, Kyoto University) & Koyasu, Masuo (Graduate School of Education, Kyoto University). *The Relation between Components of Executive Function and Theory of Mind in Young Children.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 171-182.

Recent research on children's developing theory of mind (ToM) has identified the development of executive function (EF) as an essential factor that contributes to children's developing understanding of false belief (Carlson & Moses, 2001; Perner & Lang, 1999). Two particular aspects of EF (conflict inhibition and working memory), contribute to ToM, but no study had shown any relationship between ToM and EF in Japan. The present study examined aspects of EF as related to understanding of false belief in Japanese young children. Seventy children, ages 3 to 6, were given two false belief tasks, a receptive vocabulary task, and six EF tasks. The results showed that working memory was significantly related to ToM, after age and receptive vocabulary were controlled. In addition, there was a strong correlation between conflict inhibition and working memory factors. These findings suggested that conflict inhibition requires a substantial amount of working memory capacity, and that working memory capacity enables young children to operate with multiple representations in one task situation.

【Key Words】 Theory of mind, Executive function, Working memory, Conflict inhibition, Confirmatory factor analysis

2007. 3. 30 受稿, 2008. 4. 18 受理

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，183-193

原　著

統合学童保育の巡回相談に求められる支援ニーズ：都内のある自治体における学童保育指導員への質問紙調査から

三山　岳
（東京都立大学大学院人文科学研究科）

本研究は統合学童保育における巡回相談の支援ニーズの把握を目的として，支援内容の整理およびその構造化を行った。ニーズ概念を理論的に再検討し，felt needsやnormative needsを反映させるための予備調査を行って，33項目からなる質問紙を作成した。102名の学童保育指導員による回答を分析した結果，「ニーズの切実さ」の観点から①基礎的ニーズ，②要配慮ニーズ，③要改善ニーズという3種類のニーズの存在が示された。また巡回相談の支援内容は①専門領域間での連携，②保育力量の形成，③保護者との協力連携，④障害児に対応した保育，⑤アセスメントと報告という5つの領域に整理された。さらに3種類のニーズと5つの支援領域を関連づけることで，各領域ごとの支援ニーズ特性が明らかとなった。このようにニーズ概念を整理し，支援ニーズ特性を把握することで，保育現場の多様なニーズが整理され，巡回相談において迅速かつ有効な支援が可能になることが指摘された。

【キー・ワード】 巡回相談，放課後児童クラブ，統合学童保育，支援ニーズ

問題と目的

現在の学童保育では約半数（47.7％）の自治体が障害児を受け入れており，約7,200人の障害児が学童保育所で生活している。しかし正規職員に加えて配属される加配職員の採用や，補助金を交付する自治体は全体の6割に満たない（全国学童保育連絡協議会，2003）。学童保育指導員（以下，指導員）の多くは十分な援助がないまま，不安と戸惑いを感じながら障害児の学童保育（統合学童保育）を行っているのが現状である[1]（西本，2002）。

このため学童保育所は様々な支援を必要としている。特に職員研修の拡充，加配職員の配置，専門家による巡回相談の整備などの支援は急務とされる[2]（大崎，2000）。このうち発達臨床を専門とした心理職による巡回相談の期待は大きく（浜谷，2006），学童保育での実践報告も見られるようになった（三山，2006）。こうした発達心理学に基づく現場支援は臨床発達的支援として位置づけられ，それを学問的に扱う臨床発達心理学が次第に発展しつつある（本郷，2005）。このため巡回相談を臨床発達的支援として捉え，分析することは十分な意義がある。本郷（2005）によれば，臨床発達心理学における現在の課題は，臨床発達的支援の効果を科学的に捉えると共に，被支援者のニーズに合わせた支援を通じて，支援の方法論を確立することだとしている。つまり①「支援ニーズの把握」②「支援効果の確認」③「支援方法の確立」を検討することが臨床発達心理学に求められている。

しかし学童保育の現場を発達心理学や臨床発達心理学の領域で分析した研究は限られている（浜谷，2005）。その中で浜谷・西本・古屋（2000）や西本（2002）は，統合学童保育の巡回相談が指導員への支援に重要な役割を果たすことや，その支援方法としてのコンサルテーションについて触れている。コンサルテーションは心理学的に「対人援助の専門職（コンサルタント）が，別の人物（コンサルティ）に対して，コンサルティがクライエントと関わる際に抱える仕事上または介護上の問題を解決するために，支援を与えるような援助関係の一形態」（Dougherty, 2005, p.18）と定義される。巡回相談に関する研究では相談員をコンサルタント，指導員をコンサルティ，障害児をクライエントとして捉えている。西本（2004）は巡回相談のコンサルテーションが，問題の状況を把握し定義を行う「アセスメント」と，保育実践，保護者との協力関係形成，専門機関との連携，指導員の心理的安定といった「保育への提案と助言」で構成されることを指摘している。

これらの研究はいずれも巡回相談の実践事例を分析の対象として，コンサルテーションという支援方法を検討してきた。上述の本郷(2005）の論点でいえば，個々の

1）本稿では「統合学童保育」という語を「障害児と健常児が同じ学童保育所でともに保育を受ける活動」として定義する。なお厚生労働省は学童保育所を「放課後児童クラブ」，学童保育指導員を「放課後児童指導員」として通知しているが，本稿では社会的に最も認知度が高いと思われる「学童保育」を用いた呼称を使用した。

2）「巡回相談」に明確な概念の定義はない。一般的には「専門機関のスタッフが保育所を訪問して，子どもの保育所での生活を実際に見た上で，それに則して専門的な援助活動を行うこと」と捉えられている（浜谷・秦野・松山・村田，1990）。巡回相談を行う目的は多岐にわたるが，本稿では「指導員への支援」に限定して論を進める。

実践事例から「支援ニーズの把握」を行い，コンサルテーションに基づく相談によって「支援方法の確立」を目指し，成功事例を取り扱うことで「支援効果の確認」を行ってきたと評価できる。この手順はフィールド研究におけるアクション・リサーチの手法に適っており（秋田・市川，2001），臨床発達心理学の発展に意義あるものだった。

ただ，事例研究を中心とした研究は，①「支援ニーズの把握」に関して事例固有の課題を浮き彫りにすることが可能でも，統合学童保育を行う指導員が抱える悩みの全体像を明らかにすることが困難であった。「支援ニーズの把握」は「支援方法の確立」や「支援効果の確認」を検討するための基盤であり，その研究成果の充実が望まれる。例えば統合学童保育の課題を全般的に把握し，課題に応じた支援の内容を構造化して整理できるなら，迅速かつ有効な支援が可能となるだろう。そこで本研究は統合学童保育の巡回相談における支援ニーズを構造化して把握することを研究目的とする。なお，この場合の「支援ニーズ」とは個々の「支援内容」の集合的概念を指す。

従来，心理学の分野ではこの「ニーズ」という言葉を，A. H. Maslowの欲求階層説による“human basic needs”の意味で捉え，個人の欲求として扱ってきた（Maslow, 1943）。このため障害児保育の支援ニーズは，学童保育に限らず，被支援者たる保育者に調査が行われてきた。必要な支援内容を複数回答させる調査（前田・高野・広浦・尾崎，2002）や，段階評定させる調査（遠藤・徳田，1997）などはその代表例で，支援ニーズに対する意識傾向を明らかにした。だがこれらの調査では，一度に提示できる項目に限界がある，どの項目も援助的なので評定値が高くなる，といった限界があった。そのため，どのニーズを重視して検討すべきかといった切実なニーズの判別が難しく，ニーズ全体を捉えて理解することが難しかった。それゆえ，ある支援に対する保育者の欲求を支援ニーズと捉える現在のニーズ概念を，改めて検討する必要がある。

ニーズ評価の研究を行ったPearce（1995）は，過去のニーズ概念に関する研究から，ニーズには個々人によって表明される“felt needs”と，外部の権威（authority）によって定義される“normative needs”の2つの側面があると概括した。Bradshaw（1972）によればfelt needsとは被支援者が必要と感じる個人の欲求であり，その欲求が実際の要求行動となって現れる“expressed needs”を内包している。他方，normative needsは専門家や研究者の専門的知識や価値志向性に基づいて定義されるものとされる。Figure 1はこれらのニーズの関係を図で示したものである。expressed needを含む被支援者のfelt needsと，支援者が持つnormative needsは重複する部分が大きいが，完全には一致しないことが分かる[3]。こうしたニーズ概念に基づけば，支援ニーズを把握するため

3) Bradshawはこの他にも，同じ状況下にある他の集団との比較によって相対的に捉えられるcomparative needsがあるとしている。しかし学童保育の場合，システム自体が各自治体で大きく異なるのが現状であり，単純にニーズが比較できるまでには至っていない。

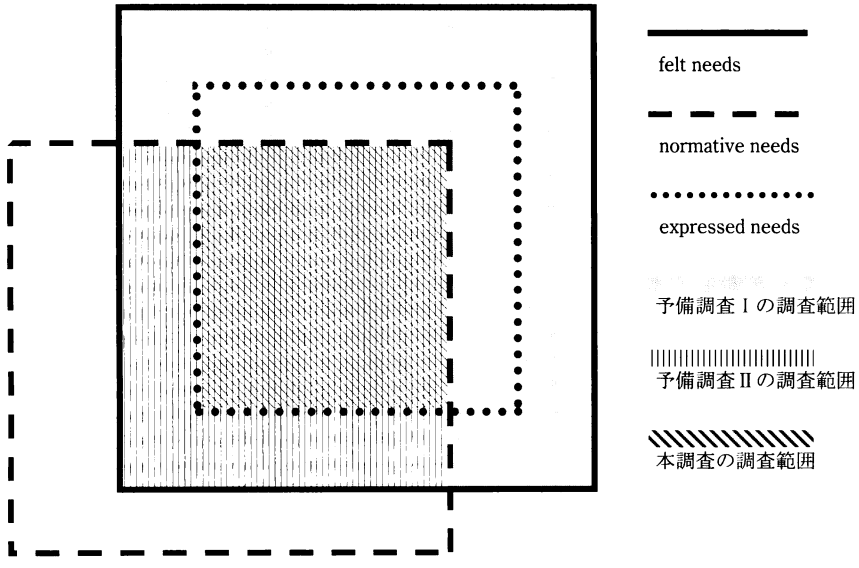


Figure 1　*ニーズの概念*（Bradshaw, 1972から改変）

には，支援者と被支援者双方の視点から捉えることが不可欠だと考えられる。

これに対して被支援者の求めるニーズの充足だけを志向するニーズ評価は“ニーズ至上主義（needology）”と呼ばれて，ニーズ評価を必要とする研究領域（成人教育など）で批判され，支援者の価値観をもっと反映させる必要があると指摘されてきた（Davidson, 1995；赤尾，2000）。これは本郷（2005）が「被支援者のニーズにあった支援，被支援者のニーズをつくりだす支援」と表現するニーズ概念と合致する。また清水（2002）が「ニーズをもつ」とは「サポートを提供しなくてはならない」あるいは「サポートを特に必要としている」という意味だと説明するのも，同様のニーズ概念が背景にあると思われる。

このような枠組みで改めて巡回相談を捉えてみると，保育者は通常，統合保育で感じる課題の全てを巡回相談で解決しようと試みるのではなく，幾つかの課題に的を絞って相談を依頼する。一方で相談員は保育者の挙げた相談内容や保育観察から，統合保育での課題を推測する。そして発達心理学などの知見に基づき，援助可能な内容に関して支援や助言を提供する。ここで最終的に両者が共有できた内容がその場での支援ニーズとなる。Figure 1でこの関係性を図示すれば，保育者が統合保育で感じる課題がfelt needsであり，巡回相談で実際に相談員に提示する課題がexpressed needsである。またnormative needsは相談員が専門的知見から援助可能だと判断する最大限の範囲だと言える。そして最終的にFigure 1の斜めの網掛けで示した領域が，保育者と相談員で共有した支援ニーズとなる。従ってこの網掛け領域の内容を明らかにし，その全体像を把握しやすいように構造化することが，巡回相談の支援ニーズを理解するために必要な手続きであると考えられた。

そこで本研究では，指導員が統合保育で感じる課題全般を土台に，相談員の視点を反映させつつ，巡回相談で援助可能な支援内容の抽出を試みる。次にそれらの支援内容を分類して整理を行うことで，支援ニーズ全体の構造化を図りたい。これらの課題を達成するため，指導員と相談員に対して質問紙調査を実施し，SPSS（Ver. 13.0.1J）を用いてそのデータを分析した。なお質問紙調査では回答を無記名とし，研究以外に情報を使用しないことを調査票に明記して，調査対象者に対する倫理的な配慮を行った。

方　法

調査全体の対象

東京都Z区内の学童保育指導員159名と，同区で巡回相談事業に従事する相談員10名。Z区は障害児保育を約25年，巡回相談を約15年間継続しており，統合学童保育に関して都内でも先進的な地域である。巡回相談員によって職員研修が毎年開かれ，指導員は日頃の保育を意識的に振り返る機会がある。このためZ区の指導員は，統合学童保育の課題や巡回相談の支援ニーズを意識化しやすいと考えられた。

予備調査の手続き

既述のように，巡回相談の支援ニーズを理解するためには，被支援者と支援者双方の視点から捉えることが不可欠である。そこで予備調査Ⅰではfelt needsを，予備調査Ⅱではnormative needsを，本調査ではexpressed needsを組み込む形で，巡回相談に関する支援ニーズを調査できるように研究をデザインした。予備調査Ⅰでは，聞き取り調査により，指導員が統合学童保育で感じる課題全般を網羅的に収集した。expressed needsとして指導員が表明する相談内容は，統合保育で感じる様々な課題を背景に持つという仮定に基づき，それらの課題をfelt needsとして抽出した。Figure 1で示せば灰色に網掛けした範囲を調査したことになる。次に予備調査Ⅱでは予備調査Ⅰで示された統合学童保育の課題を踏まえ，相談員が巡回相談で提供可能だと考える支援内容を，自由回答による質問紙調査で網羅的に収集した。ここでは指導員のfelt needsを相談員が整理し，必要な支援を導き出して指導員に提示することでnormative needsが反映されるという仮定に基づいた。つまり予備調査ⅡはFigure 1の縦線で網掛けした範囲を調査したことになる。

予備調査Ⅰ

統合学童保育を経験しているベテランの指導員5名（平均勤務年数23.4年）を協力者として，2002年8月1日から9月1日にかけて聞き取り調査を行った。巡回相談に関連して，学童保育の統合保育における現状と課題を調べる調査であることを口頭で説明し，学童保育における障害児の受け入れに関する課題（願望・不安・要求・問題点等）を語ってもらった。その面接記録をもとに117個のトピックを抽出して，KJ法により分析した。整理される概念の信頼性を高めるため，同一の意見が複数得られることを条件にして，上位トピックを形成した。その結果，26項目のトピックに整理できた。

予備調査Ⅱ

発達心理学を専門とする大学教員・大学院生や，養護学校の元教員から構成されるZ区の巡回相談員10名を協力者として，2002年12月25日から翌年1月7日にかけて，郵送およびEメールによる質問紙調査を行った（回収率80.0％）。調査協力者にはまず，予備調査Ⅰの26項目からなる分析結果を，統合学童保育で指導員が感じている課題として，下位項目の117トピックとともに提示した。そのうえで巡回相談で提供可能だと思う支援内容について自由記述による回答を求めた。回答結果

から135項目のトピックが見出されたので，再度KJ法を用いて分析を行った。上位トピックを形成する条件は予備調査Ⅰと同一にした。その結果，巡回相談の支援内容を33項目のトピックに整理できた。

本調査

予備調査ⅠとⅡから，指導員のfelt needsと相談員のnormative needsを反映した，33項目からなる巡回相談の支援内容が得られた。本調査ではこれらの支援内容に指導員のexpressed needsを反映させる目的で，再度指導員に質問紙調査による評価を求め，その結果に基づいて巡回相談の支援ニーズ全体の構造化を図ることにした。調査は2003年5月15日から7月15日にかけてZ区の指導員全員を対象に実施された。回答者数は102名，回収率は64.2％だった（男性8名，女性92名，不明2名）。平均年齢は40.8歳（22歳～59歳，$SD=10.6$）で，保育経験年数の平均は11.7年（0-39年，$SD=10.9$）だった。

質問紙の特徴

予備調査Ⅱの結果から示された33項目の支援内容に対して，指導員がそれぞれどの程度強い要求を有しているのかを検討するため，上述の33項目を用いた5件法の質問紙を作成した。質問紙は支援内容の項目ごとに，その支援に寄せる指導員の「期待」の高さと，実際に相談員がこれまでに実施した支援に対する指導員の「評価」の高さを尋ねた。ここには「期待」と「評価」のずれから「ニーズの切実さ」を測定するという目的がある。

例えば切実なニーズが存在する状況とは，指導員はある特定の支援を高く期待しているが，相談員はこれまで十分に支援を提供してこなかった場合である。あるいは逆に，相談員は専門的見地からある特定の支援が必要と判断して丁寧に提供してきたが，指導員はその支援の必要性をそれほど十分に認識していない場合である。一方，ニーズが切実でない状況とは，指導員が期待する支援と相談員が提供してきた支援が首尾よく一致し，円滑な支援が実施されている場合や，あるいは，ある特定の支援を指導員は期待しておらず，相談員も同じように支援を提供していない場合を指す。つまりニーズの切実さとは，指導員と相談員がある支援の必要性や重要性をどれだけ共有できているか，ということを表した指標である。このような「ニーズの切実さ」の指標に基づき，多様な支援内容の分布状況を把握し構造化することで，支援ニーズ全体の理解が可能になると推測した。

そこで上述の質問紙を基に，相談員のこれまでの活動に対する評価（evaluation）を測定する質問紙Evと，これからの活動に対する期待（expectation）を測定するExという2種類の版を用意した。質問紙EvとExはそれぞれ5件法を採用し，質問項目の文言も同一であるが，質問文の尋ね方と評定段階名が異なっている。質問紙Evではそれぞれの支援が「実際にどの程度巡回指導員によって行われてきたか」を問い，Exでは「支援の必要性をどの程度感じているか」を尋ねた。評定段階は『1：まったく行われなかった（まったく必要でない）』から『5：大変行われた（たいへん必要である）』までの5段階で，それぞれの質問文に適した選択肢を設けた（丸括弧外は質問紙Ev，丸括弧内は質問紙Ex）。なお巡回相談の未経験者には，「期待」を尋ねる質問紙Exのみに回答を求めた。

統計分析に際しての条件

このように本調査では質問紙EvとExを用意したが，もし両方のデータを統合して分析できるなら，ニーズの切実さを反映した支援ニーズをもっと正確に把握できるようになる。例えば支援ニーズの構造化を図るために，巡回相談の支援内容を縮約し，類型化するための主成分分析を実施することができれば，目的の達成により近づけるだろう。ただそのためには2つの質問紙をデータとして統合できるか否かを慎重に検討する必要がある。

上田（2003）によれば，ある二つのデータがⅰ）時系列的に各々独立しており，ⅱ）同一の基準で測定される場合，データを統合して主成分分析を行うことが可能である。そこでまずⅰ）の基準が該当するかを検討した。質問紙Evは指導員に巡回相談の「評価」を尋ねている。時系列で言えば「過去から現在」の活動を評定していると言える。一方質問紙Exは巡回相談への「期待」を尋ねている。時系列で言えば「現在から将来」における活動を評定している。このことから二つの質問紙は，指導員にとって評定する時期が異なる別々のデータであると判断され，ⅰ）の基準を満たすと考えられた。また，質問紙EvとExにおいてデータの基準となる評定の段階はEv/Exともに同じ5件法を採用し，程度量を尋ねる副詞も全く同一である。すなわち，それぞれの質問紙が同一の基準で支援ニーズを測定していることからⅱ）の基準も満たしており，データは統合できる可能性が高い。

質問紙EvとExは，元々予備調査Ⅱから作成した質問紙を原型とし，各質問項目の文言は全く同一で，質問項目から想起される支援活動はどちらも同じである。このため両質問紙の関係は深いと推測できる。仮に，質問紙EvとExは同一のニーズ概念を背景に持つという説明を統計的に検証できるのならば，2つの質問紙を統合できる可能性はより高まる。そこで，質問紙EvとExでそれぞれ対応する質問項目の間で平均値の相関を調べ，仮説に対する検証を行うことで，データを統合した主成分分析が可能か否かを判断することにした。

結果と考察

質問紙Ev/Exそれぞれにおいて，無回答率が25％を超えるものや，4つ以上の連続無回答があるものを分析

の対象から除外した。質問紙Evにおける有効回答数は66（欠損値率2.0％），質問紙Exにおける有効回答数は92（欠損値率0.4％）であった。

評定値の平均

質問紙Ev全体の平均値は2.5，質問紙Ex全体の平均値は3.8で，t検定ではEvの値が有意に低かった（$t(32)=-14.8, p<.01$）。Evは各質問項目の平均値にばらつきが見られ，25項目で中央値である3.0を明らかに下回った。逆にExでは33項目中31項目で中央値を上回っていた。そこで，質問紙Ev/Exともに回答した66名分のデータに対して，それぞれ対応する個々の質問項目の評定値間でt検定を行った。その結果，e05を除いた全項目においてEvの評定値が1％水準で有意に低かった。

質問紙Exの評定値が全体的に高いことは，指導員が今回の調査で取り上げた支援の大部分に対して援助的に感じたことを示している。これは遠藤・徳田（1997）のような従来のニーズ研究と同様の結果を示しており，今回の質問紙もある程度の内容妥当性があることが示唆された。ただ，質問紙全体では個々の質問項目でもEx＞Evの傾向が顕著に見られた。指導員は巡回相談に高く期待しているものの，毎回提出される報告書を除いて，支援の程度はまだ不十分と感じていると考えられる。この理由としては，Z区の巡回相談の回数制限（年に1－3回）や時間制限（3－4時間）といった量的な問題や，相談員が行う支援の質の問題など，いくつかの原因が考えられた。これらの点は本調査では特定することができなかった点であり，今後検討すべき課題である。

また質問紙EvとEx全体の平均値における相関係数は$r=.82$で，かなり強い正の相関が見られた。質問紙EvとExの対応する質問項目同士の相関が非常に強いことは，調査デザインの段階で仮定したように，それぞれの質問紙が同一の支援ニーズ概念を背景に持つことを強く示唆している。またこの結果は指導員の期待の高さに応じて，相談員が支援の内容を選択する傾向があることを示したように思われる。我妻（1987）は社会心理学の視点から，ある役割を持つ者は自分に期待される役割に対し，出来るだけ正確に把握するよう心掛け，その把握した役割となるべく合致するように自分の役割を遂行しようとすると指摘している。だとすれば，巡回相談員は指導員の期待に応えるために，自らの提供できる支援と指導員の望む支援が極力一致するように実際の活動を選択するだろう。質問紙EvとExの間に強い相関が見られたのはこの役割意識が反映されたためとも考えられる。

3種の支援ニーズ

質問紙EvとExの各項目の平均値を変数として，平方ユークリッド距離に基づき，Ward法によるクラスター分析を実施した（Table 1）。クラスター結合の過程を視覚的に判断すると，質問項目は大きく3群に分かれることが示唆された。そこで樹状図の上から順にα群（$n=8$），β群（$n=14$），γ群（$n=11$）と仮に名付けた。Figure 2

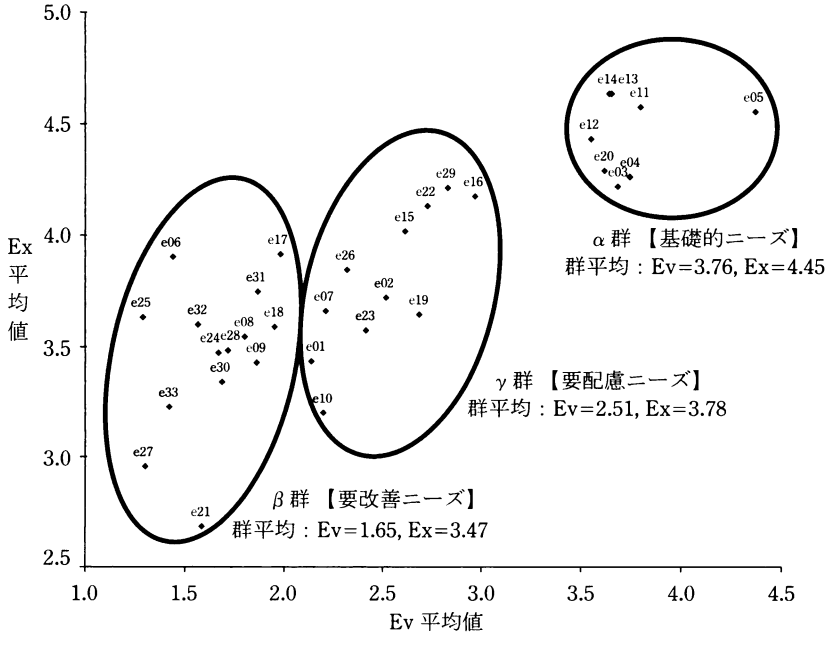
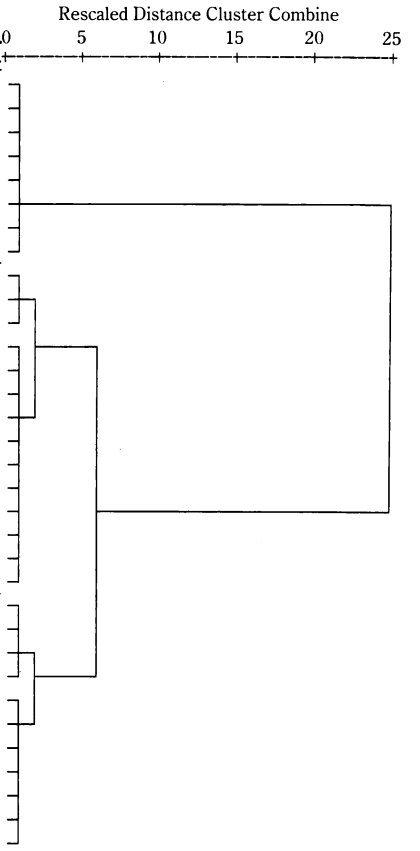


Figure 2　*質問紙Evとexにおける平均値の散布図*

Table 1 *質問紙Evとの平均値によるクラスター分析*

	項目内容	Ev Av.	Ex Av.
α群【基礎的ニーズ】質問紙Ev/Exともに値が相対的に高い群	e13: 障害のある子にたいして職員が個別の対応をおこなう際の，具体的な保育方法について相談を行う	3.6	4.6
	e14: 障害のある子の，職員にとって問題だと思われる行動の対処法について相談を行う	3.7	4.6
	e11: 障害のある子の心理的な側面について，職員の理解が深まるような相談を行う	3.8	4.6
	e04: 障害のある子の発達状況にたいして，評価（アセスメント）を行う	3.7	4.1
	e03: 障害のある子の問題行動にたいして，評価（アセスメント）を行う	3.7	4.1
	e20: 統合学童保育の実践を行う時に生じる悩みにたいして，耳をかたむけて聴き，時にアドバイスをする	3.6	4.2
	e12: 障害のある子が，現在の発達状況と環境のなかで楽しめるおもちゃや遊びについて相談を行う	3.6	4.4
	e05: 障害のある子に関する巡回指導報告書を作成する	4.4	4.3
β群【要改善ニーズ】質問紙Ev/Exともに値が相対的に低い群	e33: 地域全体における現在の支援体制づくりのために，連絡や調整の活動を行う	1.4	3.2
	e27: ほかの学童クラブに連絡を繋げたり，連携を取りやすくなるように仲介を行う	1.3	2.9
	e21: 職員自身の対人関係やストレスなど，個人的な悩みに関する援助を行う	1.7	2.7
	e32: 現在の保育環境の改善に必要だと思われる処置に対して，行政に直接働きかける	1.6	3.6
	e25: 電子メールやホットラインなど，巡回指導日以外にも巡回指導員と連絡が取れるような体制をとる	1.3	3.5
	e06: 統合学童保育の期間延長が終了（小学校卒業）した後の放課後生活について，コーディネートの活動をする	1.4	3.9
	e09: 保護者を対象として，障害に関連した情報を提供したり，啓蒙活動を行う	1.8	3.4
	e08: 外部の関係機関に関する情報を保護者に提供したり，実際にその仲介を行う	1.8	3.5
	e28: ほかの学童クラブが実践している保育の事例や，情報を提供する	1.7	3.4
	e24: 巡回指導員や職員以外の関係者も参加する保育会議（ケースカンファレンス）を実施する	1.6	3.4
	e30: 障害のある子が通う学校と連絡をとったり，連携を取りやすくなるよう仲介を行う	1.7	3.4
	e18: 巡回指導員が職員を対象とした研修会を実施する	2.0	3.6
	e31: 障害のある子に関わる医療機関や福祉機関などに関する相談を行う	1.8	3.7
	e17: 障害について書かれた一般向けのパンフレットや，書籍などの情報を紹介する	2.0	3.8
γ群【要配慮ニーズ】相対的にα群とβ群の中間に位置する群	e29: 学童保育現場の実態や限界について，巡回指導員がよく学び理解する	2.9	4.2
	e22: 医学的な障害の診断がない「ちょっと気になる子」にたいして，支援や援助を行う	2.8	4.1
	e16: 障害に関連する専門的な研究の内容や，その理論などについての知識を提供する	3.0	4.1
	e15: 職員と保護者とのあいだの関係づくりに関連した相談を行う	2.6	4.0
	e01: 障害のある子の障害そのものにたいして，巡回指導員が訓練などの直接的な援助を行う	2.2	3.4
	e10: 職員が把握した，家庭での保育の状況について評価を行い，その評価を保護者に直接的・間接的に伝える	2.3	3.1
	e26: 子どもたち集団の発展がみられるような保育活動が行えるように援助を行う	2.3	3.7
	e07: 巡回指導に関連して保護者と直接，個別に相談を行う	2.2	3.6
	e02: 障害のある子の心理的側面にたいして，巡回指導員が直接的な援助を行う	2.5	3.7
	e23: 職員の配置や保育の流れ，保育室のレイアウトなど，日常の保育での改善点について提案をする	2.4	3.5
	e19: これまでに取り組んできた統合学童保育の実践にたいして評価を行う	2.8	3.6



注．各群内の項目順はクラスター分析による。なお各質問項目の左側にある番号は，質問紙において便宜的に使用した項目番号を指す（全33項目）。

は質問紙Evを横軸，Exを縦軸とした平均値の散布図に，クラスター分析の結果を重ね合わせたものである。

3群の関係性　この3群間の違いを分析するため，まずEvとExの各平均値を従属変数として2要因の一元配置分散分析を行った（Table 2）。Evにおける群平均値は$\alpha=3.76$，$\beta=1.65$，$\gamma=2.51$であり，Exにおける群平均値は$\alpha=4.45$，$\beta=3.47$，$\gamma=3.78$であった。分析の結果，質問紙Ev/Exともに平均値間の差が有意だった（$F(2,30)=176.04, p<.001$; $F(2,30)=26.94, p<.001$）。Scheffe法を用いた多重比較によると，有意確率5％水準でEv/Exともに3群間でどの差も有意であり，数値的に$\alpha>\gamma>\beta$の関係が見られた。等質サブグループはExでγ群とβ群が5％水準でまとまり，Evでは3群がそれぞれ3グループに分かれた。

α群はこれまでの評価とこれからの期待が他群に比べて高いという特徴を持っていた。逆にβ群はこれまでの評価がかなり低く，期待もほかの群に比べると相対的に低いことが分かった。そしてγ群に関しては，これまでの評価もこれからの期待も，数値的にはα群とβ群の中間に位置しているのが特徴であった。この$\alpha>\gamma>\beta$という傾向は散布図からも容易に判別できる。特にα群に該当する項目は，指導員がその支援を強く望んでいると同時に，相談員も比較的丁寧にこれらの支援を行ってきたと思われる。すなわちα群は指導員も相談員もともに，その支援の必要性がよく認識されている群である。そこでα群は巡回相談におけるニーズの基礎に位置づくものと捉え，【基礎的ニーズ】と命名した。

では期待も評価も相対的に低いβ群はどのように位置づけられるだろうか。留意すべきは，どの群においても指導員に対する「期待」の平均値が高いことである。分散分析の結果，3群の平均値の間で有意差が見られたが，あくまでその差は相対的な意味である。現にExでの群平均はどの群も中央値である3を上回っている。Exにおける等質サブグループの検定でβ群はγ群と同一のグループを形成しており，一概に期待の値が低いとは言えない。β群やγ群の特徴を理解するにはまた別の角度からも分析する必要がある。

期待と評価のずれ　ニーズの切実さの仮説に基づき，「期待」と「評価」のずれという側面から3群の違いを分析するため，EvとExの平均値の差を二乗した値を従属変数とする1要因の一元配置分散分析を行った（Table 3）。散布図における縦軸と横軸の直行点を始点とするEv＝Exの比例直線から各群の重心点が離れるほど，期待と評価のずれは大きいと言えるからである。差の二乗値の群平均は$\alpha=.54$，$\beta=3.39$，$\gamma=1.64$であった。分析の結果，ずれの大きさの違いで有意差が見られた（$F(2,30)=30.32, p<.001$）。Scheffe法を用いた多重比較によれば，5％水準で3群間のどの差も優位であり，$\alpha<\gamma<\beta$の関係が見られた。等質サブグループは3群がそれぞれ3グループに分かれた。

このことからα群はずれが小さい群，β群はずれが大きい群，そしてγ群はちょうどその中間に位置している群ということが分かった。ニーズの切実さの概念ではずれが大きいほどニーズが切実である。逆に期待と評価の高さが首尾よく一致している場合，あるいは期待と評価が同程度に低い場合にニーズは切実でない。このため，期待と評価のずれが最も小さいα群は比較的ニーズが切実でない群だと分かる。他方，β群は期待も評価も他群に比べて最も低い群であるが，平均値の差の二乗値が一番大きく，期待と評価のずれが大きい。また，評価が期待よりかなり低いので，指導員がこの群のニーズを強く感じる場合，相談への不満はかなり強まると推測できる。従ってβ群は，ずれが大きいという切実な状況を何らかの形で改善することが望まれる，という点から【要

Table 2　*クラスター分析に基づく3群別の平均値と分散分析の結果*

	群平均			分散分析			
	α $n=8$	γ $n=11$	β $n=14$	F値	$\alpha-\gamma$	$\gamma-\beta$	$\alpha-\beta$
Ev	3.76(0.26)	2.51(0.28)	1.65(0.23)	176.04***	***	***	***
Ex	4.45(0.17)	3.78(0.33)	3.47(0.34)	26.94***	***	*	***

注．( )内は標準偏差値。　*$p<.05$，***$p<.001$

Table 3　*EvとExの平均値の差に対する分散分析の結果*

	群平均			分散分析			
	α $n=8$	γ $n=11$	β $n=14$	F値	$\alpha-\gamma$	$\gamma-\beta$	$\alpha-\beta$
$(Ev-Ex)^2$	0.54(0.34)	1.64(0.45)	3.39(1.22)	30.32***	*	***	***

注．( )内は標準偏差値。　*$p<.05$，***$p<.001$

改善ニーズ】と命名した。

一方，γ群の群平均値の高低やずれの大きさはα群とβ群の中間にある。ただ，Exの平均値はどの項目も中央値の3を上回っているが，Evはいずれも中央値を下回っている。散布図を見ても，γ群の位置はα群よりもβ群に近い。つまり指導員がこの群のある項目に強いニーズを抱えていた場合，β群ほどニーズが切実であるわけではないが，α群に比べて相談に対する不満は高まりやすいと思われる。従ってγ群は，ずれの大きさへの対処を強く迫られているわけではないが，ずれが存在するという状況を考慮して相談を進めることが望まれるという点から【要配慮ニーズ】と命名した。

5つの支援領域

質問紙EvとExの間にかなり強い相関が見られたことで，EvとExの両データを統合できる条件が整ったと判断できた。そこで質問紙EvとExともに回答した66名分のデータをそれぞれ独立データとみなして，66名分×2（Ev＋Ex）＝132のデータによる主成分分析を行った[4)]。欠損値はペア単位で除外し，プロマックス回転を行った。その上で共通性が0.25未満，主成分負荷量が0.49未満の項目を削除し，再度プロマックス回転による主成分分析を実施した結果，5つの主成分が抽出された（Table 4）。各主成分の内的整合性を検討するために

4）調査該当者が66名と少ないが，全回答者のほぼ2/3（64.7％）を占める割合を持っている。また本調査ではZ区の指導員全員を調査対象とした上で，64.2％と高い回収率を得ることができた。その結果，調査2で分析可能な対象者は指導員全体の41.5％にのぼり，Z区における支援ニーズの構造化を図るデータとして十分妥当性を持つと判断した。

Table 4　*質問紙Eの主成分分析結果*

項目内容	主成分1	主成分2	主成分3	主成分4	主成分5	共通性
e01：障害そのものに巡回指導員が直接的援助	0.94	0.03	-0.15	-0.19	0.23	0.71
e02：障害児の心理面に巡回指導員が直接的援助	0.89	-0.07	-0.25	0.06	0.32	0.77
e06：小学校卒業後の放課後をコーディネート	0.71	0.05	0.16	0.08	0.02	0.84
e32：保育環境を改善する処置を行政に働き掛ける	0.69	0.25	-0.01	0.06	-0.11	0.78
e30：障害児が通う学校と連絡・連携を取る為の仲介	0.68	0.05	0.28	-0.01	-0.09	0.79
e33：地域全体での支援体制づくりの為に連絡や調整	0.62	0.37	-0.01	0.04	-0.15	0.81
e31：障害児医療機関や福祉機関などに関する相談	0.61	0.02	0.24	0.22	-0.15	0.83
e18：巡回指導員による職員研修会の実施	0.09	0.84	-0.09	-0.04	0.02	0.68
e21：職員自身の個人的な悩みに関して援助	-0.11	0.68	0.40	-0.27	0.07	0.63
e19：職員が行う統合学童保育の実践に対して評価	-0.21	0.64	0.13	-0.01	0.45	0.66
e23：日常の保育での改善点について提案	0.11	0.62	-0.20	0.28	0.00	0.59
e24：開かれた保育会議（ケースカンファ）の実施	0.39	0.62	-0.05	-0.05	0.03	0.76
e27：他の学童クラブとの連絡・連携を取る為に仲介	0.35	0.54	0.18	-0.12	-0.01	0.78
e28：他の学童クラブの保育実践や情報を提供	0.30	0.54	0.08	0.12	-0.20	0.77
e29：学童保育の実態や限界を巡回指導員が理解	0.08	0.49	-0.05	0.41	-0.04	0.66
e10：家庭環境に対する職員評価を保護者に伝える	-0.23	0.08	0.96	0.00	-0.03	0.75
e07：保護者と直接個別相談	0.23	-0.12	0.81	-0.01	0.04	0.82
e09：保護者に対し障害関連情報の提供と啓蒙活動	0.37	-0.06	0.67	0.01	0.01	0.86
e08：外部機関情報を保護者に提供・仲介	0.46	-0.06	0.62	-0.02	-0.03	0.85
e15：職員－保護者間の関係づくりに関連した相談	-0.15	0.25	0.52	0.23	0.16	0.68
e12：障害児が楽しめるおもちゃや遊びについて相談	0.00	0.06	-0.13	0.96	-0.13	0.76
e13：障害児の具体的な個別保育方法について相談	0.05	-0.09	0.04	0.88	0.11	0.88
e11：障害児の心理面について職員の理解を深める	-0.05	-0.07	0.08	0.82	0.15	0.78
e14：問題行動への対処法について相談	-0.02	-0.02	0.14	0.71	0.22	0.79
e04：発達状況への評価（アセスメント）	0.21	0.01	0.00	-0.02	0.87	0.88
e03：問題行動への評価（アセスメント）	0.27	-0.03	0.03	-0.04	0.83	0.83
e05：巡回指導報告書の作成	-0.19	0.05	-0.02	0.16	0.67	0.52
回転後の負荷量平方和	11.81	10.53	10.25	9.49	4.63	
主成分間相関	F1	F2	F3	F4	F5	
F1　専門間連携	1					
F2　保育力形成	0.66	1				
F3　保護者協力	0.66	0.64	1			
F4　障害児対応	0.59	0.56	0.54	1		
F5　評価と報告	0.26	0.22	0.28	0.45	1	

因子抽出法：主成分分析　　回転法：Kaiserの正規化を伴うPromax法　　注．項目内容は略記（Table 1参照）。

Cronbachのα係数を求めた。第1主成分から順にα＝.95, .91, .92, .91, .84であり，いずれも十分な内部一貫性が確認された。さらにこれらの主成分が質問紙EvとEx単独でも内的整合性を保てるかどうか検証したところ，質問紙Evでは第1主成分から順にα＝.82, .72, .87, .88, .79という数値が得られた。質問紙Exでもα＝.88, .85, .88, .87, .89, という高い数値が得られ，質問紙Ev/Ex単独でも内部一貫性を保っていると判断できた。

第1主成分は発達臨床の専門家である相談員を含め，教育や行政，地域保健など障害児と密接に関わる専門領域との連携や関係調整に関する項目が該当し，「専門領域間での連携」（以下【専門間連携】と略記）に対する支援だと考えられた。第2主成分は指導員が保育全般の力量を形成することに関連した項目が多く，「保育力量の形成」（【保育力形成】）に対する支援だと解釈された。第3主成分は保護者との連携や関係の向上に関連する項目に付加が高く，「保護者との協力と連携」（【保護者協力】）に対する支援と解釈された。第4主成分は障害児の特別なニーズに対応する項目が該当し，「障害児に対応した保育」（【障害児対応】）だと解釈された。第5主成分は相談員が保育観察を行い報告するという活動が示され，「アセスメントと報告」（【評価と報告】）と解釈された。

切実なニーズと5つの支援領域の関連

Figure 3は5つの主成分を構成する下位項目の，3種類の支援ニーズに該当する割合について調べたものである。その結果，3種類の支援ニーズが占める割合が領域によって大きく異なることが分かった。【障害児対応】と【評価と報告】はその下位項目の全てが基礎的ニーズで占められた。基礎的ニーズは指導員による評価・期待がともに高く，相談員と指導員にとってその支援が巡回相談で必要だと感じているニーズである。巡回相談は特定の障害児の保育を対象として進められる事業であることから，相談の中核は障害児に直接関わるような領域の内容が基礎的ニーズとして認識されたと思われる。

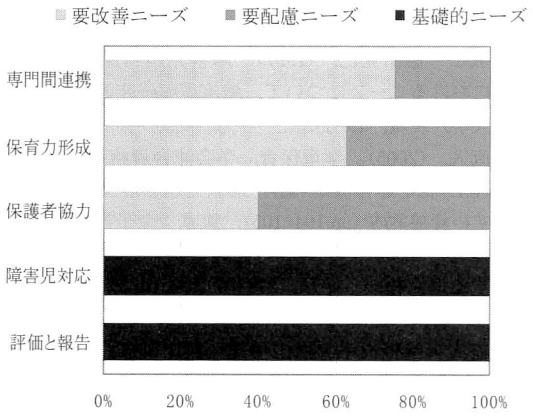


Figure 3　*支援領域とニーズの切実さの関連*

他方，【保護者協力】は要配慮ニーズの割合が高く，【専門間連携】と【保育力形成】は要改善ニーズの割合が高かった。これらの領域は「期待高・評価低」という傾向があり，ニーズの充足に対する指導員の不満が高まりやすい。特に【専門間連携】や【保育力形成】は学童保育現場における実務的な課題と絡んでいることが多く，発達心理学の専門知識と直接結びつきにくいために，期待と評価のずれが拡大して要改善ニーズの割合が高くなったと考えられる。また，これらの領域は環境調整による支援の性質が強く，その意味で【保護者協力】と似通っている。しかし保護者は子どもにとって最も身近な存在であり，その支援は対象児に関わる課題への影響力や結びつきが強い。【保護者協力】の領域で要配慮ニーズの割合が高い理由は，この領域が要改善ニーズと基礎的ニーズ双方の特徴を兼ね備えていることが一因として考えられる。

結果のまとめ

ニーズの切実さという指標から，統合学童保育の巡回相談における支援ニーズは 1）基礎的ニーズ，2）要配慮ニーズ，3）要改善ニーズの3種類に整理された。また支援の内容は①専門領域間での連携，②保育力量の形成，③保護者との協力と連携，④障害児に対応した保育，⑤アセスメントと報告という5つの領域に分けることができた。この3種類の支援ニーズと5つの支援領域との関連を調べてみると，①専門領域間での連携と②保育力量の形成は「要改善ニーズ」が，③保護者との協力と連携は「要配慮ニーズ」が，④障害児に対応した保育と⑤アセスメントと報告は「基礎的ニーズ」がそれぞれ中心となっており，支援領域の違いによって支援ニーズの切実さが異なることが分かった。

考察のまとめと今後の課題

巡回相談における支援ニーズを3種類に分類し，巡回相談で支援する領域を5つに整理したうえで，その両者を関連づけることによって各支援領域のニーズ特性が見いだせた。支援ニーズ全体の構造化を図るという本研究の目的は，ほぼ達成できたと言える。

本研究はニーズの切実さという概念を背景に，ニーズが切実な状況では期待と評価のずれがあると仮定し，質問紙調査を通じて支援ニーズの把握を試みた。その結果，ずれが確かに存在し，分析が可能であることが分かった。だが，今回の調査ではfelt needsは低いが，normative needsが高いという状況で反映される「期待低・評価高」という項目が見られなかった。これはnormative needsを扱った予備調査Ⅱで，felt needsと重複しないnormative needsを十分に汲み取れなかったという調査

限界を示すと思われる。相談員は指導員に比べて人数が少なく，統計的な信頼性を問えるだけの母集団を確保できないという事情がその背景にある。一方normative needsと重複しないfelt needsは，予備調査Ⅱにおいて予備調査Ⅰの結果に相談員が目を通すことで，ほぼ反映できたと考えられる。

上記の調査限界があるにせよ，指導員が相談員に望む支援ニーズを，相談員の視点を絡めながら概念的に，かつ視覚的に整理したところに本研究の意義がある。発達心理学の専門知識を身につけた心理職が，支援ニーズを概念的に理解することは実践における強力な視座となる。本研究の示した5領域の支援ニーズをもとに，相談員が実際に現場で出会う多様なニーズを整理することで，その特性にあった支援の提供が可能となるだろう。

上述したように【障害児対応】や【評価と報告】は巡回相談にとって基礎的なニーズと位置づけられ，心理職としての専門性と支援の有効性が最も厳しく問われる領域である。この領域の知見と支援の方法は相談員として最低限身につけておく必要がある。むしろ，基礎的ニーズ以外のニーズに相談員が出会った場合に，どう対応するかが鍵となる。

ニーズの切実さに視点をおけば，全般的に【保護者協力】は要配慮ニーズの特徴が強く，【専門間連携】と【保育力形成】は要改善ニーズの特徴が強い。要配慮ニーズは，要改善ニーズよりも指導員からの期待と評価が高いところに特性がある。すなわち，指導員がこの3つの領域に課題を感じていた場合，保護者に関する相談を優先させる可能性がある。指導員にとって保護者の問題は重要であるという認識を持ちながら，【専門間領域】や【保育力形成】の領域に関わるニーズがないか留意する必要がある。

【専門間連携】や【保育力形成】に関する領域は他の領域と比較すれば評価は低いが，期待値自体は中央値を超えており，最も切実なニーズを抱えている。つまりこの領域の相談は，指導員が相談員の支援に対する強い不満を抱く可能性がある。このため相談員はこの領域に存在するニーズを軽視できないものとして考慮する必要がある。少なくとも臨床発達的支援では，発達に関する専門的知識以外に，福祉や行政の制度，具体的な連携の手段，学童保育の専門性と限界といった知識の習熟が欠かせないだろう。

最後に今後の課題について述べる。今回は東京都のZ区を統合学童保育の先進的地域として位置づけて調査の対象としたが，指導員の人数の制限もあり，巡回相談の全体像を描くには調査の限界があった。今回の調査では統計的分析から大まかな傾向を示せたものの，その信頼性についてさらなる検証を行う必要がある。

また，今回の調査では相談員のnormative needsを十分に扱いきれなかった。相談員の人数制限は指導員に比べて格段に厳しく，今回の量的な調査では明らかにできない部分があった。例えば相談員個人が自身のnormative needsをどのように捉えているかにより，切実なニーズの改善は大きく左右される。保護者との適切な協力関係とはどのようなものか，あるいは保育力量の向上とはどのようなものか，といった相談員の捉え方によって，相談の方向性は変化する。こうした相談者個人の力量を取り扱えるような研究を進め，本研究を補完する必要がある。

相談の内容と質によって，巡回相談の支援ニーズ自体が変化する可能性の検討も必要である。言語聴覚士や作業療法士による相談と，心理による相談の支援ニーズには違いがあって当然である。心理の専門家によるnormative needsの範囲を明確にするためにも，他職種による相談との違いや，その共通点に関する検討を進めていかなくてはならない。

文　献

赤尾勝己．(2000)．成人教育プログラム計画におけるニーズ評価：ニーズ充足原則の意義と課題．現代アメリカ教育研究会(編)，*学習者のニーズに対応するアメリカの挑戦*（pp.241-270）．東京：教育開発研究所．

秋田喜代美・市川伸一．(2001)．教育・発達における実践研究．南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編)，*心理学研究法入門：調査・実験から実践まで*（pp.153-190）．東京：東京大学出版会．

Bradshaw, J. (1972). The concept of social need. *New Society*, **496**, 640-643.

Davidson, H.S. (1995). Making needs: Toward a historical sociology of needs in adult and continuing education. *Adult Education Quarterly*, **45**(4), 183-196.

Dougherty, A.M. (2005). *Psychological consultation and collaboration in school and community settings* (4th ed.). California: Thomson Brooks/Cole.

遠藤敬子・徳田克己．(1997)．障害児担当保育者の研修におけるニーズについて．*障害理解研究第2号*，筑波大学，茨城，49-58.

浜谷直人．(2005)．学童保育．学会連合資格「臨床発達心理士」認定運営機構(編)，*臨床発達心理士　わかりやすい資格案内*（pp.104-105）．東京：金子書房．

浜谷直人．(2006)．子どもの発達と保育への参加を支援する巡回相談．*発達*，**27**(107)，2-10．京都：ミネルヴァ書房．

浜谷直人・秦野悦子・松山由紀・村田叮子．(1990)．障害児保育における専門機関との連携．*季刊障害者問題研究*，**60**，42-52．東京：全国障害者問題研究会出版部．

浜谷直人・西本絹子・古屋喜美代．(2000)．学童クラブにおける障害児保育の現状と課題．*障害者問題研究*，**28**(3)，77-87．東京：全国障害者問題研究会出版部．

本郷一夫．(2005)．臨床発達心理学の専門性とはなにか．麻生　武・浜田寿美男(編)，*よくわかる臨床発達心理学* (pp.16-17)．京都：ミネルヴァ書房．

前田泰弘・高野亜紀子・広浦幸一・尾崎浩信．(2002)．地方における障害児保育実践の現状と支援ニーズ：宮城県郡部の保育所における質問紙調査から．*東北福祉大学研究紀要第27巻*，東北福祉大学，宮城，79-89．

Maslow, A. (1943). A theory of human motivation. *Psychological Review*. **50**, 370-396.

三山　岳．(2006)．子どもたちが互いに認め合う関係を支援した学童保育の巡回相談，*発達*，**27**(107)，30-36．京都：ミネルヴァ書房．

西本絹子．(2002)．コンサルテーションによるアセスメント．東京発達相談研究会・浜谷直人(編)，*保育を支援する発達臨床コンサルテーション* (pp.37-54)．京都：ミネルヴァ書房．

西本絹子．(2004)．学童保育所における軽度発達障害児のコンサルテーション：通常学級に通う高機能広汎性発達障害児の保育に対するコンサルテーションの有効性とそれを実現したコーディネーションのプロセスに関する検討．*高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要第1巻第2号*，高崎健康福祉大学，群馬，31-54．

大崎広行．(2000)．児童福祉法改正後の「学童保育」(放課後児童健全育成事業) の動向に関する一考察．*宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報第9巻*，宮城学院女子大学，宮城，71-81．

Pearce, S.D. (1995). Needs assessment: Constructing tacit knowledge from practice. *International Journal of Lifelong Education*, **11**, 405-419.

清水貞夫．(2002)．特別なニーズ教育とは．特別なニーズ教育とインテグレーション学会(編)，*特別なニーズと教育改革* (pp.6-17)．京都：かもがわ出版．

上田尚一．(2003)．*講座　情報を読む統計学：8　主成分分析*．東京：朝倉書店．

我妻　洋．(1987)．*社会心理学入門：下*．東京：講談社学術文庫．

全国学童保育連絡協議会．(2003)．*学童保育の実態と課題：2003年版実態調査のまとめ*．東京：全国学童保育連絡協議会．

付記

本論文は平成16年に武蔵野女子大学大学院へ提出した修士論文を再分析したものです。本研究にご協力頂いた学童保育指導員と巡回相談員の先生方に深くお礼を申し上げます。武蔵野大学の春原由紀先生には修士論文の作成において懇切丁寧なご指導を賜りました。また本論文の作成においては、首都大学東京の浜谷直人先生に多くのご助言ならびにご指導を頂きました。心より感謝致します。

Miyama, Gaku (Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University). *The Needs for Itinerant Consultation Support in an Integrated After-School Care Program: A Questionnaire Study of Program Leaders in a Ward of Tokyo.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 183-193.

The personnel of an after-school care program (N=102) participated in a questionnaire survey about the need for itinerant consultation for integrated child care. Principal component analysis revealed that needs for itinerant consultation support resulted in five components: (1) coordination with specialized agencies, (2) constitution of care ability, (3) collaboration with parents, (4) care programs associated with handicapped children, and (5) assessment and reporting. In addition, support needs were divided into three major groups in relation to the urgency of needs: (1) fundamental needs, (2) considerable needs, and (3) improvement needs. This research showed that the understanding of support needs in terms of urgency can lead to effective support to prevent problems that occur when service recipients are the overly primary consideration, which is called "needology."

【Key Words】 Itinerant consultation, After-school care, Integrated child-care, Support needs, Handicapped children

2005. 11. 22 受稿，2008. 4. 30 受理